公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第604集

上原Ⅰ遺跡
上原Ⅲ遺跡
林宮原遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

2015

国　土　交　通　省

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

上原Ⅰ遺跡
上原Ⅲ遺跡
林宮原遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

2015

国　土　交　通　省

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡は、山間を深く刻んで流れる吾妻川を、南下に望む上位段丘上に営まれた遺跡です。

これら３遺跡は、県道および町道の建設工事に伴う発掘調査として、平成24・25年度に調査が実施されました。

上原Ⅰ遺跡では、縄文時代前期初頭(花積下層Ⅰ式期)の集落と遺物包含層が検出されました。西側隣接地は、長野原町教育委員会により平成24年に発掘調査が行われ、縄文時代前期初頭の竪穴住居９軒、土坑２基、中期後半の竪穴住居４軒、土坑５基、ピット(石器埋納)１基が発見されています。特に、本遺跡における縄文時代前期初頭の集落は、両調査を合わせると計15軒の竪穴住居を数えることができ、出土例の少ない、同時期の集落としては注目される遺跡です。

上原Ⅲ遺跡は、今回調査の遺跡の内で最も標高の高い場所に位置しています。調査区の両側部分を、平成23年度に長野原町教育委員会が土地改良事業に伴う調査を実施し、平安時代の住居、土坑等が調査されており、平安時代の鍛治遺構も発見されました。今回の調査では、一連の平安集落の住居１軒と掘立柱建物、土坑を発見しました。

林宮原遺跡では、中世の掘立柱建物群および土坑等が発見され、十数棟の掘立柱建物は、建て替えが行われていることも確認されました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には、多大なるご支援、ご協力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

本書が長野原町、吾妻郡内、ひいては群馬県における歴史研究の新たな資料として活用されることを願い序といたします。

平成27年９月

公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　中　野　三　智　男

例　　言

1．本書は八ッ場ダム建設工事に伴い発掘調査された、上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡の発掘調査報告書である。

2．上原Ⅰ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字上原1,032-2、1,033、1,034-2、1,034-3、1,034-4、1,036-2、1,036-3、1,036-4、1,039-2、1,041-3、1,041-4、1,041-5
上原Ⅲ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字上原1,277-1
林宮原遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字宮原567-2
に所在する。

3．発掘調査は八ッ場ダム建設工事に伴うもので、国土交通省の委託を受け、群馬県教育委員会が公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施された。

4．各遺跡の発掘調査期間と調査体制は以下のとおりである。

上原Ⅰ遺跡
発掘調査期間　平成24年10月９日～11月30日
発掘調査面積　1,392㎡
発掘調査担当　山口逸弘（上席専門員）・黒澤照弘（主任調査研究員）
遺跡掘削工事請負　株式会社　歴史の杜
委託　地上測量：株式会社　測研

上原Ⅲ遺跡
発掘調査期間　平成25年６月17日～７月22日
発掘調査面積　317㎡
発掘調査担当　小野和之（専門官）・麻生敏隆（上席専門員）・関　俊明（主任調査研究員）
遺跡掘削工事請負　株式会社　測研
委託　地上測量：株式会社　測研

林宮原遺跡
発掘調査期間　平成24年４月１日～５月17日、５月31日～６月12日
発掘調査面積　850㎡
発掘調査担当　山口逸弘（上席専門員）・黒澤照弘（主任調査研究員）
遺跡掘削工事請負　株式会社　歴史の杜
委託　地上測量：株式会社　測研

5．整理事業の期間と体制は以下のとおりである。

整理期間	上原Ⅰ遺跡	平成25年度	平成26年２月１日～３月31日
		平成26年度	平成26年11月１日～12月31日
	上原Ⅲ遺跡	平成26年度	平成27年１月１日～２月28日
	林宮原遺跡	平成26年度	平成27年３月１日～３月31日
		平成27年度	平成27年４月１日～４月30日

整理担当　山口逸弘（平成25年度）　谷藤保彦（平成26年度）　小野和之（平成27年度）

6．本書作成の担当は以下のとおりである。

編集担当　谷藤保彦、小野和之

本文執筆　谷藤保彦　本文(上原Ⅰ遺跡)遺物観察表

小野和之　本文(上原Ⅲ遺跡)

山口逸弘　本文(林宮原遺跡)

デジタル編集　齊田智彦

保存処理　関　邦一

7．石材鑑定は松村和男(当事業団)が行った。

8．出土遺物および図面・写真等の記録は群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

9．発掘調査および本書の作成にあたっては下記の機関、諸氏よりご教示、ご指導をいただいた。記して感謝の意を表する。(敬称略)

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、長野原町教育委員会、白石光男、富田孝彦

凡　　例

1．上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡における遺構測量は、国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第Ⅸ系)」を用いている。

真北方向角は+0°　18′38.58″(東偏)である。

遺構図中で使用した北方位は、すべて座標北を示す。

2．等高線・遺構断面図等に記した数値は海抜標高を示す。

3．遺構図の縮尺は、原則として以下の通りである。

遺構全体図　1／500　1／300　1／200　　住居合成図　1／80　　住居　1／60　　掘立柱建物　1／60

カマド　1／30　　土坑　1／40　　溝　1／60

4．遺物実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

・土器　1／3

・石器　石皿、台石、丸石等の大形品　1／5、1／4　　打製石斧、磨製石斧、磨石、凹石、敲石等　1／3

石鏃、石錐等　1／1　　石匙、スクレイパー、剥片石器　1／2　　垂飾品等の小形品　1／2

石製品　1／4、1／3　　その他は図中に示す。

・鉄製品　1／2　　古銭　1／1

5．遺構に使用したスクリーントーンは以下のことを示す。

焼土

6．遺物写真の縮率は原則として遺物図とほぼ同じである。

7．遺構の計測値単位は原則m、遺物についてはcmを使用。また石器の重量単位はｇを用いた。

8．本文中の火山灰略称は以下の通りである。

As－BP（浅間板鼻褐色軽石　BP19,000－24,000）　As－YP（浅間板鼻黄色軽石　BP13,000－14,000）

As－YPK（浅間草津軽石　BP13,000－14,000）　As－C（浅間Ｃ軽石　AD300前後）　As－B（浅間Ｂ軽石　AD1108）

As－Kk（浅間粕川軽石　AD1128）　As－A（浅間Ａ軽石　AD1783)である。

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次・表目次・写真目次

第１章　調査に至る経過と遺跡の環境
　第１節　八ッ場ダム発掘調査の経緯
　第２節　調査の方法－調査区の設定－
　第３節　林地区の歴史的環境
第２章　上原Ⅰ遺跡
　第１節　調査に至る経緯と経過
　　第１項　調査に至る経緯
　　第２項　調査の経過
　　１．発掘調査の経過　２．整理事業の経過
　第２節　調査の方法
　　第１項　調査区とグリッドの設定
　　第２項　発掘調査の方法
　第３節　遺跡の立地と基本土層
　　第１項　遺跡の立地
　　第２項　基本土層
　第４節　検出された遺構と遺物
　　第１項　縄文時代
　　１．概要　２．竪穴住居　３．土坑
　　４．焼土　５．遺構外出土遺物
　　第２項　平安時代以降
　　１．概要　２．竪穴住居　３．土坑
　　４．ピット
　第５節　調査の成果(総括)
　　第１項　上原Ⅰ遺跡の全体像
　　１．縄文時代　２．平安時代
　　第２項　分割調査された住居
　　第３項　総　括
第３章　上原Ⅲ遺跡
　第１節　調査に至る経緯と経過
　　第１項　調査に至る経緯
　　第２項　調査の経過
　第２節　調査の方法
　　第１項　調査区とグリッドの設定
　　第２項　発掘調査の方法
　第３節　遺跡の立地と基本土層
　　第１項　遺跡の立地
　　第２項　基本土層
　第４節　検出された遺構と遺物
　　第１項　概要
　　第２項　遺構と遺物
　　１．竪穴住居　２．掘立柱建物
　　３．土坑　４．溝　５．遺構外出土遺物
　第５節　調査の成果(総括)
第４章　林宮原遺跡
　第１節　調査に至る経緯と経過
　　第１項　調査に至る経緯
　　第２項　調査の経過
　第２節　調査の方法
　　第１項　発掘調査の方法
　第３節　遺跡の立地と基本土層
　　第１項　遺跡の立地
　　第２項　基本土層
　第４節　検出された遺構と遺物
　　第１項　概要
　　第２項　遺構と遺物
　　１．掘立柱建物　２．土坑　３．ピット
　　４．遺構外出土遺物
　第５節　調査の成果(総括)

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　調査区の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３図　上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡及び周辺遺跡位置図・5

上原Ⅰ遺跡
第４図　上原Ⅰ遺跡　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第５図　上原Ⅰ遺跡　調査範囲・周辺地形図・・・・・・・・・・・・・10
第６図　上原Ⅰ遺跡　調査地点縄文時代遺構全体図・・・・・・・・・12
第７図　81区１号住居　平面図、出土遺物（１）・・・・・・・・・・・13
第８図　81区１号住居　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・14
第９図　81区２号住居　平・断面図、出土遺物（１）・・・・・・・・・15
第10図　81区２号住居　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・16
第11図　81区３号住居　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・・・・・18
第12図　81区４号住居　平面図、出土遺物・・・・・・・・・・・・・・19
第13図　91区５号住居　平・断面図、出土遺物（１）・・・・・・・・・20
第14図　91区５号住居　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・21
第15図　91区５号住居　出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・22
第16図　91区６号住居　平・断面図、出土遺物（１）・・・・・・・・・23
第17図　91区６号住居　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・24
第18図　91区７号住居　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・・・・・25
第19図　91区８号住居　平・断面図、出土遺物（１）・・・・・・・・・26
第20図　91区８号住居　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・27
第21図　91区13～15号土坑　平・断面図、出土遺物　・・・・・・・・29
第22図　81区１号焼土　平面分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第23図　91区１～12号焼土　平面分布図、出土遺物　・・・・・・・・31
第24図　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第25図　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第26図　遺構外出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第27図　遺構外出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第28図　遺構外出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第29図　遺構外出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第30図　遺構外出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第31図　遺構外出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第32図　遺構外出土遺物（９）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第33図　上原Ⅰ遺跡　調査地点平安時代以降遺構全体図・・・・・・・46
第34図　91区１号住居　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・・・・・48
第35図　91区２号住居　床面平・断面図、カマド１平・断面図・・・49
第36図　91区２号住居　掘方平面図、カマド２平・断面図・・・・・50
第37図　91区２号住居　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第38図　91区３号住居　平・断面図、カマド平・断面図、出土遺物・52
第39図　91区４号住居　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・・・・・53
第40図　81区１・２号土坑　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・54
第41図　81区３・４号土坑　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・55
第42図　81区５号土坑、91区１・２号土坑　平・断面図・・・・・・57
第43図　91区３～５号土坑　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・58
第44図　91区６～８号土坑　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・60
第45図　91区９～12号土坑　平・断面図　・・・・・・・・・・・・・61
第46図　上原Ⅰ遺跡　縄文時代　遺構分布全体図（合成図）・・・・・63
第47図　上原Ⅰ遺跡　古墳・平安時代以降　遺構分布全体図（合成図）64
第48図　81区１号住居・SI－22　平面合成図、出土遺物・・・・・・65
第49図　81区４号住居・SI－27　平面合成図、出土遺物・・・・・・66
第50図　91区１号住居・SI－04　平面合成図、出土遺物・・・・・・67

上原Ⅲ遺跡
第51図　上原Ⅲ遺跡　調査範囲・周辺地形図・・・・・・・・・・・・87
第52図　上原Ⅲ遺跡　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第53図　上原Ⅲ遺跡　調査地点遺構全体図・・・・・・・・・・・・・・89
第54図　１号住居　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・・・・・・・90
第55図　１号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・91
第56図　１・２・４～６号土坑　平・断面図、出土遺物・・・・・・93
第57図　７～10号土坑　平・断面図、出土遺物　・・・・・・・・・・94
第58図　１・２号溝　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第59図　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
第60図　上原Ⅲ遺跡　遺構分布全体図（合成図）・・・・・・・・・・ 100

林宮原遺跡
第61図　林宮原遺跡　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
第62図　林宮原遺跡　調査範囲・周辺地形図・・・・・・・・・・・ 103
第63図　林宮原遺跡　調査地点遺構全体図・・・・・・・・・・・・ 104
第64図　１号掘立柱建物　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・（折込）
第65図　２号掘立柱建物　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・ 108
第66図　３号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・ 109
第67図　４号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・ 110
第68図　５号掘立柱建物　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・ 111
第69図　６号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・ 113
第70図　７号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・ 114
第71図　８・９号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・ 115
第72図　11号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・ 116
第73図　13・14号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・ 117
第74図　15号掘立柱建物　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・ 118
第75図　１・２・４号土坑　平・断面図・・・・・・・・・・・・・ 121
第76図　５・７～９号土坑　平・断面図、出土遺物・・・・・・・ 122
第77図　10～14号土坑　平・断面図　・・・・・・・・・・・・・・ 123
第78図　15・16号土坑　平・断面図、出土遺物・・・・・・・・・ 124
第79図　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
第80図　林宮原遺跡　掘立柱建物柱間計測図・・・・・・・・・・ 127

表目次

表１　八ッ場ダム建設に伴う調査遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・3

上原Ⅰ遺跡
表２　遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
表３　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

上原Ⅲ遺跡
表４　発掘調査工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
表５　１号住居　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
表６　６・９号土坑　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・95
表７　遺構外　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
表８　遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98

林宮原遺跡
表９　遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 128
表10　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131

写真目次

上原Ⅰ遺跡

ＰＬ．１　１　遠景(北から)
　　２　91区西　第１面　全景(北から)
ＰＬ．２　１　91区東･81区　第１面　全景(北から)
　　２　91区東･81区　第２面　全景(北から)
ＰＬ．３　１　第１面　91区１号住居　全景(西から)
　　２　第１面　91区１号住居　掘り方(南から)
　　３　第１面　91区２号住居　遺物出土状況(西から)
　　４　第１面　91区２号住居　全景(西から)
　　５　第１面　91区２号住居　掘り方(西から)
　　６　第１面　91区２号住居　１号カマド(北西から)
　　７　第１面　91区２号住居　１号カマド(北西から)
　　８　第１面　91区２号住居　２号カマド(南から)
ＰＬ．４　１　第１面　91区３号住居　全景(西から)
　　２　第１面　91区３号住居　掘り方(西から)
　　３　第１面　91区３号住居　カマド(西から)
　　４　第１面　91区２・４号住居　重複状況(南から)
　　５　第１面　91区４号住居　全景(南から)
　　６　第１面　91区４号住居　カマド(南から)
　　７　第２面　91区５号住居　全景(南から)
　　８　第２面　91区５号住居　全景(南西から)
ＰＬ．５　１　第２面　91区６号住居　全景(南から)
　　２　第２面　91区６号住居　遺物出土状況(南西から)
　　３　第２面　91区７号住居　全景(西から)
　　４　第２面　91区８号住居　遺物出土状況(南から)
　　５　第２面　81区１号住居　床面(南から)
　　６　第２面　81区１号住居　遺物出土状況(西から)
　　７　第２面　81区２号住居　遺物出土状況(南から)
　　８　第２面　81区２号住居　床面全景(西から)
ＰＬ．６　１　第２面　81区２・３号住居　床面全景(南西から)
　　２　第２面　81区４号住居　床面全景(東から)
　　３　第１面　91区１号土坑　全景(東から)
　　４　第１面　91区２号土坑　全景(南から)
　　５　第１面　91区３号土坑　全景(東から)
　　６　第１面　91区５号土坑　全景(南から)
　　７　第１面　91区６号土坑　全景(南から)
　　８　第１面　91区７号土坑　全景(南から)
ＰＬ．７　１　第１面　91区８号土坑　全景(南から)
　　２　第１面　91区９号土坑　全景(南から)
　　３　第１面　91区10号土坑　上面(南から)
　　４　第１面　91区10号土坑　全景(南から)
　　５　第１面　91区11号土坑　全景(南東から)
　　６　第１面　91区12号土坑　全景(東から)
　　７　第２面　91区13号土坑　全景(東から)
　　８　第２面　91区15号土坑　全景(南から)
ＰＬ．８　１　第１面　81区１号土坑　全景(南から)
　　２　第１面　81区２号土坑　全景(南から)
　　３　第１面　81区３号土坑　全景(南から)
　　４　第１面　81区４号土坑　全景(南から)
　　５　第１面　81区５号土坑　土層断面(西から)
　　６　第１面　81区５号土坑　全景(南から)
　　７　第２面　81区Ｈ－23グリッド遺物出土状況(西から)
　　８　第２面　81区Ｈ－24グリッド遺物出土状況(南から)
ＰＬ．９　81区１号住居出土遺物
　　81区２号住居出土遺物(１)
ＰＬ．10　81区２号住居出土遺物(２)
ＰＬ．11　81区３号住居出土遺物
　　81区４号住居出土遺物
　　91区５号住居出土遺物(１)
ＰＬ．12　91区５号住居出土遺物(２)
ＰＬ．13　91区６号住居出土遺物
ＰＬ．14　91区７号住居出土遺物
　　91区８号住居出土遺物
ＰＬ．15　91区14・15号土坑出土遺物
　　91区１・３号焼土出土遺物
　　遺構外出土遺物(１)
ＰＬ．16　遺構外出土遺物(２)
ＰＬ．17　遺構外出土遺物(３)
ＰＬ．18　遺構外出土遺物(４)
ＰＬ．19　遺構外出土遺物(５)
ＰＬ．20　遺構外出土遺物(６)
ＰＬ．21　遺構外出土遺物(７)
ＰＬ．22　遺構外出土遺物(８)
　　91区１号住居出土遺物
　　91区２号住居出土遺物
ＰＬ．23　91区３号住居出土遺物
　　91区４号住居出土遺物
　　91区７号土坑出土遺物

上原Ⅲ遺跡

ＰＬ．24　１　調査区　近景(西から)
　　２　東区　全景(西から)
ＰＬ．25　１　中区　全景(東から)
　　２　西区　全景(東から)
ＰＬ．26　１　１号住居　全景(西から)
　　２　１号住居　掘り方(西から)
　　３　１号土坑　全景(南から)
　　４　２号土坑　全景(南から)
　　５　４号土坑　全景(南から)
ＰＬ．27　１　５号土坑　全景(北から)
　　２　６号土坑　全景(南から)
　　３　７号土坑　全景(南から)
　　４　８号土坑　全景(北から)
　　５　９号土坑　全景(東から)
　　６　10号土坑　全景(北から)
　　７　１号溝　全景(北西から)
　　８　２号溝　全景(南東から)
ＰＬ．28　１号住居出土遺物
　　６・９号土坑出土遺物
　　遺構外出土遺物

林宮原遺跡

ＰＬ．29　１　遠景(北東から)
　　２　近景(北東から)
ＰＬ．30　１　西側　全景(西から)
　　２　東側　全景(東から)
ＰＬ．31　１　１号掘立柱建物　全景(東から)
　　２　２号掘立柱建物　全景(東から)
　　３　３号掘立柱建物　全景(南から)
　　４　４号掘立柱建物　全景(南から)
　　５　６号掘立柱建物　全景(東から)
　　６　７号掘立柱建物　全景(東から)
　　７　８号掘立柱建物　全景(東から)
　　８　11号掘立柱建物　全景(東から)
ＰＬ．32　１　13号掘立柱建物　全景(東から)
　　２　１号土坑　全景(南から)
　　３　２号土坑　土層断面(南から)
　　４　４号土坑　上面石組状況(南から)
　　５　４号土坑　人骨出土状況(南から)
　　６　４号土坑　底面(南から)
　　７　５号土坑　全景(南から)
　　８　７号土坑　全景(南から)

ＰＬ．33　１　８号土坑　全景(南から)
　　２　９号土坑　全景(南から)
　　３　11号土坑　全景(南から)
　　４　12号土坑　全景(南から)
　　５　13号土坑　全景(南から)
　　６　14号土坑　全景(南から)
　　７　15号土坑　全景(南から)
　　８　16号土坑　全景(北から)
ＰＬ．34　１号掘立柱建物出土遺物
　　２号掘立柱建物出土遺物
　　５号掘立柱建物出土遺物
　　８・９･16号土坑出土遺物
　　遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経過と遺跡の環境

本報告書は、群馬県吾妻郡長野原町に所在する上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡、林宮原遺跡の発掘調査報告書である。３遺跡とも八ッ場ダム建設に関連する発掘調査によるもので、同時に、長野原町林地区にある遺跡である。ここでは、３遺跡に共通する調査に至る経緯と周辺遺跡、調査区の設定方法を述べる。各遺跡の調査経過や調査方法は、各章遺跡毎に述べていきたい。

第１節　八ッ場ダム発掘調査の経緯

八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、建設省関東地方建設局（現国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（現東吾妻町教育委員会）が協議し、平成６年３月18日「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年４月１日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

調査当初は、工事用進入路建設に先立つ小規模調査が先行したが、平成10年度以降、工事用進入路が徐々に整い、住民の生活再建の施設としての学校建設や住宅地造成、国道・県道建設工事に伴う発掘調査が増加し、広大な面積が対象となった。発掘調査される遺跡も長野原久々戸遺跡や尾坂遺跡などのように、江戸時代の天明泥流下の畑が一面に広がり、また、長野原一本松遺跡や横壁中村遺跡にみる縄文時代中・後期の大集落が発掘調査されてきた。

本書に掲載される３遺跡は、上記の造成地や国道を結ぶ小規模な町道などを対象としており、調査面積も少なく、調査期間も短いものとなった。上原Ⅰ遺跡と林宮原遺跡が平成24年度、上原Ⅲ遺跡が平成25年度の発掘調査である。

なお、平成26年度以降、水没地区の発掘調査が対象となり、再度、広域な面積を対象とした発掘調査が進められている。

第１図　遺跡位置図　（国土地理院５万分の１地形図「草津」使用）

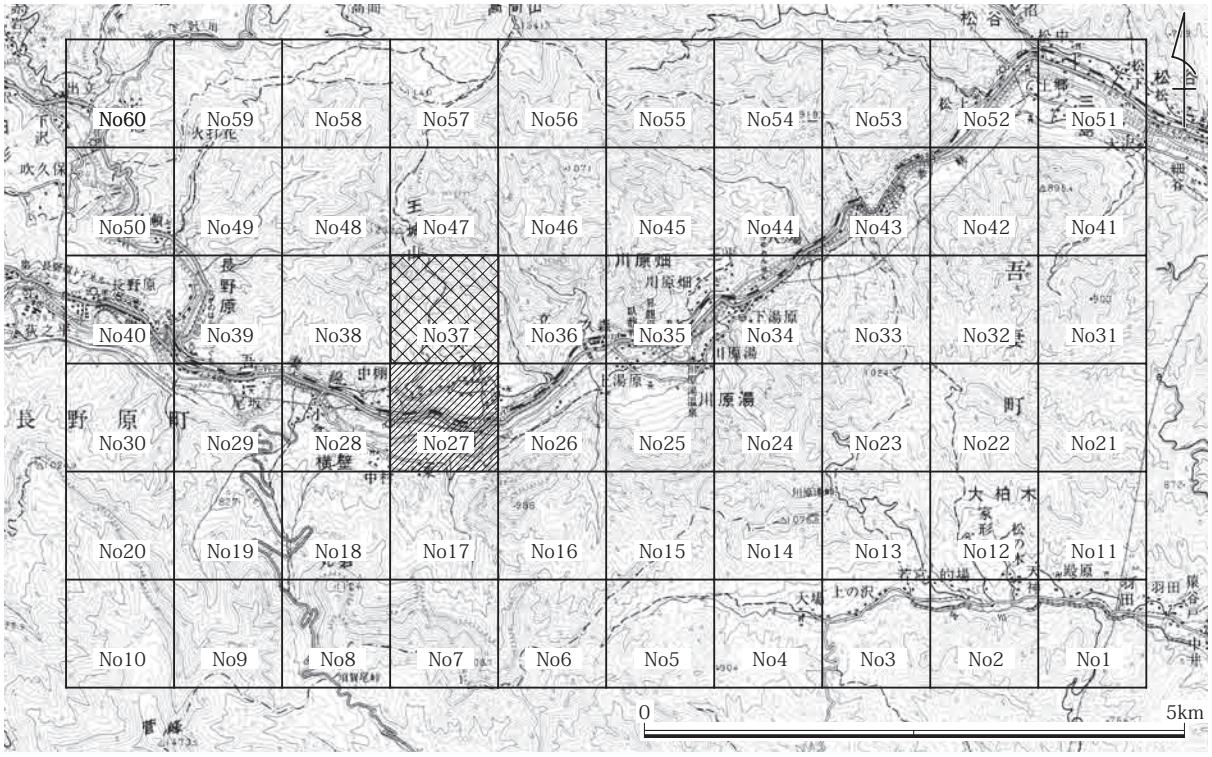
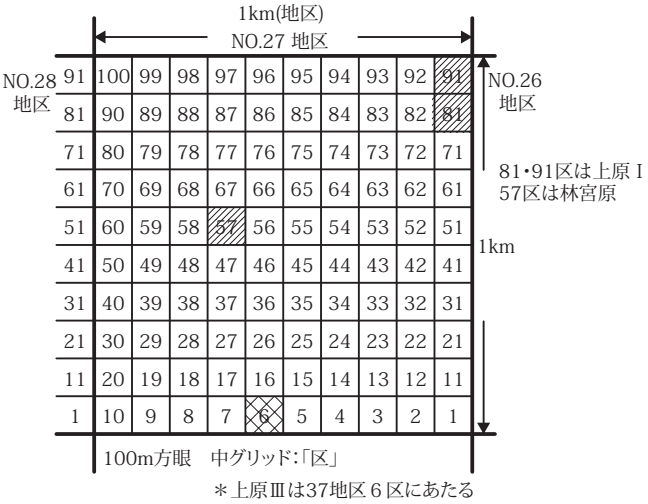


図１　「地区」設定



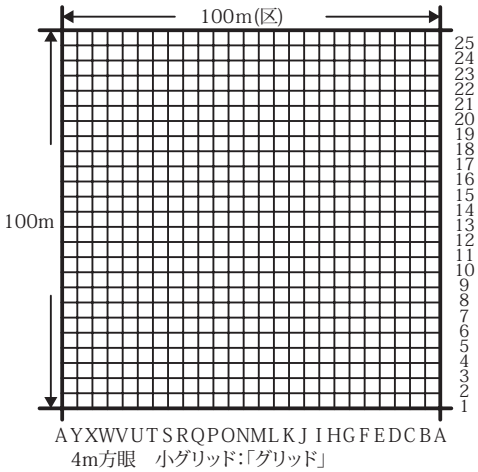


図２　「区」「グリッド」設定模式図

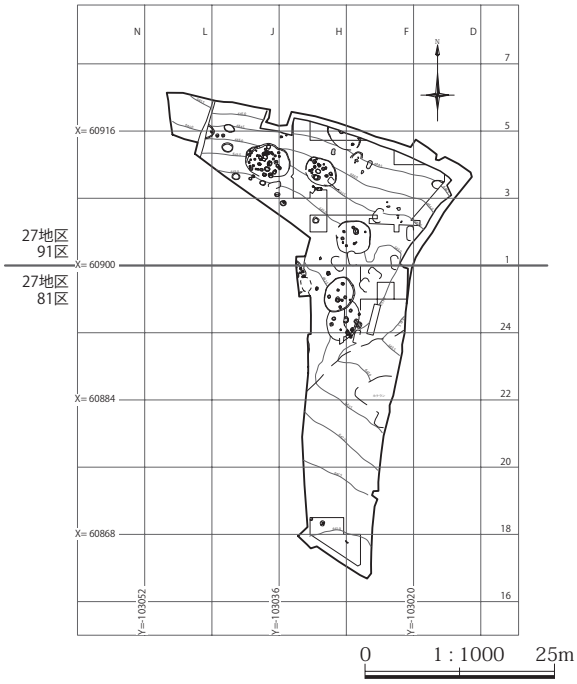


図３　上原Ⅰ遺跡の「区」「グリッド」設定

図１にあるように、大グリッドとして、上原Ⅰ・林宮原遺跡は27地区に、上原Ⅲ遺跡は37地区に含まれる。図２上にあるように100m単位の中グリッドとしては、上原Ⅰ遺跡は81区と91区に跨がり、林宮原遺跡は57区に位置する。上原Ⅲ遺跡は37地区６区にあたる。小グリッドは、４m方眼で図２下のように設定した。上原Ⅰ遺跡調査区を全体図として表した例が、図３である。

第２図　調査区の設定

第２節　調査の方法－調査区の設定－

平成６年から始まった八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。

１．遺跡名称の略号（遺跡番号）

八ッ場ダムの略称はYD、次に長野原町の大字５地区に、１：川原畑地区、２：川原湯地区、３：横壁地区、４：林地区、５：長野原地区と区分し、さらに各地区に所在する遺跡の調査順に番号を付すこととなっている。したがって、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡、林宮原遺跡は林地区での調査であり、上原ⅠはYD4-3、上原ⅢはYD4-24、林宮原はYD4-23となる。

２．グリッドの設定

グリッドの設定は、国家座標第Ⅸ系を使用し、東吾妻町大字大柏木付近を基点（座標値：Ｘ＝58000.0、Ｙ＝－97000.0）として、北西方向に60区画の１㎞方眼が設定され大グリッド（地区）としている。上原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡は27地区、上原Ⅲ遺跡は37地区とした大グリッドに位置する。

大グリッド（地区）内を100m方眼の中グリッド（区）に100分割し、分割された中グリッドは、大グリッドの南東隅を基点とする。上原Ⅰ遺跡の調査区は、81・91区に跨ることとなる。さらに、この中グリッド（区）内を４ｍ方眼に625分割し、中グリッドの南東隅を基点にＹ軸となる東から西へＡ～Ｙ、Ｘ軸となる南から北へ１～25を付し、最小のグリッドとして呼称した。また、大グリッドの境界が本調査区を通らないため、大グリッドの番号を省略し、中グリッドと小グリッドを「91区Ｖ－11」のように標記した（第２図）。

遺構名称については、中グリッド毎の遺構名称となっている。上原Ⅰ遺跡を例に取れば、27地区81区１号住居（81区１号住居）と27地区91区１号住居（91区１号住居）となっている。１遺跡内に１号住居が複数存在することになり留意が必要である。

なお、調査区の設定方法については、「第２章　第２節八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」『長野原一本松遺跡（１）』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002）に詳しい。

所在大字	YD番号		遺跡名	調査年度(平成)
川原畑	YD1	01	－	
	YD1	02	東宮	９・19・20・21
	YD1	03	石畑	10
	YD1	04	三平Ⅰ	16・17・24・25
	YD1	05	二社平	10
	YD1	06	三平Ⅱ	16
	YD1	07	上ノ平Ⅰ	18・19
	YD1	08	西宮	20・26
	YD1	09	西宮岩陰	26
川原湯	YD2	01	川原湯勝沼	９・15・16
	YD2	02	西ノ上	14
	YD2	03	石川原	20
横壁	YD3	01	横壁勝沼	
	YD3	02	西久保Ⅰ	10・12
	YD3	03	横壁中村	８～18
	YD3	04	山根Ⅲ	13・18
	YD3	05	西久保Ⅳ	21・23
林	YD4	01	下田	７・25・26
	YD4	02	－	
	YD4	03	上原Ⅰ	24
	YD4	04	－	
	YD4	05	花畑	10・11・12
	YD4	06	楡木Ⅲ	10
	YD4	07	中棚Ⅱ	11・12・13・16・17
	YD4	08	下原	12・13・15・16
	YD4	09	楡木Ⅱ	11・12・13・16・17
	YD4	10	二反沢	12
	YD4	11	立馬Ⅰ	13・14・17
	YD4	12	立馬Ⅱ	14
	YD4	13	上原Ⅳ	15・21
	YD4	14	林中原Ⅰ	16・19・20・21
	YD4	15	林中原Ⅱ	16・20・21
	YD4	16	上原Ⅱ	16
	YD4	17	林の御塚	
	YD4	18	立馬Ⅲ	19
	YD4	19	東原Ⅰ	20
	YD4	20	東原Ⅱ	20
	YD4	21	東原Ⅲ	20・21
	YD4	22	楡木Ⅰ	21
	YD4	23	林宮原	24
	YD4	24	上原Ⅲ	25
長野原	YD5	01	長野原一本松	６～10・12～17・19・20
	YD5	02	尾坂	11・18～22・25・26
	YD5	03	久々戸	７・９・10・15
	YD5	04	幸神	８・９・14・17
	YD5	05	長野原城跡	23
	YD5	06	町遺跡	23・24・25
三島	YD6	01	上郷Ｂ	13・14
	YD6	02	上郷岡原	13・14・15・17・18
	YD6	03	上郷Ａ	15・19・20
	YD6	04	上郷西	19
	YD6		三島大沢	
大柏木	YD7	01	廣石Ａ	13
	YD7		大柏木上ノ沢	
松谷	YD8		松田前田	
岩下	YD9		－	

表１　八ッ場ダム建設に伴う調査遺跡一覧

第３節　林地区の歴史的環境

ここでは、３遺跡が所在する長野原町林地区の調査遺跡を中心に述べていきたい。長野原町を中心とする吾妻川中流域に占地する諸遺跡の詳細は既刊の八ッ場ダム関連の報告書を参考にしていただきたい。

長野原町林地区は、吾妻川左岸にあり、山地地形から最上位段丘～低位段丘毎に多くの遺跡が包蔵され、この10数年は八ッ場ダム関連の発掘調査で、濃密な遺跡分布が知られるようになった。

特に、平成23～25年にかけて行われた長野原町教育委員会(以下町教委)による林地区遺跡群の発掘調査は、林地区の各所を面的に広く調査した例で、新たな調査成果が数多く得られている。

縄文時代

草創期の遺物を出土した遺跡としては、第３図の範囲に入らなかったため除外しているが、楡木Ⅱ遺跡で表裏縄文１点が出土している。

早期の遺跡としては、撚糸文系土器を出土した遺跡として、前述の楡木Ⅱ遺跡、立馬Ⅰ遺跡が上げられよう。立馬Ⅰ遺跡では住居を検出し、包含層出土では、沈線文系土器がまとまる。この傾向は立馬Ⅱ遺跡や立馬Ⅲ遺跡でも顕著で、特に立馬Ⅲで住居出土資料を提示する。中棚Ⅰ遺跡では、絡条体圧痕を施す深鉢が土坑から出土している。中棚遺跡以外は山地斜面あるいは最上位段丘面の緩やかな傾斜地を選ぶ傾向が見られる。

前期では、初頭段階の資料が充実する上原Ⅰ遺跡(本書)が上げられよう。町教委調査の分も併せると、関東地方屈指の該期資料となり得よう。同時期の資料としては、林中原Ⅰ遺跡52区１号住が該当する。前期前葉段階では、林中原Ⅰ遺跡で２軒の住居が報告されている。中葉から後葉段階の資料は包含層出土が主だが、林中原Ⅰ遺跡や立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡で見る事ができる。楡木Ⅱ遺跡でも前期末葉の良好な資料が出土している。

林地区は、中期初頭～前葉段階の資料が充実する。上原Ⅱ遺跡では、竪穴状遺構出土とされているが、住居出土と判断して良いだろう。良好な土器群の出土を見る。その他では立馬Ⅱ遺跡や楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡、花畑遺跡でまとまる。特に五領ヶ台Ⅱ式が充実しており、他地区に比して質・量ともに抜き出た存在を示す。中葉段階としては、立馬Ⅱ遺跡で集落が報告されている。遺物出土量も豊富であり、良好な在り方を示す。後葉段階になると、拠点集落である林中原Ⅱ遺跡が知られる。後期にまで続く集落である。上原Ⅰ遺跡でも町教委調査分で小規模な集落を検出している。

後期になると集落域が広がるようだが、中期から継続傾向になる林中原Ⅱ遺跡では初頭～前葉の住居が調査されている。前葉段階の集落では上原Ⅳ遺跡において、事業団調査、町教委調査で敷石住居が調査されている。事業団調査で得られた注口土器(福田類型)は隣接する林中原Ⅰ遺跡(町教委調査)でも出土しており、当地域の後期前葉土器様相の一つとなっている。

晩期前葉～後葉段階の資料が極端に少ない。これは林地区に限らず、八ッ場ダム調査域全体の傾向で、僅かに横壁中村遺跡で包含層出土遺物を見るのみである。終末期になると、立馬Ⅰ遺跡などで破片資料を見る。

弥生時代

前期から中期の資料が目立つ。後期に至ると激減する様相を示す。立馬Ⅰ遺跡では中期に比定される甕棺墓を調査している。また、上原Ⅰ遺跡では土坑より小型壺を出土している。変形工字文を配し、底面にまで渦巻文が達する異色の土器である。前期であろう。その他、包含層ながら下原遺跡などでも前期破片が出土しており、林地区全体で散在する傾向を見せている。

古墳時代

前期集落跡として上原Ⅰ遺跡が上げられよう。住居１軒、土坑１基と小規模集落と思われるが、Ｓ字状口縁台付甕の出土が見られる。この時期の資料は長野原町で初出であり意義深い。

下原遺跡では５世紀末～６世紀前半段階の土器を出土した住居が報告されている。また、林宮原遺跡、上原Ⅳ遺跡でも住居を調査している。山地斜面に占地する二反沢遺跡では、小破片ながら古墳時代に比定される土師器破片の出土を見る。西吾妻地域では古墳時代の遺構・遺物が希少な地域ながら、林地区では古墳時代の遺構が検出されており、当地区の卓越性が窺われる現象である。

平安時代

小規模な集落が点在する様相である。おそらく、畑作や鍛冶あるいは布生産を生業としていたと思われるが、用益地としての畑と居住地としての住居が、同一台地に

第３図　上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡及び周辺遺跡位置図

営まれる景観様相と推定できる。

その中で、楡木Ⅱ遺跡の38軒の集落は傑出する。林地区の西端にありながら、当地区の拠点的な在り方を示す。近接する中棚Ⅰ遺跡は９世紀後半代の住居が４軒ながら辺長６～７ｍを測る大型住居を主体とする。灰釉陶器の出土量も多く、墨書土器も「三家」・「人」・「赤」などが見られ、「三家」は楡木Ⅱ遺跡でも出土することから、楡木Ⅱ遺跡と同等の拠点的な性格を有する集落と捉えられる。同様に上原Ⅲ遺跡は山地斜面際に選地する集落ながら、15軒の住居を数える。鍛冶工房（SI12）も確認され、鍛冶滓や鉄滓の分析作業を基に、脱炭作業から鍛錬鍛冶までの工程が導き出されている。竪穴住居からは墨書土器の出土も目立ち、「長」・「経」・「赤」・「麿」などの文字が確認されている。灰釉陶器の出土も当地域の中で傑出している。その他の集落としては、下原遺跡や楡木Ⅰ遺跡、花畑遺跡、上原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡などで９世紀後半から10世紀前半の集落が報告されている。

陥穴状土坑は、平安時代から中世に比定されている。ただ、縄文時代の陥穴状土坑の存在も予想され、全てを当該期に帰属はできない。また、吾妻川流域では、陥穴状土坑は左岸に偏る傾向が見られ、林地区も多数の例が調査されている。花畑遺跡、東原Ⅰ～Ⅲ遺跡、立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡、上原Ⅰ～Ⅲ遺跡、楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡など殆どの遺跡で確認されている。

中近世

従来、八ッ場ダム調査関連では中近世遺構としては天明泥流下の畑や建物が知られていたが、泥流の及ばない地域、例えば上位段丘面における林地区においても、中近世遺構も確認されている。特筆すべきは、平成21年に林城が林中原Ⅰ遺跡の一部として調査されており、林城として、堀・石垣・池・土坑・掘立柱建物が位置付けられている。その他に中近世に位置付けられる掘立柱建物や墓壙が多数調査されている。また炉・柱穴を伴う竪穴状遺構からは漆紙や完形の内耳土器が出土しており、性格などに注目が集まる。林城に隣接した地点を町教委が調査しているが、林城の延長である平坦面や掘立柱建物を確認している。林城に関しては、新知見の城であり、今後さらに検証を重ねるべきであろう。

その他の中近世遺構を調査した遺跡としては、東原Ⅰ遺跡で２棟、東原Ⅱ遺跡で１棟、東原Ⅲ遺跡で４棟の掘立柱建物を見る。いずれも削平面を伴う例である。また近世から近代に比定されるイロリを伴う礎石建物が東原Ⅲ遺跡で検出されている。その他に、楡木Ⅱ遺跡や林宮原遺跡（本書）、林中原Ⅱ遺跡（町教委）でも中近世に比定される掘立柱建物が報告されている。

林中原Ⅰ遺跡では墓壙も多く調査されている。同様に上原Ⅱ遺跡や下原遺跡、林宮原遺跡でも見る事ができる。

天明泥流下の畑は主に下位段丘と中位段丘で調査されている。林地区では下原遺跡や下田遺跡、中棚Ⅱ遺跡に畑が広がる。

なお、山地斜面にあたる二反沢遺跡では、中世に比定される石垣を伴う中世造成面や近世天明以降の畑が調査されている。

林地区埋蔵文化財主要参考文献
長野原町教育委員会＝長野原町教委
（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団＝群埋文と略す。
１．長野原町教委2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集（以下町報告第○集）
２．長野原町教委2002『林宮原遺跡Ⅱ』町報告第14集
３．長野原町教委2005『町内遺跡Ⅴ』町報告第15集
４．長野原町教委2006『町内遺跡Ⅵ』町報告第16集
５．長野原町教委2007『町内遺跡Ⅶ』町報告第17集
６．長野原町教委2009『町内遺跡Ⅷ』町報告第18集
７．長野原町教委2010『町内遺跡Ⅸ』町報告第19集
８．長野原町教委2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』町報告第20集
９．長野原町教委2010『町内遺跡Ⅹ』町報告第21集
10．長野原町教委2012『町内遺跡Ⅺ』町報告第22集
11．長野原町教委2012『林宮原遺跡Ⅷ』町報告第23集
12．長野原町教委2013『町内遺跡Ⅻ』町報告第25集
13．長野原町教委2013『町内遺跡XIII』町報告第27集
14．長野原町教委2014『町内遺跡XIV』町報告第28集
15．長野原町教委2015『林地区遺跡群』町報告第30集
16．群埋文2002『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第１集（以下八ッ場○集）
17．群埋文2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』八ッ場３集
18．群埋文2004『久々戸遺跡（２）・中棚Ⅱ遺跡（２）・西ノ上遺跡・上郷Ａ遺跡』八ッ場４集
19．群埋文2006『立馬Ⅱ遺跡』八ッ場８集
20．群埋文2006『上郷Ｂ遺跡・廣石Ａ遺跡・二反沢遺跡』八ッ場９集
21．群埋文2006『立馬Ⅰ遺跡』八ッ場11集
22．群埋文2007『下原遺跡Ⅱ』八ッ場12集
23．群埋文2008『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡（２）』八ッ場17集
24．群埋文2008『楡木Ⅱ遺跡（１）』八ッ場18集
25．群埋文2008『上ノ平Ⅰ遺跡（１）』八ッ場23集
26．群埋文2009『立馬Ⅲ遺跡』八ッ場26集
27．群埋文2009『楡木Ⅱ遺跡（２）』八ッ場27集
28．群埋文2010『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』八ッ場33集
29．群埋文2012『楡木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡・西久保Ⅳ遺跡』八ッ場39集
30．群埋文2014『林中原Ⅰ遺跡・長野原城』八ッ場43集

第２章　上原Ⅰ遺跡

第１節　調査に至る経緯と経過

上原Ⅰ遺跡は、八ッ場ダム建設工事に伴い、町道建設工事に伴う発掘調査が実施された。

第１項　調査に至る経緯

平成25年４月１日、国土交通省関東地方整備局長と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で、平成25年度八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理事業の受託契約が締結された。同５月11日に、群馬県教育委員会文化財保護課による試掘調査が実施され、縄文時代および平安時代の遺構が確認されたことから本調査が必要とされた。同８月29日に群馬県教育委員会文化財保護課、国土交通省、当事業団の三者による八ッ場ダム関連埋蔵文化財調整会議が行われ、長野原町が圃場整備に伴い実施している上原Ⅰ遺跡の発掘調査終了後、当事業団が道路整備に伴う上原Ⅰ遺跡の発掘調査を開始することが決まった。

第２項　調査の経過

１．発掘調査の経過

発掘調査は、平成24年10月から翌11月までの２ヶ月間を要した。

平成24年10月９日より調査を開始し、先ずは人力によるトレンチ掘削から始め、遺構面の確認を行った。翌10日からは、重機による表土掘削を開始し、併せて安全対策工事およびプレハブ等の設営を行った。同11日からは、第１面調査として平安時代以降を対象とした調査を目的とし、遺構確認作業と共に検出した住居等の掘削を順次開始した。同12日には、遺構が検出された81区南側調査地点の全景写真および測量を行い、重機による埋め戻しを行った。同17日、91区南東隅で縄文土器が集中する箇所を検出したため、第１面調査と併行して人力による掘削を開始した。同30日からは、縄文時代を対象とした第２面の重機による掘削を開始した。翌31日には、第１面調査が全て終了し、第２面調査へと移行した。11月１日、91区西側調査地点での縄文時代の遺構が検出されず、写真および測量を行い同調査地点の調査を終了した。また、91区東側では、遺構確認作業と併行して縄文時代の住居の調査を開始した。同５日からは、91区と併行して81区の遺構確認を開始し、順次各遺構の調査を進めた。同22日には、第２面目の全景写真を撮影し、同27日から埋め戻しと撤収作業を開始した。そして、同30日に発掘調査を全て終了し、現地の引き渡しを行った。

２．整理事業の経過

整理事業は、平成26年２月から翌３月（平成25年度）までと、同年11月から翌12月（平成26年度）までの、２ヶ年度に跨る計４ヶ月を予定して行った。

平成25年度

作業は、遺物整理を主として行った。土器については、分類作業、接合作業を経て、掲載土器の選定までを行った。石器については、分類作業と掲載石器の選定までを行った。

平成26年度

作業は、遺構平面図類および遺構写真の確認から開始し、出土遺物の図化作業を行った。

遺構については、各遺構図ごとの修正作業の後にデジタル編集作業を行い、併せて遺構写真の選定、本文執筆を行った。なお、遺跡位置図のデジタル編集作業については、その一部を業者委託して作成した。

遺物については、土器と石器の種別ごとに、復元作業、写真撮影、実測作業、そしてこれら遺物図のトレース作業と進め、各遺物観察の執筆を行った。なお、打製石器については、実測・トレース作業を業者委託して作成した。

一連の作業後、報告書版下のレイアウト作成、デジタル編集作業およびデジタル組版を行い、発掘調査報告書の刊行準備を済ませ、整理業務を終了した。

第２節　調査の方法

第１項　調査区とグリッドの設定

上原Ⅰ遺跡における遺跡略称や調査区とグリッド設定についての基本的な方法は、第１章、第２節に述べた通りである。

本遺跡は、27地区とした大グリッドに位置しており、大グリッドの設定は、日本測地系2000第Ⅸ系を使用し、吾妻郡東吾妻町大字大柏木付近を基点(座標値：Ｘ＝58000.0、Ｙ＝－97000.0)として、北西方向に60区画の１㎞方眼が設定される。27地区とされる大グリッドの南東交点を基点に縦横100分割した100m方眼(中グリッド)を設定する。

本調査区は中グリッド、81・91区に跨ることとなる。大グリッドの境界が本調査区を通らないため、小グリッド呼称は、大グリッドの番号を省略し、「91区Ｖ－11」あるいは、「81区Ｖ－11」のように標記した。遺構番号はそれぞれの区毎に付番した。

第２項　発掘調査の方法

発掘調査は、表土除去に重機を使用し、表土除去後の各作業は発掘作業員により実施した。遺構確認作業はジョレンを用いて行い、面的な遺構の把握に努めた。

遺構確認は、まず第１面調査として基本土層第Ⅳ層(黒褐色土)上面から中位を確認面とし、古代以降を対象とした調査を行った。その結果、平安時代の竪穴住居、古代から中世の土坑(陥し穴を含む)・ピットを確認した。しかし、81区南側の調査地点では、遺構の検出はできなかった。また、81区北側においても、その大半がローム面まで削平されていたことから、遺構の検出数は少ない。続く、第２面調査では、基本土層第Ⅴ層(黒色土)上面および第Ⅵ層(黒褐色土)上面を遺構確認面とし、縄文時代を対象とした調査を行った。その結果、81区と91区に跨る調査地点において、縄文時代前期初頭期の竪穴住居および土坑、焼土を確認した。併せて、縄文時代前期初頭期の遺物包含層調査も行った。

遺構等の測量は、測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、1/10、1/20、1/40を基本として、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。また、全体図は、1/150、1/300を作成した。

写真撮影は、中判カメラでの白黒フィルム、デジタル撮影データの２種類を基本とし、調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行った。なお、撮影した写真のデジタルデータは、HDやDVD－ROM等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

遺物の洗浄・注記は、業者に委託して行った。

第３節　遺跡の立地と基本土層

第１項　遺跡の立地

上原Ⅰ遺跡は、吾妻郡長野原町大字林字上原に所在し、吾妻川左岸の最上位段丘面のほぼ中央に位置している。遺跡地は、北東から南西方向に向かう緩斜面で、標高637.5m～646.5mを測る。この最上位段丘面上には、本遺跡以外にも多くの遺跡が近接し合う。

本遺跡の西側に隣接して上原Ⅳ遺跡、北側に隣接して上原Ⅱおよび上原Ⅲ遺跡、東側には花畑遺跡、そして段丘面が最も広くなる南側には東から林中原Ⅱ遺跡、林中原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡が、段丘面の南端部に東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡がある。

第２項　基本土層

本調査に先行して発掘調査が行われた町教委調査では、Ａ・Ｂの２地点で基本土層が確認されている。Ａ地点は本調査での91区西側調査地点の西先端部付近であり、Ｂ地点は本調査で検出された81区１号住居と81区４号住居の間の調査範囲境にあたる。この町教委調査での基本土層を踏襲し、本調査での基本土層を確認した。第４図に示した基本土層図は、91区東側調査地点の北壁中央付近(91区６号住居の東側)での層序である。

本遺跡は吾妻川左岸の最上位段丘面に立地することから、中位段丘面にみられる天明３年(1783年)の浅間山噴火に伴う泥流はない。表土(黒褐色土)下には、1.5mほどの黒褐色土ないし黒色土が堆積し、その下に暗褐色のローム漸移層、そして黄褐色ロームが層序をなす。

以下、基本土層図を元に、堆積する各層について記述する。

Ⅰ層：黒褐色土　表土。粘性乏しく、しまり弱い。（町教委調査での、基本土層Ⅰ層に対応）

Ⅱ層:黒褐色土　しまりやや弱く、As-YPkを少量含む。（町教委調査での、基本土層Ⅱa層に対応）

Ⅲ層：黒褐色土　粘性・しまりやや強い。As-YPk少量含む。（町教委調査での、基本土層Ⅱb層に対応）

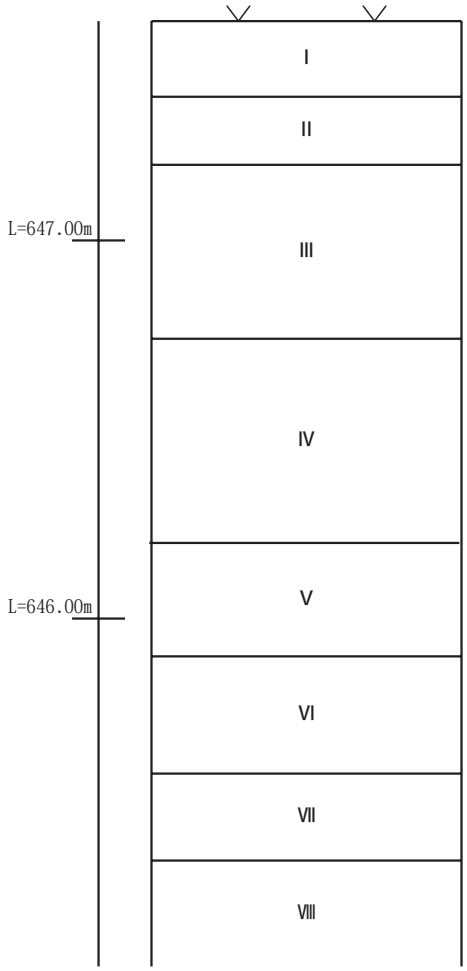
Ⅳ層：黒褐色土　やや暗い。大粒のAs-YPkを多く含む。上面～中面が平安時代以降の遺構調査面。また、層下位には、縄文時代の遺物を包含する。（町教委調査での、基本土層Ⅲ層に対応）

Ⅴ層：黒色土　粘性・しまりともに強い。大粒のAs-YPkを多く、炭化粒・焼土粒を含む。縄文時代の遺物を包含し、遺構調査面。（町教委調査での、基本土層Ⅳ層に対応）

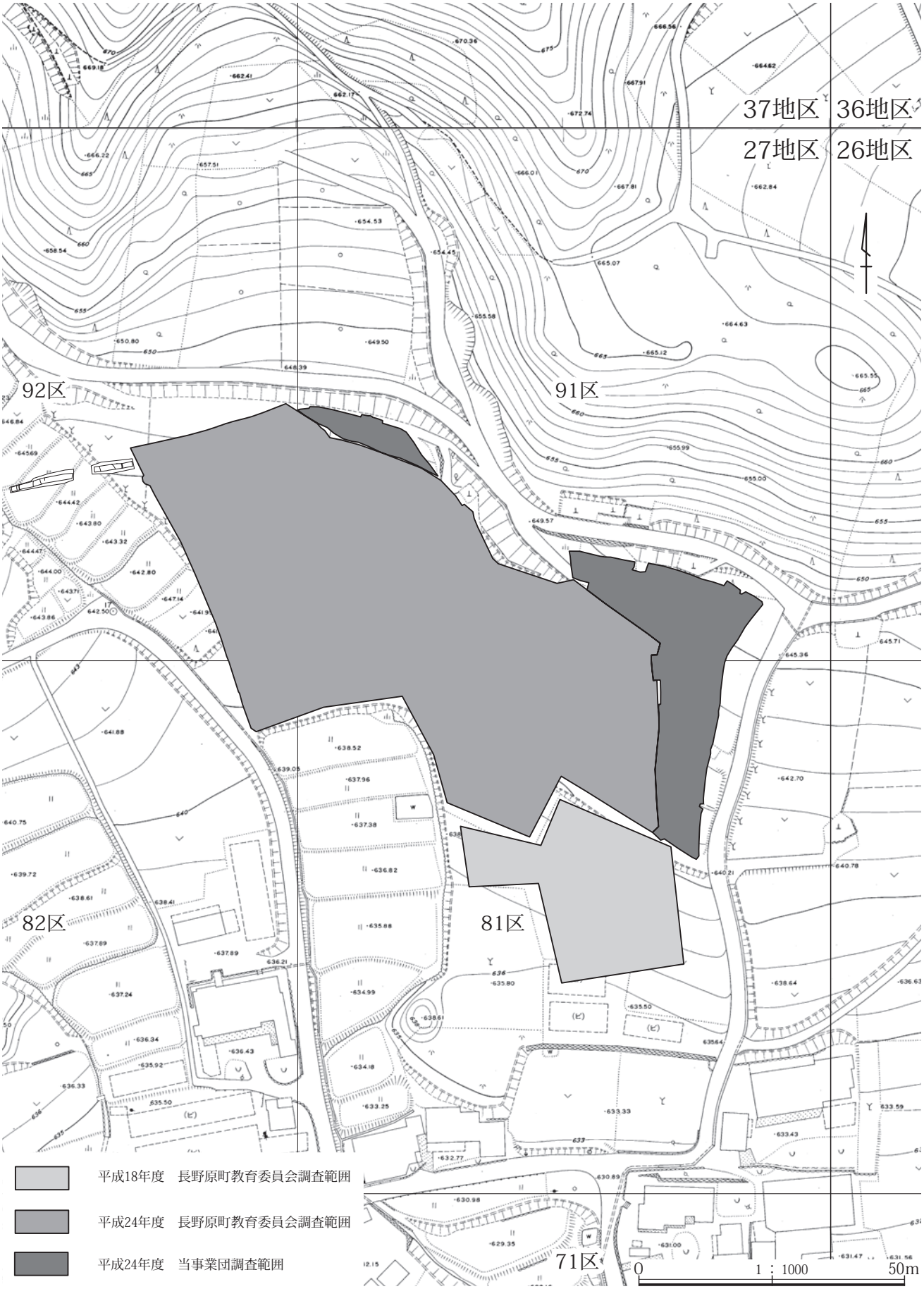
Ⅵ層：黒褐色土　明るく粘性強い。大粒のAs-YPkを多く含む。縄文時代の遺構調査面。（町教委調査での、基本土層Ⅳ'層に対応）

Ⅶ層：暗褐色土　ローム漸移層。粘性・しまり強い。ローム塊・As-YPkを含む。

Ⅷ層：黄褐色土　ローム層。



第４図　上原Ⅰ遺跡　基本土層



第５図　上原Ⅰ遺跡　調査範囲・周辺地形図

第４節　検出された遺構と遺物

第１項　縄文時代

１．概要

本調査で検出された縄文時代の遺構は、81区北側と91区東側に跨る調査区において、基本土層Ⅴ・Ⅵ層中位を確認面とした第２面調査で、第６図に示した縄文時代前期初頭(花積下層Ⅰ式期)の集落と遺物包含層が検出された。集落を構成する遺構には、竪穴住居８軒、土坑３基、焼土13ヶ所、ピット１基がある。

本調査区の西側隣接地は、町教委により平成24年に発掘調査が行われ、縄文時代前期初頭の竪穴住居９軒、土坑２基、中期後半の竪穴住居４軒、土坑５基、ピット(石器埋納)１基が検出されている。特に、町教委による調査での住居の内、２軒は当事業団調査区に跨って検出されている。なお、当事業団調査区内には、中期後半の竪穴住居は検出されていない。

本遺跡における縄文時代前期初頭の集落は、両調査を合わせると計15軒の竪穴住居を数えることができ、同時期の県内外での集落としては最も竪穴住居数の多い遺跡である。近接する林中原Ⅰ遺跡で竪穴住居１軒、林中原Ⅱ遺跡で竪穴住居２軒が検出されている。

２．竪穴住居

本調査で検出された縄文時代の竪穴住居は、81区北側に４軒、91区西側に４軒の、計８軒を検出した。この内、81区での２軒は、町教委による調査で検出された住居の続きであり、本調査ではその残る部分を調査した。

以下、各住居ごとに記載する。(表２遺構一覧表を参照)

81区１号住居　(第７・８図、PL．５・９)

本調査区と、町教委による調査区とに跨り、住居の東端を検出した。住居の主体は町教委調査区にあり、SI22として調査されている。

位置：81区の北西端に位置し、本住居の南東側に重複する81区２・３号住居、南側に81区４号住居が近接する。また、北東側４ｍほどに91区７号住居がある。

グリッド：81区Ⅰ－25

重複：本住居の東端南側に81区５号土坑と重複するが、遺構確認面の違いから(土坑は、１面調査時に検出)、新旧は本住居の方が旧い。

形状：本調査では住居東端の極一部を検出したが、町教委調査からすると、全体形状は概ね楕円形を呈し、長軸方向は北西を向く。

規模：住居東端の極一部のため、計測不能。

床面・壁：床面の状況は、本調査では不明。極一部を検出した住居東端壁は、緩やかに立ち上がる。

炉：本調査では検出されていないが、町教委調査で検出されている。

柱穴：町教委調査でも数基を検出しているようであり、本調査でも壁際に３基検出した。柱穴は概ね径20㎝、深さ８～23㎝を測る。

遺物：調査した住居の範囲が狭いことから、遺物の出土量は多くないが、住居の東端壁に図示した第７図１を含む土器が集中して出土した(PL．５－６)。図示した出土遺物(第７・８図)は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器が主体となっている。１は底部を欠く半完形の尖底深鉢形土器で、平口縁の肥厚した口縁部文様帯に撚糸側面圧痕で渦巻き文と横位に２条巡らせ、以下の胴部に０段多条のＬＲ縄とＲＬ縄で横位回転による羽状縄文を施す。２は平口縁の口唇部に、単位的な鋸歯状となる刻み状沈線を施し、口縁以下の胴部に横位回転による羽状縄文が施される。５の胴部には異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される等、花積下層Ⅰ式の特徴的な文様を施文する土器群である。また、４は平口縁の口縁下に細い隆帯を巡らせ、以下の胴部に横位回転による羽状縄文が施された塚田式土器である。

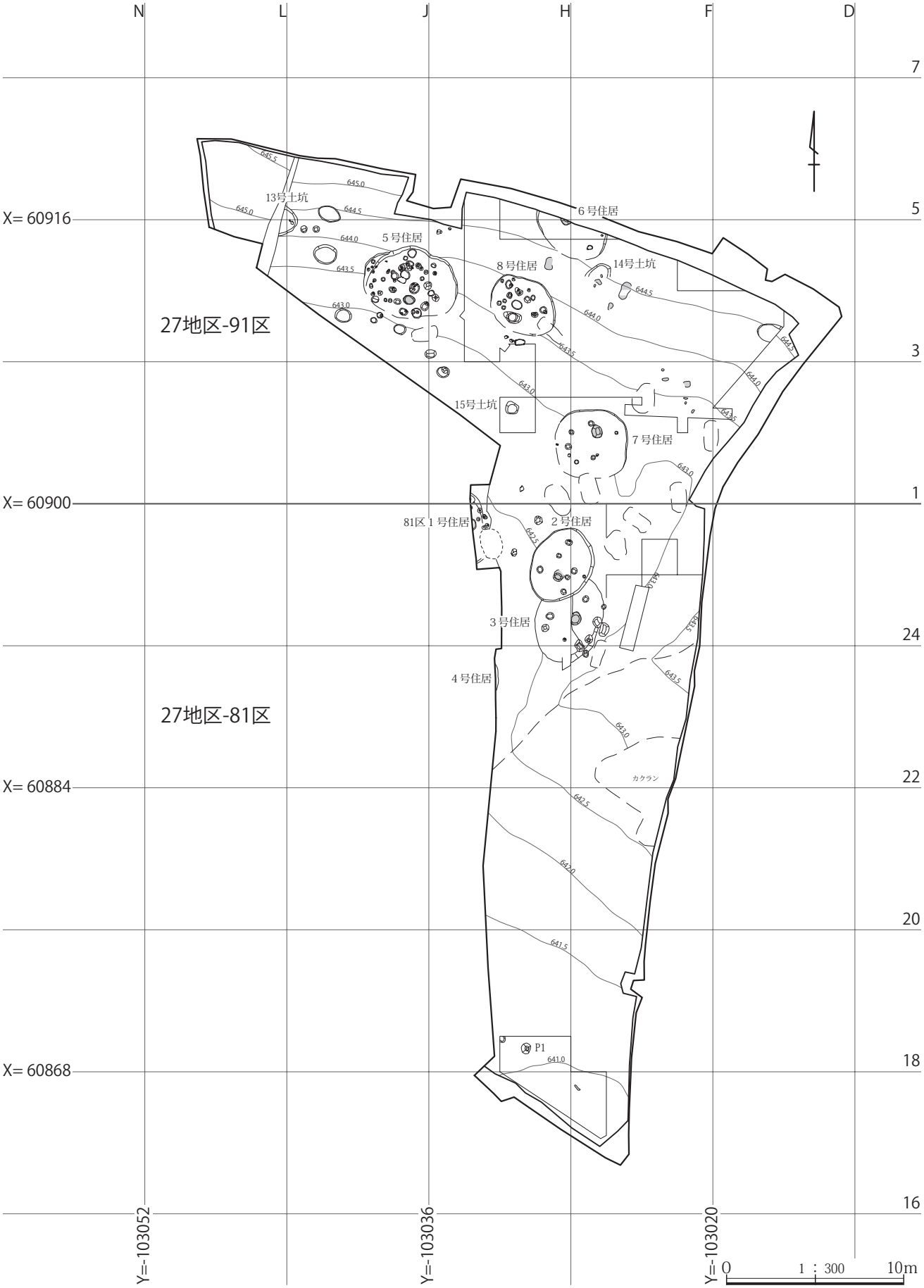
石器には、剥片石器の小型スクレイパー１点と、礫石器の表面に凹部を連ね、敲打による剥離をもつ15の磨石１点を図示した。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに剥片類６点がある。

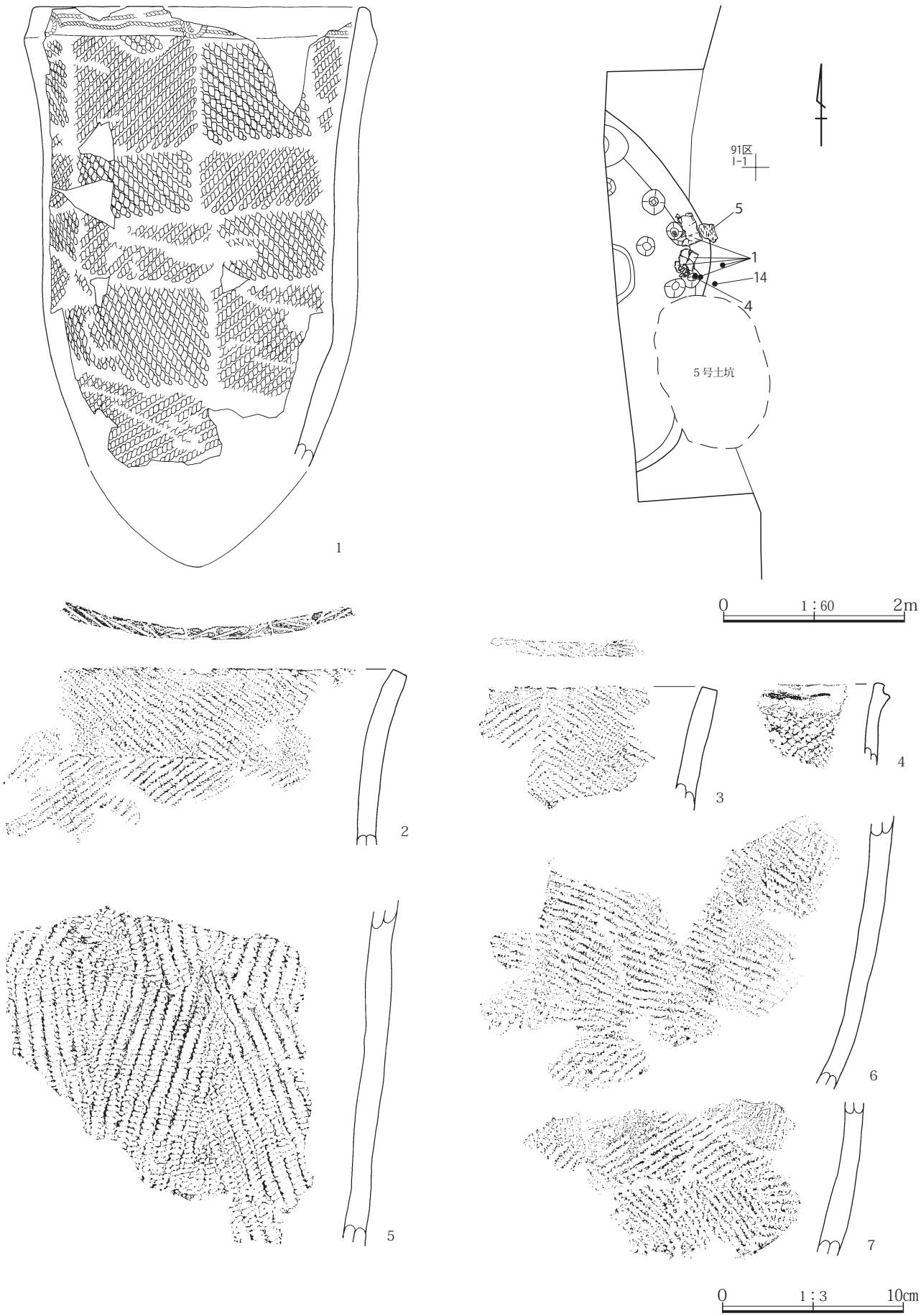
時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居であり、花積下層Ⅰ式土器と塚田式土器が供伴している。

81区２号住居　(第９・10図、PL．５・９・10)

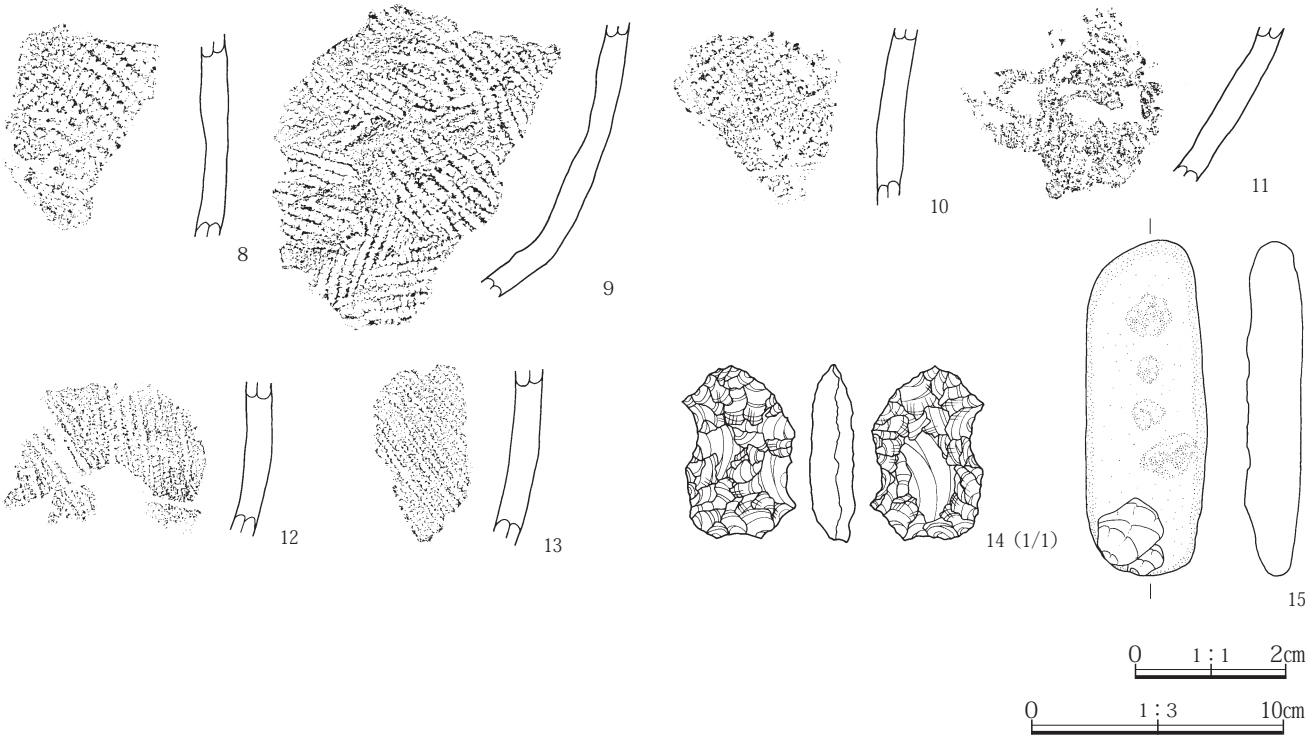
位置：81区の北端付近に位置する。81区３号住居と重複し、本住居の北西側に81区１号住居、南西側に81区４号住居が近接する。また、北側には91区７号住居が近



第６図　上原Ⅰ遺跡　調査地点縄文時代遺構全体図



第７図　81区１号住居　平面図、出土遺物（１）



第８図　81区１号住居　出土遺物（２）

接する。

グリッド：81区Ｇ・Ｈ－24・25

重複：本住居の南側を81区３号住居と重複するが、埋没土の土層断面による堆積状況確認、および床面位置が81区３号住居より本住居の方が低い位置にあることから、その新旧は本住居の方が新しい。

形状：楕円形を呈する。

規模：長軸4.45m、短軸3.46m、壁高0.14m

長軸方向：Ｎ－25°－Ｅ　　**床面積**：10.36㎡

埋没土：As-YPkを混入する黒褐色土を主体とするが、混入物の差異から５層に分層できた。

床面・壁：床面は基本土層Ⅵ層（黒褐色土）中にあり、ほぼ平坦で、中央付近がやや硬化ぎみ。壁は全体に緩やかに立ち上がる。

炉：長軸上の中央南寄りに位置し、浅い掘り込みをもつ地床炉である。掘り込み規模は、長さ50㎝、幅45㎝、深さ9㎝を測る。焼土化した範囲は、掘り込みよりもやや住居中央に寄る。

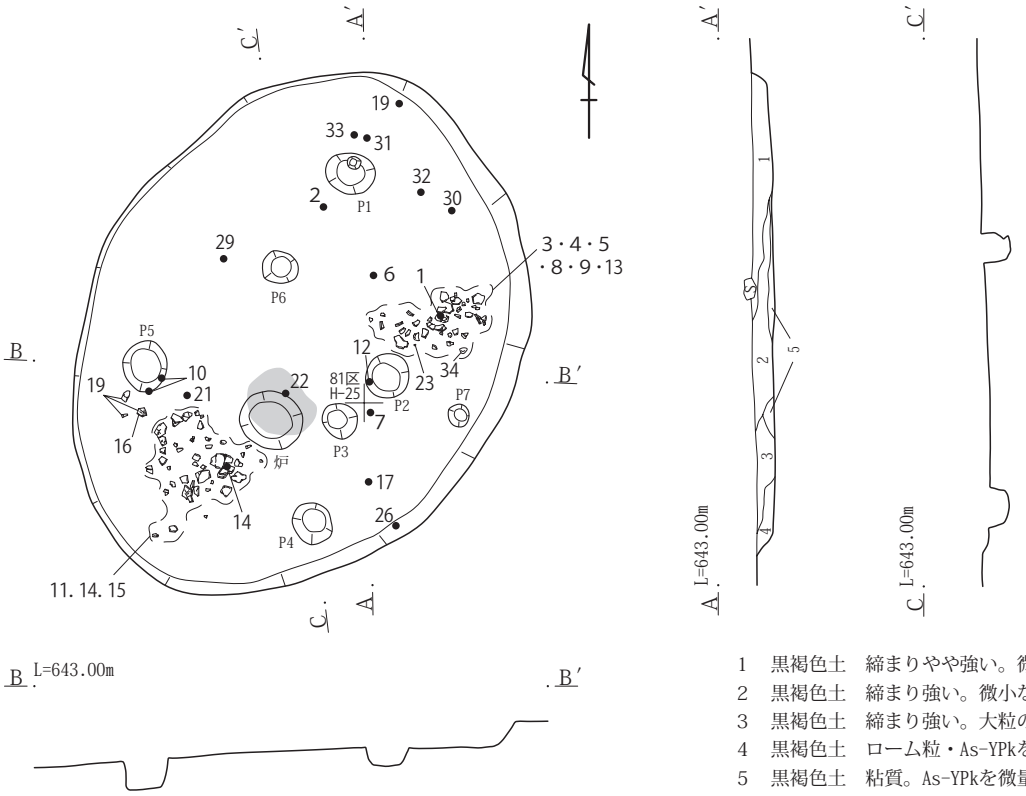
柱穴：柱穴は計７基を検出したが、P1・2・4～6の５基が主柱穴となる可能性が高い。主柱穴は概ね円形で、径28～35㎝、深さ15～30㎝を測る。

遺物：出土遺物の多くは、埋没土中からのものが主体を占め、住居の壁寄りにやや集中ぎみに出土した（PL．５－７）。図示した出土遺物（第９・10図）は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器が主体となっている。１は平口縁の肥厚ぎみな口縁部文様帯に撚糸側面圧痕で文様を描き、円形刺突を配する。２は波状口縁の口縁下が肥厚し、波頂下の屈曲部に瘤状の貼付をもつ。３～10には縦長な菱状構成となる縄文が施される等、花積下層Ⅰ式の特徴的な文様を施文する土器群である。また、18～20は二ツ木式土器で、口縁部文様に撚糸側面圧痕と刻み隆帯で蕨手状の主文様を描き、刺切文を充填し、口縁部文様帯下端に刻み隆帯を巡らせて文様帯区画し、瘤状貼付文を配する。胴部には幅狭なループ縄文を羽状に施している。

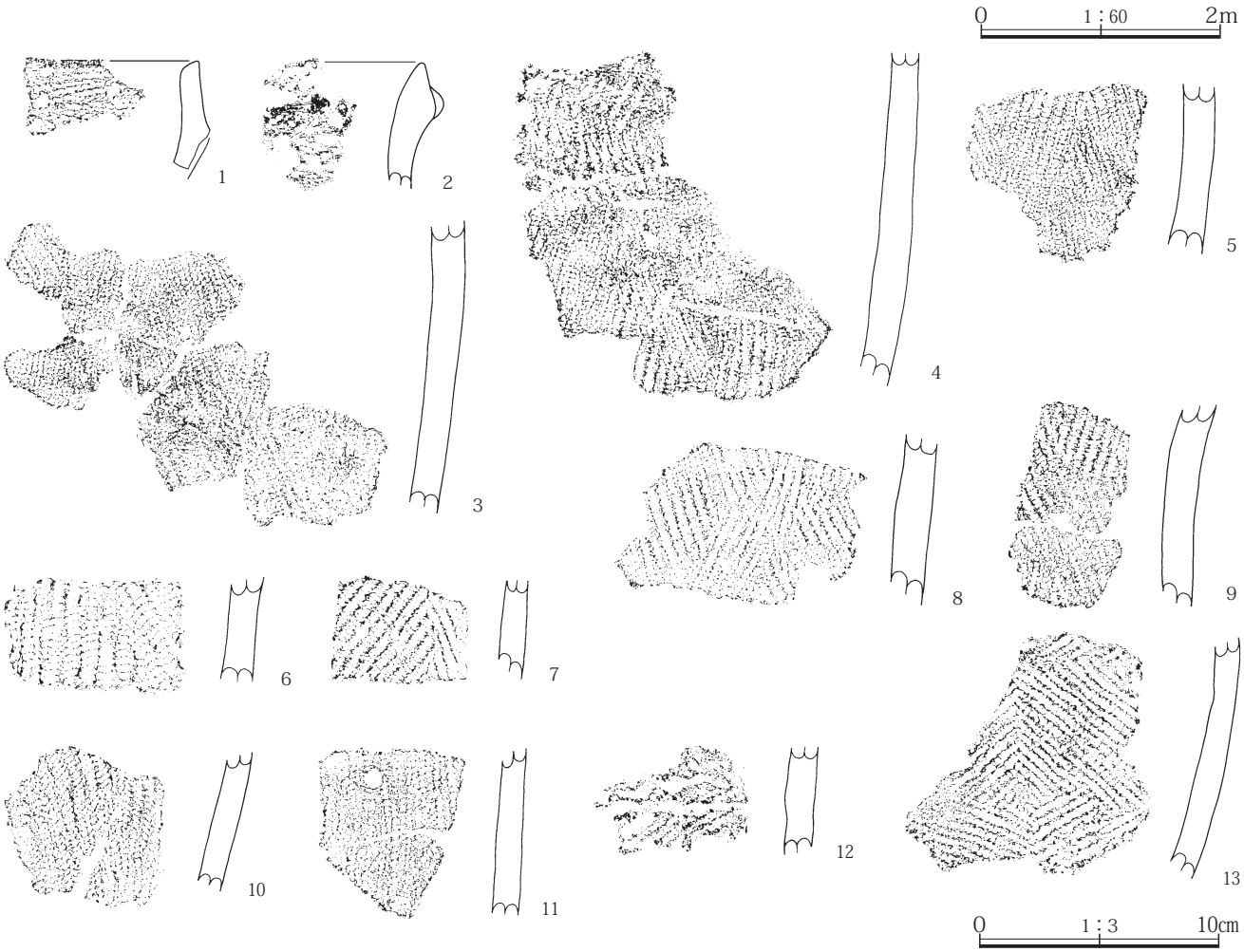
石器には、剥片石器の石鏃として21～26の凹基無茎鏃・有茎鏃の６点、27の石錐１点、28～30のスクレイパー３点、31の石箆１点、32の打製石斧１点、礫石器として33・34の磨石２点を図示した。また、写真掲載のみの石器として、35・36の石鏃（未製品を含む）がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに剥片類63点がある。

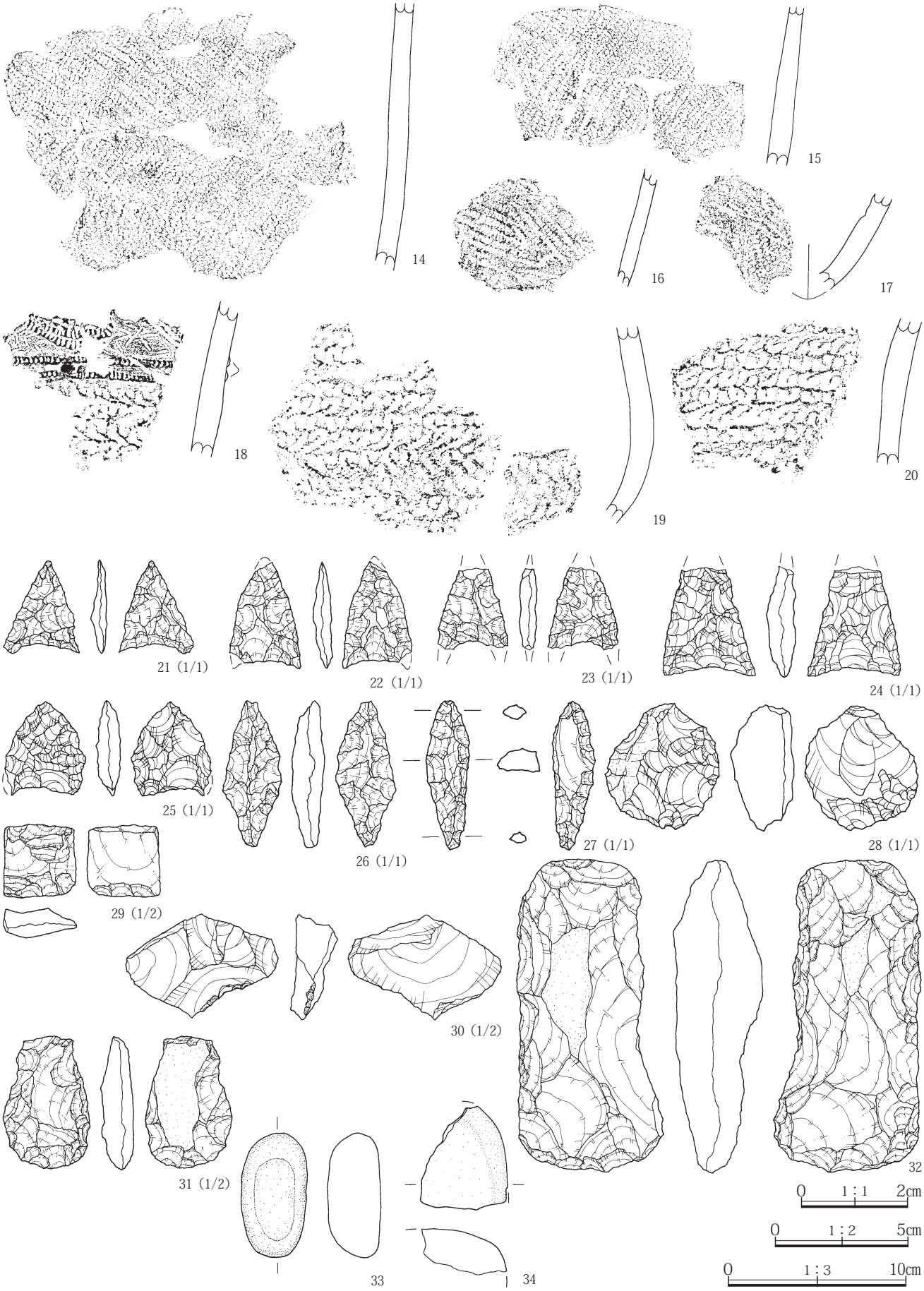
時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居であり、二ツ木式土器は混在と考えられる。



1　黒褐色土　締まりやや強い。微小なAs-YPkを多く含む。
2　黒褐色土　締まり強い。微小なAs-YPkを少量含む。
3　黒褐色土　締まり強い。大粒のAs-YPkを少量含む。
4　黒褐色土　ローム粒・As-YPkを含む。
5　黒褐色土　粘質。As-YPkを微量含む。



第９図　81区２号住居　平・断面図、出土遺物（１）



第10図　81区２号住居　出土遺物（２）

81区３号住居　（第11図、PL．６・11）

当初の遺構確認では、住居プランを検出できなかったが、その後に焼土を検出し、再度の確認でプランの一部を検出したことから住居と認定した。検出できたのは、住居東半の床面と南東壁である。

位置：81区の北端付近に位置する。81区２号住居と重複し、本住居の北西側に81区１号住居、南西側に81区４号住居が近接する。

グリッド：81区Ｇ・Ｈ－23・24

重複：本住居の北側を81区２号住居と重複するが、81区２号住居の土層断面、および床面位置が81区２号住居より本住居の方が高い位置にあることから、その新旧は本住居の方が旧い。

形状：楕円形を呈する。

規模：長軸4.95m、短軸3.59m、壁高0.13m

長軸方向：Ｎ－19°－Ｅ　　**床面積**：11.68㎡

床面・壁：東半で確認できたが、明確な硬化面は確認できなかった。床面は基本土層Ⅵ層(黒褐色土)中にあり、平坦ぎみであるが、僅かに西傾斜する。南東側で確認できた壁は、傾斜をもって立ち上がる。

炉：住居中央付近に位置し、浅い掘り込みをもつ地床炉である。掘り込み規模は、長さ72㎝、幅53㎝、深さ9㎝を測る。焼土化範囲は、ほぼ掘り込み上に重なる。

柱穴：柱穴は住居内に計７基を検出したが、P1～5の５基が主柱穴となる可能性が高い。主柱穴は概ね円形で、径40㎝前後、深さ15～30㎝を測る。

遺物：住居の遺存状況が悪いことから、出土遺物は少ない。図示した出土遺物(第11図)は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器が殆どである。１～４は胴部に条が縦方向となる縄文や、胴部上半に横位回転の縄文と下半に条が縦方向となる縄文が施される土器で、花積下層Ⅰ式の土器群である。

石器には、礫石器の中央に凹部をもつ磨石１点を図示した。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに剥片類２点がある。

時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

81区４号住居　（第12図、PL．６・11）

本調査区と、町教委による調査区とに跨り、住居の東端を検出した。住居の主体は町教委調査区にあり、SI27として調査されている。

位置：81区北側の西端に位置し、本住居の北東側に重複する81区２・３号住居が近接する。

グリッド：81区Ⅰ－23

形状：本調査では住居東端の極一部のみを検出したが、町教委調査からすると、全体形状は不整楕円形を呈し、長軸方向は北北西を向く。

規模：(本調査分)南北方向1.45m、東西方向0.3m

床面：確認できなかった。

遺物：調査した住居の範囲が極めて狭いことから、遺物の出土量は少ない。図示した出土遺物(第12図)は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器である。１は平口縁の口縁下に、細い縄の回転絡条体を斜位・横位・縦位に施し、２～４も同様である。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに剥片類１点がある。

時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

91区５号住居　（第13～15図、PL．４・11・12）

位置：91区の中央西寄りに位置し、本住居の東側２mに91区８号住居、東北東側６mに６号住居、南東側９mに91区７号住居がある。

グリッド：91区Ⅰ・Ｊ－３・４

形状：南半の壁は確認できなかったが、住居に伴うと考えられる柱穴から、やや不整な楕円形の住居と推測される。

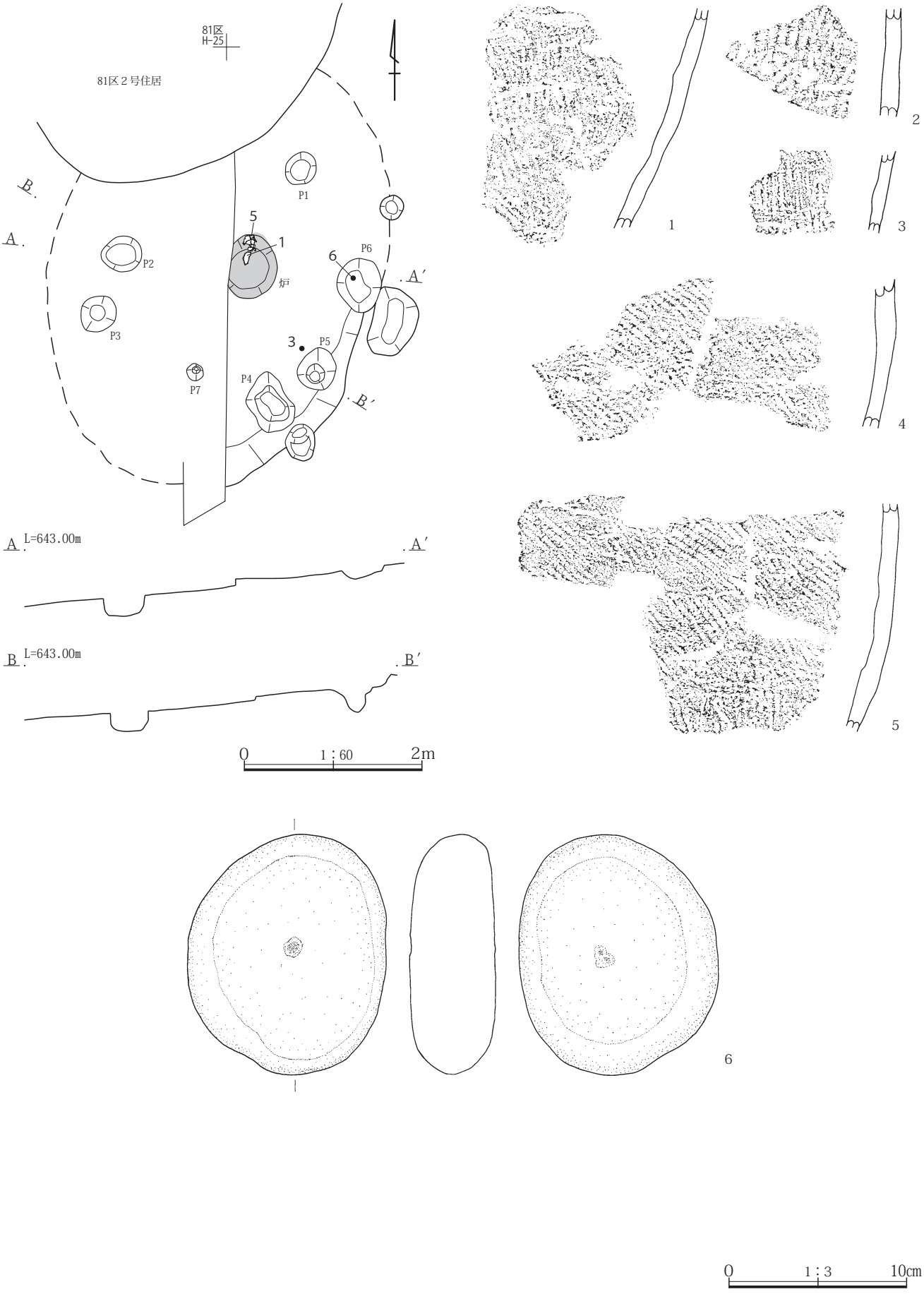
規模：長軸5.43m、短軸(4.14)m、壁高0.62m

長軸方向：Ｎ－69°－Ｗ　　**床面積**：(15.22) ㎡

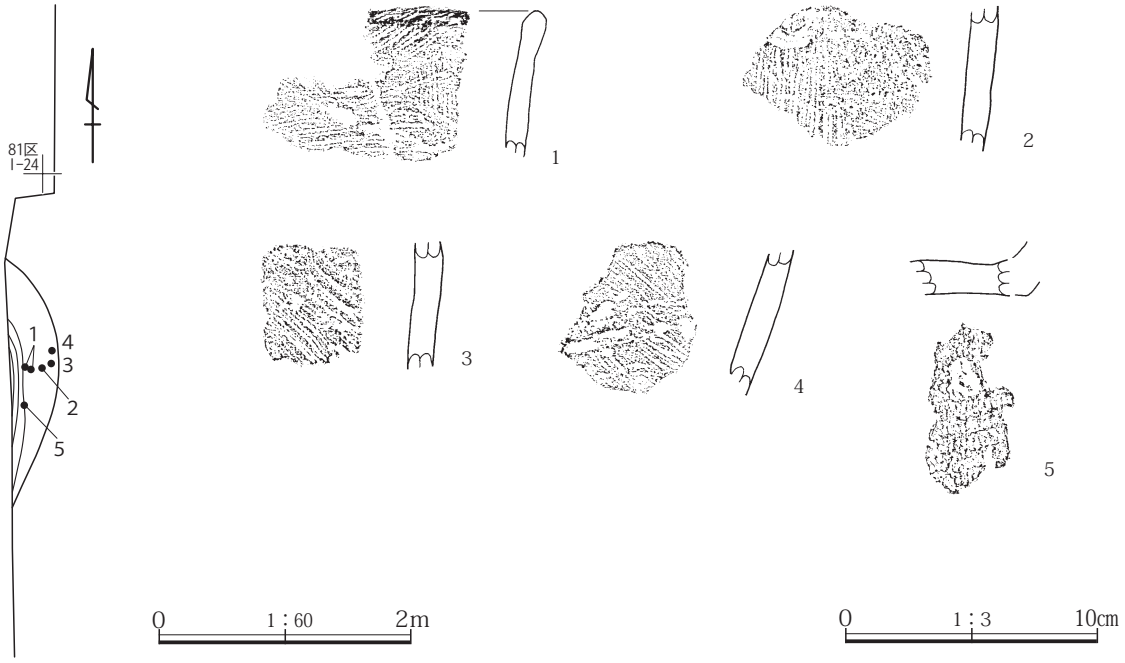
埋没土：As-YPkを混入する黒褐色土を主体とし、混入物の差異から３層に分層できた。

床面・壁：床面はローム土中にあり(南側は、基本土層Ⅵ層の黒褐色土中)、ほぼ平坦で、住居中央から炉周辺にかけて硬化している。南側の壁は確認できなかったが、斜面山側となる北側壁は、土層断面からすると37㎝以上のかなり高い壁であることが推測できる。

炉：住居の長軸上中央南東寄りに位置し、浅い掘り込



第11図　81区３号住居　平・断面図、出土遺物



第12図　81区４号住居　平面図、出土遺物

みをもつ地床炉である。掘り込み規模は、長さ60㎝、幅49㎝、深さ８㎝を測る。焼土化した範囲は、ほぼ掘り込み上に重なる。また、長軸上の中央東寄りには、P21とした同規模の掘り込みが有り、焼土の検出はないが、住居内の位置から地床炉であった可能性をもつ。

柱穴：柱穴は数多く検出した。その内、P1～8の８基が主柱穴となる可能性が高く、亀甲形状の配置を想定でき、概ね円形で径23～36㎝、深さ10～40㎝を測る。また、P21を地床炉であったと想定すると、他の柱穴の多さから、住居の建て替えの可能性もある。

遺物：本調査の中で最も遺物の出土量が多い住居である。しかし、出土遺物の大半は埋没土中からのもので、床面直上遺物には、住居長軸上の中央西寄りに平坦な大型礫が、長軸上の中央東寄りに第15図47の石皿が出土している。図示した出土遺物（第13～15図）は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器が殆どである。１は平口縁の口縁部文様に撚糸側面圧痕で文様を描き、４～11は胴部に縦長な菱状構成となる縄文が、13～21は羽状縄文が施される等、花積下層Ⅰ式の特徴的な文様を施文する土器群である。

石器には、剥片石器の石鏃として23～34の凹基無茎鏃・平基無茎鏃の12点（未製品を含む）、35・36の石錐２点、37・38の石匙２点、39のスクレイパー１点、40の使用痕剥片、41・42の打製石斧２点、礫石器として43～45の磨石３点、46の凹石１点、47の表裏面に多孔をもつ石皿１点を図示した。また、写真掲載のみの石器として、48～53の石鏃６点（未製品を含む）がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片６点、剥片類619点（内、黒曜石が529点と多数を占める）と、本調査の中では最も多量に出土している。

時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

91区６号住居　（第16・17図、PL．５・13）

位置：91区北端中央の調査範囲境に位置し、本住居の南西側２ｍに91区８号住居、西南西側６ｍに91区５号住居、南側8.5ｍに91区７号住居がある。

グリッド：91区Ｇ－４、Ｈ－４・５

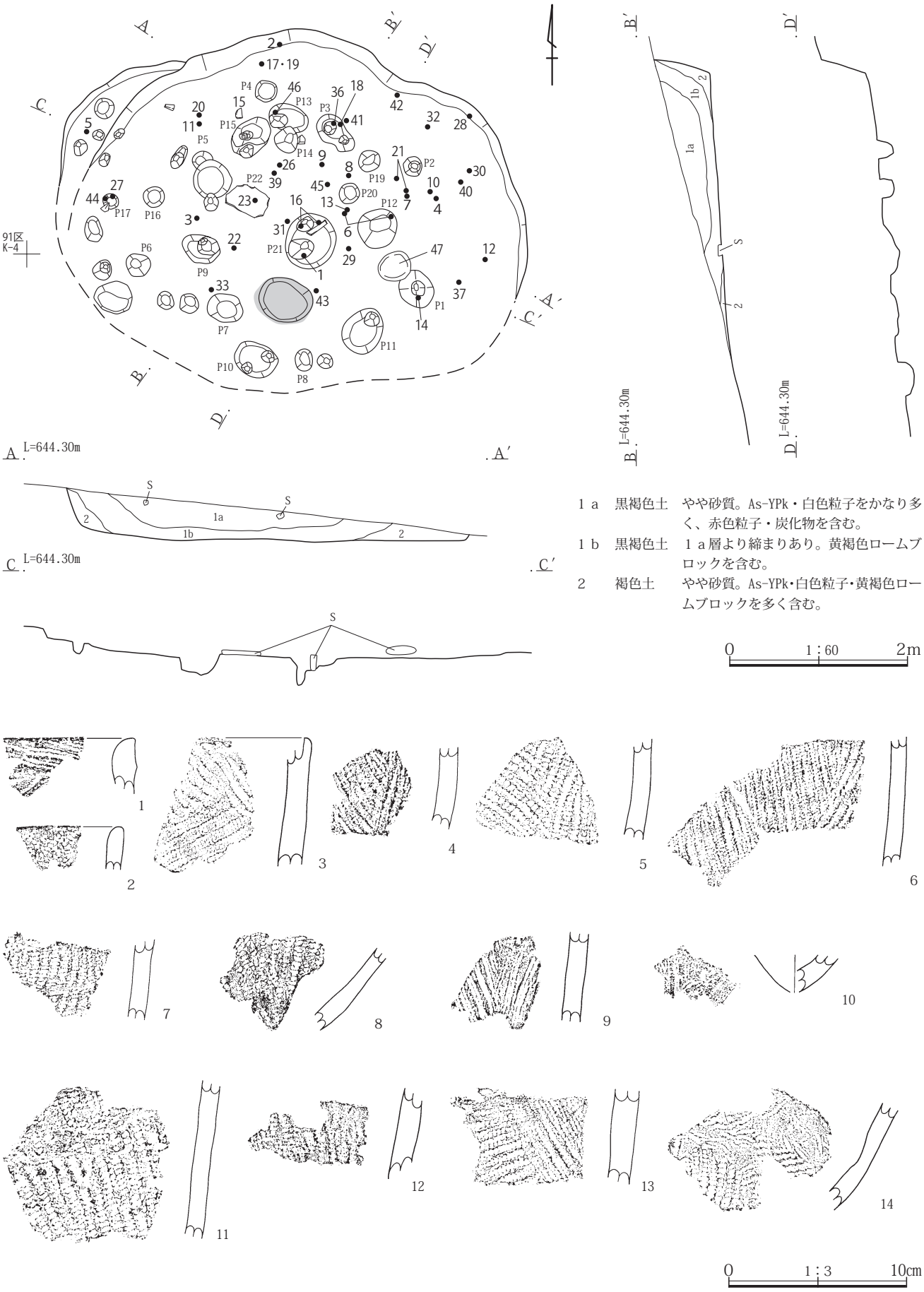
形状：住居の北半は調査区外にあり、南側の壁は確認できなかったが、検出された壁のあり方から、楕円形の住居と推測される。

規模：長軸（4.19）ｍ、短軸（1.9）ｍ、壁高0.37ｍ

長軸方向：Ｎ－39°－Ｗ　　**床面積**：（6.19）㎡

埋没土：As-YPkを混入する黒色土と黒褐色土を主体とするが、混入物の差異から７層に分層できた。

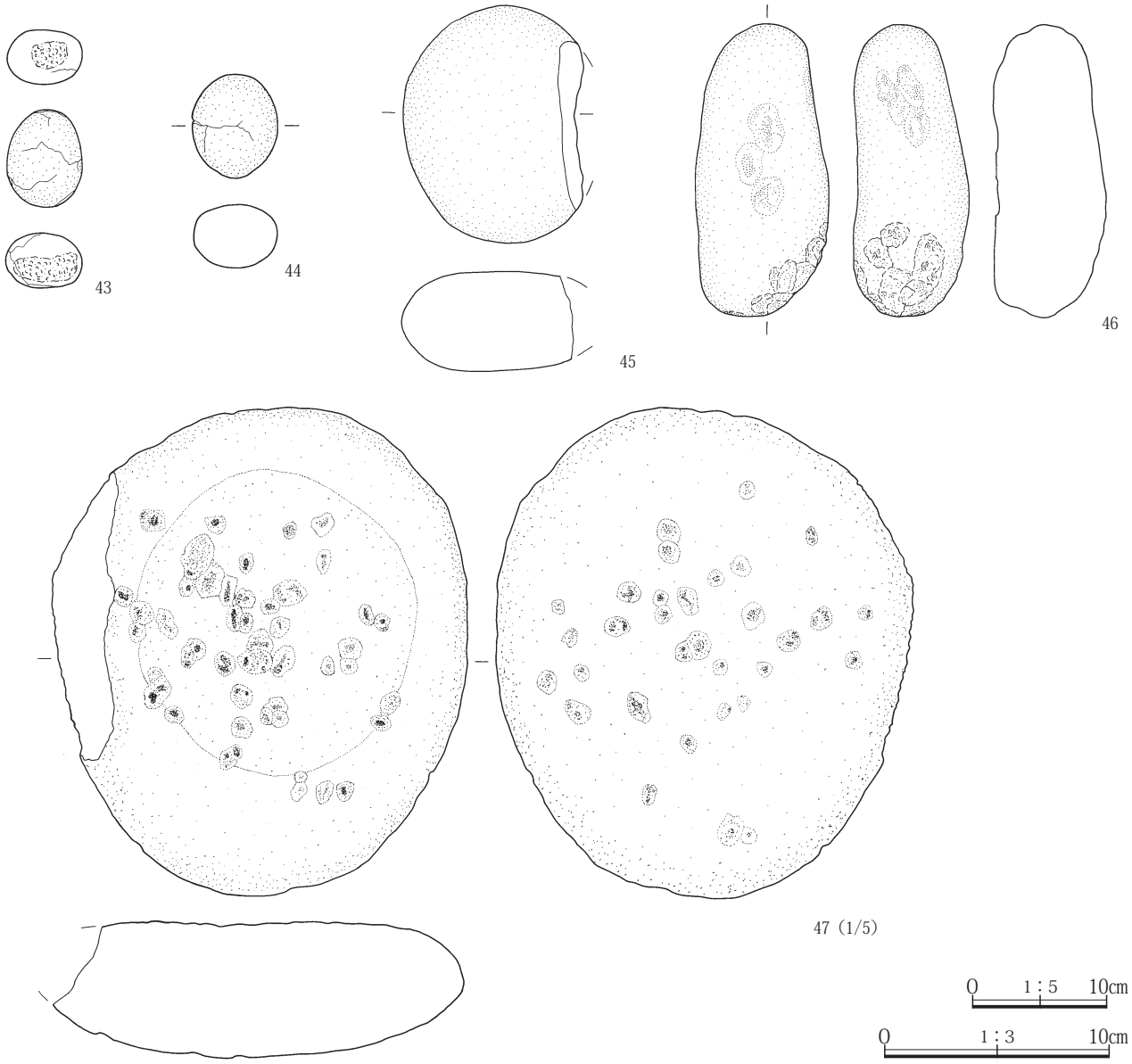
床面・壁：床面は基本土層Ⅵ層（黒褐色土）中にあり、ほ



１ａ　黒褐色土　やや砂質。As-YPk・白色粒子をかなり多く、赤色粒子・炭化物を含む。
１ｂ　黒褐色土　１ａ層より締まりあり。黄褐色ロームブロックを含む。
２　　褐色土　やや砂質。As-YPk・白色粒子・黄褐色ロームブロックを多く含む。

第13図　91区５号住居　平・断面図、出土遺物（１）

第14図　91区５号住居　出土遺物（２）



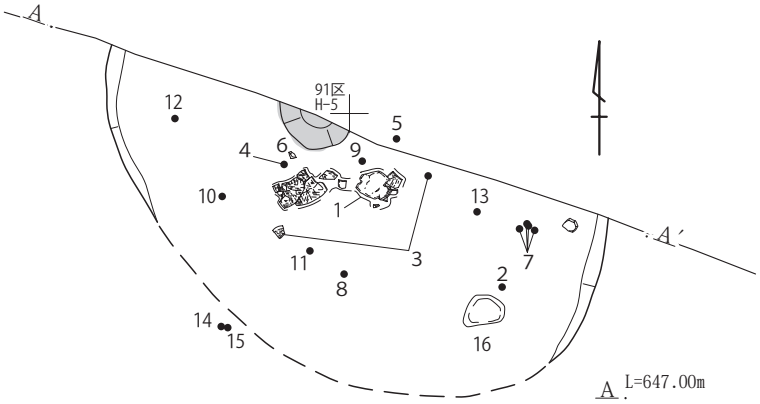
第15図　91区５号住居　出土遺物（３）

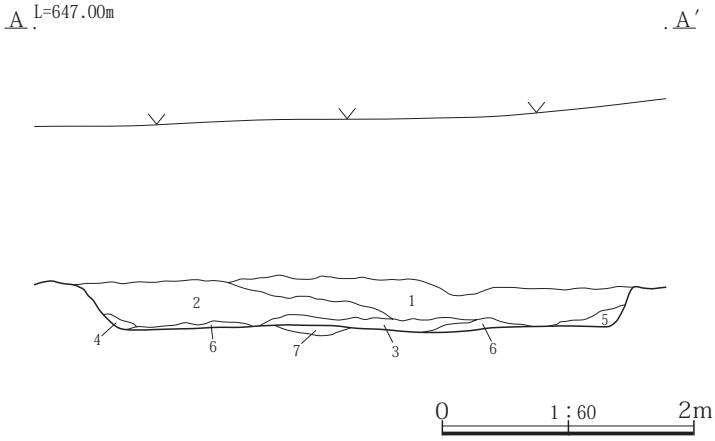
ぼ平坦で、住居中央から炉周辺にかけて硬化している。南側の壁は確認できなかったが、斜面山側となる北側壁は、土層断面からすると37cm以上のかなり高い壁であることが推測できる。

炉：住居の長軸上中央よりやや西寄りにあり、浅い擂り鉢状を呈する地床炉である。炉の規模は、径60cm前後の円形と推測され、深さ６cmを測る。炉内は被熱し、焼土化している。

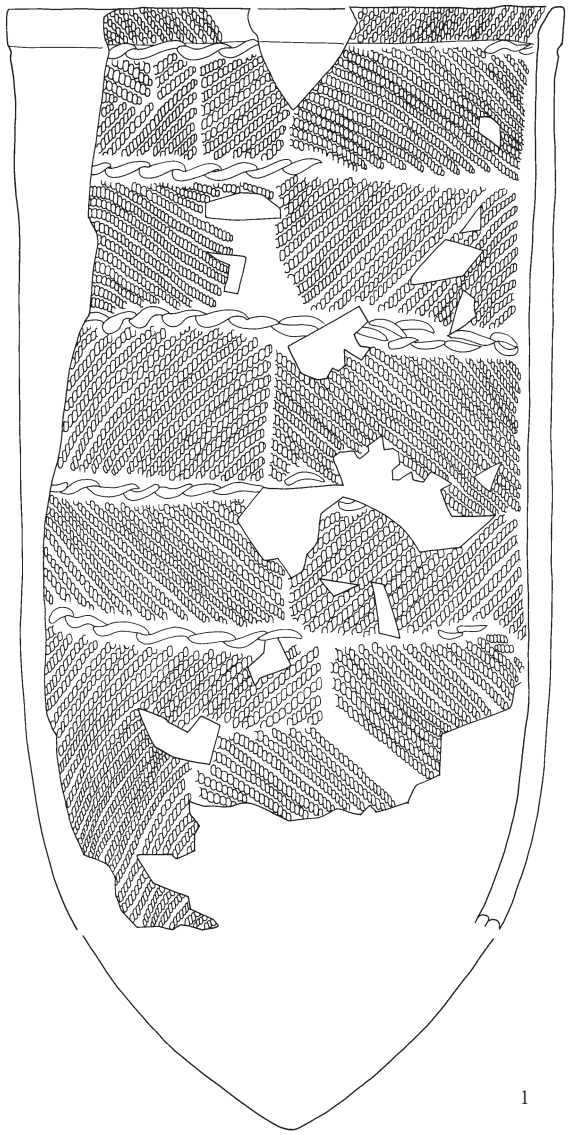
遺物：出土遺物はあまり多くない。住居全体に散漫な出土を見せるが、炉の南側の床面近くから第16図１の半完形土器が出土している（PL．５－２）。また、住居の長軸上南東側には、床面直上に第17図16の石皿が出土している（PL．５－１）。図示した出土遺物（第16・17図）は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器が殆どである。１は底部を欠く半完形の尖底深鉢形土器で、平口縁の口縁下が肥厚し、口縁以下に横位回転による羽状縄文が施される。２は小波状口縁の口縁下が肥厚し、波頂下に瘤状の貼付をもち、胴部に羽状縄文を施す。３は平口縁の肥厚した口縁部文様に回転絡条体を斜位に施し、胴部に横位回転による羽状縄文を施す。さらに、４～６は胴部に縦長な菱状構成となる縄文が施される等、花積下層Ⅰ式の特徴的な文様を施文する土器群である。

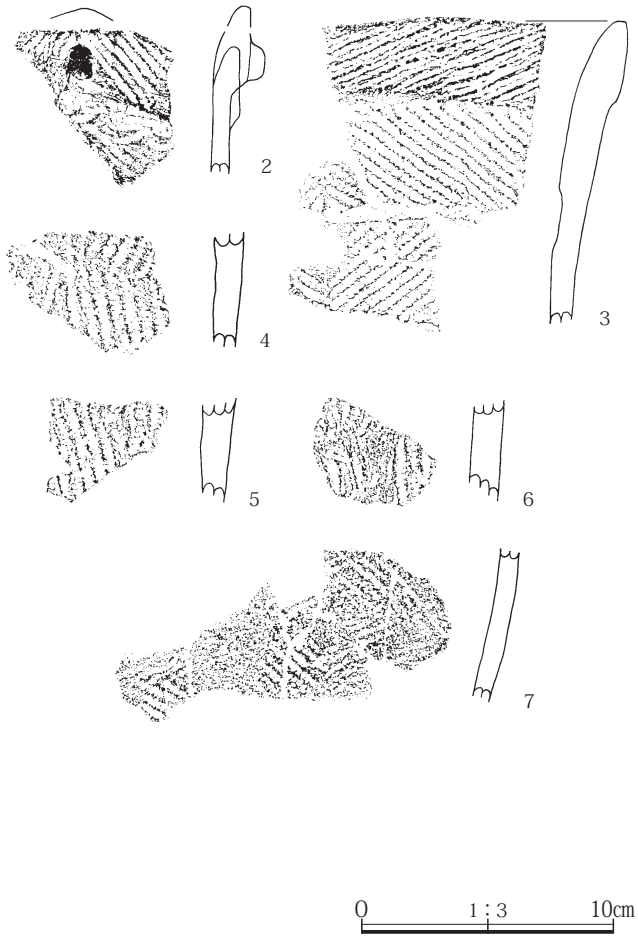
石器には、剥片石器の石鏃として８～11の凹基無茎鏃４点、12～14のスクレイパー３点、礫石器として15



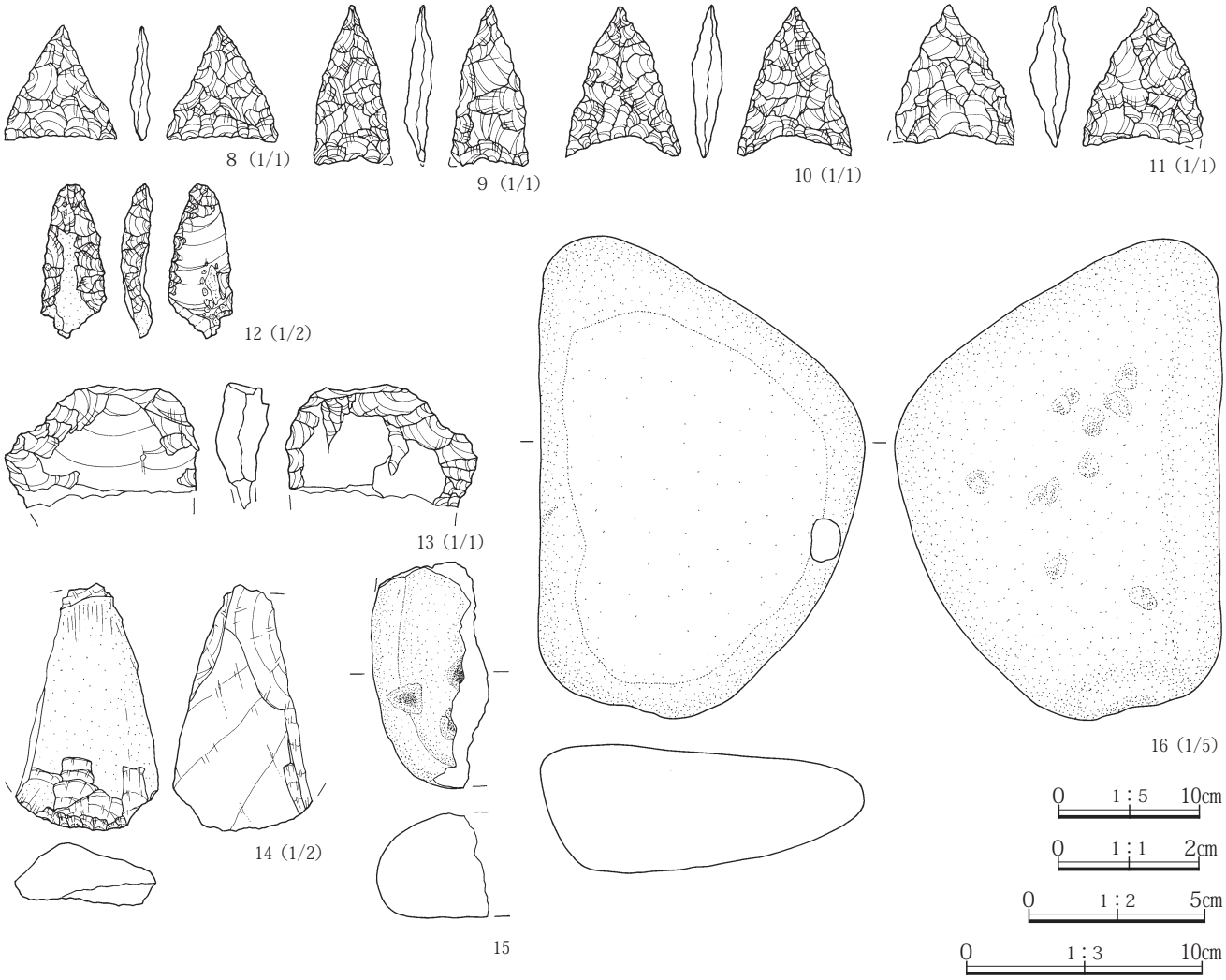


1　黒色土　大粒のAs-YPk・炭化物を含む。
2　黒褐色土　やや明るく、ローム粒を少量、大粒のAs-YPk・炭化物を含む。
3　黒褐色土　粘質。大粒のAs-YPkを少量含む。
4　暗褐色土　粘質。ロームブロックを含む。
5　黒色土　粘質。大粒のAs-YPkを少量含む。
6　黒色土　粘質。大粒のAs-YPkを微量含む。
7　赤褐色土　焼土ブロックが主体。





第16図　91区６号住居　平・断面図、出土遺物（１）



第17図　91区６号住居　出土遺物（２）

の凹部をもつ磨石１点、16の裏面に多孔をもつ石皿１点を図示した。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに剥片類69点（内、黒曜石が62点と多数を占める）がある。

時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

91区７号住居　（第18図、PL．５・14）

位置：91区南側に位置し、本住居の北北西側５mに91区８号住居、北西側8.5mに91区５号住居、南側３mに81区２号住居がある。

グリッド：91区Ｇ・Ｈ－１・２

重複：本住居の南側に91区６号土坑と重複するが、遺構確認面の違いから（土坑は、１面調査時に検出）、新旧は本住居の方が旧い。

形状：南西半の壁は確認できなかったが、住居に伴うと考えられる柱穴と確認できた壁の状況から、かなり角の丸い隅丸方形の住居と推測される。

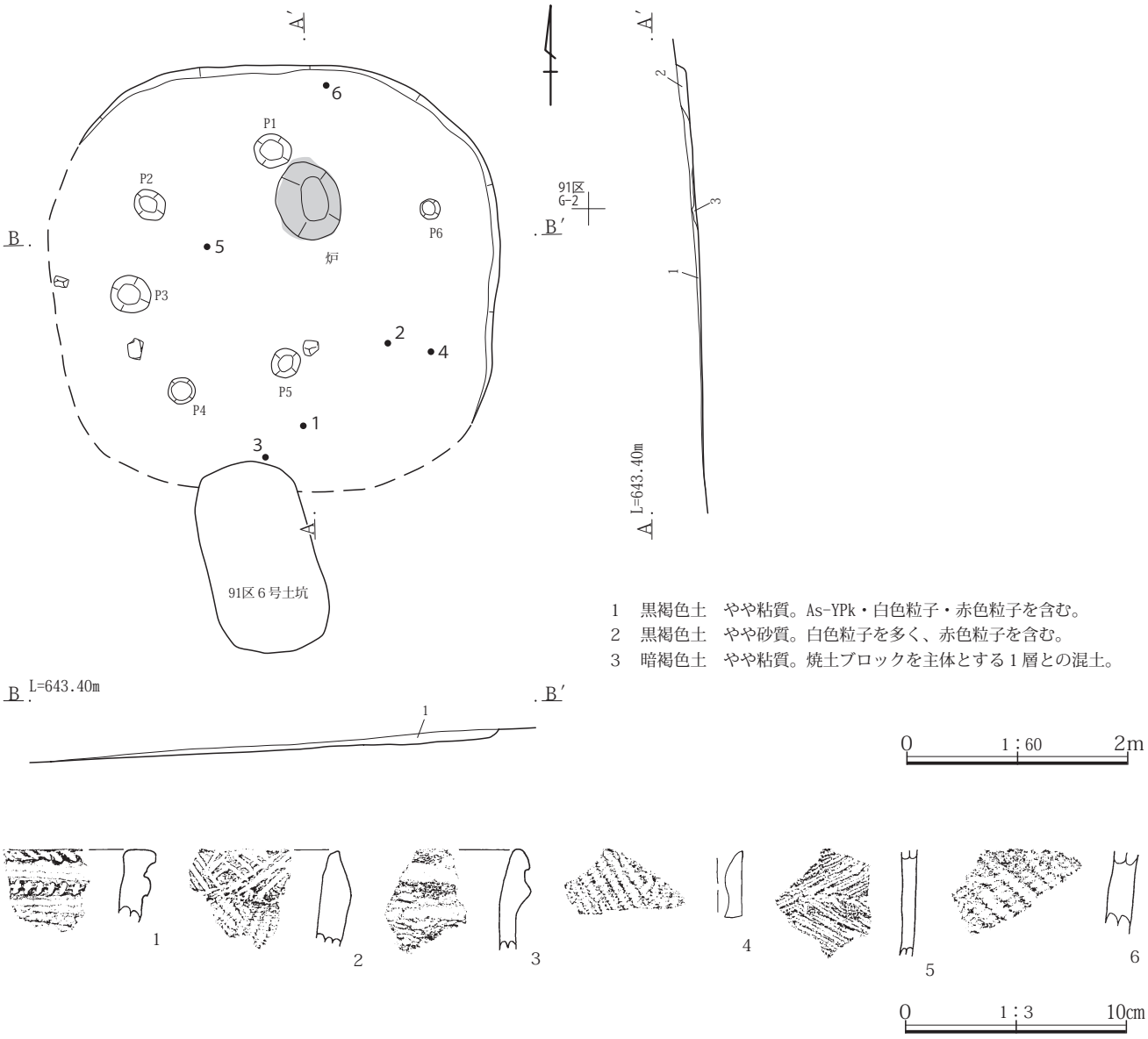
規模：長軸（4.10）m、短軸（3.88）m、壁高0.10m

長軸方向：Ｎ－88°－Ｅ　　**床面積**：13.19㎡

埋没土：As-YPkを含む黒褐色土を主体とするが、混入物の差異から３層に分層できた。

床面・壁：床面は基本土層Ⅵ層（黒褐色土）中にあり、ほぼ平坦で、炉の周辺がやや硬化している。南西側の壁は確認できなかったが、斜面山側となる北東側壁は、傾斜をもって立ち上がる。

炉：住居の中央よりやや北東寄りにあり、浅い擂り鉢状の掘り込みをもつ地床炉である。掘り込み規模は、長さ64㎝、幅53㎝、深さ10㎝を測る。焼土化した範囲は、ほぼ掘り込み上に重なる。



第18図　91区７号住居　平・断面図、出土遺物

柱穴：柱穴は計６基を検出した。このP1～6は主柱穴となる可能性が高い。概ね円形で径20～35cm、深さ７cm前後と浅い。

遺物：出土遺物は少なく、住居全体に散漫な出土。図示した出土遺物(第18図)は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器である。１は平口縁の口縁部文様に刻み状沈線をもつ隆帯巡らせ、糸側面圧痕と刺突列を組ませて文様を描く。２は平口縁の肥厚ぎみな口縁部文様に沈線で複合鋸歯状の文様を描き、胴部に縦長な菱状構成となる縄文を施す。３は平口縁の口縁部に隆帯を巡らせ、隆帯下に撚糸側面圧痕で口縁部文様が施される等、花積下層Ⅰ式の特徴的な文様を施文する土器群である。

石器は図示していない。写真掲載のみの石器として、７～９の石鏃３点(未製品を含む)がある。

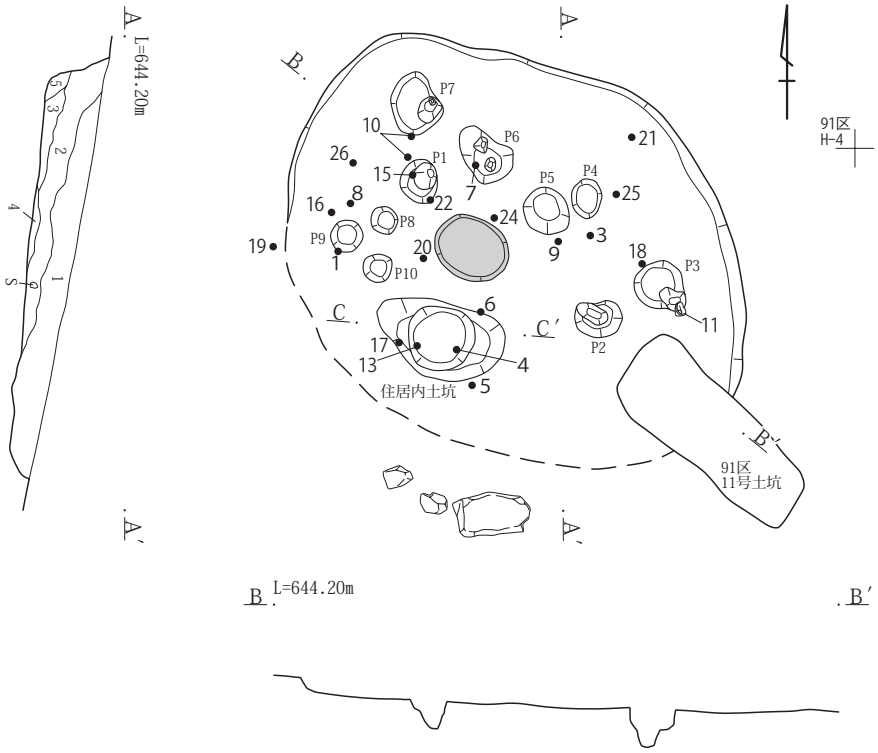
未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片３点、剥片類28点(内、黒曜石は19点)がある。

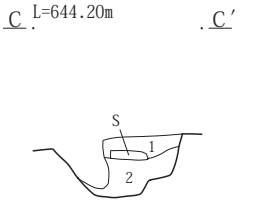
時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

91区８号住居　(第19・20図、PL．５・14)

位置：91区のほぼ中央に位置し、本住居の西側２mに91区５号住居、北東側２mに91区６号住居、南南東側５mに91区７号住居がある。

グリッド：91区Ｈ・Ⅰ－３・４

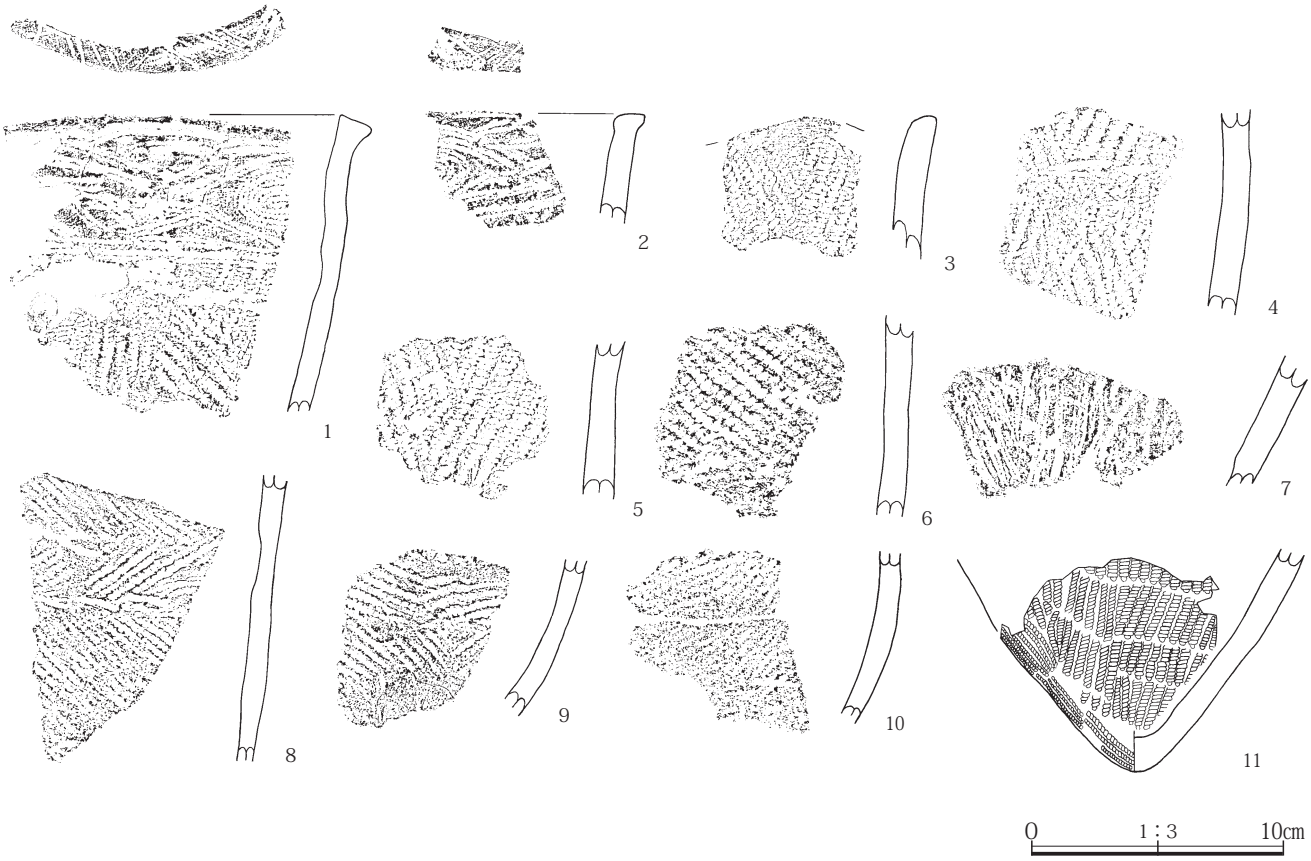




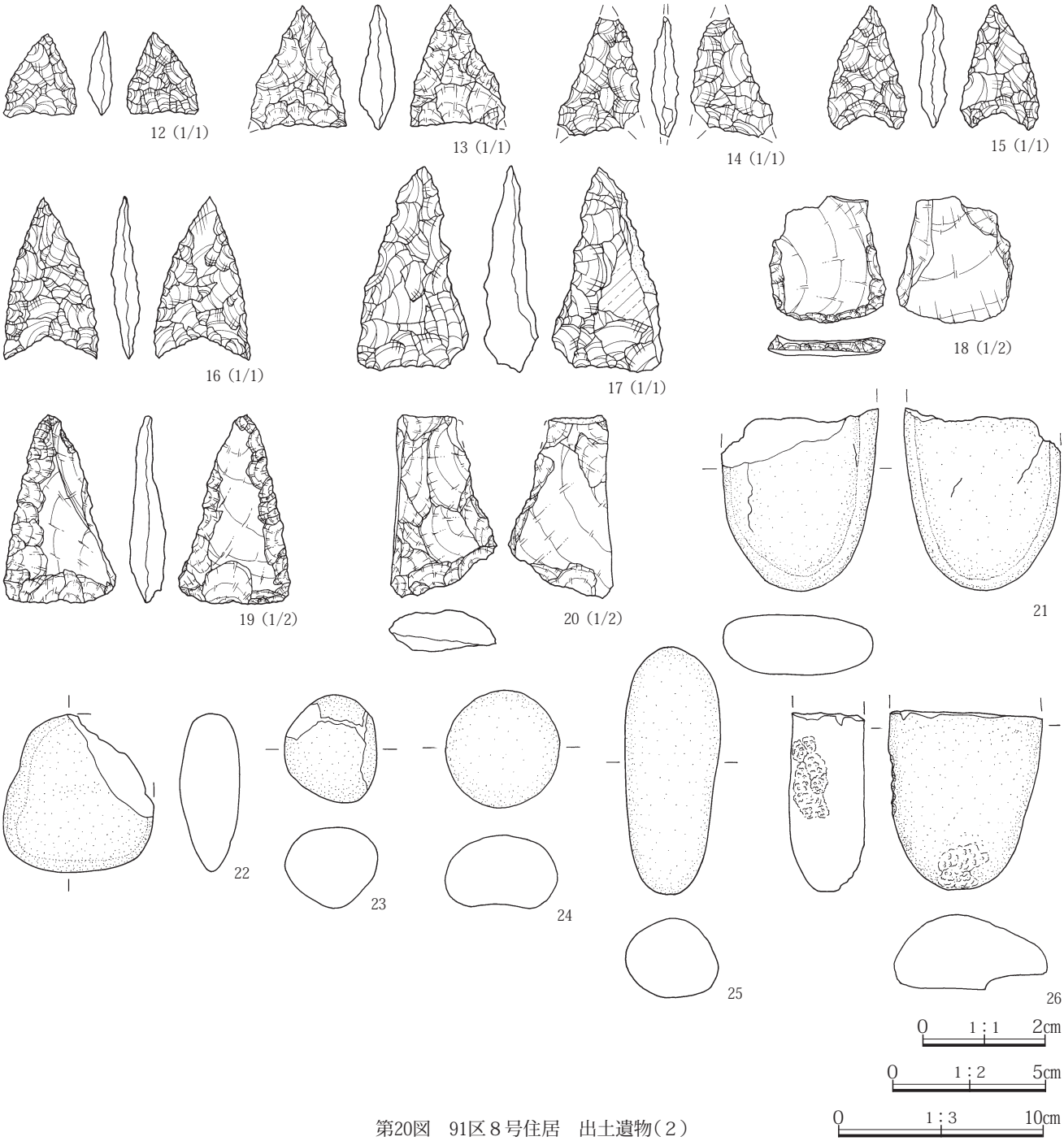
C－C’
1　黒褐色土　大粒のAs-YPk・ローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロックを多く含む。

A－A’
1　黒褐色土　締まり強い。大粒のAs-YPkを多く含む。
2　黒褐色土　締まり強い。大粒のAs-YPkを少量含む。
3　暗褐色土　微小なAs-YPkを少量含む。
4　暗褐色土　粘質。As-YPkを微量含む。
5　褐色土　　ローム粒・As-YPkを含む。

0　1：60　2m



第19図　91区８号住居　平・断面図、出土遺物（１）



第20図　91区８号住居　出土遺物（２）

重複：本住居の南側に91区11号土坑と重複するが、遺構確認面の違いから（土坑は、１面調査時に検出）、新旧は本住居の方が旧い。

形状：南西側の壁は確認できなかったが、住居に伴うと考えられる柱穴と確認できた壁の状況から、楕円形の住居と推測される。

規模：長軸(4.09)m、短軸(3.17)m、壁高0.50m

長軸方向：Ｎ－51°－Ｗ　　**床面積**：9.23㎡

埋没土：As-YPkを含む黒褐色土を主体とするが、混入物の差異から５層に分層できた。

床面・壁：床面は基本土層Ⅵ層（黒褐色土）中にあり、ほぼ平坦で、住居中央から炉周辺が硬化している。南西側の壁は確認できず、北東側の壁もあまり残りは良くなかったが、土層断面からすると斜面山側となる北側壁は壁高50cmを測り、傾斜をもって立ち上がる。

炉：住居の長軸上中央よりやや西寄りにあり、浅い掘り込みをもつ地床炉である。掘り込み規模は、長さ61cm、幅49cm、深さ９cmを測る。焼土化した範囲は、ほぼ掘り

込み上に重なる。

柱穴：柱穴は計10基を検出した。この内、P1・2は主柱穴の一部となる可能性が高いが、他の柱穴は不明。概ね円形で径25～40㎝、深さ９～19㎝を測る。

住居内土坑：炉の南西側に土坑が検出されている。楕円形状を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.6m、深さ51㎝を測る。第１面調査時には確認できず、第２面調査の本住居調査時に確認できたことから、住居内土坑として扱ったが、本住居に伴うかは不明。

遺物：出土遺物はあまり多くなく、住居全体に散漫な出土。図示した出土遺物(第19・20図)は、土器は前期初頭の花積下層Ⅰ式土器が殆どである。１・２は平口縁の口唇部に鋸歯ないし複合鋸歯状の文様を描き、口縁部文様に撚糸側面圧痕で菱状構成させ、菱中央に撚糸側面圧痕で渦巻き文を配する。また、口縁部文様下端には撚糸側面圧痕を巡らせて口縁部文様帯を区画し、胴部に縦長な菱状構成となる縄文を施す土器で、典型的な花積下層Ⅰ式である。３～11も同様な土器群で、11は尖底となる底部である。

石器には、剥片石器の石鏃として12～17の凹基無茎鏃６点(未製品を含む)、18～20のスクレイパー３点(19は、抉入部が弱い石匙？)、礫石器として21～25の磨石５点、26の敲石１点を図示した。また、写真掲載のみの石器として、27～30の石鏃４点(未製品を含む)がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片３点、剥片類130点(内、黒曜石が64点、頁岩類57点と多数を占める)がある。

時期：出土遺物から、縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

３．土坑

検出された縄文時代の土坑は、91区に点在する３基を数えるのみである。

以下､各土坑ごとに記載する。(表２遺構一覧表を参照)

91区13号土坑　(第21図、PL．７)

位置：91区の西端付近に位置し、南東側４mに91区５号住居がある。

グリッド：91区Ｋ・Ｊ－４・５

形状：西半は検出できなかったが、円形を呈すると思われる。

規模：径1.76m、深さ0.60m

埋没土は、上位に３層のAs-YPkを含む黒褐色土を主体とし、下位に４層の暗褐色土が堆積する。底面は概ね円形で、緩く南傾斜するが平坦。埋土中に礫が含まれるものの、遺物は出土していない。第２面調査時の検出であることから、縄文時代の土坑と考えられる。

91区14号土坑　(第21図、PL.15)

位置：91区の北側中央付近に位置し、北西側に91区６号住居、南西側に91区８号住居が近接する。また、周囲に１～６号焼土がある。

グリッド：91区Ｇ－４

形状：南半は検出できなかったが、楕円形を呈すると思われる。

規模：長軸1.32m、短軸(0.52)m、深さ0.32m

埋没土は、暗褐色土を主体とするが、混入物の差異から３層に分層できた。底面はほぼ平坦。出土遺物には、１の平口縁の口縁下が肥厚して段をもち、横位に縄文が施される花積下層Ⅰ式土器がある。この出土土器から、縄文時代前期初頭期の土坑と考えられる。

91区15号土坑　(第21図、PL．７・15)

位置：91区の南寄りに位置し、南東側に近接して91区７号住居、北側４mに91区８号住居、南側５mに81区１号住居がある。

グリッド：91区Ｈ－２

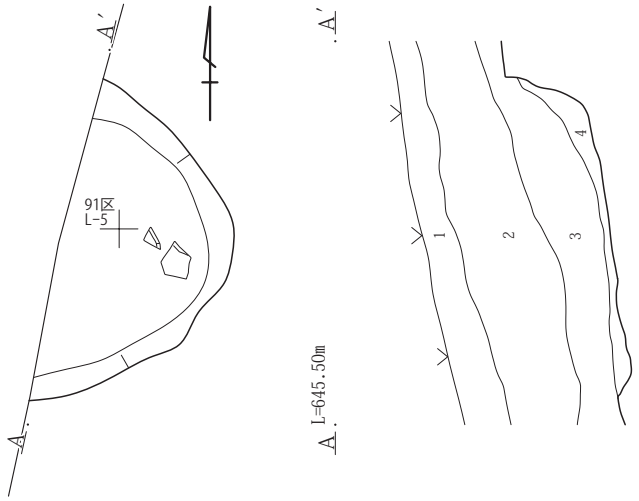
形状：不整円形を呈する。

規模：長軸0.78m、短軸0.76m、深さ0.40m

長軸方向：Ｎ－31°－Ｗ

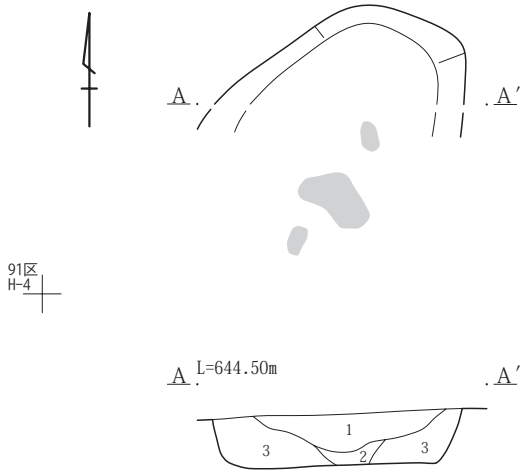
埋没土は、As-YPkを多く含む黒褐色土である。底面はやや凹凸ぎみ。出土遺物には、２の凹基無茎石鏃１点がある。出土土器はないが、縄文時代の土坑と考えられる。

91区13号土坑

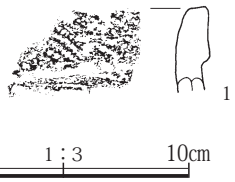


91区13号土坑
1　表土
2　黒褐色土　やや砂質。As-YPk・白色粒子を多く含む。
3　黒褐色土　やや砂質。As-YPk・白色粒子をかなり多く、赤色粒子を含む。
4　暗褐色土　ロームブロックが層下半に多く、As-YPk・赤色粒子・白色粒子を含む。

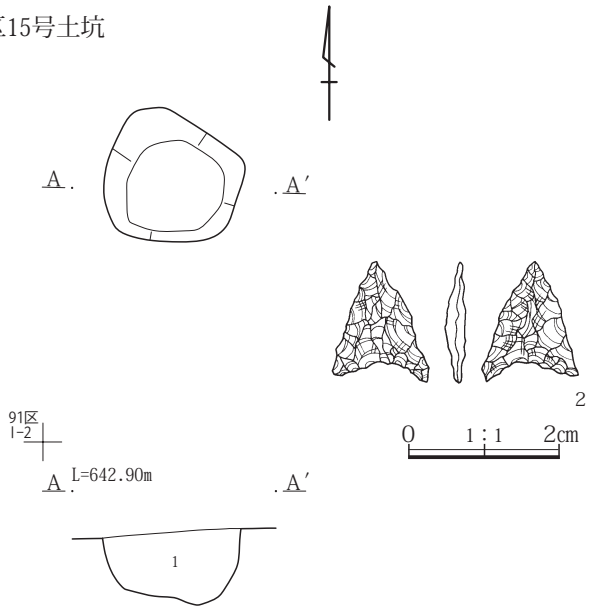
91区14号土坑



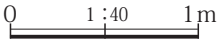
91区14号土坑
1　暗褐色土　やや砂質。白色粒子・赤色粒子を含み、As-YPkが散在。
2　暗褐色土　やや砂質。１層に焼土ブロックを多く含む。
3　暗褐色土　やや砂質。As-YPkを多く、白色粒子・赤色粒子を含む。



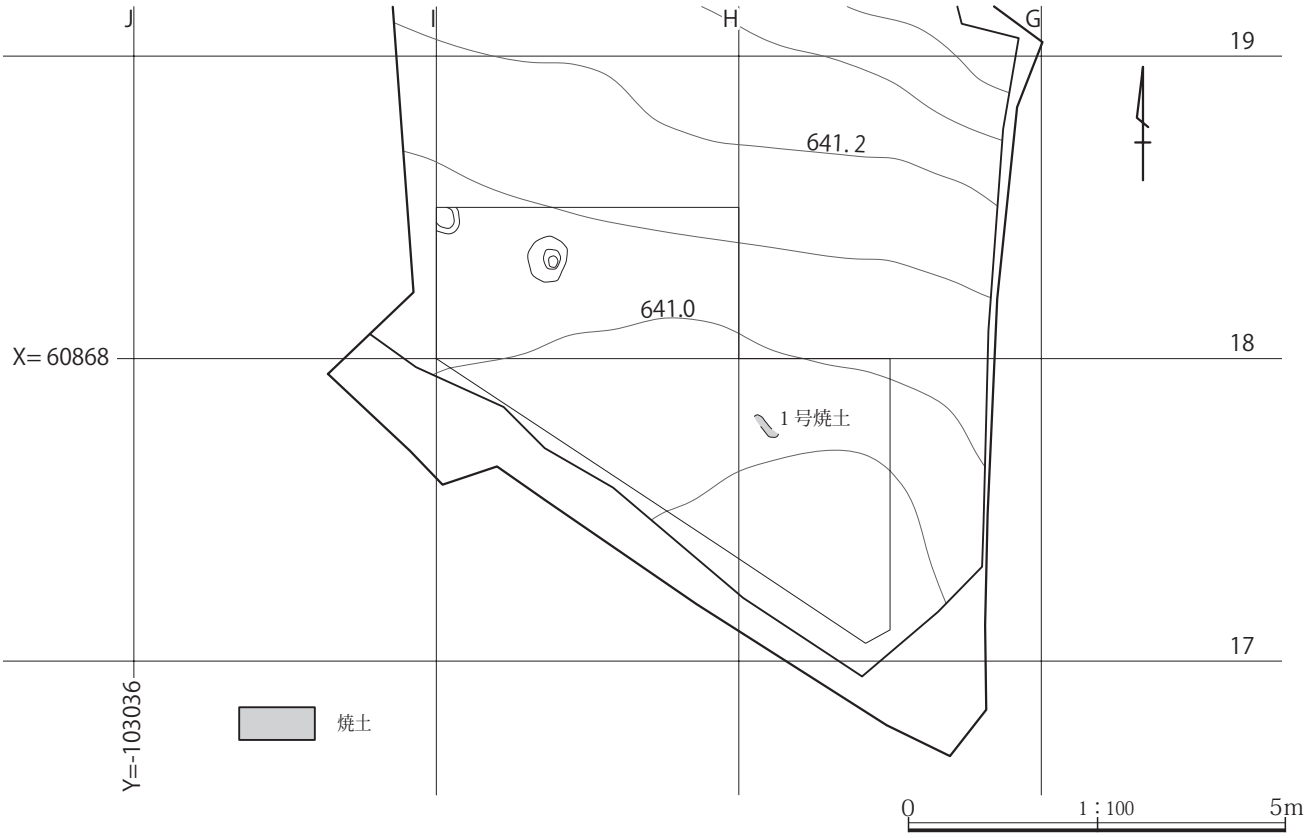
91区15号土坑



91区15号土坑
1　黒褐色土　やや砂質。As-YPkを多く、白色粒子を含む。



第21図　91区13～15号土坑　平・断面図、出土遺物



第22図　81区１号焼土　平面分布図

４．焼土

検出された縄文時代の焼土は、81・91区に散在し、81区に１ヶ所､91区に12ヶ所の計13ヶ所を検出した。特に、91区での焼土は、１～６号焼土、７～12号焼土がそれぞれ近接する。なお、これらの焼土は、周囲の丁寧な遺構確認からも遺構に伴うものではなく、単独で存在するようである。

以下､各焼土ごとに記載する。(表２遺構一覧表を参照)

81区１号焼土　(第22図)

位置：81区の南端に位置し、周囲には第２面調査で検出されたピットが僅かにあるのみで、北側24mにある81区３号住居までの間は削平により遺構は検出されていない。

グリッド：81区Ｇ－17

形状：長楕円形を呈する。

規模：長軸39cm、短軸11cm

長軸方向：Ｎ－43°－Ｗ

焼土下に、掘り込みは確認されていない。

91区１号焼土　(第23図、PL.15)

位置：91区の北側中央付近に位置し、西側に近接して91区14号土坑、北西側３ｍに91区６号住居がある。また、周囲に２・４～６号焼土がある。

グリッド：91区Ｇ－３・４

形状：長楕円形を呈する。

規模：長軸101cm、短軸55cm

長軸方向：Ｎ－23°－Ｅ

焼土下に、掘り込みは確認されていない。周囲からは、１・２の花積下層Ⅰ式土器と、３の打製石斧１点が出土している。

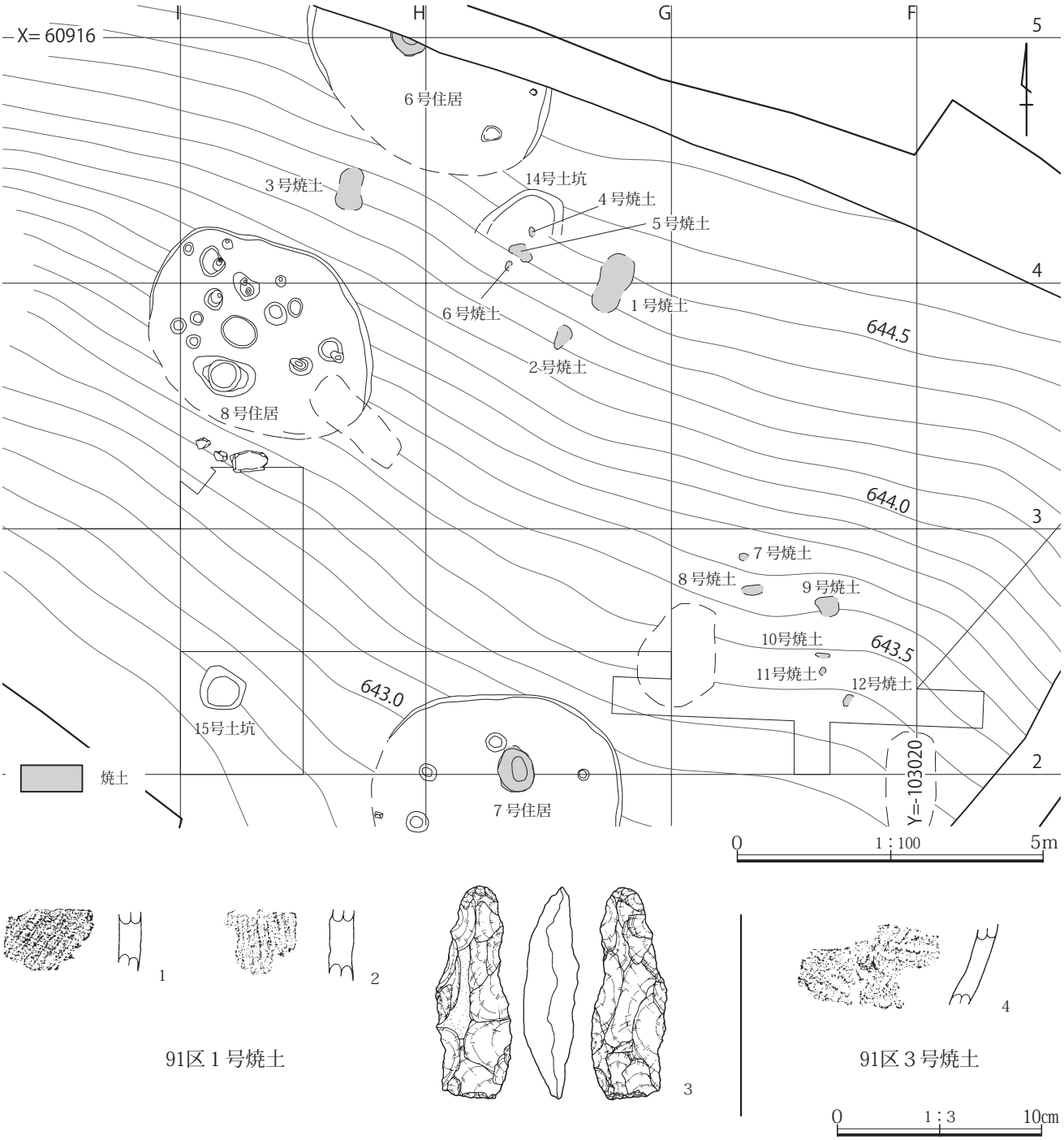
91区２号焼土　(第23図)

位置：91区の北側中央付近に位置し、北北西側に近接して91区14号土坑、同側３ｍに91区６号住居、西側３ｍに91区８号住居がある。また、周囲に１・４～６号焼土がある。

グリッド：91区Ｇ－３

形状：楕円形を呈する。

規模：長軸41cm、短軸26cm



第23図　91区１～12号焼土　平面分布図、出土遺物

長軸方向：Ｎ－28°－Ｅ

焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区３号焼土　（第23図、PL.15）

位置：91区の北側中央付近に位置し、北側に91区６号住居、南側に91区８号住居が近接する。また、東側に91区14号土坑、91区１・２・４～６号焼土がある。

グリッド：91区Ｈ－４

形状：楕円形を呈する。

規模：長軸70㎝、短軸44㎝

長軸方向：Ｎ－７°－Ｅ

焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区４号焼土　（第23図）

位置：91区の北側中央付近に位置し、91区５・６号焼土と共に91区14号土坑内にあり、周囲に91区１～３号焼土

がある。
グリッド：91区Ｇ－４
形状：小さな楕円形を呈する。
規模：長軸16㎝、短軸９㎝
長軸方向：Ｎ－18°－Ｗ
　91区14号土坑内にあることから、土坑に伴う可能性もある。

91区５号焼土　（第23図）
位置：91区の北側中央付近に位置し、91区４・６号焼土と共に91区14号土坑範囲内にあり、周囲に91区１～３号焼土がある。
グリッド：91区Ｇ－４
形状：不整楕円形を呈する。
規模：長軸40㎝、短軸22㎝
長軸方向：Ｎ－63°－Ｗ
　91区14号土坑範囲内にあることから、土坑に伴う可能性もある。

91区６号焼土　（第23図）
位置：91区の北側中央付近に位置し、91区４・５号焼土と共に91区14号土坑範囲内にあり、周囲に91区１～３号焼土がある。
グリッド：91区Ｇ－４
形状：小さな楕円形を呈する。
規模：長軸16㎝、短軸９㎝
長軸方向：Ｎ－15°－Ｅ
　91区14号土坑範囲内にあることから、土坑に伴う可能性もある。

91区７号焼土　（第23図）
位置：91区の東側に位置し、南西側４ｍに91区７号住居があり、南東側に91区８～12号焼土が集中する。
グリッド：91区Ｆ－２
形状：小さな円形を呈する。
規模：径15㎝
　焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区８号焼土　（第23図）
位置：91区の東側に位置し、南西側４ｍに91区７号住居があり、周囲に91区７・９～12号焼土が集中する。
グリッド：91区Ｆ－２
形状：楕円形を呈する。
規模：長軸36㎝、短軸16㎝
長軸方向：Ｎ－84°－Ｅ
　焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区９号焼土　（第23図）
位置：91区の東側に位置し、南西側４ｍに91区７号住居があり、周囲に91区７・８・10～12号焼土が集中する。
グリッド：91区Ｆ－２
形状：不整形を呈する。
規模：長軸41㎝、短軸37㎝
長軸方向：Ｎ－65°－Ｗ
　焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区10号焼土　（第23図）
位置：91区の東側に位置し、南西側４ｍに91区７号住居があり、周囲に91区７～９・11・12号焼土が集中する。
グリッド：91区Ｆ－２
形状：小さな楕円形を呈する。
規模：長軸24㎝、短軸10㎝
長軸方向：Ｎ－83°－Ｗ
　焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区11号焼土　（第23図）
位置：91区の東側に位置し、南西側４ｍに91区７号住居があり、周囲に91区７～10・12号焼土が集中する。
グリッド：91区Ｆ－２
形状：小さな楕円形を呈する。
規模：長軸13㎝、短軸９㎝
長軸方向：Ｎ－58°－Ｅ
　焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

91区12号焼土　（第23図）
位置：91区の東側に位置し、南西側４ｍに91区７号住居があり、北東側に91区７～11号焼土が集中する。
グリッド：91区Ｆ－２
形状：小さな楕円形を呈する。
規模：長軸21㎝、短軸11㎝

長軸方向：Ｎ－57°－Ｅ

焼土の周囲に、掘り込みは確認されていない。

５．遺構外出土遺物

調査区内から出土した、遺構に伴わない縄文時代の遺物を扱う。遺構外出土遺物は、第１面下から第２面調査時に出土し、各遺構の時期である前期初頭の花積下層式土器が主体を占め、僅かに中期の土器がある。また、石器には石鏃や石錐、石匙、スクレイパー、石箆、打製・磨製石斧、凹石、磨石等といった定形石器をはじめ、不定型な二次加工剥片や多くの剥片類が出土している。

以下、種別ごとに記載する。

（１）土器

１～64は、前期初頭花積下層Ｉ式の特徴的な文様を施文する土器群である。

１～22・25・26は、口縁下に肥厚した口縁部文様帯をもつ類である。１～11は波状口縁となる。１・２は同一個体で、内反ぎみの波状口縁の口縁下が肥厚し、口縁部文様帯となる。この肥厚帯には細い２本組縄（Ｌ・Ｌ縄）による撚糸側面圧痕を鋸歯状に施文し、波頂下の三角部には撚糸側面圧痕を三角状に施文する。以下の胴部には、ＬＲ縄で縦長な菱状構成となる縄文が施される。３～７も同様に、撚糸側面圧痕で口縁部文様を描き、７の胴部には縦長な菱状構成となる縄文が施される。８・９は小波状口縁の口縁下が肥厚し、口縁下にＲＬ縄とＬＲ縄の横位回転による羽状縄文が施される。10は波状口縁の口縁下が肥厚し、波頂下に低い瘤状貼付、肥厚帯と胴部に細い２本組縄による回転絡条体で羽状縄文が施される。以下の胴部に同様の回転絡条体が施される。11は波状口縁の口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯に細い２種類の２本組縄による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施される。以下の胴部にも、同様の回転絡条体を横位に施す。12～18・22・25・26は平口縁で、12・13・26は口縁下が肥厚ぎみで段をもち、口縁以下にＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。14は口縁以下に０段多条のＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。15は口縁下が肥厚して段をもち、口縁以下にＬＲ縄で横位・縦位回転により羽状縄文が施される。16は外反ぎみの平口縁で、口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯に細い２本組縄（Ｌ・Ｌ縄）による回転絡条体を斜位に施し、以下の胴部にＬＲ縄とＲＬ縄の横位回転による羽状縄文が施される。17・18の口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２種類の２本組縄（Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄）による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施され、以下の胴部に同様の回転絡条体を横位に施す。22は口縁下に肥厚ぎみの緩い段をもち、口縁以下に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。また、25は平口縁の口唇部に斜位の刻みをもち、口縁下に細い２種類の２本組縄（Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄）による回転絡条体で、複合鋸歯状に口縁部文様を施す。なお、19～21は口唇部を欠くが、小波状口縁の口縁下が肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２本組縄（Ｌ・Ｌ縄）による回転絡条体を横位施す。以下の胴部に細い２種類の２本組縄（Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄）による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。

23・24・27・28は、口縁部文様帯をもたない類である。23・24は波状口縁であり、23の口縁以下に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。24には波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁以下にＲＬ縄の縄文が縦位近い方向に施される。27・28は平口縁で、27は口縁以下に０段多条のＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。28は口縁以下に０段多条のＲＬ縄を横位、０段多条のＬＲ縄を縦位・斜位に施文する。

29～42は、胴部に縦長な菱状構成となる縄文が施される類である。29・30・31は胴部にＲＬ縄とＬＲ縄による縦長な菱状構成となる縄文が施される。33・34・36・37は胴部に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。35・38・39・41は胴部にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。40・42は19～21と同一個体となる胴部であり、胴部に細い２種類の２本組縄（Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄）による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。

43～56は、胴部に羽状縄文が施される類である。43は０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。44～52はＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。この内、47の内面には横位の整形痕が残り、49・50の内面には指頭状の

浅い凹凸がみられ、50には横位の整形痕が顕著である。また、51・52の原体端部は、結節処理されている。53・54と55・56はそれぞれ同一個体で、細い２種類の２本組縄（Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄）による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施され、原体の端部処理が明瞭である。さらに、57はＲＬ縄とＬＲ縄で、縦位回転による縦位羽状縄文が施される。

58～61は、胴部に横位回転の縄文が施される類である。58は０段多条のＲＬ縄による横位回転の縄文が施される。59・61はＲＬ縄による横位回転の縄文が施される。60はＬＲ縄の縄文が施される。

62～64は尖底部付近で、62・63の胴部下端にＲＬ縄で斜位回転による縦走縄文が施される。64はＲＬ縄で縦位ぎみな斜縄文が施され、内面に指頭状の浅い凹凸が残る。

65～71は、前期初頭花積下層Ⅰ式に併行する塚田式とされる土器群である。65は小波状口縁の口縁下に細い隆帯を２条巡らせ、口縁部文様に斜位の沈線を施す。66は波頂部を欠くが、小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に低い隆帯を巡らせ、口縁以下にＬＲ縄が施される。67・68・71は同一個体で、小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に隆帯を巡らせ、口縁下に０段多条のＲＬ縄を横位施文し、以下の胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄による横位回転の羽状縄文が施される。69は小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に肥厚ぎみな緩い段をもち、口縁以下にＬＲ縄の縄文が横位に施される。70は小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下にＬＲ縄が横位に施され、内面には指頭状の浅い凹凸が残る。

72は平口縁の口縁下に幅広でやや肥厚した緩い段をもち、口縁以下にＬＲ縄の縄文が横位に施され、中道式と考えられる。

73～85は、前期前葉二ツ木式の特徴的な文様を施文する土器群である。73・74は平口縁ないし波状口縁の口縁直下に刻みをもつ細い隆帯を巡らせ、口縁部文様体内に刺切文を横位ハ字状に充填する。75は口縁部文様に２本組の刻み隆帯で蕨手状の主文様を描き、主文様間に刺切文を横位ハ字状に充填する。76は平口縁の口唇部に円形竹管刺突を施し、口唇から隆帯を垂下させ、隆帯上に円形竹管刺突を施す。口縁下にはＬＲ縄の結節縄文を横位回転で施す。77～80は同一個体で、平口縁の口縁下にＲＬ縄とＬＲ縄による横位結束羽状縄文が施され、内面に横位の整形痕が残る。81・82は同一個体で、口縁部文様に撚糸側面圧痕で蕨手状等の主文様を描き、口縁部文様帯下端に２条の刻み隆帯を巡らせて文様帯区画し、刻み隆帯間に撚糸側面圧痕を沿わせる。以下の胴部には、０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄による横位羽状縄文が施される。

83～85は胴部にＲＬ縄とＬＲ縄によるやや幅狭な結束羽状縄文が施され、83・85の内面には横位の整形痕が残る。

86・87は、前期前葉二ツ木式に併行する布目式と考えられる土器である。86は波状口縁の口唇部に半截竹管による爪形刺突をもち、口縁下は肥厚ぎみで、頸部が段状に屈曲し、屈曲部に半截竹管による爪形刺突が巡り、口縁以下にＬＲ縄の縄文が横位に施される。胴部の器厚は、４㎜とかなり薄い。87は頸部下が段状に屈曲し、屈曲部に爪形刺突をもつ。頸部から胴部には、原体幅の短いＲＬ縄の縄文が施される。

88～97は、前期前葉関山Ⅰ式の特徴的な文様を施文する土器群である。

88～92は同一個体で、波頂部を欠くが波状口縁の口縁直下に刻みを施し、口縁部文様に刻みをもつ半截竹管による平行沈線で重弧状（半円状）の文様を描き、文様間に円形刺突を充填させる。さらに、口縁部文様の下端を刻みをもつ半截竹管による平行沈線を２条巡らせて文様帯区画し、以下の胴部にＬＲ縄の結節縄文を横位に施す。93は胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、幅広な横位羽状縄文が施される。94～96は胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、やや幅広な横位羽状縄文が施される。97は胴部に０段多条のＬＲ縄で、横位の幅広な縄文が施される。

98・99は、前期前葉と考えられるが詳細は不明。98は胴部下半に軟軸絡条体？を横位に回転施文し、内面に斜位の整形痕が顕著である。99は平底となる底部で、胴部下端にＲＬ縄を横位に施し、底面に網代痕状の痕跡を残す。

100～106は、前期後半から末葉にかけての土器群で

ある。100は波状の口縁が朝顔状に開く深鉢で、地文にＬＲの縄文を施し、波頂下に細い半截竹管による平行沈線を垂下させて軸線とし、菱状の文様を描き、菱中央には米字状の文様を加える（諸磯ａ式）。101は頸部に結節浮線で渦巻き状の文様を施す（諸磯ｃ式）。102は胴部に半截竹管による断面Ｄ字状の沈線を同心円状に描き、その隙間に弧状の印刻を施す（諸磯ｃ式）。103は胴部文様に結節浮線を横位に施文し、地文にＬＲの縄文を施す（十三菩提式）。104は朝顔状となる頸部に、半截竹管による渦巻きをもつ沈線で文様を描き、その下端を沈線を巡らせて文様帯区画する。105は大きく屈曲する胴部にＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。106は胴部にＬＲ縄とＲＬ縄で、横位回転によるやや幅狭な羽状縄文が施される。

107 ～ 116は、中期の土器群であるが、出土量は少ない。107は胴部に細い隆帯で渦巻き状の文様を施す（中期中葉か）。108は爪状の連続刺突を横位に施す（中期中葉か）。109は胴部に沈線が巡る（阿玉台式か）。110は胴部に連結部をもつ２本の隆帯を垂下させ、縦位の綾杉状沈線を施す（栃倉式）。111は胴部に隆帯を垂下させ、縦位の綾杉状沈線を施す（栃倉式）。112は平口縁の口縁下に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、区画内に条線を縦位に施す（加曽利Ｅ３式）。113は胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、その間にＲＬ縄を縦位に充填する（加曽利Ｅ３式）。114は胴部に蛇行隆帯を垂下させ、その間に細い斜行沈線を施す（加曽利Ｅ３式）。115は胴部に２条の隆帯で曲線的な文様を描き、文様内に縄文を施す（加曽利Ｅ３式）。116は湾曲する胴部に沈線で渦巻き状の文様を描き、文様間にＬＲ縄の縄文を充填する（加曽利Ｅ４式）。

117は、後期初頭の称名寺式で、朝顔状に開く平口縁の口唇部に沈線が巡り、口縁下が無紋となる。

118 ～ 123は、弥生時代中期の土器群である。118は平口縁の頸部下に３条の沈線が廻る。119は頸部から胴部の屈曲部にかけて、沈線で変形工字文等の文様を描き、表面には赤色塗彩が施される。120は胴部に斜位ないし縦位の条線を施す。121は胴部に浅い条痕が斜位に施される。122は胴部下半に斜位の条線を浅く施す。123は平底の底面に網代痕をもつ。

（２）石器

出土した石器は、剥片類も含めた総数1231点である。これらの器種には、剥片石器として石鏃68点（未製品を含む）（81区25点、91区43点）、石錐12点（81区７点、91区５点）、石匙３点（81区）、スクレイパー30点（81区13点、91区17点）、二次加工剥片45点（81区19点、91区26点）、石箆３点（81区２点、91区１点）、打製石斧３点（91区）、および磨製石斧１点（81区）があり、礫石器として磨石24点（81区11点、91区13点）、凹石３点（81区２点、91区１点）、敲石２点（91区）がある。また、剥片類は1038点を数え、この内黒曜石が539点と多数を占め、次いで頁岩類300点、チャート137点の順となる。なお、剥片類については、図示していない。

石鏃（第28図、PL.18）

図示したのは124 ～ 145の22点で、他は写真掲載した。石鏃の形態には、凹基無茎鏃（凹基の抉りは深いものと、浅いものとが存在）が主体を占め、平基無茎鏃、基部が円弧状となる小型の無茎鏃が少量ある。また、242 ～ 252は未製品である。これら66点の使用される石材は、黒曜石が最も多く37点、次いで玉髄10点、珪質変質岩（流紋岩質凝灰岩）６点、チャート４点、黒色頁岩３点、珪質頁岩２点、頁岩２点、流紋岩２点である。

石錐（第29図、PL.18・19）

図示したのは、146 ～ 156の11点である。その形態には、146 ～ 150のような棒状を呈する類と、逆二等辺三角形様等の摘み部と刃部が明瞭な類がある。また、154のような、剥片素材で刃部となる先端部のみに調整加工が施される類もある。使用される石材は、玉髄が４点、チャート３点、黒曜石１点、珪質変質岩（流紋岩質凝灰岩）１点、黒色頁岩２点である。

石匙（第29図、PL.19）

図示した157 ～ 159の３点は、いずれも横長な石匙である。使用石材は、それぞれ玉髄、チャート、黒色頁岩である。

スクレイパー（第29・30図、PL.19）

図示したのは、160 ～ 173の14点である。小型なもの

と大型の両者があり、小型スクレイパーには167・168・172・173の方形を呈する類もある。また、刃部角は鋭角となる削器様なものが多いが、169のように鈍角な掻器的なものもある。使用される石材は、珪質頁岩が４点、黒色頁岩３点、頁岩３点、流紋岩２点、玉髄１点、チャート１点である。

二次加工剥片（第30図、PL.19）

174・175の２点を代表させて図示した。小型剥片を素材とし、剥片の縁辺に集中して細かな剥離調整が施されるものである。使用石材は、チャート、黒曜石である。

石篦（第30図、PL.19）

図示した176～178の３点は、いずれも小型で、剥離は表面を主に裏面にまで及び、刃部となる下端は鋭角気味である。使用される石材は、黒色頁岩が２点、玉髄１点である。

打製石斧（第30図、PL.20）

形態には、棒状礫を素材とした179、撥形の180、分銅形の181がある。使用される石材は、頁岩が２点、安山岩１点である。

磨製石斧（第30図、PL.20）

182は磨製石斧の破片で、石材に緑色片岩が使用されている。

磨石（第31・32図、PL.20）

183～204の22点を図示した。この内、183・184や186は石製品的な特異な形状を呈し、187・188は球状を呈する類、185・189～198は扁平な楕円状等を呈する類、さらに199～204は磨石であると共に凹石としての機能を併せ持つ類である。183・184は小型礫を素材に、全体に研磨が施され、両側縁の上下端付近に最終的な研磨面をもち、六角形状を呈する。186は小型の円礫を素材に、全体に研磨が施され、表面が凸状、側縁が平坦となり、裏面は全体に凹状となる。なお、中には被熱しているものも含まれる。使用される石材は、全て細粒輝石安山岩である。

凹石（第32図、PL.20）

205・206の２点を図示した。扁平な楕円礫を素材とし、平坦面に凹部をもつ。使用される石材は、205は花崗閃緑岩、206は細粒輝石安山岩である。

敲石（第32図、PL.20）

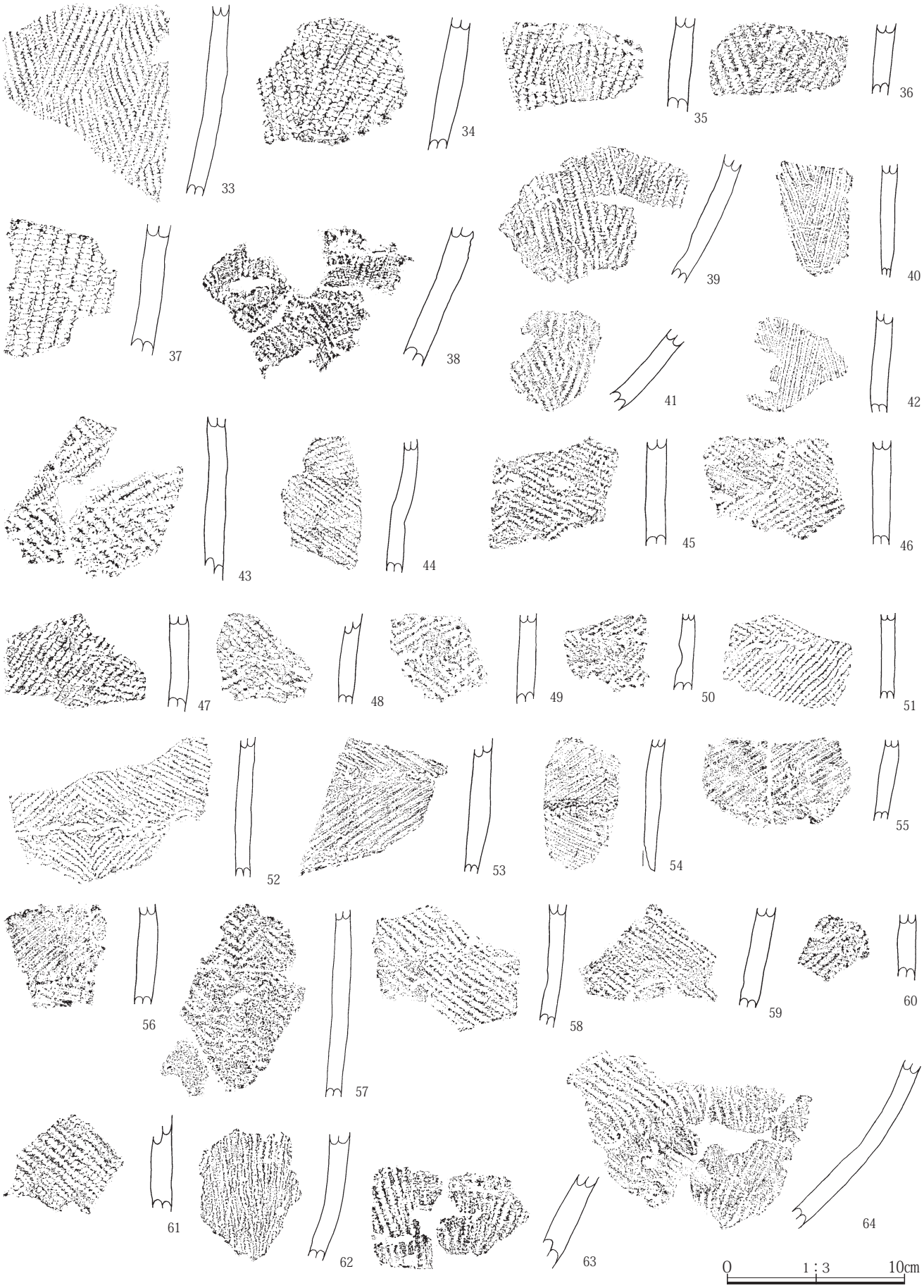
207の１点を図示した。縦長な礫を素材とし、小口端部付近に敲打痕をもち、石材は細粒輝石安山岩である。

（３）石製品

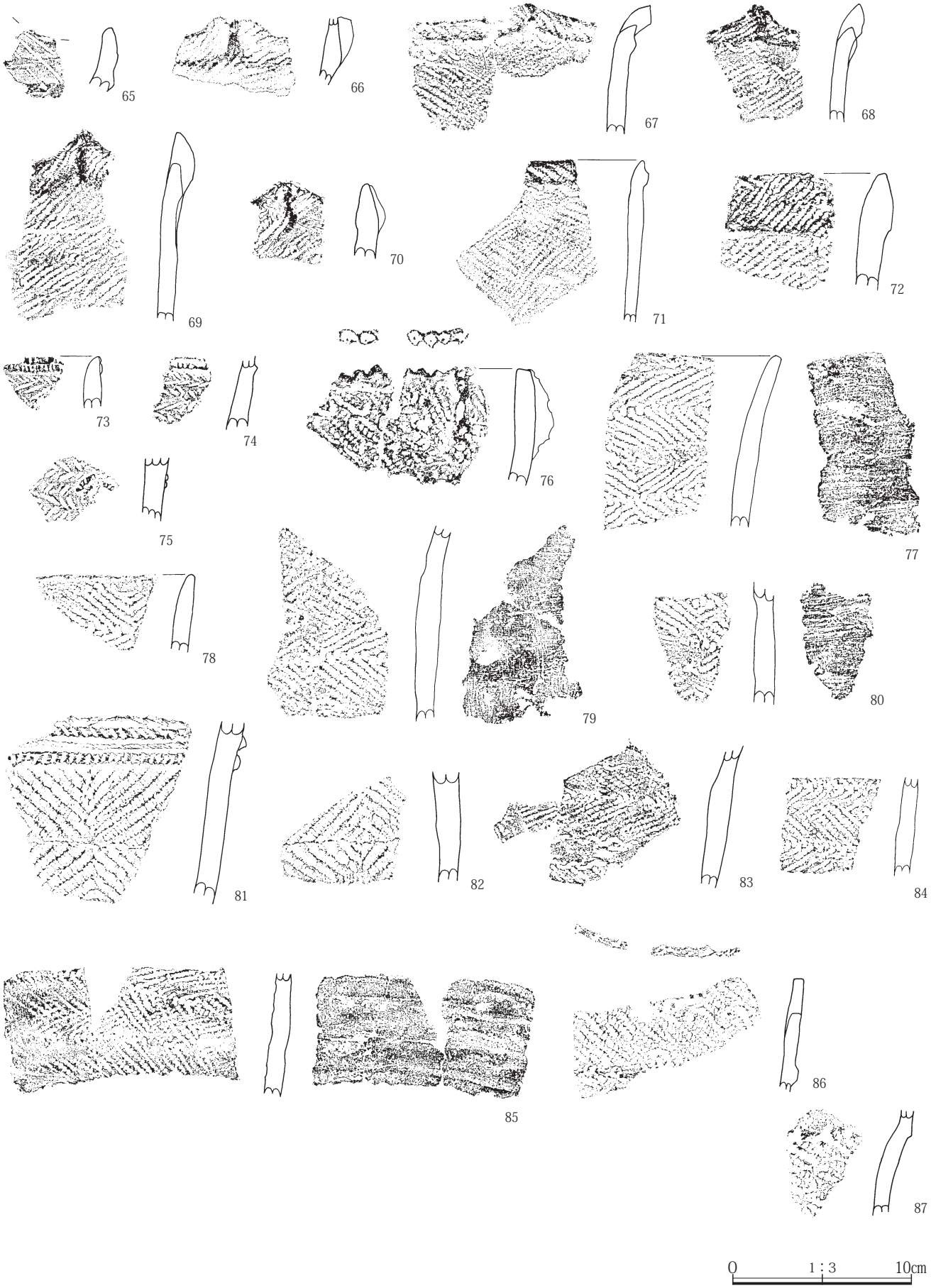
玉類（第32図、PL.20）

図に示した、208の珪質頁岩製の玉飾りが１点出土している。研磨により外形は円形を呈し、その中央に両面穿孔による孔をもつ。孔径0.3㎝。時期不明。

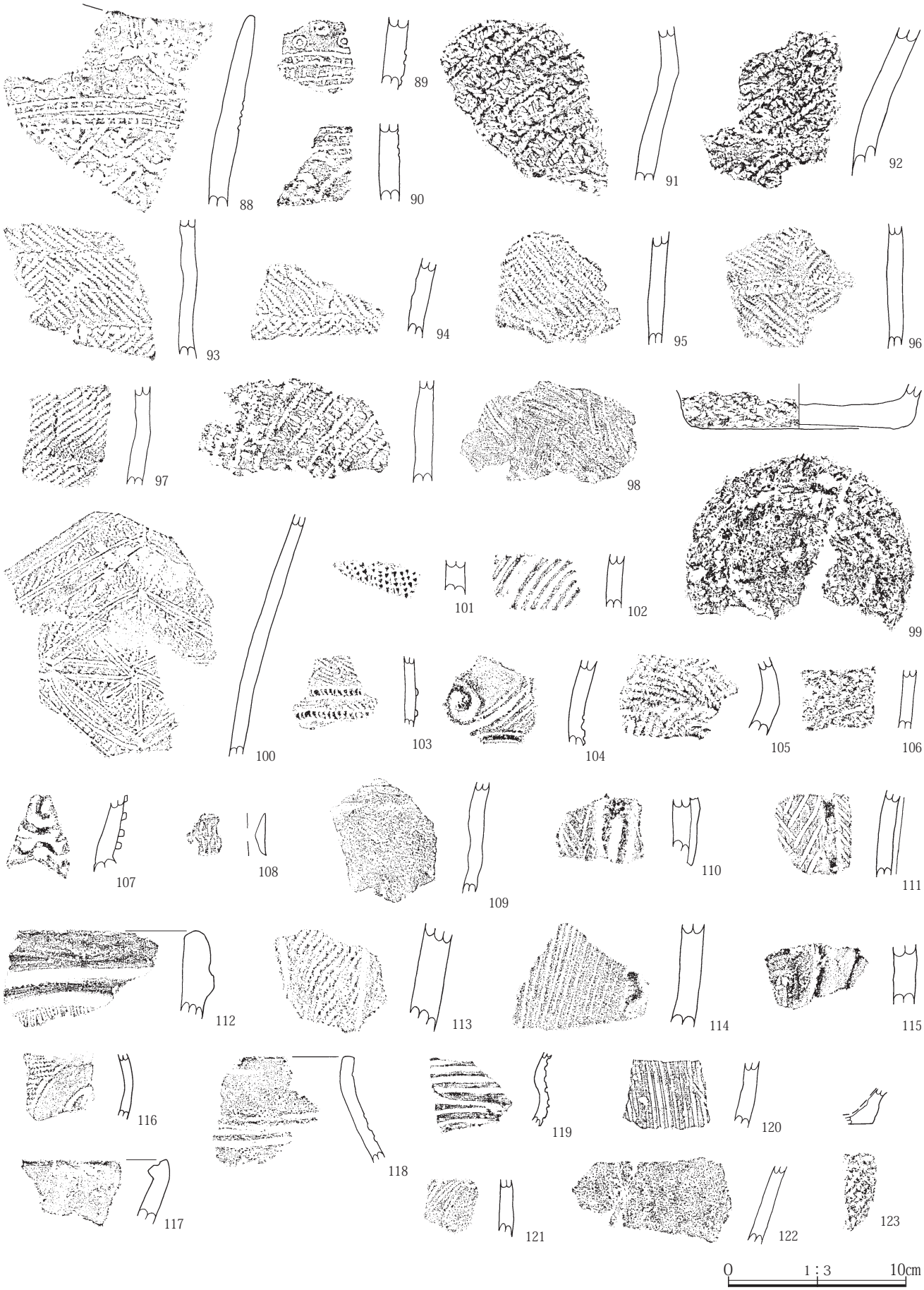
第 24 図　遺構外出土遺物（１）



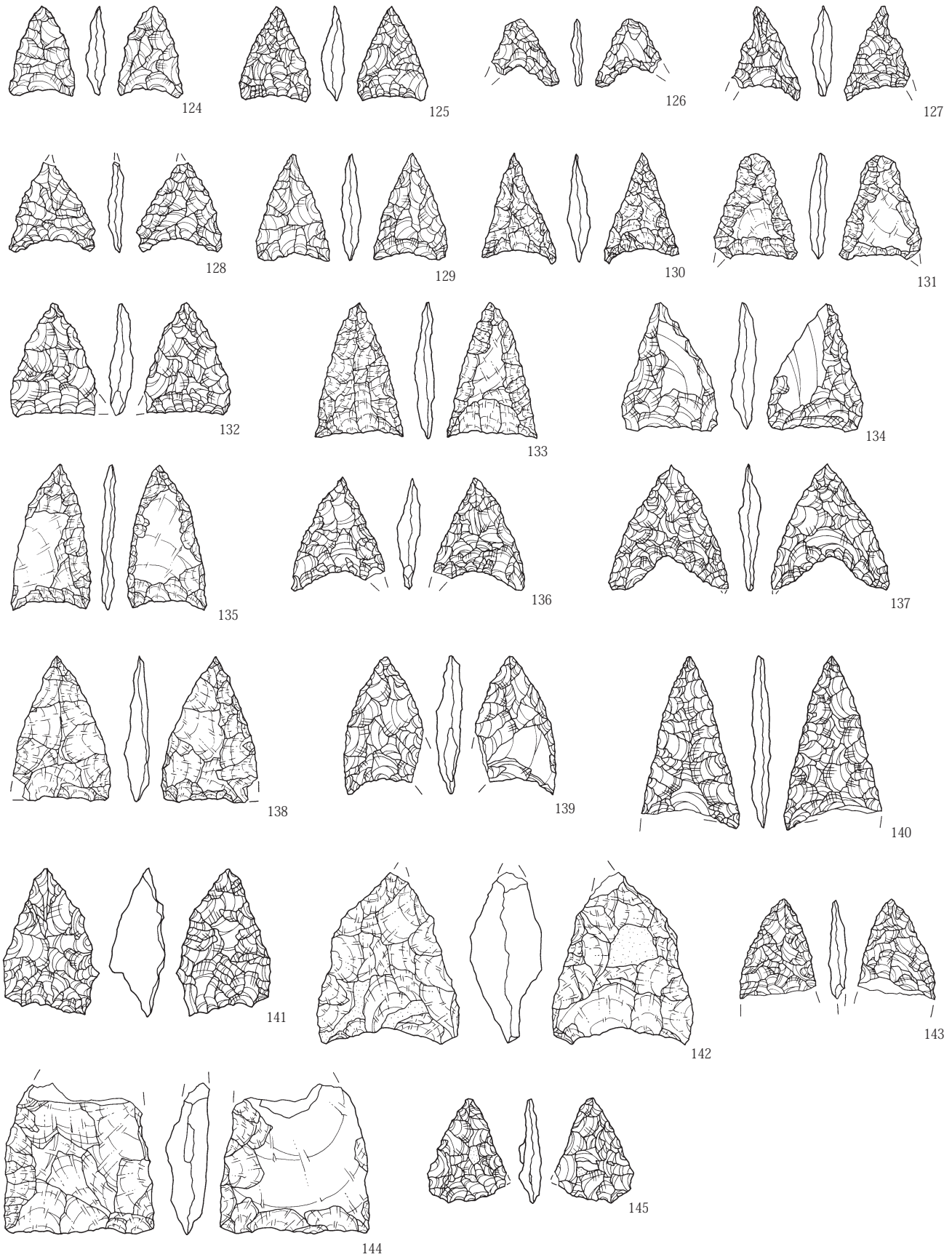
第25図　遺構外出土遺物（２）



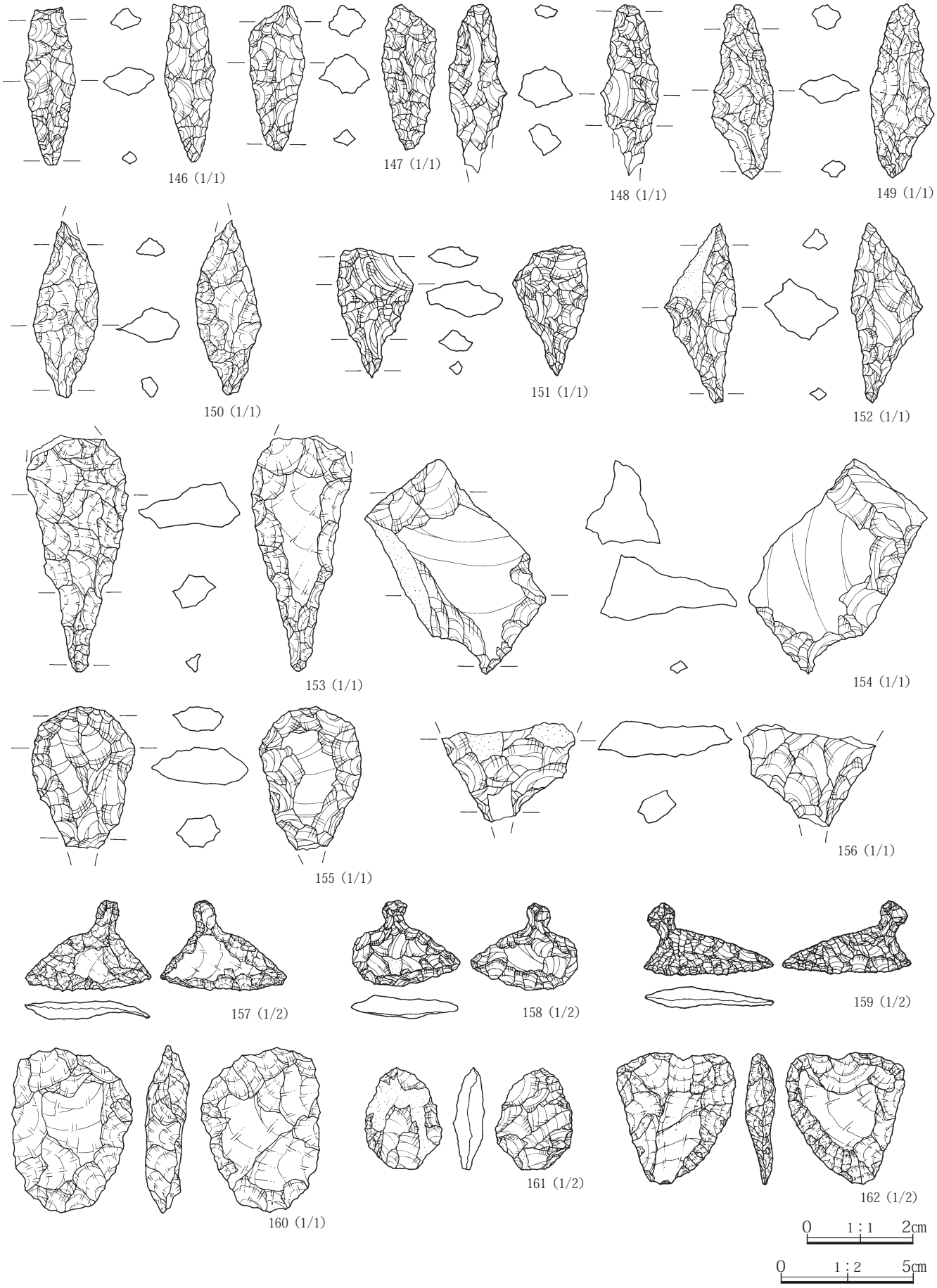
第26図　遺構外出土遺物（３）



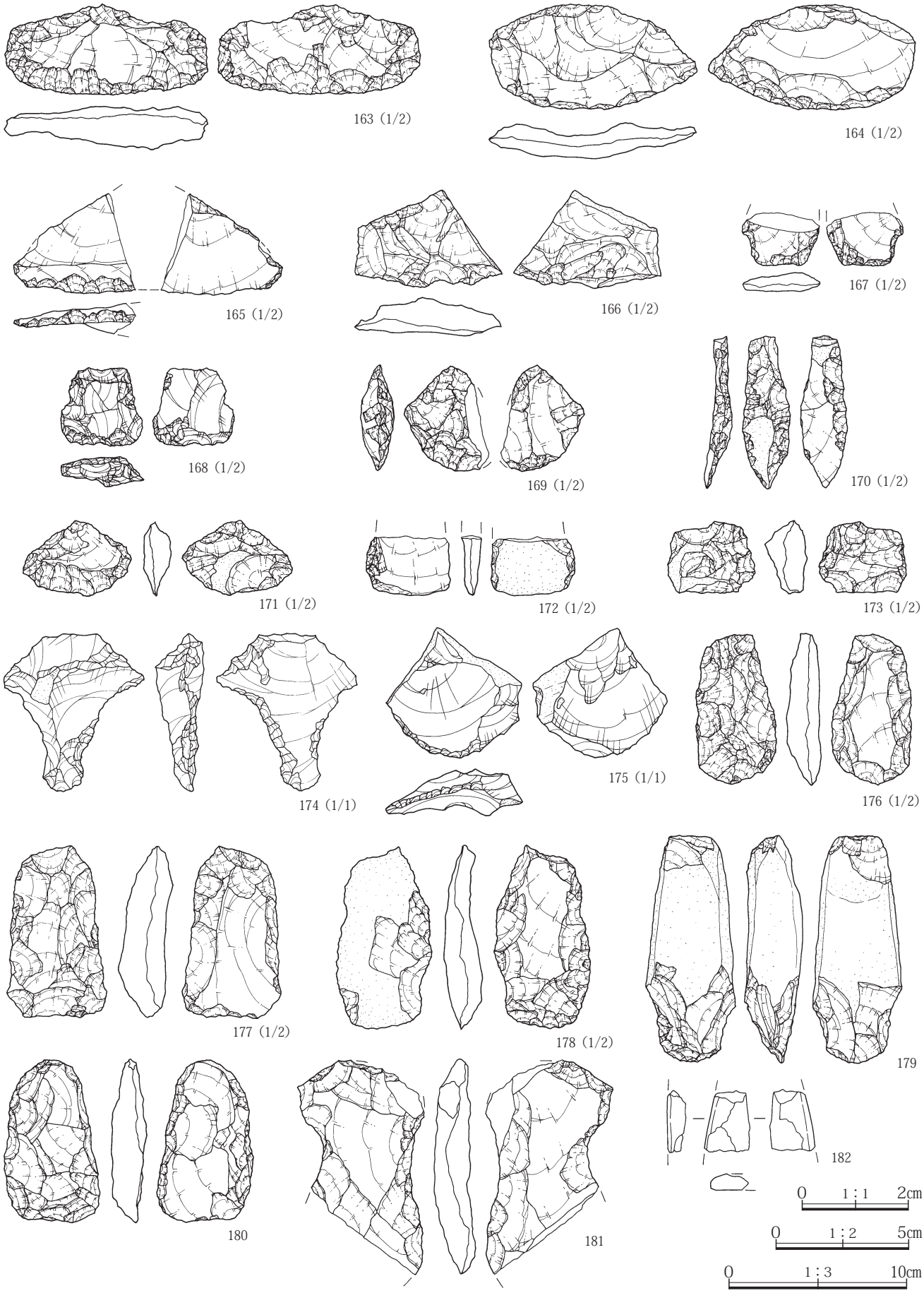
第27図　遺構外出土遺物（４）



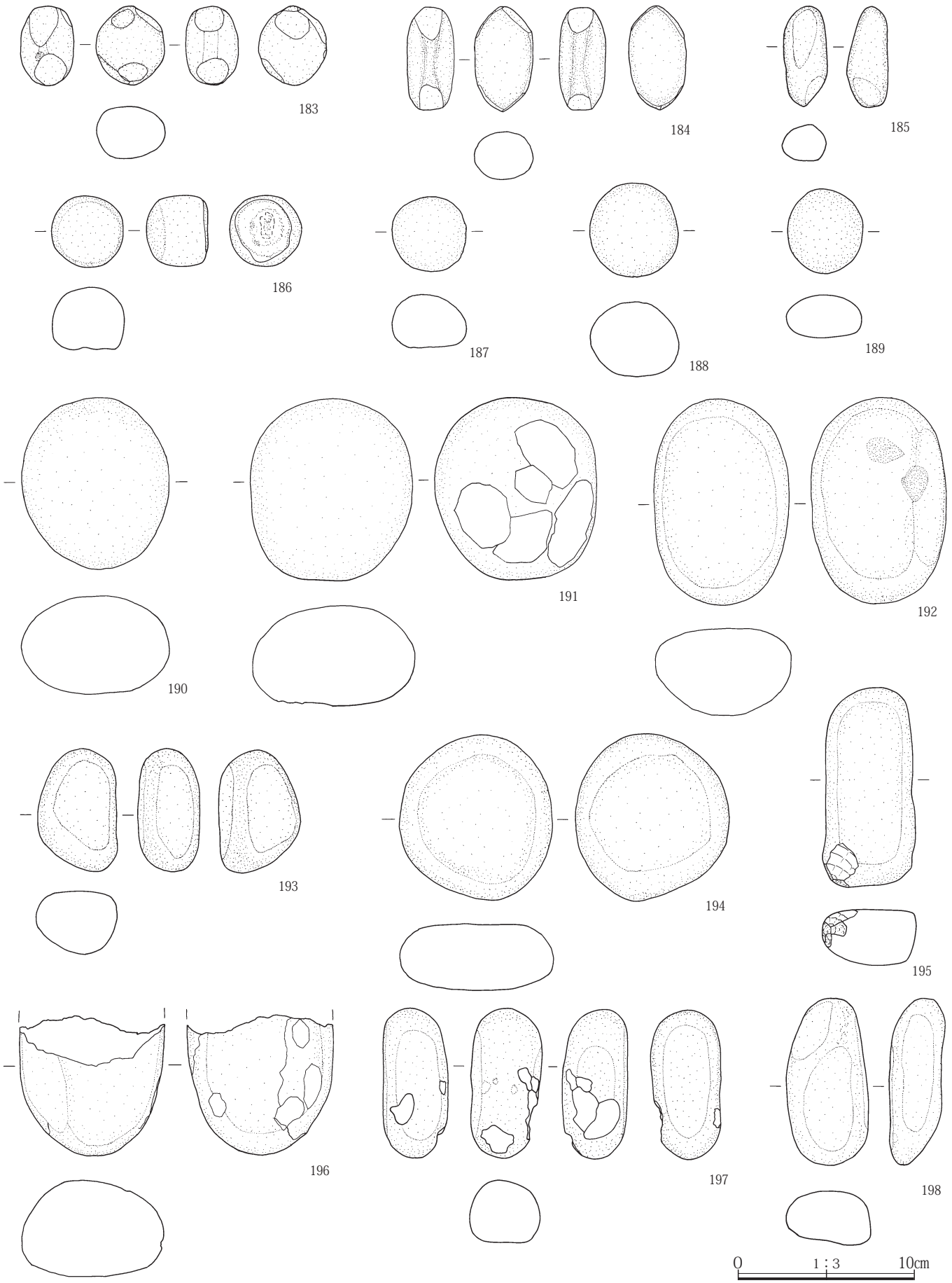
第28図　遺構外出土遺物（５）



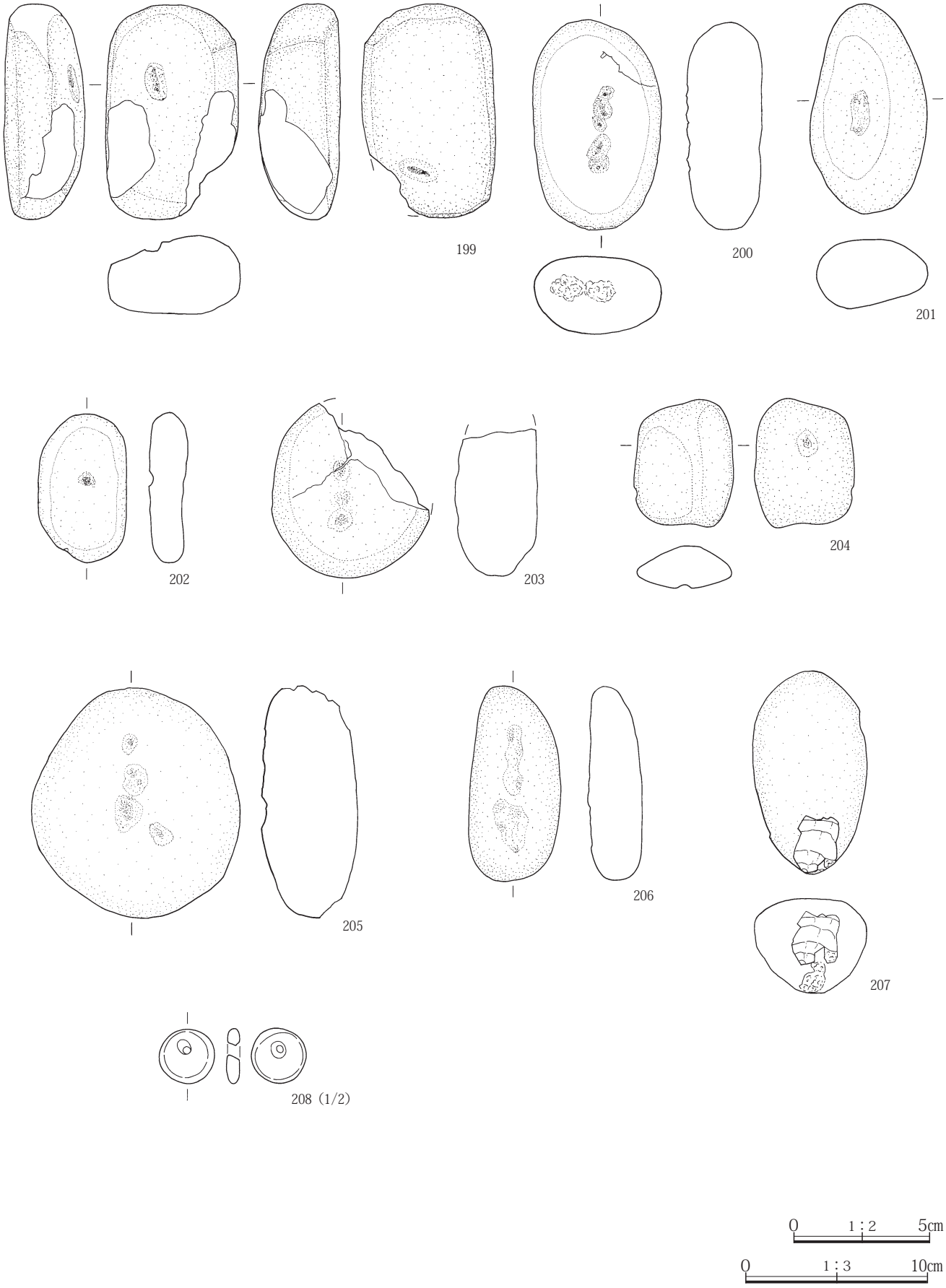
第29図　遺構外出土遺物（６）



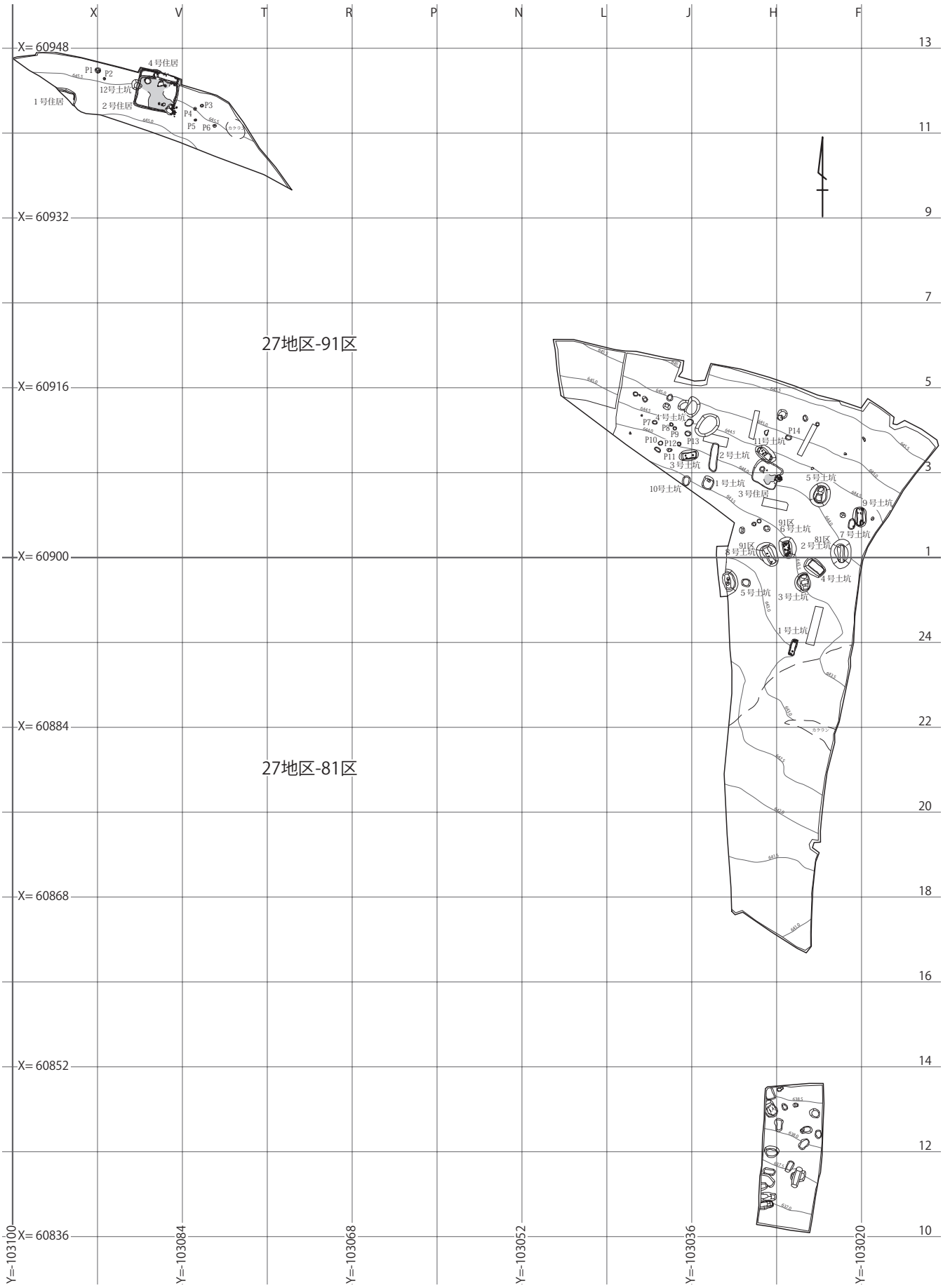
第30図　遺構外出土遺物（７）



第31図　遺構外出土遺物（８）



第32図　遺構外出土遺物（９）



第 33 図　上原Ⅰ遺跡　調査地点平安時代以降遺構全体図

第２項　平安時代以降

１．概要

本調査で検出された平安時代以降の遺構は、91区西側に位置する調査区と、81区北側と91区東側に跨る調査区の２地点おいて、基本土層第Ⅳ層上面を確認面とした第１面調査で、第33図に示した平安時代の集落と、古代から中世にかけた土坑(陥し穴を含む)等が検出された。平安時代の集落を構成する竪穴住居は、91区に４軒を検出した。陥し穴を含む土坑は、81区に５基、91区に12基の計17基、さらにピットは91区に計14基がある。

本調査区の西側に隣接する町教委による発掘調査では、古墳時代の竪穴住居１軒、土坑１基、平安時代の竪穴住居11軒、土坑60基(陥し穴を含む)、焼土遺構４基、近世・近代の土坑４基、焼土遺構５基が検出されている。特に、町教委による調査での平安時代住居の内、１軒は当事業団調査区に跨って検出されている。なお、当事業団調査区内には、古墳時代の遺構は検出されていない。

本遺跡における平安時代の集落は、両調査を合わせると計15軒の竪穴住居を数えることがでる。一方、近接する平安時代の住居は、上原Ⅲ遺跡で竪穴住居13軒・鍛冶工房１軒、上原Ⅳ遺跡で竪穴住居１軒、林中原Ⅱ遺跡で陥し穴などが検出されている。

２．竪穴住居

９世紀後半に位置づけられる、平安時代の竪穴住居を91区に４軒検出した。竪穴住居は点在し、内２軒は重複する。なお、１軒は、町教委による調査で検出された住居の続きであり、本調査ではその残る部分を調査した。

以下、各遺構ごとに記載する。(表２遺構一覧表を参照)

91区１号住居　(第34図、PL．３・22)

本調査区と、町教委による調査区とに跨り、住居の北東隅を検出した。住居の主体は町教委調査区にあり、SI04として調査されている。

位置：91区西側調査区の西端に位置し、本住居の東北東側４mに重複する91区２・４号住居がある。

グリッド：91区Ｘ－11・12

形状：本調査では住居の北東隅のみを検出したが、町教委調査からすると、全体形状は方形を呈し、東壁中央南寄りにカマドをもつ。また、南東隅には貯蔵穴を有し、壁周溝が回る。

規模：(本調査分)南北辺(1.43)m、東西辺(2.21)m、壁高0.47m

埋没土：焼土、炭化物、礫含む暗灰褐色土を主とし、黒褐色土の層を分層することができた。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

壁溝：北壁から東壁にかけて壁際に検出した。幅12㎝前後、深さ８㎝を測る。

その他：深さ５㎝前後の掘り方をもち、底面は概ね平坦。掘り方埋土は、灰褐色土を主とする。なお、カマド等は町教委調査で検出している。

遺物：出土遺物は極めて少なく、土師器の甕片１点を図示(第34図)した。

時期：出土した甕片から、９世紀後半の住居と考えられる。

91区２号住居　(第35～37図、PL．３・22)

位置：91区西側調査区の中央北寄りに位置し、本住居の西南西側４mに91区１号住居がある。

グリッド：91区Ｖ・Ｗ－11・12

重複：本住居の北側に、91区４号住居が重複する。また、西壁には91区12号土坑が重複する。土層断面の観察から、いずれの遺構よりも本住居の方が新しい。

形状：東南東方向にやや長い長方形を呈し、隅がやや丸みをもつ。

規模：長辺4.0m、短辺3.15m、壁高0.50m

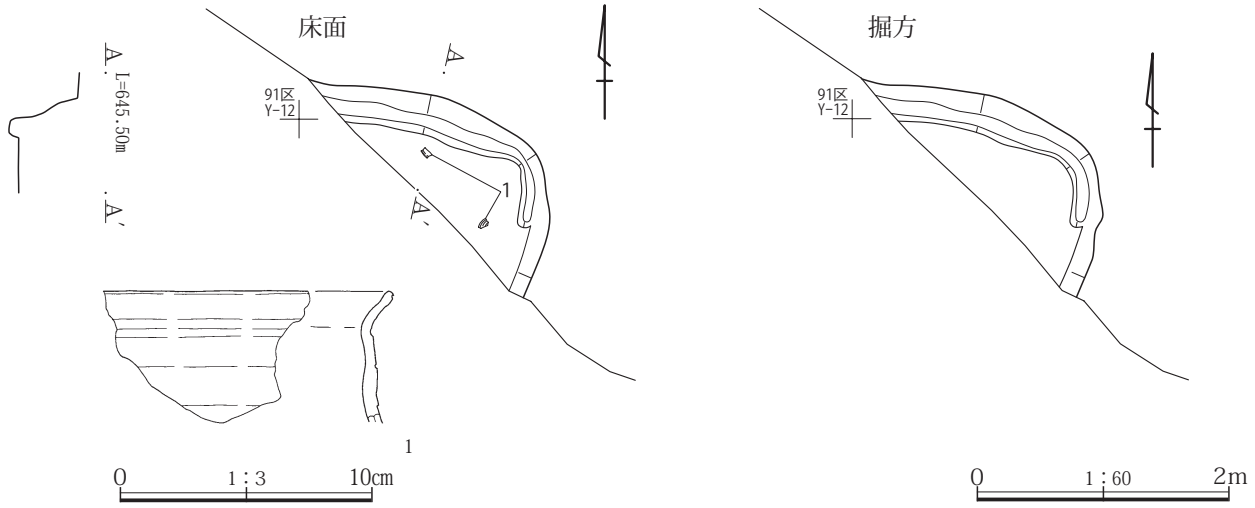
長軸方向：Ｎ－78°－Ｗ　　**床面積**：10.86㎡

埋没土：２ａ・ｂ～４層が埋没土で、床面を覆うのは２ｂ層の黒褐色土を主に、３・４層の黒褐色土および暗褐色土である。

床面・壁：床面は概ね平坦で、壁は全体に垂直に近く立ち上がる。

壁溝：カマドが位置する南東隅を除く壁際に検出した。幅13㎝前後、深さ６㎝を測る。埋土は、５層の黒色土。

カマド：新旧２基のカマドを検出した。カマド１は、本住居の最終使用時のカマドで、南東隅に位置し(方位Ｎ－134°－Ｅ)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.01m、幅(0.67)mを測る。燃焼部は壁外側が主体とな



第34図　91区１号住居　平・断面図、出土遺物

り、火床は住居床面より僅かに低くなる。焚口脇から壁の内側に、礫が散在することから、石組みのカマドであった可能性を残す。遺存状態は極めて悪い。カマド２は、カマド１より旧い段階の本住居に伴うカマドで、北壁の中央西寄りに位置し（方位Ｎ－14°－Ｅ）、壁の外側に大きく突出する。規模は全長0.97m、幅0.60mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面より僅かに低くなる。袖部は存在しない。

貯蔵穴：北西隅付近に位置し、ほぼ円形で、径62㎝、深さ13㎝を測る。底面は平坦。

その他：東壁寄りに不整形な楕円状の掘り方をもち、底面はやや凹凸ぎみ。埋土は、床面を構成する６・７層で、鈍い黄褐色土および暗褐色土である。

遺物：出土した遺物は少ないが、灰釉陶器の皿１点、須恵器の椀１点、壺１点（３・４は同一個体）、羽釜２点、小型甕１点、土師器の甕１点、鉄製品１点（槍鉋の先端部）を図示（第37図）した。多くは、埋土中からの出土である。

時期：出土した杯・椀・甕類から、９世紀後半の住居と考えられる。

91区３号住居　（第38図、PL．４・23）

位置：91区東側調査区のほぼ中央に位置し、本住居の北側を91区11号土坑と重複する。

グリッド：91区Ｇ・Ｈ－２・３

重複：本住居の北西隅付近に、91区11号土坑が重複する。土層断面の観察から、本住居の方が旧い。

形状：南東方向にやや長い長方形を呈し、隅は丸みをもつ。

規模：長辺2.58m、短辺2.33m、壁高0.29m

長軸方向：Ｎ－61°－Ｗ　床面積：4.87㎡

埋没土：１～５層が埋没土で、上層の１層とした黒褐色土を主に、床面を覆うのは２・４・５層の暗褐色土および黒褐色土である。また、６層としたのは91区11号土坑の埋没土である。

床面・壁：床面は僅かに凹凸をもつが概ね平坦で、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

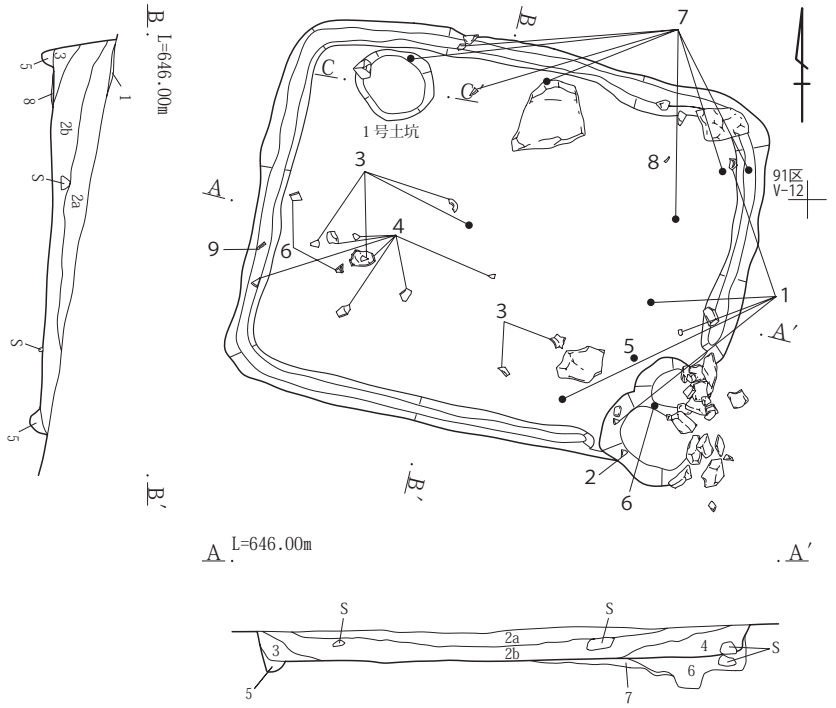
カマド：東壁のほぼ中央に位置し（方位Ｎ－115°－Ｅ）、壁の外側に大きく突出する。規模は全長0.66m、幅0.61mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面より僅かに低くなる。カマド内に礫が散在するが、石組みかは判然としない。

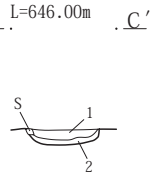
貯蔵穴：住居の中央西寄りに、貯蔵穴と考えられる円形の土坑（１号土坑）が検出された。径50㎝、深さ20㎝を測る。底面は平坦。

その他：掘り方等は、検出されていない。

遺物：出土した遺物は少なく、カマド内およびカマド前付近に散在する。須恵器の羽釜１点、土師器の小型甕１点、表面に点状に鉄滓が付着する凹石１点を図示（第38図）した。

時期：出土した羽釜・小型甕から、９世紀後半の住居と考えられる。



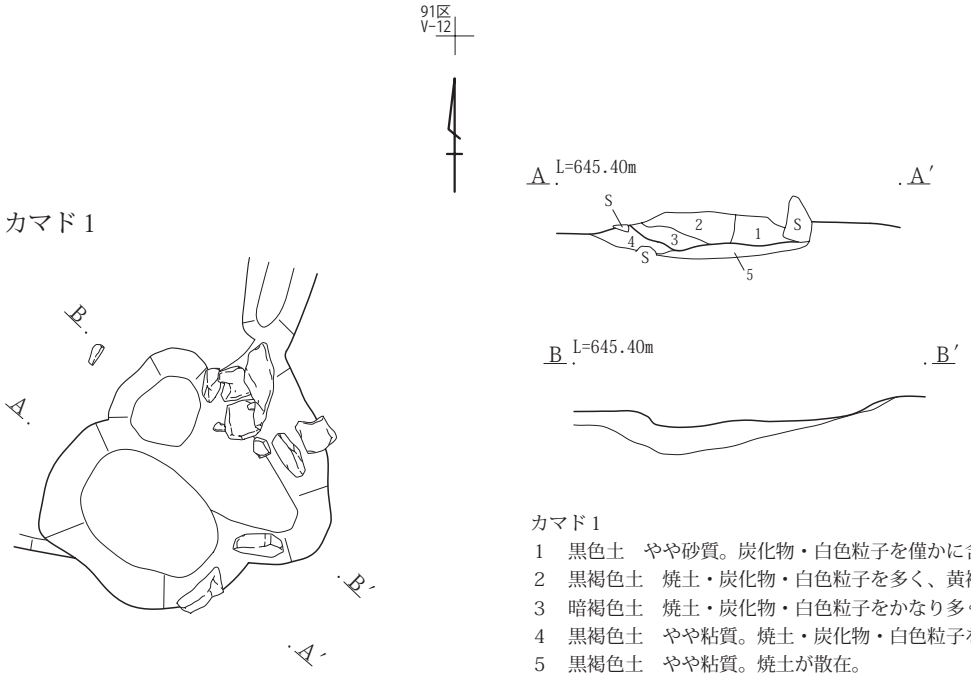


C－C’
1　黒褐色土　鈍い黄褐色土ブロックと黒色土(地山)ブロックとの混土。焼土、炭化物を含む。
2　暗褐色土　やや粘質。暗褐色土(地山)を主体とし、焼土を多く、炭化物を含む。

A－A’、B－B’
1　表土
2ａ　黒褐色土　やや砂質。焼土・炭化物・色粒子を均質に含み、礫が散在。
2ｂ　黒褐色土　２ａ層よりも固く締まり、礫を僅かに含む。
3　黒褐色土　やや粘質。焼土・炭化物・白色粒子を僅かに含む。
4　暗褐色土　焼土・炭化物・白色粒子を多く含み、礫・黄褐色地山ブロックが散在。
5　黒色土　やや砂質。焼土・白色粒子を僅かに含む。３層に近似。
6　鈍い黄褐色土　鈍い黄褐色･黄褐色土ブロックを主体とし､焼土･炭化物を多く含む。
7　暗褐色土　やや粘質。８層に鈍い黄褐色土ブロックを含み、焼土・炭化物が多い。
8　黒色土　焼土を含み、鈍い黄褐色土ブロックを層状に含む。

0　1：60　2m

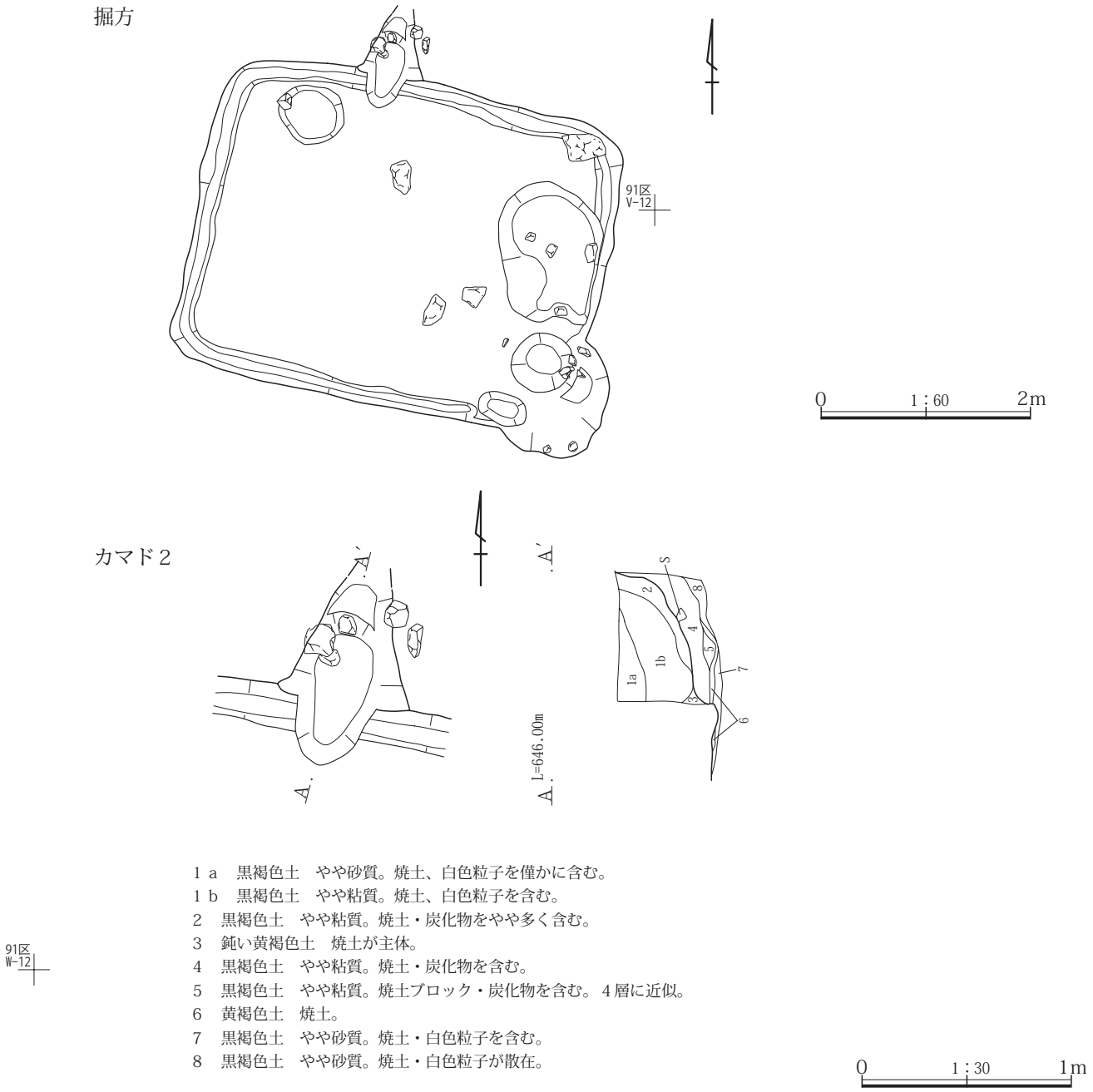
カマド１



カマド１
1　黒色土　やや砂質。炭化物・白色粒子を僅かに含む。
2　黒褐色土　焼土・炭化物・白色粒子を多く、黄褐色地山ブロックを含む。
3　暗褐色土　焼土・炭化物・白色粒子をかなり多く、黄褐色地山ブロックを多く含む。
4　黒褐色土　やや粘質。焼土・炭化物・白色粒子を多く含む。
5　黒褐色土　やや粘質。焼土が散在。

0　1：30　1m

第35図　91区２号住居　床面平・断面図、カマド１平・断面図



第36図　91区２号住居　掘方平面図、カマド２平・断面図

91区４号住居　（第39図、PL．４・23）

位置：91区西側調査区の中央北壁際に位置し、本住居の西南西側4.5mに91区１号住居がある。

グリッド：91区Ｖ・Ｗ－12

重複：本住居の南側の大半を、91区２号住居と重複する。土層断面の観察から、本住居の方が旧い。

形状：91区２号住居と同様な長方形を呈すると考えられるが、大半を91区２号住居と重複するため、詳細は不明。

規模：長辺3.74m、短辺(0.65)m、壁高0.40m

床面積：(1.69) ㎡

埋没土：１～３層が埋没土で、１ａ・ｂ層の黒褐色土を主に、床面を覆うのは１ｂ・２層である。

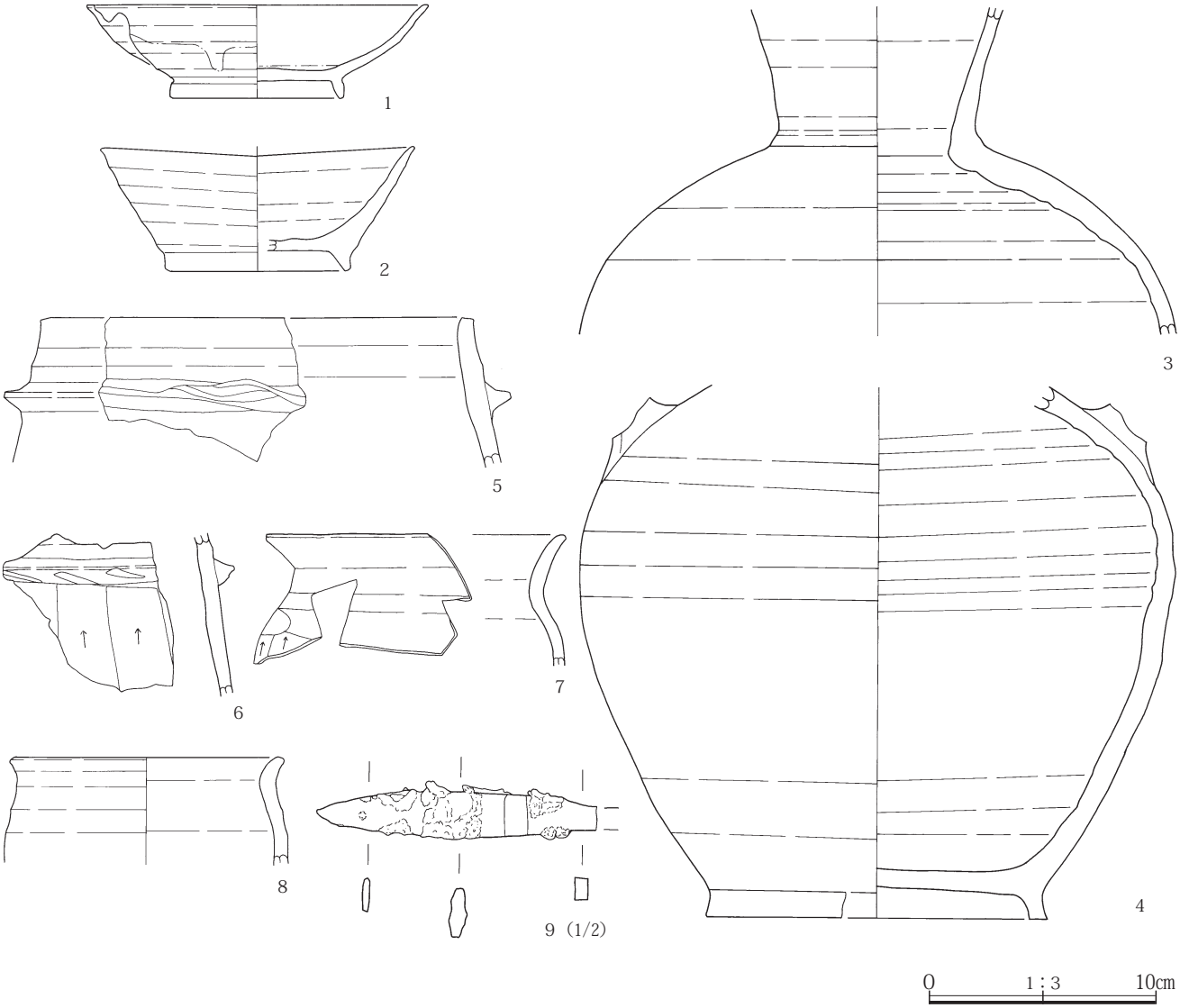
床面・壁：床面は比較的平坦で、壁は垂直ぎみに立ち上がる。

壁溝：北壁中央のカマドを除いた壁際に検出した。幅８㎝、深さ５㎝前後を測る。

カマド：北壁の中央やや東寄りに位置するが、カマドの燃焼部は調査区外へと延びるため、詳細は不明。

その他：掘り方等は、検出されていない。

遺物：出土した遺物は少なく、カマド前付近からである。



第37図　91区２号住居　出土遺物

土師器の甕１点、敲石１点を図示(第39図)した。

時期：出土した甕から、９世紀後半の住居と考えられる。

３．土坑

検出された土坑(陥し穴を含む)は、91区西側の調査区に１基、81区北側と91区東側に跨る調査区に16基(81区５基、91区に11基)の計17基が検出された。この内、陥し穴と考えられる土坑は、81区と91区が接する当たりに集中するが、町教委による調査で検出された等高線上に沿って帯状に延びる59基の延長上にある。

以下、各土坑ごとに記載する。(表２遺構一覧表を参照)

81区１号土坑　(第40図、PL．８)

位置：81区の中央北寄りに位置し、北側4.5mに81区３号土坑、北西側７mに81区５号土坑がある。

グリッド：81区Ｇ－23・24

形状：北北東方向に長軸をもつ、隅丸長方形を呈する。

規模：長軸1.60m、短軸0.65m、深さ0.70m

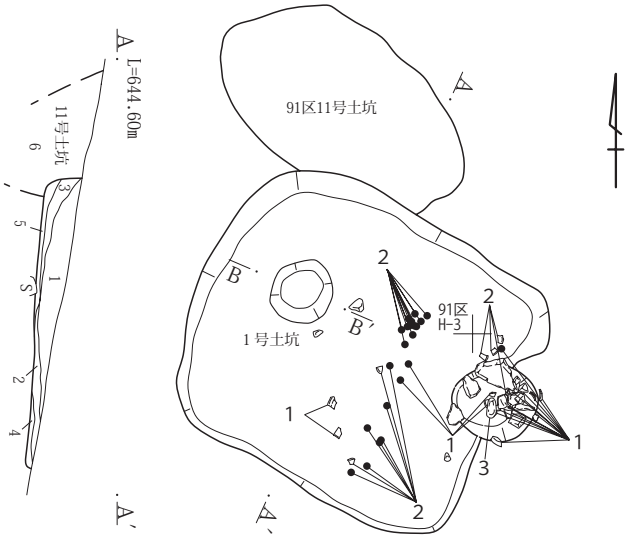
長軸方向：Ｎ－17°－Ｅ

埋土は、As-YPkを少量含む黒色土を主とし、４層に分層できる。底面は、やや凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

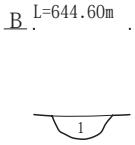
81区２号土坑　(第40図、PL．８)

位置：91区に跨る81区の北端に位置し、南西側80cmに81区４号土坑、北側90cmに91区７号土坑がある。

グリッド：81区Ｆ－25、91区Ｆ－１



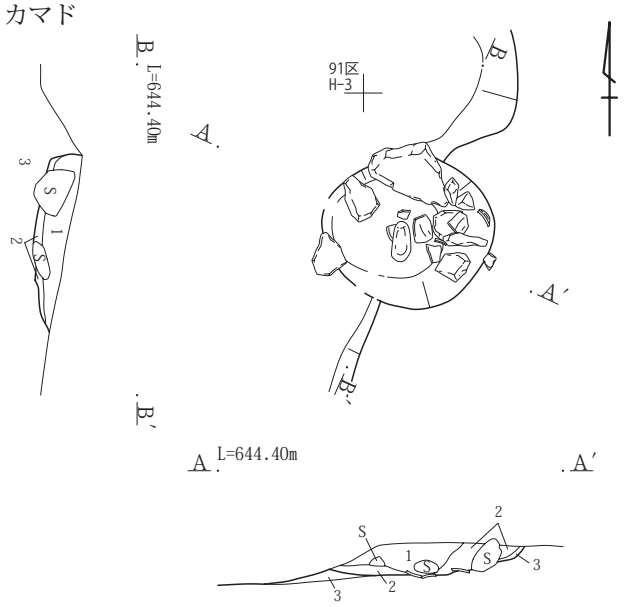
A－A’
1　黒褐色土　やや粘質。層下半に焼土を僅かに含む。
2　暗褐色土　粘質。明黄褐色粘土ブロックを多く含む。
3　暗褐色土　やや粘質。焼土を多く含み、地山ブロックとの混土。
4　黒褐色土　やや粘質。焼土を僅かに含む。
5　暗褐色土　やや粘質で硬く、地山ブロックを主体とする。
6　黒褐色土　やや粘質。赤色粒子・白色粒子を含む。（91区11号土坑）



B－B’
1　黒褐色土　やや粘質。焼土を多く、炭化物、白色粒子を含む。

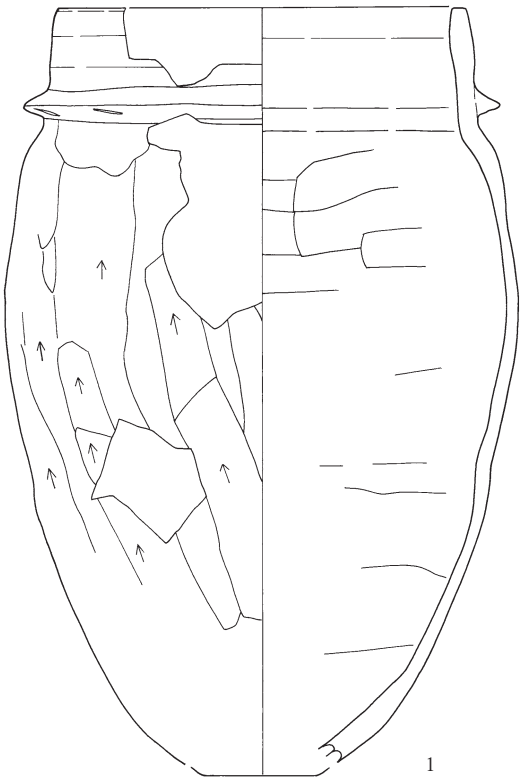
0　1：60　2m

カマド

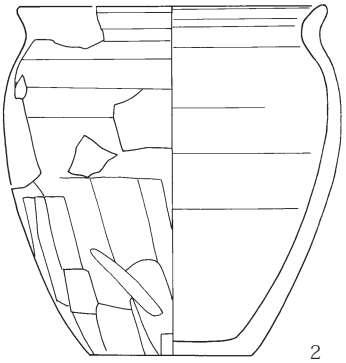


カマド
1　暗褐色土　やや粘質。層下半に焼土をやや多く含む。
2　鈍い黄褐色土　やや粘質。焼土が主体。
3　黒褐色土　やや粘質。焼土を含む。

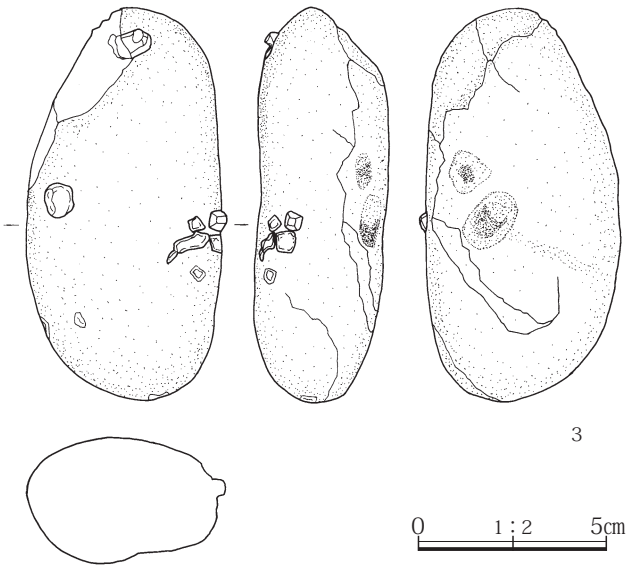
0　1：30　1m



1



2

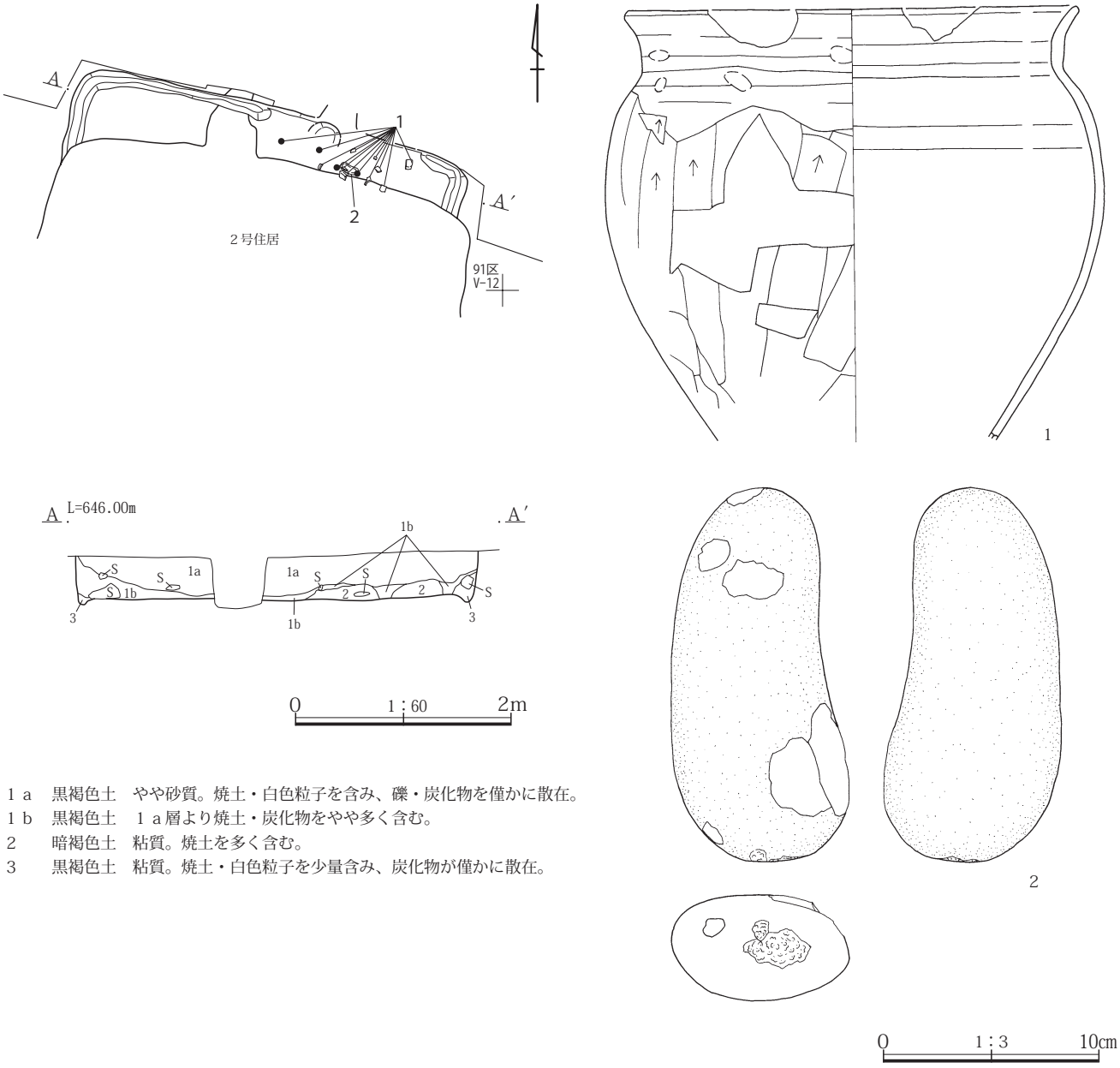


3

0　1：2　5cm

0　1：3　10cm

第38図　91区３号住居　平・断面図、カマド平・断面図、出土遺物



１ａ　黒褐色土　やや砂質。焼土・白色粒子を含み、礫・炭化物を僅かに散在。
１ｂ　黒褐色土　１ａ層より焼土・炭化物をやや多く含む。
２　　暗褐色土　粘質。焼土を多く含む。
３　　黒褐色土　粘質。焼土・白色粒子を少量含み、炭化物が僅かに散在。

第39図　91区４号住居　平・断面図、出土遺物

形状：南北方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸2.80m、短軸1.94m、深さ1.98m

長軸方向：Ｎ－５°－Ｅ

埋土は、As-YPkやローム粒を含む黒色土および暗褐色土を主とし、12層に分層できる。底面は細長く、ほぼ平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

81区３号土坑　(第41図、PL．８)

位置：81区の北端に位置し、北東側に隣接して81区４号土坑、南側4.5mに81区１号土坑がある。

グリッド：81区Ｇ－25

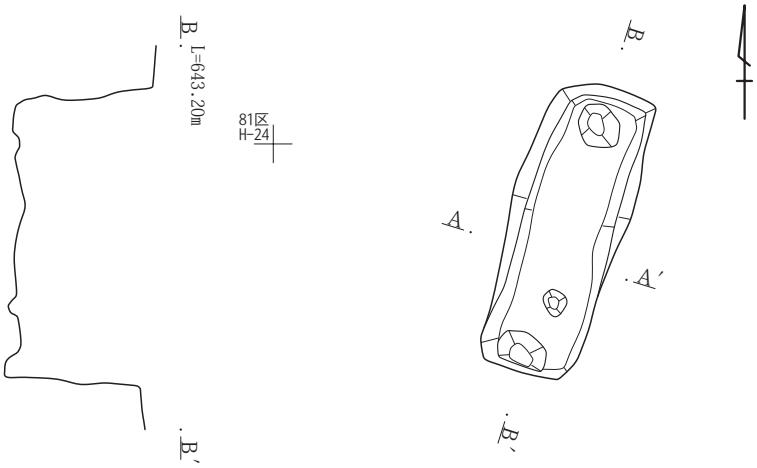
形状：南北方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸1.90m、短軸1.50m、深さ1.64m

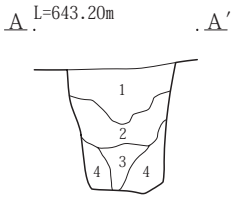
長軸方向：Ｎ－５°－Ｗ

埋土は、As-YPkを含む黒褐色土および黒色土を主とし、８層に分層できる。底面は長方形で、凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

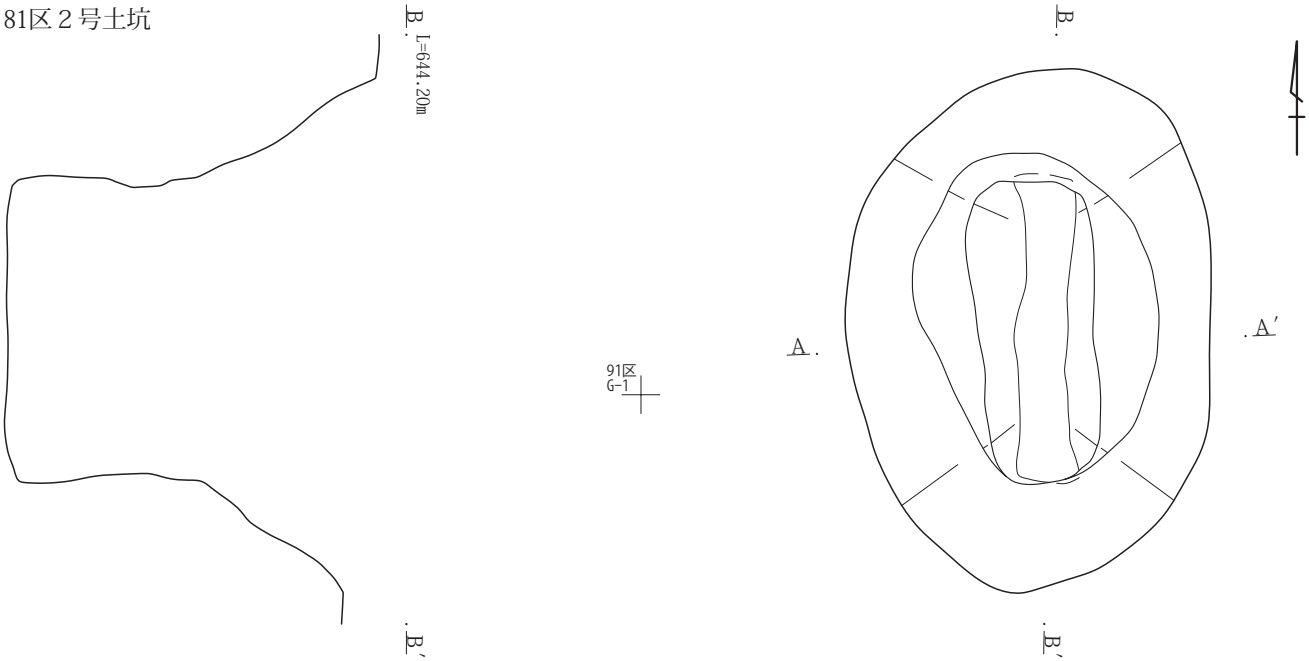
81区１号土坑



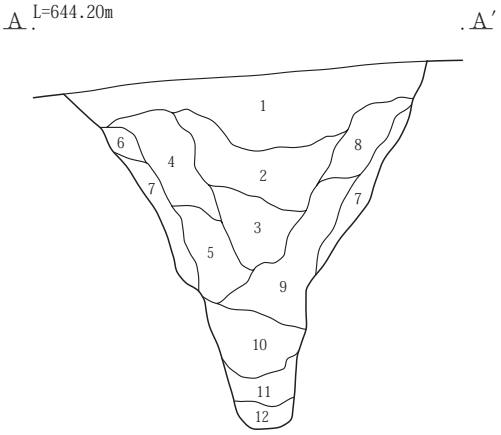
81区１号土坑
1　黒色土　軟質。As-YPkを少量含む。
2　黒色土　軟質。ロームブロック・As-YPkを少量含む。
3　黒色土　混入物少なく、均質。
4　黒褐色土　ローム大ブロック含む。



81区２号土坑



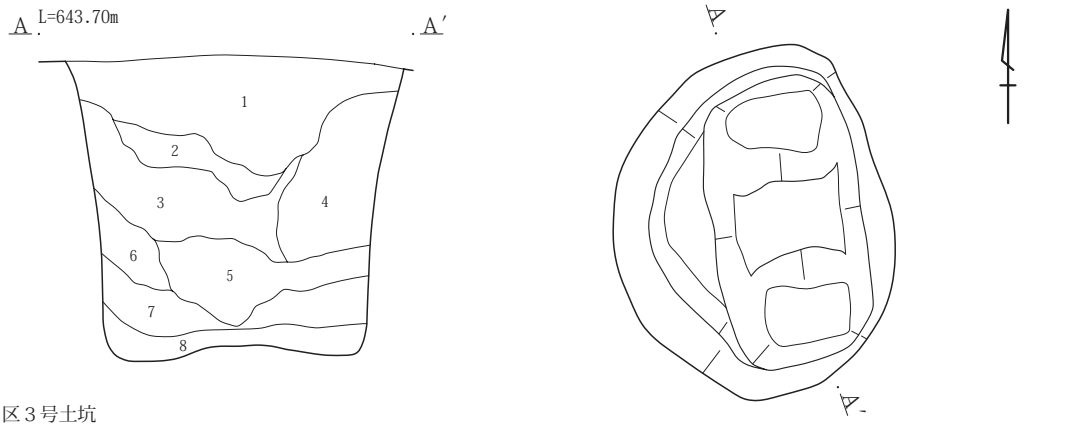
81区２号土坑
1　黒色土　軟質。灰色味をおび、小礫・As-YPkを少量含む。
2　暗褐色土　締まり強い。ローム粒を少量含む。
3　暗褐色土　締まり強い。ローム粒・As-YPkを微量含む。
4　暗褐色土　ローム粒をブロック状に多く含む。
5　暗褐色土　ローム粒をブロック状に少量含む。
6　黒色土　ローム粒を多く含む。
7　黒色土　ローム粒を少量含む。
8　黒色土　均質で、As-YPkを微量含む。
9　黒色土　締まりやや強い。均質で、混入物を微量含む。
10　黒色土　やや明るく均質で、ローム粒を少量含む。
11　黒色土　締まり強い。均質で、混入物を微量含む。
12　黒褐色土　ローム小ブロックを多く含む。



0　1:40　1m

第40図　81区１・２号土坑　平・断面図

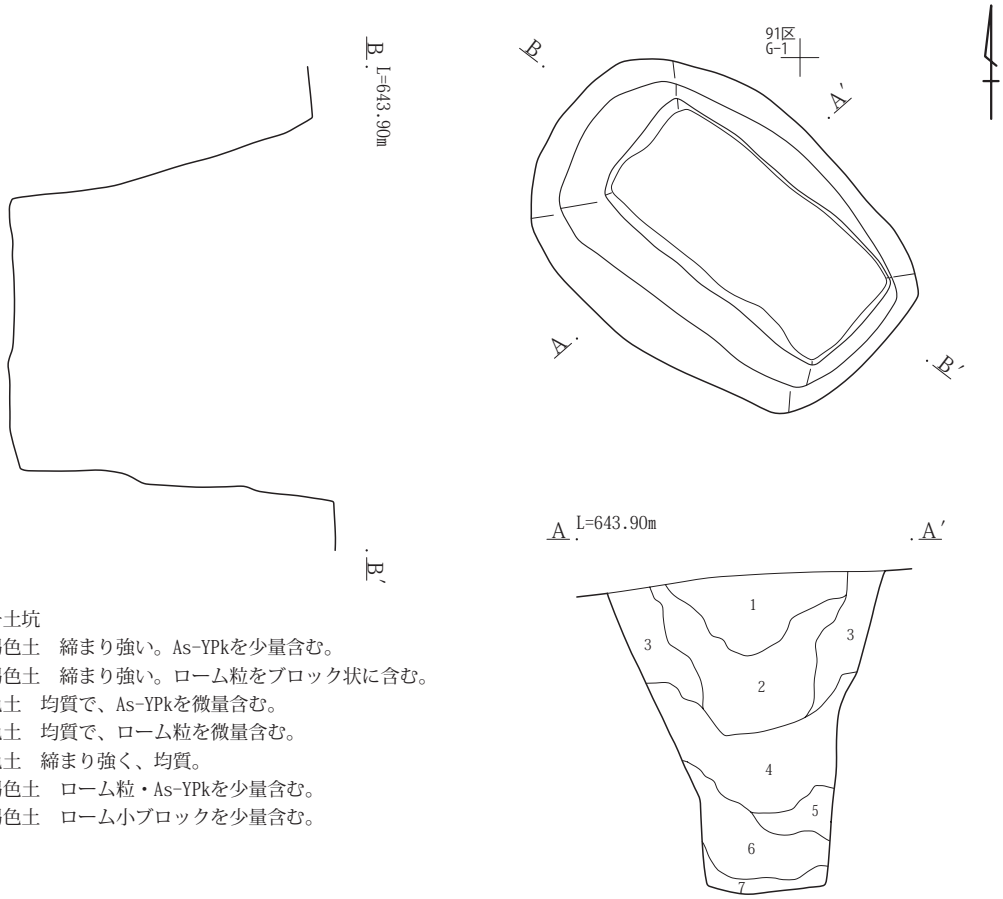
81区３号土坑



81区３号土坑
1　黒褐色土　As-YPkを少量含む。
2　黒褐色土　褐色土小ブロック・As-YPkを少量含む。
3　黒褐色土　締まりやや強い。暗く、As-YPkを微量含む。
4　黒色土　締まり強い。均質で、褐色土ブロックを少量含む。
5　黒色土　均質で、As-YPkを微量含む。
6　黒色土　ローム粒を少量含む。
7　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。
8　黒褐色土　ローム小ブロックを多く含む。

81区
G-25

81区４号土坑



81区４号土坑
1　黒褐色土　締まり強い。As-YPkを少量含む。
2　暗褐色土　締まり強い。ローム粒をブロック状に含む。
3　黒色土　均質で、As-YPkを微量含む。
4　黒色土　均質で、ローム粒を微量含む。
5　黒色土　締まり強く、均質。
6　黒褐色土　ローム粒・As-YPkを少量含む。
7　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。

0　1:40　1m

第41図　81区３・４号土坑　平・断面図

81区４号土坑　（第41図、PL．８）

位置：81区の北端中央付近に位置し、南西側に隣接して81区３号土坑、北東側80cmに81区２号土坑がある。

グリッド：81区Ｆ・Ｇ－25

形状：北西方向に長軸をもつ、隅丸長方形を呈する。

規模：長軸2.08m、短軸1.48m、深さ1.71m

長軸方向：Ｎ－52°－Ｗ

埋土は、As-YPkを含む黒褐色土および黒色土を主とし、７層に分層できる。底面はやや幅狭な長方形で、ほぼ平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

81区５号土坑　（第42図、PL．８）

位置：81区北側の西壁際に位置し、81区１号住居と重複し、東側3.4mに81区３号土坑がある。

グリッド：81区Ｈ・Ｉ－25

重複：81区１号住居と僅かに重複するが、その新旧は遺構確認面および埋土の違いから、本土坑の方が新しい。

形状：南北方向に長軸をもつ、楕円形を呈すると思われる。

規模：長軸2.50m、短軸(1.38)m、深さ1.94m

長軸方向：Ｎ－５°－Ｗ

埋土は、As-YPkを含む黒褐色土および黒色土を主とし、13層に分層できる。底面は凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

91区１号土坑　（第42図、PL．６）

位置：91区東側調査区の中央西寄りに位置し、北側に近接して91区２号土坑、西側1.0mに91区10号土坑がある。

グリッド：91区Ｉ－２

形状：北北東方向に長軸をもつ、隅丸長方形を呈する。

規模：長軸1.24m、短軸1.06m、深さ0.48m

長軸方向：Ｎ－15°－Ｅ

埋土は、黒色土および黒褐色土を主とし、３層に分層できる。底面は概ね平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

91区２号土坑　（第42図、PL．６）

位置：91区東側調査区の中央やや西寄りに位置し、南側に近接して91区１号土坑、西側3.0mに91区３号土坑、東側3.2mに91区３号住居がある。

グリッド：91区Ｉ－３

形状：北北東方向に長軸をもつ、長楕円形を呈する。

規模：長軸2.67m、短軸0.75m、深さ0.12m

長軸方向：Ｎ－10°－Ｅ

埋土は、As-YPkを含む暗褐色土である。底面は概ね平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

91区３号土坑　（第43図、PL．６）

位置：91区東側調査区の中央西寄りに位置し、東側1.0mに91区２号土坑、南側1.3mに91区10号土坑がある。

グリッド：91区Ｉ・Ｊ－３

形状：東北東方向に長軸をもつ、長楕円形を呈する。

規模：長軸1.86m、短軸1.00m、深さ1.40m

長軸方向：Ｎ－79°－Ｅ

埋土は、As-YPkを含む黒褐色土および黒色土を主とし、７層に分層できる。底面は長方形で、凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

91区４号土坑　（第43図）

位置：91区東側調査区の中央西寄りに位置し、南側2.0mに91区３号土坑がある。

グリッド：91区Ｉ・Ｊ－４

形状：北東方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸0.86m、短軸0.62m、深さ0.26m

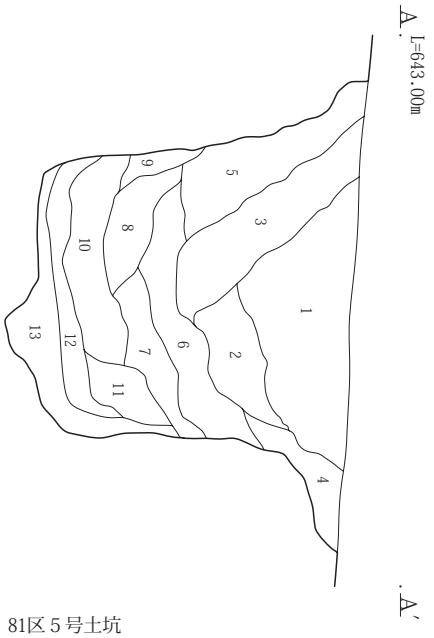
長軸方向：Ｎ－53°－Ｅ

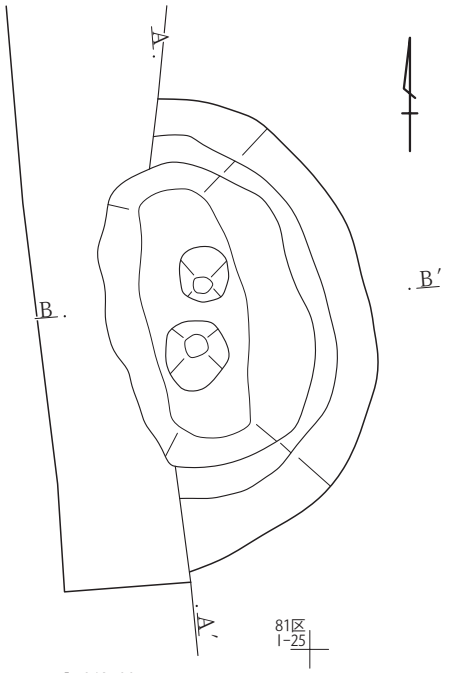
埋土は、As-YPkを含む黒色土と黒褐色土で、２層に分層できる。底面はやや凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

91区５号土坑　（第43図、PL．６）

位置：91区東側調査区の中央東寄りに位置し、西北西側3.0mに91区３号住居、南東側2.5mに91区９号土坑がある。

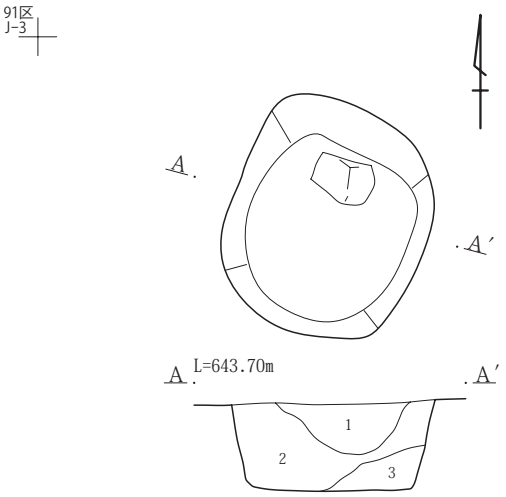
81区５号土坑





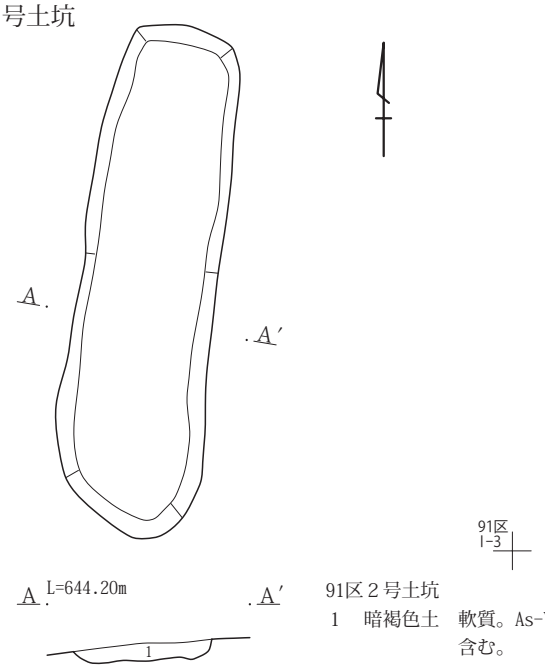
81区５号土坑
1　黒褐色土　締まり強い。ロームブロック・細粒As-YPkを少量含む。
2　黒褐色土　締まり強い。ローム粒・細粒As-YPkを含む。
3　黒褐色土　締まり強い。２層より暗く、細粒As-YPkを多く含む。
4　黒褐色土　やや暗く、細粒As-YPkを少量含む。
5　黒色土　細粒As-YPkを少量含む。
6　黒色土　ローム粒を少量含む。
7　黒色土　明るく、ローム粒をブロック状に含む。
8　黒色土　均質で、ローム粒・As-YPkを微量含む。
9　黒色土　均質で、混入物なし。
10　黒褐色土　ローム小ブロックを多く含む。
11　黒色土　締まりやや強い。ローム粒を少量含む。
12　黒色土　ローム小ブロックを少量含む。
13　黒色土　ローム粒を少量含む。

91区１号土坑



91区１号土坑
1　黒色土　軟質で、均質。
2　黒褐色土　締まりやや強い。ローム粒を少量含む。
3　黒色土　軟質。１層より暗く、ローム粒を微量含む。

91区２号土坑

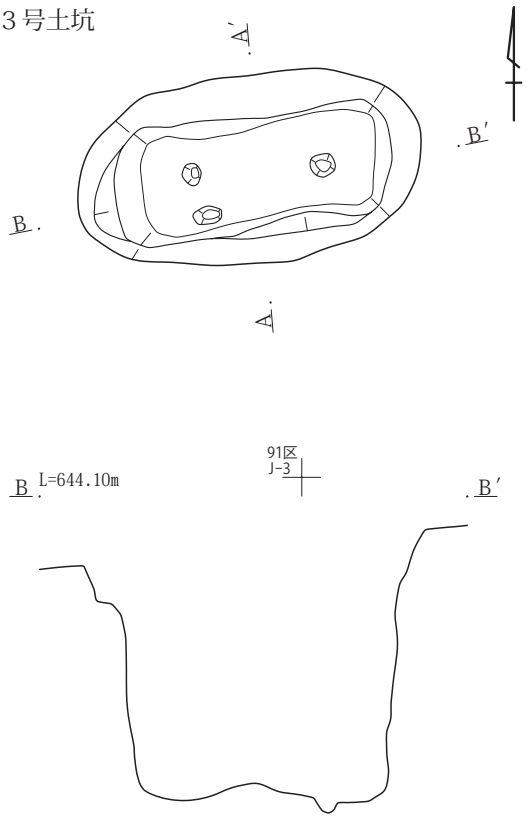


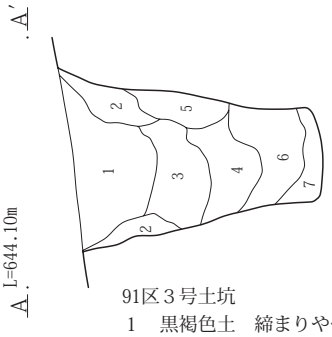
91区２号土坑
1　暗褐色土　軟質。As-YPkを微量含む。

0　1:40　1m

第42図　81区５号土坑、91区１・２号土坑　平・断面図

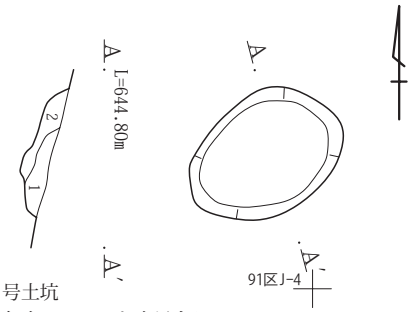
91区３号土坑





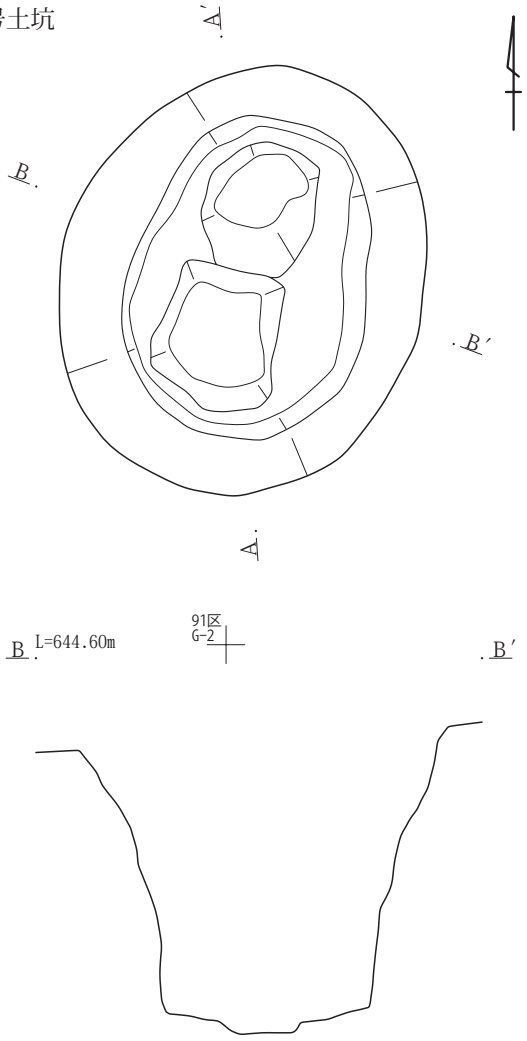
91区３号土坑
1　黒褐色土　締まりやや強い。明るく、As-YPkを少量含む。
2　黒色土　軟質。As-YPkを微量含む。
3　黒色土　締まりやや強い。黒褐色土ブロックを含む。
4　黒色土　やや明るく、ローム粒を少量含む。
5　黒色土　締まりやや強い。暗く、As-YPkを少量含む。
6　黒色土　暗く、As-YPkを少量含む。
7　黒褐色土　ロームブロックを多く含む。

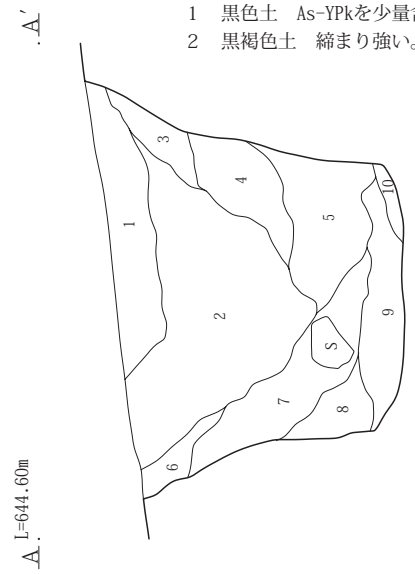
91区４号土坑



91区４号土坑
1　黒色土　As-YPkを少量含む。
2　黒褐色土　締まり強い。As-YPkを少量含む。

91区５号土坑





91区５号土坑
1　黒色土　灰色味をおび、大粒のAs-YPkを含む。
2　暗褐色土　締まり強い。大粒のAs-YPkを多く含む。
3　黒色土　細粒As-YPkを少量含む。
4　黒色土　締まりやや強い。As-YPkを微量含む。
5　黒色土　締まり強い。ローム粒・As-YPkを少量含む。
6　黒色土　均質で、As-YPkを微量含む。
7　黒色土　締まり強い。均質で、As-YPkを微量含む。
8　黒褐色土　As-YPkを少量含む。
9　暗褐色土　ローム粒・As-YPkを少量含む。
10　暗褐色土　締まり強い。ローム粒を多く含む。

0　1:40　1m

第43図　91区３～５号土坑　平・断面図

グリッド：91区Ｆ・Ｇ－２
形状：北北東方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。
規模：長軸2.28m、短軸1.94m、深さ1.70m
長軸方向：Ｎ－21°－Ｅ
埋土は、As-YPkを含む黒色土と暗褐色土で、10層に分層できる。底面は凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

91区６号土坑　(第44図、PL．６)
位置：91区東側調査区の中央南端に位置し、81区と接する。西側には隣接して91区８号土坑、南東側には近接して81区４号土坑がある。
グリッド：91区Ｇ－１、81区Ｇ－25
形状：北西方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。
規模：長軸2.02m、短軸1.60m、深さ1.62m
長軸方向：Ｎ－11°－Ｗ
埋土は、As-YPkを含む黒褐色土および黒色土を主とし、８層に分層できる。底面は概ね長方形で、細かな凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

91区７号土坑　(第44図、PL．６・23)
位置：91区東側調査区の南東寄りに位置し、91区９号土坑と重複する。南側には81区２号土坑が近接する。
グリッド：91区Ｆ－１
重複：本土坑の北東側を91区９号土坑と僅かに重複するが、その新旧は不明。
形状：北北東方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。
規模：長軸1.02m、短軸0.64m、深さ0.16m
長軸方向：Ｎ－６°－Ｅ
埋土は黒褐色土で、底面は平坦。出土遺物には、図示した須恵器の椀の底部があり、９世紀後半の土坑の可能性が高い。

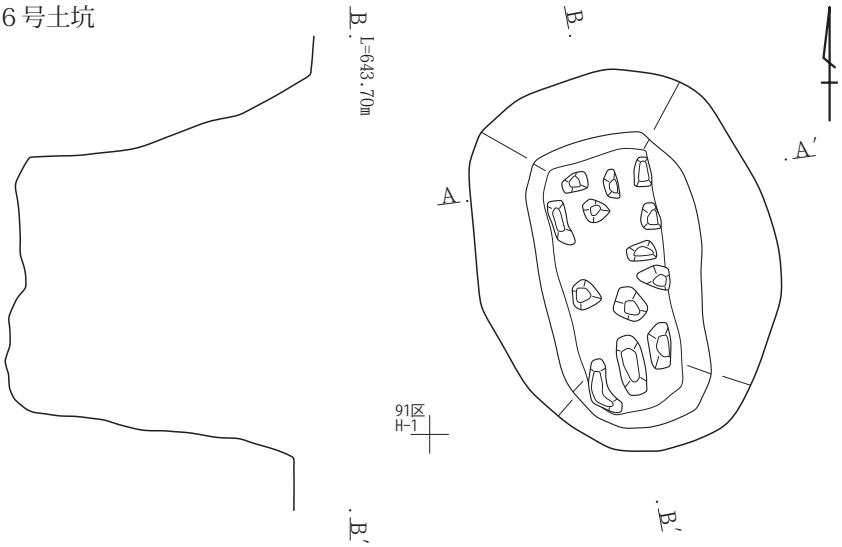
91区８号土坑　(第44図、PL．７)
位置：91区東側調査区の中央南端に位置し、81区に跨る。東側には隣接して91区６号土坑、南西側1.6mには81区５号土坑がある。
グリッド：91区Ｇ・Ｈ－１、81区Ｇ・Ｈ－25
形状：北北西方向に長軸をもつ、不整楕円形を呈する。
規模：長軸2.40m、短軸1.82m、深さ1.60m
長軸方向：Ｎ－28°－Ｗ
埋土は、ローム大ブロックを多く含む黄褐色土や、As-YPkを含む黒褐色土および黒色土を主とし、８層に分層できる。底面はやや細長い長方形で、僅かに細かな凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

91区９号土坑　(第45図、PL．７)
位置：91区東側調査区の南東寄りに位置し、91区７号土坑と重複する。南側には81区２号土坑が近接する。
グリッド：91区Ｅ・Ｆ－１・２
重複：本土坑の南西側を91区７号土坑と僅かに重複するが、その新旧は不明。
形状：南北方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。
規模：長軸1.87m、短軸1.28m、深さ1.64m
長軸方向：Ｎ－０°
埋土は、暗褐色土、As-YPkを含む黒色土および黒褐色土を主とし、９層に分層できる。底面は概ね長方形で、細かな凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

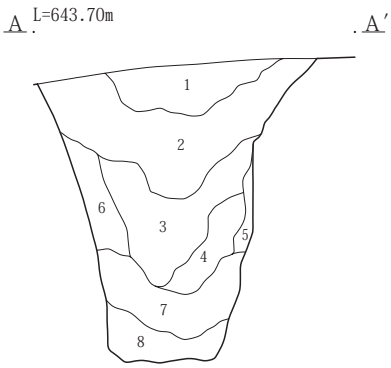
91区10号土坑　(第45図、PL．７)
位置：91区東側調査区の南西で、調査区境に位置する。東側1.0mに91区１号土坑、北側1.3mに91区３号土坑がある。
グリッド：91区Ｊ－２
形状：南北方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。
規模：長軸0.98m、短軸0.76m、深さ0.16m
長軸方向：Ｎ－５°－Ｅ
埋土は、As-YPkを含む黒色土で、上位に礫が集石する。底面はやや擂鉢状。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

91区11号土坑　(第45図、PL．７)
位置：91区東側調査区のほぼ中央に位置し、91区３号

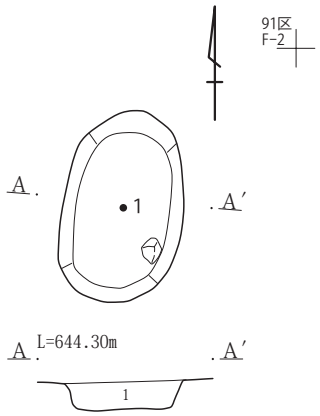
91区６号土坑



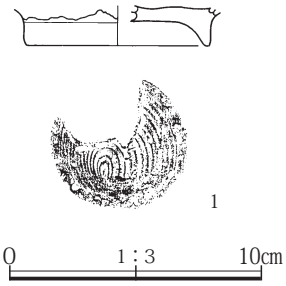
91区６号土坑
1　黒褐色土　灰色味をおび、炭化物・As-YPkを少量含む。
2　黒褐色土　暗く、炭化物を多く、As-YPkを少量含む。
3　黒褐色土　締まりやや強い。褐色土ブロック・As-YPkを少量含む。
4　黒褐色土　締まり強く、明るい。褐色土ブロックを多く含む。
5　黒色土　粘質。大粒のAs-YPkを多く含む。
6　黒色土　均質で、As-YPkを少量含む。
7　黒褐色土　褐色土ブロック・As-YPkを少量含む。
8　黒褐色土　締まりやや強い。ローム小ブロックを多く含む。



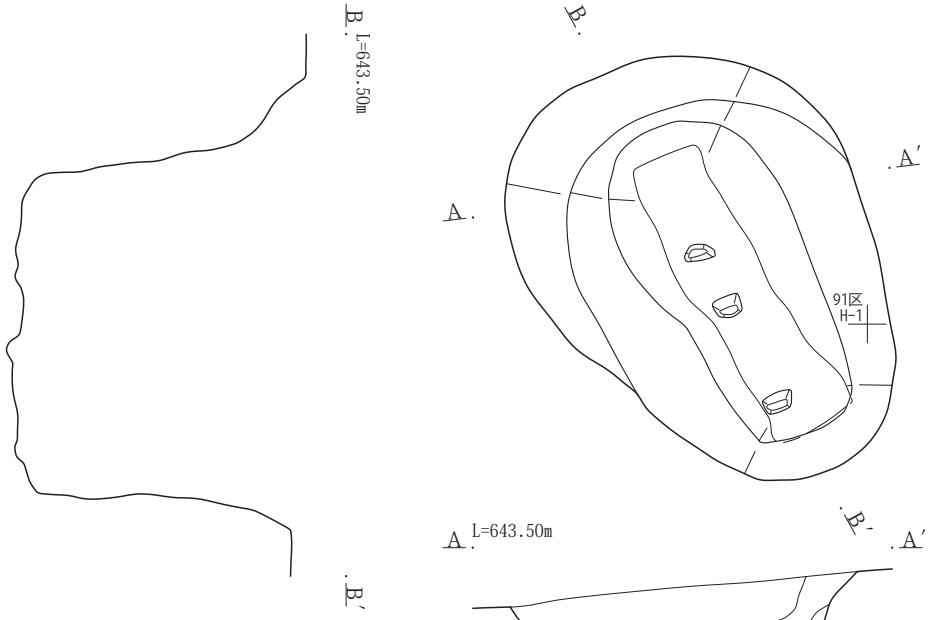
91区７号土坑



91区７号土坑
1　黒褐色土　締まり強い。均質で、As-YPkを微量含む。



91区８号土坑

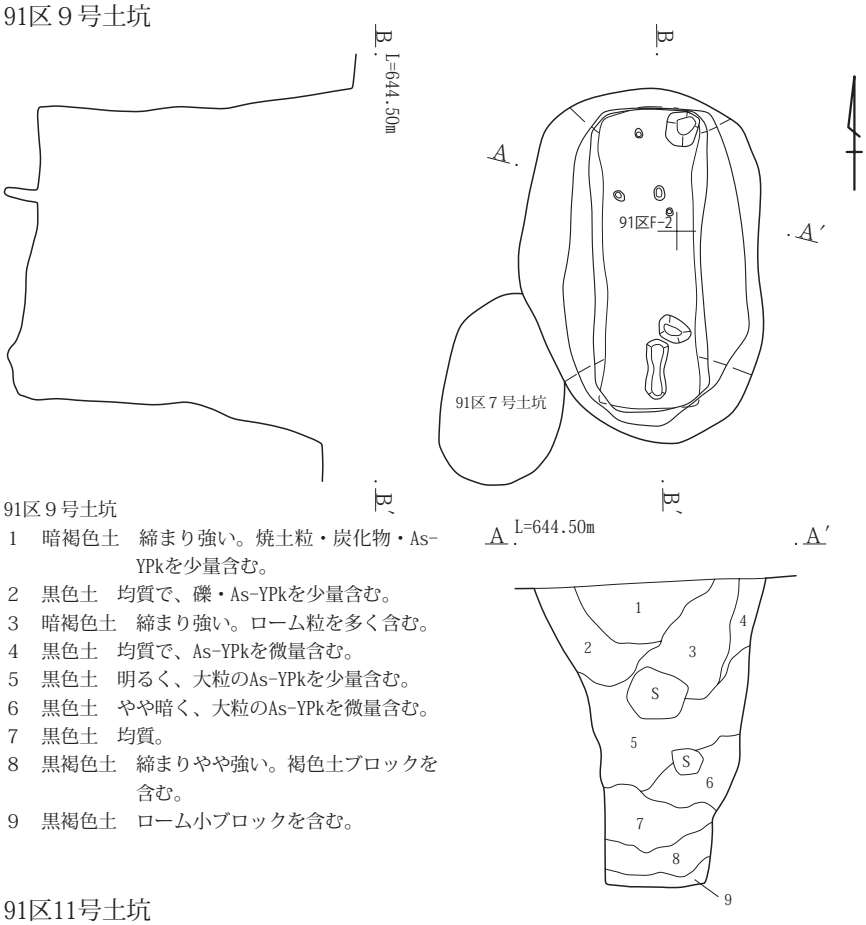


91区８号土坑
1　黄褐色土　ローム大ブロックを多く含む。
2　黒色土　ローム粒・As-YPkを少量含む。
3　黒褐色土　褐色土ブロック・As-YPkを少量含む。
4　黒褐色土　均質で、As-YPkを微量含む。
5　黒色土　均質で、As-YPkを微量含む。
6　黒色土　ローム粒を少量含む。
7　黒色土　ローム小ブロックを少量含む。
8　黒褐色土　締まり弱い。ローム小ブロックを多く含む。

0　1：40　1m

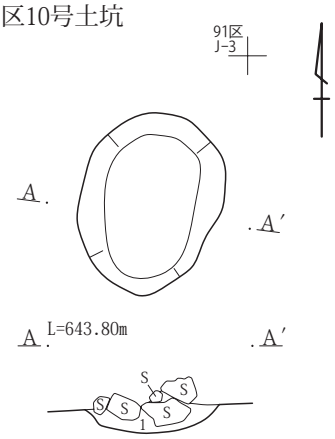
第44図　91区６～８号土坑　平・断面図、出土遺物

91区９号土坑



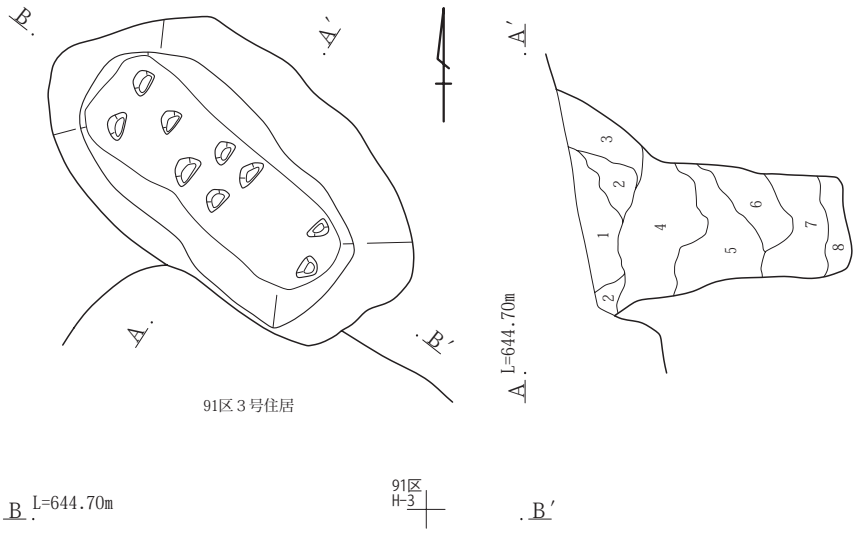
91区９号土坑
1　暗褐色土　締まり強い。焼土粒・炭化物・As-YPkを少量含む。
2　黒色土　均質で、礫・As-YPkを少量含む。
3　暗褐色土　締まり強い。ローム粒を多く含む。
4　黒色土　均質で、As-YPkを微量含む。
5　黒色土　明るく、大粒のAs-YPkを少量含む。
6　黒色土　やや暗く、大粒のAs-YPkを微量含む。
7　黒色土　均質。
8　黒褐色土　締まりやや強い。褐色土ブロックを含む。
9　黒褐色土　ローム小ブロックを含む。

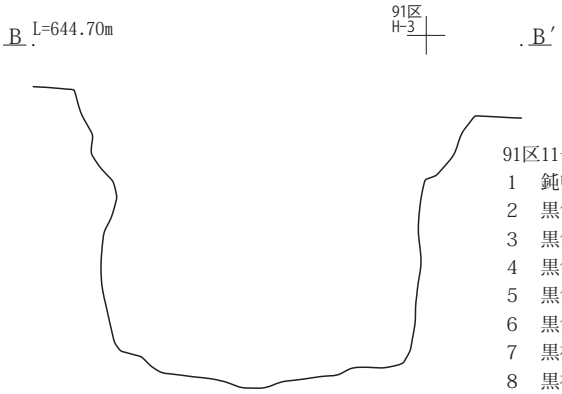
91区10号土坑



91区10号土坑
1　黒色土　As-YPkを微量含む。

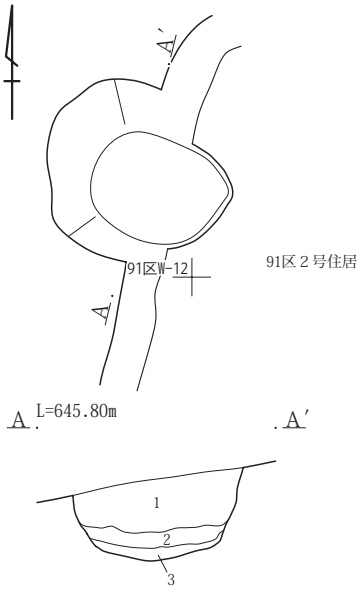
91区11号土坑





91区11号土坑
1　鈍い褐色土　やや砂質。As-YPkを少量含む。
2　黒色土　褐色土ブロック・As-YPkを少量含む。
3　黒色土　As-YPkを少量含む。
4　黒色土　締まりやや強い。As-YPkを少量含む。
5　黒色土　As-YPkを多く含む。
6　黒色土　As-YPkを微量含む。
7　黒褐色土　均質で、混入物は微少。
8　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。

91区12号土坑



91区12号土坑
1　黒褐色土　やや粘質。焼土・白色粒子を多く、炭化物を含む。
2　暗赤褐色土　粘土。焼土・炭化物を含む。
3　暗褐色土　焼土・白色粒子を少量含む。

0　1:40　1m

第45図　91区９～12号土坑　平・断面図

住居と重複する。

グリッド：91区Ｈ－３

重複：本土坑の南東側に、91区３号住居が重複する。土層断面の観察から、本土坑の方が新しい。

形状：北西方向に長軸をもつ、長楕円形を呈する。

規模：長軸2.20m、短軸1.24m、深さ1.56m

長軸方向：Ｎ－57°－Ｗ

埋土は、鈍い褐色土、As-YPkを含む黒色土および黒褐色土を主とし、８層に分層できる。底面は概ね長方形で、細かな凹凸をもつ。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、周囲の状況および形状等から、古代以降の土坑(陥し穴)と考えられる。

91区12号土坑　(第45図、PL．７)

位置：91区西側調査区の中央付近で、91区２号住居と重複する。

グリッド：91区Ｗ－12

重複：本土坑の東半が、91区２号住居と重複する。土層断面の観察から、本土坑の方が旧い。

形状：円形ないし楕円形を呈すると考えられる。

規模：長軸0.94m、短軸(0.58)m、深さ0.50m

埋土は黒褐色土を主とし、３層に分層できる。底面はやや擂鉢状。出土遺物はなく､時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

４．ピット

検出されたピットは、81区に１基、91区に14基の計15基が散漫に検出された(表２遺構一覧表を参照)。町教委による調査では、第１面調査で計51基が検出されている。

第５節　調査の成果(総括)

第１項　上原Ⅰ遺跡の全体像

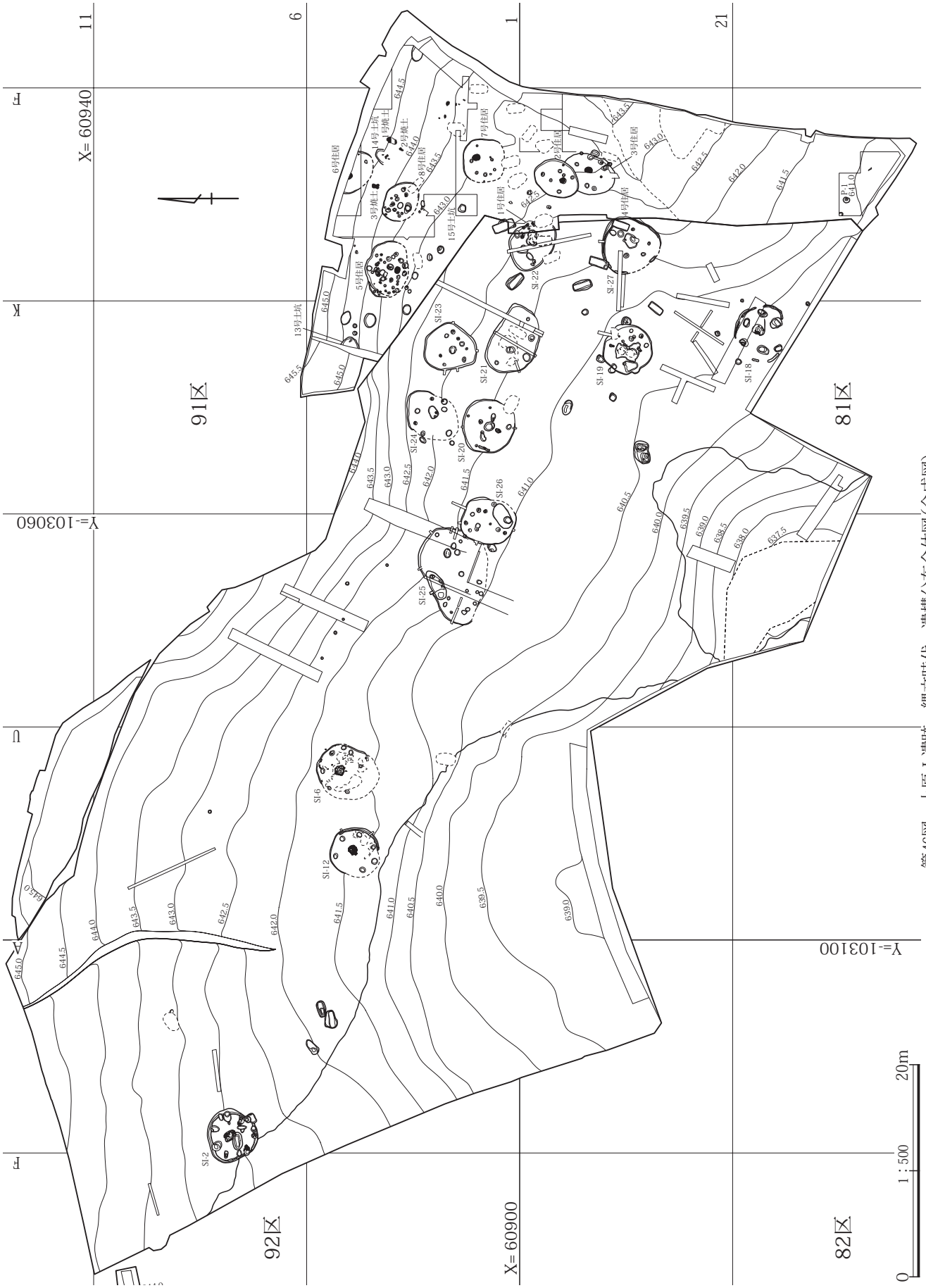
先述したように、本遺跡の調査は数次に渡り、また当事業団と町教委が分割した状態で行った経緯がある。ここでは、町教委と当事業団の調査データを集約し、縄文時代と平安時代を中心に本遺跡の全体像を明らかとする。

１．縄文時代

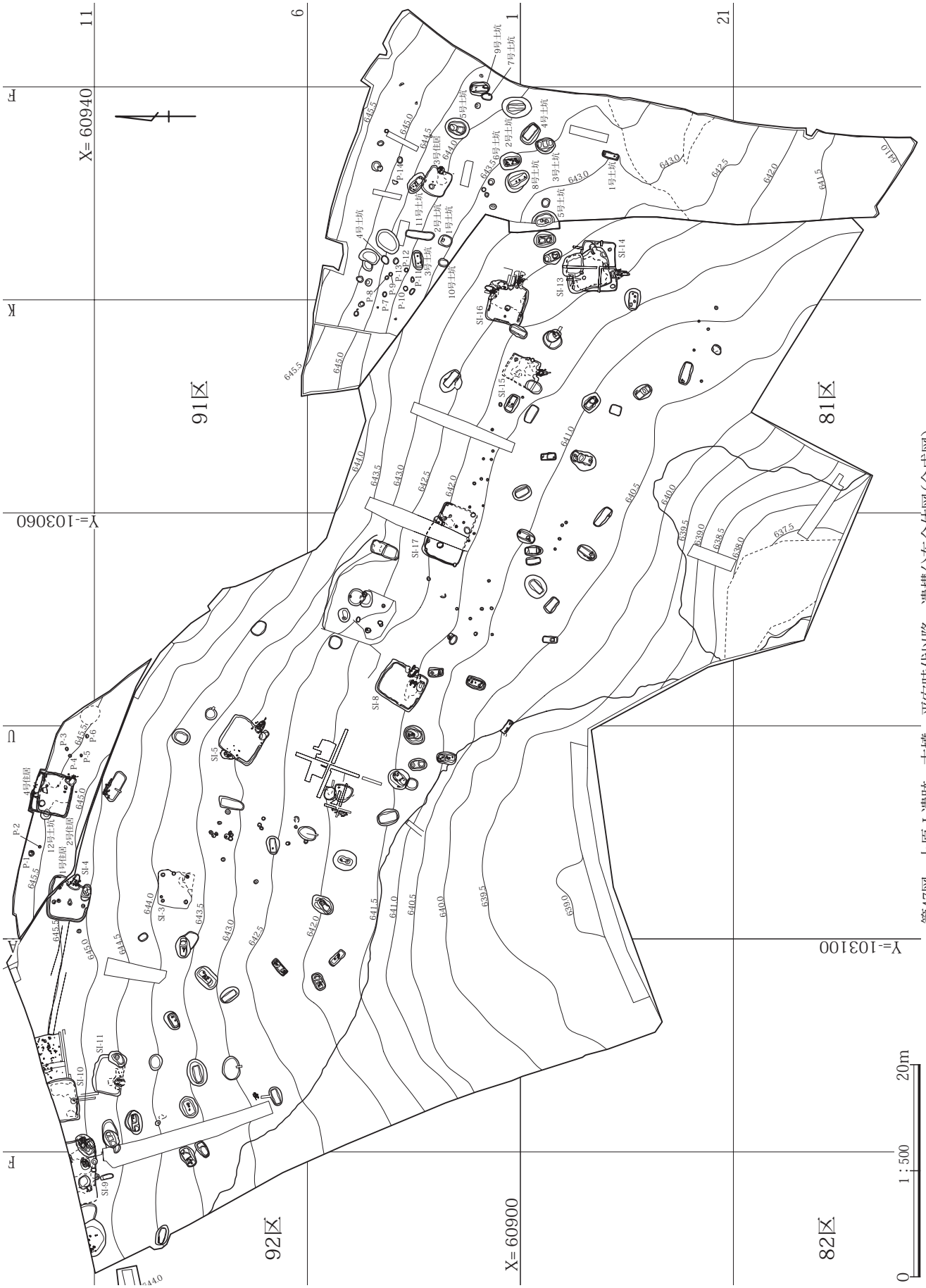
本遺跡における縄文時代の遺構分布につて、合成した図を第46図に示した。それぞれの調査で検出された縄文時代の住居は、事業団調査分では前期が８軒(81区１～４号住居、91区５～８号住居)、町教委調査分では前期が９軒(SI－19～27)および中期が４軒(SI－02・06・12・18)の計13軒である。この内、前期の２軒は両調査に跨る住居であり、両調査における住居数は前期15軒、中期４軒となる。因みに、前期の15軒全てが、前期初頭に位置づけられる花積下層Ⅰ式期の住居である。また、中期の４軒は、中葉から後葉にかけての住居である。

この花積下層Ⅰ式期の住居15軒は、両調査範囲全体の東側に集中していることが見て取れる。また、その配置の状況は、環状や列状を呈しているとは言えず、段丘奥の平坦面への変換部に狭い範囲で集中している状況である(本遺跡の東側に隣接する東原Ⅰ遺跡へ、範囲が拡大する可能性もある。第３図参照)。同段丘上での周辺遺跡にも、同時期の住居を散見することができるが、その検出数は何れも少なく、本遺跡が前期初頭花積下層Ⅰ式期における拠点的な集落であったものと推測できる。しかも、群馬県内での同時期の集落で著名な坪井遺跡や久保田遺跡等の遺跡と比較しても、その数は本遺跡が圧倒している。

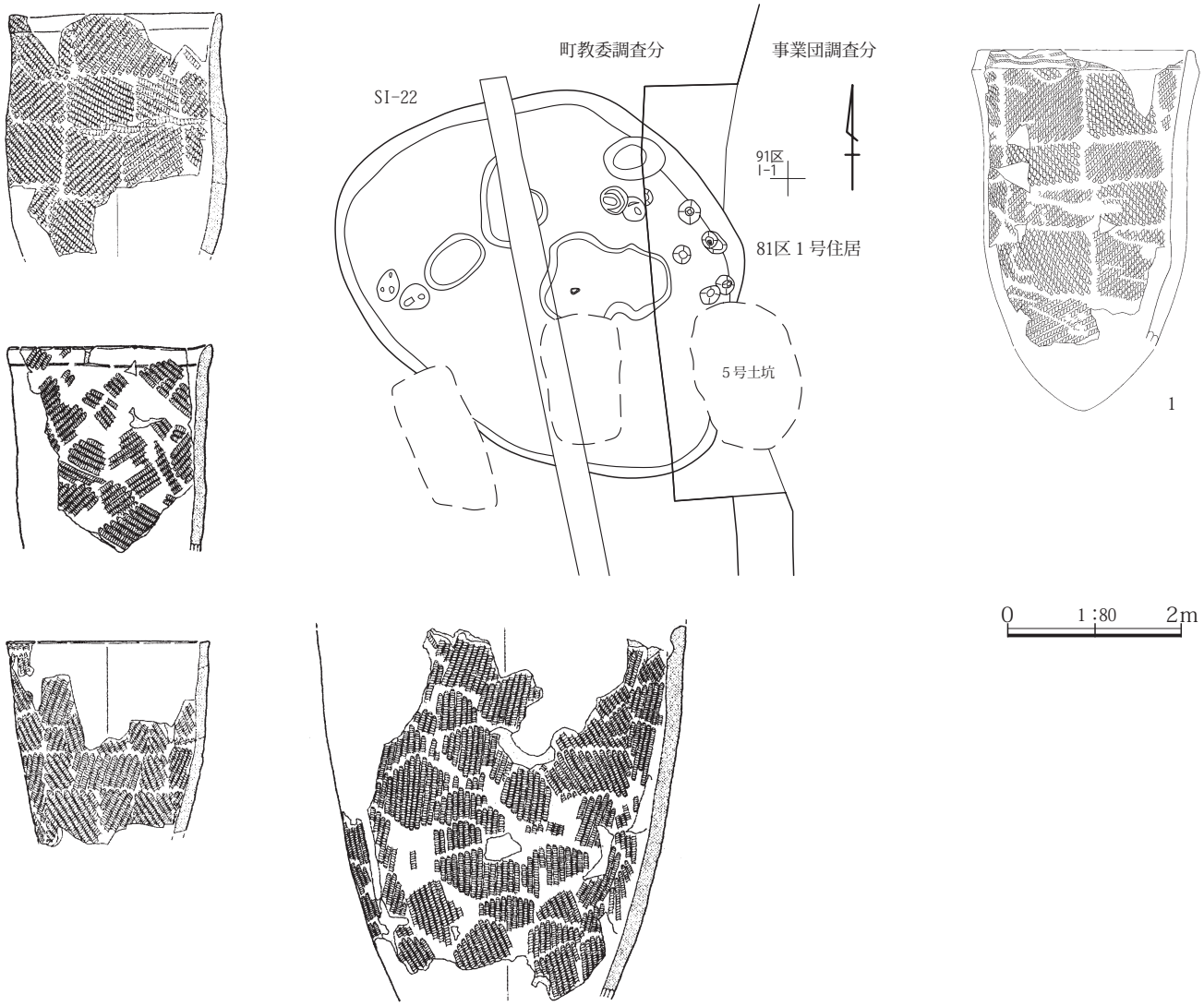
さらに、各住居の配置状況を詳細に見ると、極めて近接する住居と重複する住居がある。極めて近接する住居は、SI－20とSI－24、SI－21とSI－23であり、重複する住居は81区２号住居と81区３号住居、SI－25とSI－26である。こうした状況は、同じ花積下層Ⅰ式期の住居に時間幅が存在することが言え、同様に花積下層Ⅰ式土器に時間幅の存在を持たせることができる。依って、本遺跡で調査された15軒は、花積下層Ⅰ式期の時間幅の



第46図　上原Ⅰ遺跡　縄文時代　遺構分布全体図(合成図)



第47図　上原Ⅰ遺跡　古墳・平安時代以降　遺構分布全体図（合成図）



第48図　81区１号住居・SI－22　平面合成図、出土遺物

中で継続した集落であると考えられよう。

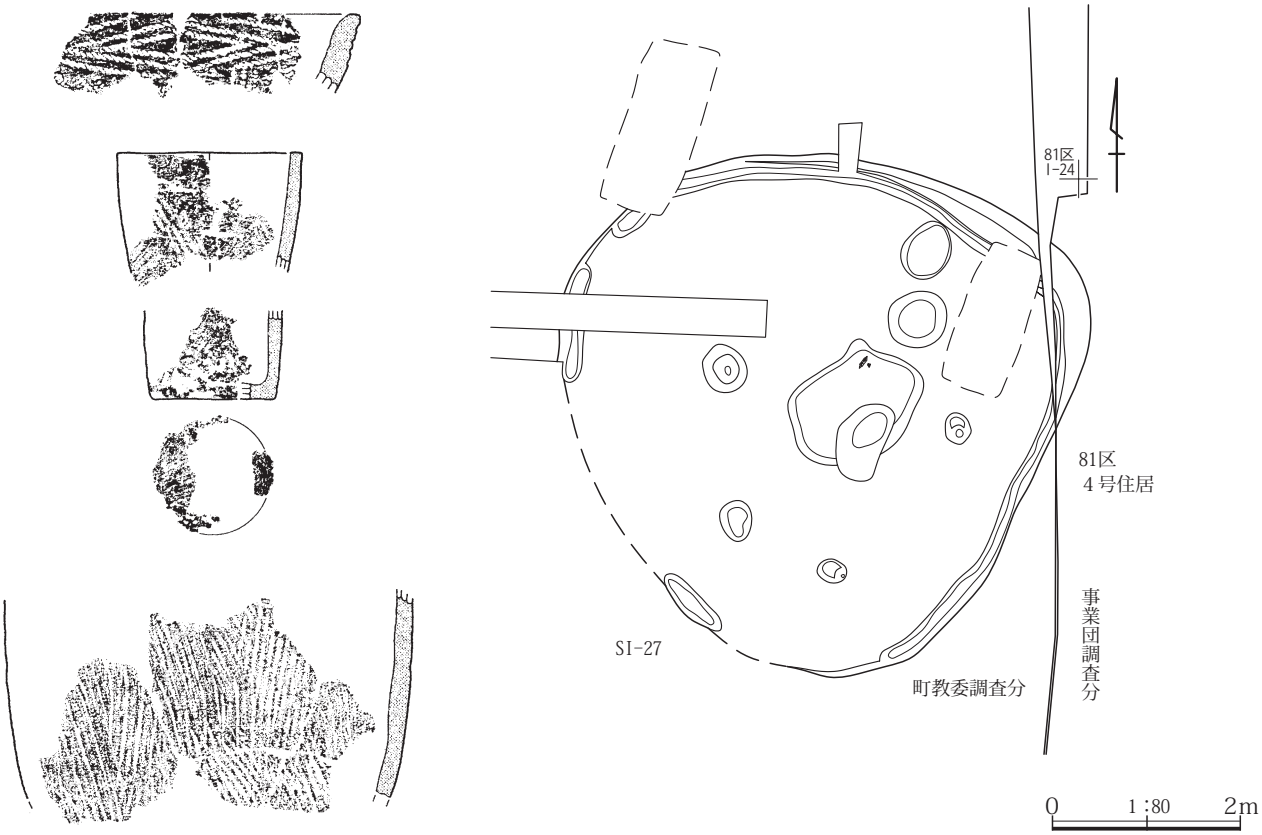
なお、各住居から出土した土器には、花積下層Ｉ式土器と塚田式土器が共伴している例が多く、編年的位置づけも裏付けられる。同様に、両土器型式の分布範囲が交錯している地域であることも窺える。

２．平安時代

本遺跡における古代以降の遺構分布について、合成した図を第47図に示した。それぞれの調査で検出された平安時代の住居は、事業団調査分では91区１～４号住居の４軒全てが９世紀後半、町教委調査分ではSI－04・05・08・09Ｂ・13の５軒が９世紀後半、SI－09Ａ・11・16の３軒が９世紀後半～10世紀前半、SI－14・15・17の３軒が10世紀前半であり、計15軒となる。この内、９世紀後半の２軒は両調査に跨る住居であり、両調査における住居数は９世紀後半８軒、９世紀後半～10世紀前半３軒、10世紀前半３軒の合計では14軒ということになる。

９世紀後半と９世紀後半～10世紀前半、10世紀前半の３期に継続される集落であるが、その分布は段丘奥の平坦面への変換部に散漫に展開していると言え、東西方向にもう少し集落が広がる可能性を十分にもつ。また、各住居のカマド方向については、東方向を向くカマドは７基、北方向を向くのは４基、南方向を向くのは３基である。

なお、陥し穴と考えられる土坑については、数は多くないが平安時代の住居と重複する例が存在し、それらの新旧は、住居の方が旧いことが確認されている。



第49図　81区４号住居・SI－27　平面合成図、出土遺物

第２項　分割調査された住居

当事業団と町教委による調査で分割された住居について、両調査のデータを合成させ、分割住居を再確認することを目的とした。

81区１号住居(事業団)・SI－22（町教委）

第48図に示したのが、分割調査された81区１号住居・SI－22の合成図と、主な出土土器である。

住居形状は、やや不整な楕円形を呈する。その規模は長軸5.12m、短軸3.60mを測り、長軸は北西方向を向く。

床面はほぼ平坦である。炉は地床炉で、住居のほぼ中央に位置し、不整な浅い掘り込みをもつ。主柱穴は明確ではないが、数基のピットを検出している。

第48図中に１とした土器は事業団調査での出土土器で、他は町教委調査による出土土器である。同じ住居内出土であり、前期初頭花積下層Ⅰ式に比定される土器群である。また、本書では図示していないが、塚田式土器が数片供伴している。

住居の時期は、出土土器から縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

81区４号住居(事業団)・SI－27（町教委）

第49図に示したのが、分割調査された81区４号住居・SI－27の合成図と、主な出土土器である。

住居形状は、やや不整な楕円形(東壁が大きく膨らむ)を呈する。その規模は長軸5.68m、短軸(5.48)mを測り、長軸は北北西方向を向く。

床面はほぼ平坦である。炉は地床炉で、住居のほぼ中央に位置し、不整な浅い掘り込みをもつ。主柱穴は明確ではないが、数基のピットを検出している。

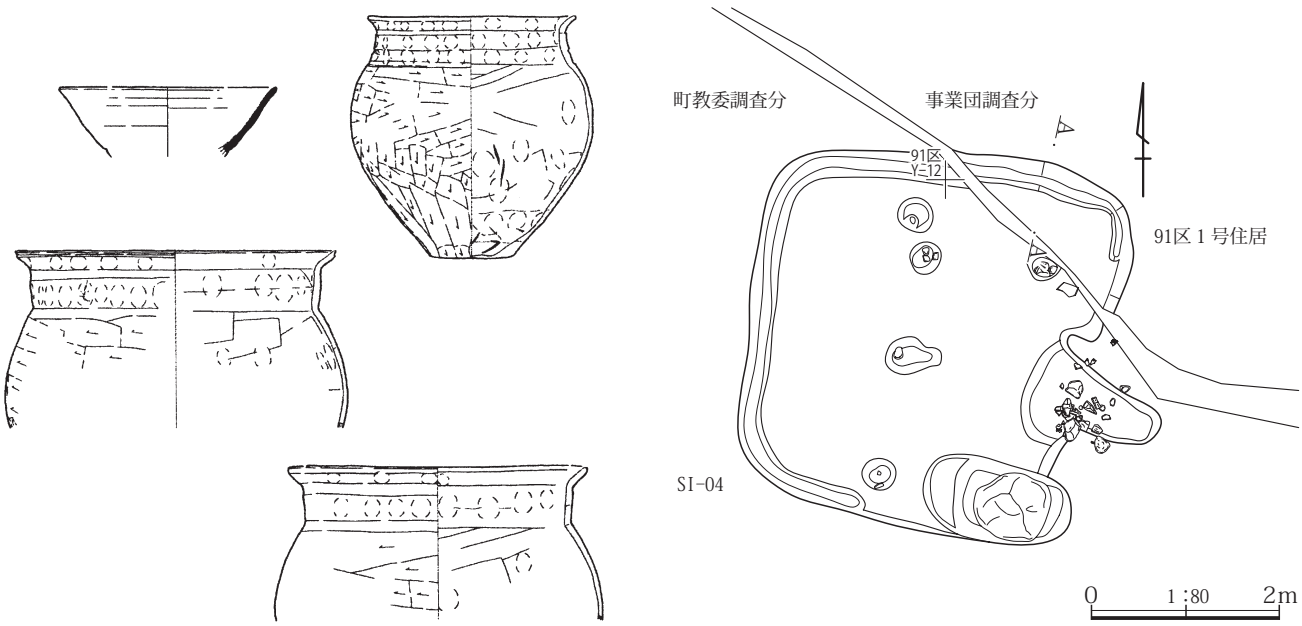
事業団調査の出土土器は数片と少なく、第49図に示した土器は町教委調査での出土土器である。やはり、前期初頭花積下層Ⅰ式に比定される土器群で、事業団調査の数片と同様である。

住居の時期は、出土土器から縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式期の住居である。

91区１号住居(事業団)・SI－04（町教委）

第50図に示したのが、分割調査された91区１号住居・SI－04の合成図と、主な出土土器である。

住居形状は、やや不整な隅丸方形を呈する。その規模は北壁辺3.80m、西壁辺3.70mを測り、北壁辺は東



第50図　91区１号住居・SI－04　平面合成図、出土遺物

西方向を向く。

床面はほぼ平坦で、北壁から西壁・南壁側へ、幅12cm前後の壁溝が廻る。また、床面上には、南東隅に貯蔵穴が検出され、さらにピットが５基検出されている。

カマドは東壁のほぼ中央付近に位置し、壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.5m、幅0.88mを測り、左袖部が残存する。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面より僅かに低くなる。

第50図に示した土器は、町教委調査での出土土器である。カマド内および貯蔵穴付近、南壁付近からで、コの字状口縁甕が多く出土している。

住居の時期は、出土土器から９世紀後半期の住居である。

第３項　総　括

今回の調査では、縄文時代と平安時代の集落をはじめとした、多くの遺構・遺物が検出された。ここでは、各時代の様相をまとめて総括としたい。

縄文時代

検出された前期初頭花積下層Ⅰ式期の竪穴住居は８軒であったが、町教委調査分を合わせた本遺跡での住居数は15軒を数え、同時期の県内遺跡の中では最も数の多い遺跡であることが判った。同時に、同地域における拠点的集落であることも理解できた。

さらに、各住居の配置状況から、花積下層Ⅰ式期における時間幅の存在、本集落が花積下層Ⅰ式期の時間幅の中で継続した集落であることも理解できた。

一方、町教委調査で検出された中期の住居の広がりはなく、本遺跡内での中期の存在は小規模であったことが伺える。

弥生・古墳時代

今回の調査では、遺構の検出はなかった。しかし、町教委調査では、弥生時代前期の土坑１基、古墳時代前期の住居１軒および古墳時代中期の土坑２基が検出されており、調査区外に遺構の展開が予測される。

平安時代

検出された住居は、９世紀後半期の住居４軒であった。しかし、町教委調査分を合わせた、本遺跡の住居数は計14軒を数え、９世紀後半・９世紀後半～10世紀前半・10世紀前半の３期に継続される集落であることが判った。

また、平安時代(古代)以降の陥し穴は11基検出されてが、町教委調査分を合わせると計70基の数に上る。平安期の集落以降の遺構であると考えられよう。

表２　遺構一覧表

住居

遺構名	位置	平面形状	規模(m)				長軸方位	炉(m)				カマド				重複関係	時期/備考
	(グリッド)		長軸	短軸	深さ	床面積		規模(m)				位置/方位/規模(m)				(古→新)	
81区 １号住居	Ｉ-25	不整楕円形	－	－	－	－	－	長	－	幅	－	－				１面５号土坑 １住→５土	縄文時代前期初頭期 長野原町教委SI-22
								深	－								
81区 ２号住居	G・H-24・25	楕円形	4.45	3.46	0.14	10.36	N-25°-E	長	0.50	幅	0.45	－				81区３号住居 ３住→２住	縄文時代前期初頭期
								深	0.09								
81区 ３号住居	G・H-23・24	楕円形	4.95	3.59	0.13	11.68	N-19°-E	長	0.72	幅	(0.53)	－				81区２号住居 ３住→２住	縄文時代前期初頭期
								深	0.09								
81区 ４号住居	Ｉ-23	不整楕円形	－	－	－	－	－	長	－	幅	－	－					縄文時代前期初頭期 長野原町教委SI-27
								深	－								
91区 １号住居	X-11・12	隅丸長方形	(2.21)	(1.43)	0.47	(1.05)	N-16°-E	－				位置	－	方位	－		平安時代 壁周溝:幅0.04～0.12、深0.08m 長野原町教委SI-04
												長さ	－	幅	－		
91区 ２号住居	V・W-11・12	隅丸長方形	4.00	3.15	0.50	10.86	N-78°-W	－				カマド① 位置	南東隅	方位	N-134°-E	91区４号住居 91区12号土坑 ４住→２住 12土→２住	平安時代 壁周溝:幅0.05～0.13、深0.06m 貯蔵穴:径0.62、深0.13m
												カマド① 長さ	1.01	幅	(0.67)		
												カマド② 位置	北壁	方位	N-14°-E		
												カマド② 長さ	0.97	幅	0.60		
91区 ３号住居	G・H-２・３	隅丸長方形	2.58	2.33	0.29	4.87	N-61°-W	－				位置	東壁	方位	N-115°-E	91区11号土坑 11土→３住	平安時代 貯蔵穴:径0.5、深0.2m
												長さ	0.66	幅	0.61		
91区 ４号住居	V・W-12	－	3.74	(0.65)	0.40	(1.69)	－	－				位置	北壁	方位	N-30°-E	91区２号住居 ４住→２住	平安時代 壁周溝:幅0.03～0.08、深0.05m
												長さ	(0.13)	幅	(0.31)		
91区 ５号住居	Ｉ・Ｊ-３・４	不整楕円形	5.43	(4.14)	0.62	(15.22)	N-69°-W	長	0.60	幅	0.49	－					縄文時代前期初頭期
								深	0.08								
91区 ６号住居	G-４ H-４・５	楕円形	(4.19)	(1.90)	0.37	(6.19)	N-39°-W	長	0.59	幅	(0.27)	－					縄文時代前期初頭期
								深	0.06								
91区 ７号住居	G・H-１・２	隅丸方形	(4.10)	(3.88)	0.10	13.19	N-88°-E	長	0.64	幅	0.53	－				１面６号土坑 ７住→６土	縄文時代前期初頭期
								深	0.10								
91区 ８号住居	H・Ｉ-3・４	楕円形	(4.09)	(3.17)	0.50	9.23	N-51°-W	長	0.61	幅	0.49	－				１面11号土坑 ８住→11土	縄文時代前期初頭期 住居内土坑:長1.05、幅0.6、深0.51m
								深	0.09								

土坑

遺構名	位置	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	検出面/時期/備考
	(グリッド)		長軸(径)	短軸	深さ			
81区１号土坑	G-23・24	隅丸長方形	1.60	0.65	0.70	N－17°－E		１面　平安時代～中世　陥し穴
81区２号土坑	F-25、91区F-１	楕円形	2.80	1.94	1.98	N－５°－E		１面　平安時代～中世　陥し穴
81区３号土坑	G-25	楕円形	1.90	1.50	1.64	N－５°－E		１面　平安時代～中世　陥し穴
81区４号土坑	F・G-25	隅丸長方形	2.08	1.48	1.71	N－52°－W		１面　平安時代～中世　陥し穴
81区５号土坑	H・Ｉ-25	楕円形	2.50	(1.38)	1.94	N－５°－W		１面　平安時代～中世　陥し穴
91区１号土坑	Ｉ-２	隅丸長方形	1.24	1.06	0.48	N－15°－E		１面　平安時代以降
91区２号土坑	Ｉ-３	長楕円形	2.67	0.75	0.12	N－10°－E		１面　平安時代以降
91区３号土坑	Ｉ・Ｊ-３	長楕円形	1.86	1.00	1.40	N－79°－E		１面　平安時代～中世　陥し穴
91区４号土坑	Ｉ・Ｊ-４	楕円形	0.86	0.62	0.26	N－53°－E		１面　平安時代以降
91区５号土坑	F・G-２	楕円形	2.28	1.94	1.70	N－21°－E		１面　平安時代～中世　陥し穴
91区６号土坑	G-１、81区G-25	楕円形	2.02	1.60	1.62	N－11°－W		１面　平安時代～中世　陥し穴
91区７号土坑	F-１	楕円形	1.02	0.64	0.16	N－６°－E	９号土坑	１面　平安時代
91区８号土坑	G・H-１、81区G・H-25	不整形	2.40	1.82	1.60	N－28°－W		１面　平安時代～中世　陥し穴
91区９号土坑	E・F-１・２	楕円形	1.87	1.28	1.64	N－０°	７号土坑	１面　平安時代～中世　陥し穴
91区10号土坑	Ｊ-２	楕円形	0.98	0.76	0.16	N－５°－E		１面　平安時代以降
91区11号土坑	H-３	長楕円形	2.20	1.24	1.56	N－57°－W	３号住居	１面　平安時代　陥し穴
91区12号土坑	W-12	－	0.94	(0.58)	0.50	－	２号住居	１面　平安時代
91区13号土坑	K・L-４・５	－	1.76	(0.92)	0.60	－		２面　縄文時代前期初頭
91区14号土坑	G-４	－	1.32	(0.52)	0.32	－		２面　縄文時代前期初頭
91区15号土坑	H-２	不整形	0.78	0.76	0.40	N－31°－W		２面　縄文時代前期初頭

焼土

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	規模(m) 長軸(径)	規模(m) 短軸	長軸方位	検出面/時期/備考
81区１号焼土	G-17	不整形	0.39	0.11	N－43°－W	２面　縄文時代前期初頭？
91区１号焼土	G－３・４	不整楕円形	1.01	0.55	N－23°－E	２面　縄文時代前期初頭
91区２号焼土	G－３	不整形	0.41	0.26	N－28°－E	２面　縄文時代前期初頭
91区３号焼土	H－４	不整形	0.70	0.44	N－７°－E	２面　縄文時代前期初頭
91区４号焼土	G－４	楕円形	0.16	0.09	N－18°－W	２面　縄文時代前期初頭
91区５号焼土	G－４	不整形	0.40	0.22	N－63°－W	２面　縄文時代前期初頭
91区６号焼土	G－４	楕円形	0.16	0.09	N－15°－E	２面　縄文時代前期初頭
91区７号焼土	F－２	楕円形	0.15	0.12	N－90°－W	２面　縄文時代前期初頭
91区８号焼土	F－２	長楕円形	0.36	0.16	N－84°－E	２面　縄文時代前期初頭
91区９号焼土	F－２	不整形	0.41	0.37	N－65°－W	２面　縄文時代前期初頭
91区10号焼土	F－２	不整形	0.24	0.10	N－83°－W	２面　縄文時代前期初頭
91区11号焼土	F－２	楕円形	0.13	0.09	N－58°－E	２面　縄文時代前期初頭
91区12号焼土	F－２	楕円形	0.21	0.11	N－57°－E	２面　縄文時代前期初頭

ピット

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	規模(m) 長軸(径)	規模(m) 短軸	規模(m) 深さ	長軸方位	重複関係	検出面/時期/備考
81区１号ピット	H-18	楕円形	0.60	0.48	0.94	N－18°－E	－	２面　縄文時代？
91区１号ピット	W・X-12	円形	0.50	－	0.22	－	－	１面　平安時代以降
91区２号ピット	W-12	円形	0.24	－	0.20	－	－	１面　平安時代以降
91区３号ピット	U-11	円形	0.30	－	0.13	－	－	１面　平安時代以降
91区４号ピット	U-11	円形	0.28	－	0.28	－	－	１面　平安時代以降
91区５号ピット	U-11	楕円形	0.26	0.18	0.18	N－75°－E	－	１面　平安時代以降
91区６号ピット	U-11	不整形	0.32	0.26	0.27	N－90°－W	－	１面　平安時代以降
91区７号ピット	J－４	楕円形	0.48	0.38	0.12	N－80°－W	－	１面　平安時代以降
91区８号ピット	J－４	楕円形	0.38	0.30	0.19	N－45°－W	－	１面　平安時代以降
91区９号ピット	J－４	円形	0.34	－	0.18	－	－	１面　平安時代以降
91区10号ピット	J－３	円形	0.40	－	0.09	－	－	１面　平安時代以降
91区11号ピット	J－３	不整形	0.50	0.32	0.13	N－90°－W	－	１面　平安時代以降
91区12号ピット	J－３	円形	0.38	－	0.10	－	－	１面　平安時代以降
91区13号ピット	J－３	楕円形	0.54	0.48	0.23	N－47°－W	－	１面　平安時代以降
91区14号ピット	G－３	楕円形	0.60	0.48	0.28	N－10°－E	－	１面　平安時代以降

表３　遺物観察表

81区１号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第７図 PL．９	1	縄文土器 深鉢	口縁～胴部下半	口 高	(18.3) (25.3)			繊維多量	僅かに外反する平口縁で、胴部下半を欠くが、底部が尖底となる砲弾型器形。口縁下が肥厚ぎみに屈曲して口縁部文様帯を作出し、口縁部文様に撚糸側面圧痕を横位に２条巡らせ、撚糸側面圧痕で渦巻き文を有する。口縁部文様下の胴部には、０段多条のＬＲ縄とＲＬ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第７図 PL．９	2	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、細砂	３と同一個体。平口縁の口唇部に、単位的な鋸歯状となる刻み状の沈線を施す。口縁以下の胴部には、０段多条のＬＲ縄と０段多条のＲＬ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第７図 PL．９	3	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、細砂	２と同一個体。平口縁の口唇部に、単位的な鋸歯状となる刻み状の沈線を施す。口縁以下の胴部には、０段多条のＬＲ縄と０段多条のＲＬ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第７図 PL．９	4	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量	平口縁の口縁下に細い隆帯を巡らせ、以下の胴部にＬＲ縄とＲＬ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	塚田式
第７図 PL．９	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第７図 PL．９	6	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	７と同一個体。胴部下半に０段多条のＬＲ縄で、縦・横位回転による幅広な羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第７図 PL．９	7	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	６と同一個体。胴部下半に０段多条のＬＲ縄で、縦・横位回転による幅広な羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	8	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量	胴部に０段多条のＬＲ縄と０段多条のＲＬ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	9	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部下半で底部へ大きく屈曲する。ＲＬ縄で横位回転による縄文を主に施すが、一部にＬＲ縄との横位回転による羽状縄文となる部分もある。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	10	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量	胴部にＲＬ縄で縦位回転の縄文を施す。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	11	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部下半の底部付近で、表面の剥落が著しい。浅く縄文が施されている。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	12	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	13と同一個体の可能性あり。胴部下半にＲＬ縄で、縦位ぎみな斜縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	13	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	12と同一個体の可能性あり。胴部下半にＲＬ縄で、縦位ぎみな斜縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第８図 PL．９	14	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	2.3 1.5	厚 重	0.6 2.2	チャート	小型で、全体に細かく浅い押圧剥離調整が施され、周縁は表裏交互押圧剥離による。裏面中央に主要剥離面を残す。	
第８図 PL．９	15	礫石器 磨石類	完形	長 幅	13.3 4.8	厚 重	2.3 273.1	閃緑岩	縦長な扁平礫を素材に、表面の長軸上に凹部を連ねる(凹石)。また、下端左角には、敲打による剥離をもつ(敲石)。	

81区２号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第９図 PL．９	1	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁下が肥厚ぎみに屈曲して口縁部文様帯を作出し、口縁部文様に２本組(Ｌ・Ｒ縄)の撚糸側面圧痕で文様を描き、円形刺突を配する。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL．９	2	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	波状口縁となる口縁下が肥厚ぎみに屈曲し、波頂下の屈曲部に瘤状の貼付をもつ。口縁以下に縄文が施されるが、原体は不明。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL．９	3	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、粗砂	４・５と同一個体。胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL．９	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、粗砂	３・５と同一個体。胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL．９	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、粗砂	３・４と同一個体。胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	6	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	7	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	8	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、粗砂	９と同一個体。胴部にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	9	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、粗砂	８と同一個体。胴部にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	10	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	11	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第９図 PL.10	12	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第９図 PL.10	13	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による幅広な羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第10図 PL.10	14	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	15と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第10図 PL.10	15	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	14と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第10図 PL.10	16	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＬＲ縄で、横位回転による縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第10図 PL.10	17	縄文土器 深鉢	底部片					繊維、粗砂	尖底部を僅かに欠く底部片。底部付近には、ＬＲ縄で縦位回転の縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第10図 PL.10	18	縄文土器 深鉢	頸～胴部片					繊維、細礫	19・20と同一個体。口縁部文様に２本組(Ｌ・Ｒ縄)の撚糸側面圧痕と２本組の刻み隆帯で蕨手状の主文様を描き、その間に刺切文を横位ハ字状に充填する。さらに、口縁部文様帯下端には、２条の刻み隆帯を巡らせて文様帯区画し、瘤状貼付文を配する。胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、重畳する幅狭な横位羽状縄文が施される。	二ツ木式
第10図 PL.10	19	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細礫	18・20と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、重畳する幅狭な横位羽状縄文が施される。	二ツ木式
第10図 PL.10	20	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細礫	18・19と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、重畳する幅狭な横位羽状縄文が施される。	二ツ木式
第10図 PL.10	21	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.7 1.4	厚 重	0.3 0.5	珪質頁岩	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施され、凹基の抉りは浅い。	
第10図 PL.10	22	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	(2.0) (1.3)	厚 重	0.3 0.6	珪質頁岩	先端と左脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや浅い。	
第10図 PL.10	23	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	(1.5) (1.3)	厚 重	0.3 0.5	珪質頁岩	先端と両脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや深い。	
第10図 PL.10	24	剥片石器 石鏃	埋土 先端欠	長 幅	(2.0) 1.7	厚 重	0.5 1.7	チャート	先端を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第10図 PL.10	25	剥片石器 石鏃	埋土 僅欠	長 幅	1.7 1.5	厚 重	0.4 1.1	黒曜石	左脚端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施され、特に表面は丁寧。凹基の抉りは浅い。	
第10図 PL.10	26	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.7 1.1	厚 重	0.6 1.3	珪質頁岩	有茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
第10図 PL.10	27	剥片石器 石錐	埋土 完形	長 幅	2.7 0.8	厚 重	0.4 1.1	黒色頁岩	棒状で下端刃部側が細くなる。周縁に細かく浅い押圧剥離調整が施され、裏面中央に主要剥離面を残す。	
第10図 PL.10	28	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	埋土 完形	長 幅	2.3 2.1	厚 重	1.2 4.7	黒曜石	小型で、表面中央から左側縁部にかけて自然面を残し、主な刃部は右側縁にある。押圧剥離調整が施され、刃部は鈍角。裏面は主要剥離面。	
第10図 PL.10	29	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	2.7 2.7	厚 重	1.1 8.6	珪質頁岩	小型な方形を呈する。横長剥片を素材とし、剥片形状をそのままに(左側縁側は節理面)、表裏面の下端部に連続的な剥離を施す。	
第10図 PL.10	30	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	3.9 5.7	厚 重	1.8 21.2	チャート	横長剥片を素材とし、剥片形状をそのままに、表面の下端部に連続的な剥離を施す。	
第10図 PL.10	31	剥片石器 石篦	完形	長 幅	4.9 3.3	厚 重	1.2 19.4	珪質頁岩	小型で、裏面中央に自然面を大きく残す。剥離は表面を主に裏面にまで及ぶが、表面周縁は特に丁寧。刃部となる下端は鈍角。	
第10図 PL.10	32	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	17.5 8.2	厚 重	5.5 741.3	頁岩	短冊型を呈する大型の打製石斧で、表裏面の中央に自然面を残す。剥離は表裏両面の周縁から繰り返され、刃部となる下端は上弦弧状を呈する。	
第10図 PL.10	33	礫石器 磨石	完形	長 幅	6.9 3.7	厚 重	2.9 115.4	細粒輝石安山岩	小型で縦長な礫を素材に、表面に磨面をもつ。	
第10図 PL.10	34	礫石器 磨石	破片	長 幅	(5.7) (4.9)	厚 重	(2.6) 80.6	細粒輝石安山岩	楕円状を呈する磨石の破片。全体に研磨が施されると思われる。被熱による破損か。	
PL.10	35	剥片石器 石鏃	埋土 基部欠	長 幅	(2.1) (1.5)	厚 重	0.5 1.3	珪質頁岩	基部を欠く。表裏面共に押圧剥離調整が施され、特に表面は丁寧。裏面中央に主要剥離面を残す。	
PL.10	36	剥片石器 石鏃未製品		長 幅	2.7 1.5	厚 重	0.4 1.5	黒曜石	先端部を僅かに欠く。裏面下端に打面を残す剥片形状をそのままに、上半の両側縁から押圧剥離調整が施されるが、他は未調整。	

81区３号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第11図 PL.11	1	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部下半の尖底部付近で、条が縦方向となる浅い縄文が施される。原体は不明。	花積下層Ⅰ式
第11図 PL.11	2	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第11図 PL.11	3	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部下半にＲＬ縄で条が縦方向となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第11図 PL.11	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	５と同一個体。胴部上半に０段多条のＲＬ縄で、横位回転による縄文が施される。また、内面には指頭状の凹凸がみられる。	花積下層Ⅰ式
第11図 PL.11	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	４と同一個体。胴部上半に０段多条のＲＬ縄で、横位回転による縄文が施される。胴部下半には同一原体で、条が縦方向となる縄文が施される。また、内面には指頭状の凹凸がみられる。	花積下層Ⅰ式
第11図 PL.11	6	礫石器 磨石	完形	長 幅	13.5 11.2	厚 重	4.7 1103.7	細粒輝石安山岩	円形な扁平礫を素材に、表裏面に磨面(磨石)と中央に凹部(凹石)をもつ。被熱している。	

81区４号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第12図 PL.11	1	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口唇部および口縁下に、細い縄の回転絡条体で斜位・横位・縦位に施す。	花積下層Ⅰ式
第12図 PL.11	2	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	３・４と同一個体。胴部に細い縄の回転絡条体を縦位に施す。	花積下層Ⅰ式
第12図 PL.11	3	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	２・４と同一個体。胴部に細い縄の回転絡条体を斜位に施す。	花積下層Ⅰ式
第12図 PL.11	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	２・３と同一個体。胴部に細い縄の回転絡条体を斜位に施す。	花積下層Ⅰ式
第12図 PL.11	5	縄文土器 深鉢	底部片					繊維、細砂	平底となる底部で、底面に０段多条のＬＲ縄による縄文が施される。	花積下層Ⅰ式

91区５号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図 PL.11	1	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	やや内反ぎみの平口縁で、口縁下の口縁部文様に２本組(Ｌ・Ｒ縄)の撚糸側面圧痕で文様を描く。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	2	縄文土器 深鉢	底部片					繊維	尖底となる底部で、底部まで細い２本組縄(Ｌ・Ｒ縄)による回転絡条体が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	3	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口唇部に０段多条のＬＲ縄が施され、口縁以下の胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	6	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	7	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	8	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維	尖底部付近となる胴部下端に、ＲＬ縄で縦位ぎみな斜縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	9	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に細い２本組縄(Ｒ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	10	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁以下に、ＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	11	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部下半にＲＬ縄で、縦位ぎみな斜縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	12	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維	胴部下半にＲＬ縄で、縦位ぎみな斜縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	13	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文ないし羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第13図 PL.11	14	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂少	尖底部付近となる胴部下端に、ＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文ないし羽状縄文が施される。また、内面には指頭状の浅い凹凸がみられる。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	15	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	16	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	17	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	18	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	19	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、粗砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	20	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	21	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第14図 PL.11	22	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄で、横位回転による縄文が施される。	花積下層Ⅰ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.12	23	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.3 1.3	厚 重	0.1 0.2	黒曜石	小型の凹基無茎鏃。薄い小型剥片を素材とし、表裏面の周縁のみに押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第14図 PL.12	24	剥片石器 石鏃	埋土 僅欠	長 幅	2.1 (1.4)	厚 重	0.3 0.5	黒曜石	基部を僅かに欠く、小型の平基無茎鏃。主要剥離面を表面とし、両側縁の表裏面に押圧剥離調整が施される。	
第14図 PL.12	25	剥片石器 石鏃	焼土(炉) 僅欠	長 幅	(1.2) 1.6	厚 重	0.4 0.4	黒曜石	先端を僅かに欠く、小型の平基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施される。	
第14図 PL.12	26	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.9 1.5	厚 重	0.4 0.8	黒曜石	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第14図 PL.12	27	剥片石器 石鏃	右脚欠	長 幅	2.4 (1.6)	厚 重	0.5 1.3	チャート	右脚端部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや浅い。	
第14図 PL.12	28	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.9 1.7	厚 重	0.4 1.9	珪質頁岩	凹基無茎鏃。表裏の中央に大きな剥離面を残し、器体の周縁に押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや浅い。	
第14図 PL.12	29	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	(1.6) (1.7)	厚 重	0.3 1.0	黒曜石	先端と右脚端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第14図 PL.12	30	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	1.8 (1.6)	厚 重	0.5 0.7	黒曜石	右脚端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第14図 PL.12	31	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.6	厚 重	0.4 0.5	黒曜石	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施され、裏面中央に主要剥離面を僅かに残す。凹基の抉りは深い。	
第14図 PL.12	32	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.3 1.8	厚 重	0.3 0.9	黒曜石	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｖ字状に深い。	
第14図 PL.12	33	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	2.0 (1.7)	厚 重	0.4 0.7	黒曜石	右脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｖ字状に深い。	
第14図 PL.12	34	剥片石器 石鏃未製品	ピット５	長 幅	(1.7) (1.5)	厚 重	0.3 0.6	黒曜石	石鏃の未製品。石鏃の上半となる素材剥片の表裏に押圧剥離調整が施され、先端部が作出される。しかし、下半は剥離調整が及んでいない。	
第14図 PL.12	35	剥片石器 石錐	ピット　埋土 完形	長 幅	3.3 1.0	厚 重	0.6 1.9	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	棒状で下端刃部側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施され、裏面中央に主要剥離面を残す。	
第14図 PL.12	36	剥片石器 石錐	僅欠	長 幅	(3.6) 1.5	厚 重	0.5 3.0	黒曜石	先端となる下端部を僅かに欠く。表面上部と上端に自然面を残し、下半に両側縁側から丁寧な押圧剥離調整が施される。	
第14図 PL.12	37	剥片石器 石匙	完形	長 幅	2.7 4.8	厚 重	0.9 9.2	黒色頁岩	上端両側の抉りが弱い、横長な石匙。横長剥片を素材とし、主要剥離面を表面とする。押圧剥離はやや粗く、上端部周辺と下端刃部の表裏面に及ぶ。	
第14図 PL.12	38	剥片石器 石匙	埋土 上端部	長 幅	(1.6) (1.3)	厚 重	0.4 1.1	チャート	石匙の上端部で、刃部となる下半を大きく欠く。上端両側縁の抉入部は明瞭で、器体全体に丁寧な押圧剥離による調整が施されると思われる。縦型の可能性あり。	
第14図 PL.12	39	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	2.1 2.0	厚 重	0.6 3.0	流紋岩	小型な方形状を呈する。横長剥片を素材とし、剥片形状をそのままに、周縁から押圧剥離調整が施される。刃部となる下端はやや鈍角。	
第14図 PL.12	40	剥片石器 使用痕剥片	完形	長 幅	4.7 2.5	厚 重	1.0 8.5	珪質頁岩	縦長剥片を素材とし、右側縁に細かな剥離が認められる。	
第14図 PL.12	41	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	7.9 4.6	厚 重	1.6 57.4	頁岩	短冊型を呈する。表面中央に主要剥離面、裏面下側に自然面を残す。剥離は表裏両面の周縁から粗く、表面の両側縁は細かな剥離が施される。	
第14図 PL.12	42	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	17.5 6.9	厚 重	3.6 529.7	安山岩	短冊型を呈する大型の打製石斧。上端に礫分割時の打面、左側縁に分割時の剥離面、裏面に敲打痕をもつ自然面を大きく残す。剥離は表面の周縁および裏面片側縁から粗く施される。	
第15図 PL.12	43	礫石器 磨石	完形	長 幅	4.3 3.3	厚 重	2.4 46.3	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施され(磨石)、上下端が敲打痕で潰れる(敲石)。被熱し、ヒビが入る。	
第15図 PL.12	44	礫石器 磨石	完形	長 幅	4.6 3.7	厚 重	2.8 59.9	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施される。被熱し、ヒビが入る。	
第15図 PL.12	45	礫石器 磨石	右縁欠	長 幅	10.5 (7.9)	厚 重	4.4 511.7	細粒輝石安山岩	右側縁を欠く。拳大の扁平礫を素材に、全体に研磨が施される。	
第15図 PL.12	46	礫石器 凹石	完形	長 幅	13.0 5.9	厚 重	5.1 586.5	花尾閃緑岩	棒状礫を素材に、表裏面の長軸上に凹部を連ねる(凹石)。また、下端右側縁は、敲打痕により潰れる(敲石)。	
第15図 PL.12	47	礫石器 石皿	僅欠	長 幅	36.0 30.7	厚 重	10.0 14000	細粒輝石安山岩	左縁を僅かに欠く。楕円ぎみな大型扁平礫を素材とし、表面に研磨面をもち、その中央がやや凹む(石皿)。また、表裏面には、凹部を多くもち、多孔石の要素をも併せもつ。	
PL.12	48	剥片石器 石鏃	埋土 右脚欠	長 幅	1.8 (1.3)	厚 重	0.3 0.7	黒曜石	右脚部を欠く小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
PL.12	49	剥片石器 石鏃	左脚欠	長 幅	1.6 (1.3)	厚 重	0.3 0.5	黒曜石	左脚部を僅かに欠き、基部が円弧状となる小型の無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
PL.12	50	剥片石器 石鏃	埋土 先端欠	長 幅	(1.2) (1.2)	厚 重	0.3 0.4	黒曜石	先端と右脚部を欠く小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
PL.12	51	剥片石器 石鏃	埋土 先端片	長 幅	(1.2) (1.3)	厚 重	(0.3) 0.3	黒曜石	石鏃の先端部。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.12	52	剥片石器 石鏃未製品		長 幅	(2.4) 2.1	厚 重	1.1 4.6	黒曜石	先端を欠く。厚みのある剥片を素材に、表面の左側縁と下端から押圧剥離を施すが、他は未調整。	
PL.12	53	剥片石器 石鏃未製品		長 幅	2.3 1.3	厚 重	0.3 0.9	黒曜石	剥片形状をそのままに、表裏面への押圧剥離により先端部が作出されるが、他の調整は甘い。	

91区６号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図 PL.13	1	縄文土器 深鉢	口縁～胴部下半	口 高	(22.0) (36.4)			繊維多量、細砂	僅かに外反する平口縁で、胴部下半を欠くが、底部が尖底となる砲弾型器形。口縁下がやや肥厚して段状となり、口縁以下にＬＲ縄とＲＬ縄の横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第16図 PL.13	2	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、細砂	波頂部を欠くが、小波状口縁の口縁下は肥厚して段をもち、波頂下に瘤状の貼付をもつ。肥厚帯となる口縁部文様には、波頂下を境に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄が施され、以下の胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第16図 PL.13	3	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、細砂	外反ぎみの平口縁で、口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯口縁部文様に細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による回転絡条体を斜位に施す。以下の胴部にはＬＲ縄とＲＬ縄の横位回転による羽状縄文が施される。また、内面には指頭状の浅い凹凸がみられる。	花積下層Ｉ式
第16図 PL.13	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第16図 PL.13	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第16図 PL.13	6	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第16図 PL.13	7	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	１と同一個体の可能性あり。胴部下半にＬＲ縄とＲＬ縄の横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第17図 PL.13	8	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.1 1.1	厚 重	0.2 0.5	黒曜石	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第17図 PL.13	9	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	2.2 (1.1)	厚 重	0.4 0.8	チャート	細身の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第17図 PL.13	10	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.1 1.6	厚 重	0.5 0.8	黒曜石	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第17図 PL.13	11	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	2.0 (2.7)	厚 重	0.6 1.1	黒曜石	左脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第17図 PL.13	12	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	4.3 1.8	厚 重	0.9 4.7	黒曜石	表面に自然面を残す小型な縦長剥片を素材とし、剥片形状をそのままに、周縁から押圧剥離調整が施される。刃部となる右側縁は特に丁寧。	
第17図 PL.13	13	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	下半欠	長 幅	(1.7) 2.7	厚 重	0.8 3.1	チャート	上端に打面を残すスクレイパーの上半部。両側縁に押圧剥離調整が施される。	
第17図 PL.13	14	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	6.9 4.0	厚 重	2.2 36.2	頁岩	表面に自然面を残す剥片を素材とし、刃部となる表面の下端に押圧剥離調整が施される。	
第17図 PL.13	15	礫石器 磨石	破片	長 幅	9.6 4.7	厚 重	4.9 264.3	細粒輝石安山岩	扁平礫を素材に、表面に研磨が施され(磨石)、併せて凹部をもつ(凹石)。	
第17図 PL.13	16	礫石器 石皿	完形	長 幅	34.1 23.1	厚 重	9.1 10100	細粒輝石安山岩	大型の扁平礫を素材とし、表面に研磨面をもち、その中央は平坦で僅かに凹みぎみ(石皿)。また、裏面には、凹部を多くもち、多孔石の要素をも併せもつ。	

91区７号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第18図 PL.14	1	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維	平口縁の口唇部が隆帯様に突出して広い面となり、口唇直下突出上には斜位の刻み状沈線、およびその下の隆帯上には縦位の刻み状沈線を施して巡らせ、隆帯の上下にはやや太めのＬ縄のより糸側面圧痕を沿わせる。さらに、以下の口縁部文様に、同様の側面圧痕と刺突列を組ませて文様を描く。	花積下層Ｉ式
第18図 PL.14	2	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量	４と同一個体。平口縁の口縁下が肥厚ぎみに屈曲して口縁部文様帯を作出し、口縁部文様に沈線で３～４本単位の複合鋸歯状の文様を描く。以下の胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第18図 PL.14	3	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口唇部直下とその下に隆帯を巡らせ、隆帯下に撚糸側面圧痕で口縁部文様が施される。	花積下層Ｉ式
第18図 PL.14	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量	２と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。裏面は剥落。	花積下層Ｉ式
第18図 PL.14	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部に細い２本組縄(Ｒ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦位・横位回転による横位羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第18図 PL.14	6	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄で横位回転による縄文が施される。	花積下層Ｉ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.14	7	剥片石器 石鏃未製品		長 幅	2.5 (1.5)	厚 重	0.7 2.1	黒曜石	右半を欠く。剥片形状をそのままに、表裏面への押圧剥離により先端部が作出されるが、他の調整は甘い。	
PL.14	8	剥片石器 石鏃	上半欠	長 幅	(1.6) 1.8	厚 重	0.4 1.2	チャート	上半の先端側を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
PL.14	9	剥片石器 石鏃	埋土 上半欠	長 幅	(1.0) 1.3	厚 重	0.3 0.4	黒曜石	上半の先端側を欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	

91区８号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.14	1	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、粗砂	２と同一個体。平口縁の口唇部が隆帯様に突出して広い面となり、その口唇部に沈線で３～５本単位の鋸歯ないし複合鋸歯状の文様を描く。口縁下の口縁部文様に２本組(Ｌ・Ｒ縄)の撚糸側面圧痕により上下の鋸歯を菱状に構成させ、菱中央に同様の撚糸側面圧痕で渦巻きを描き配する。また、口縁部文様下端には同様の撚糸側面圧痕を巡らせて、口縁部文様帯を区画する。以下の胴部には、０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	2	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、粗砂	１と同一個体。平口縁の口唇部が隆帯様に突出して広い面となり、その口唇部に沈線で３～５本単位の鋸歯ないし複合鋸歯状の文様を描く。口縁下の口縁部文様に２本組(Ｌ・Ｒ縄)の撚糸側面圧痕により上下の鋸歯を菱状に構成させ、菱中央に同様の撚糸側面圧痕で渦巻きを描き配する。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	3	縄文土器 深鉢	口縁部片					繊維多量、細砂	４・５と同一個体。やや外反ぎみの波状口縁で、口縁以下の胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	4	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	３・５と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	5	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	３・４と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	6	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄で横位回転による縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	7	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部下半に細い２本組縄(Ｌ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	8	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。また、内面には指頭状の浅い凹凸が残る。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	9	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部下半の底部付近で、ＲＬ縄の縦・横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	10	縄文土器 深鉢	胴部片					繊維、細砂	胴部下半にＬＲ縄で横位回転による縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第19図 PL.14	11	縄文土器 深鉢	底部片					繊維、細砂	尖底となる底部で、尖底部付近にＬＲ縄で条が縦方向となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第20図 PL.14	12	剥片石器 石鏃	埋土 完形	長 幅	1.3 1.1	厚 重	0.4 0.5	黒曜石	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅く、平基に近い。	
第20図 PL.14	13	剥片石器 石鏃	僅欠	長 幅	2.0 (1.1)	厚 重	0.6 1.1	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	左脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第20図 PL.14	14	剥片石器 石鏃	一部欠	長 幅	(1.9) (1.4)	厚 重	0.4 1.1	チャート	先端と両脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第20図 PL.14	15	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.0 1.3	厚 重	0.4 0.5	玉髄	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｕ字状に深い。	
第20図 PL.14	16	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.6 1.5	厚 重	0.5 1.0	黒曜石	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｖ字状に深い。	
第20図 PL.14	17	剥片石器 石鏃未製品		長 幅	3.3 1.7	厚 重	0.9 3.1	珪質頁岩	裏面に節理面を残す石鏃の未製品。表裏面に押圧剥離調整が施されるが、剥離はやや粗く、裏面の片縁には剥離が及んでいない。下端は浅い凹基状。	
第20図 PL.14	18	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	4.1 3.8	厚 重	0.6 9.2	黒色頁岩	左側縁付近に打点をもつ主要剥離面を表面とし、刃部となる下端に剥離調整が施される。刃部は鋭角。	
第20図 PL.14	19	剥片石器 石匙？	完形	長 幅	6.1 4.1	厚 重	1.2 19.4	黒色頁岩	縦長の石匙形を呈するが、上端の抉入部の剥離は弱い。表裏面の両側縁と下端に押圧剥離調整が施される。	
第20図 PL.14	20	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	完形	長 幅	5.9 3.4	厚 重	1.4 29.9	流紋岩	上端の節理面を打面とした剥片を素材とし、裏面は主要剥離面を大きく残す。表面の周縁から剥離調整を施し、刃部となる下端はやや鈍角。	
第20図 PL.14	21	礫石器 磨石	上半欠	長 幅	(8.8) 7.6	厚 重	2.9 292.3	細粒輝石安山岩	縦長な扁平礫を素材に、表裏面に研磨面をもつ。被熱している。	
第20図 PL.14	22	礫石器 磨石	一部欠	長 幅	(7.7) 7.3	厚 重	2.9 222.2	細粒輝石安山岩	右側上部を欠く。拳大の扁平礫を素材に、表面に研磨が施される。	
第20図 PL.14	23	礫石器 磨石	ピット１ 完形	長 幅	5.2 4.5	厚 重	3.9 71.9	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施される。被熱し、ヒビが入る。	
第20図 PL.14	24	礫石器 磨石	完形	長 幅	5.8 5.5	厚 重	3.5 164.6	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、表面を主として全体に研磨が及ぶ。	
第20図 PL.14	25	礫石器 磨石	完形	長 幅	12.0 4.6	厚 重	3.8 336.0	細粒輝石安山岩	縦長な棒状礫を素材に、全体を研磨する。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第20図 PL.14	26	礫石器 敲石	上半欠	長	(8.6)	厚	3.5	細粒輝石安山岩	縦長な扁平礫を素材に、下端および左側縁に敲打痕による潰れをもつ(敲石)。	
				幅	7.4	重	331.0			
PL.14	27	剥片石器 石鏃未製品	埋土	長	2.0	厚	0.5	黒曜石	剥片形状をそのままに、浅き細かな押圧剥離により器体形状を整えるが、全体的に剥離が甘い。	
				幅	1.2	重	1.2			
PL.14	28	剥片石器 石鏃	先端片	長	(1.6)	厚	(0.4)	黒曜石	石鏃の先端部。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
				幅	(1.1)	重	0.4			
PL.14	29	剥片石器 石鏃	左半欠	長	2.1	厚	0.3	黒曜石	左半を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施されるが、裏面は粗い。凹基の抉りは浅い。	
				幅	(1.0)	重	0.6			
PL.14	30	剥片石器 石鏃未製品		長	2.3	厚	0.7	黒曜石	裏面に主要剥離面を残し、表裏面に押圧剥離調整を施した石鏃ないしスクレイパー類の欠損品に、欠損部へ再加工を施すが加工途中。	
				幅	1.7	重	2.4			

91区14・15号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第21図 PL.15	1	縄文土器 深鉢	91区14号土坑 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口唇部がやや広い面となり、口縁下は肥厚して段をもつ。肥厚帯となる口縁部文様には、ＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄が横位に施される。	花積下層Ｉ式
第21図 PL.15	2	剥片石器 石鏃	91区15号土坑 完形	長	1.6	厚	0.3	黒曜石	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
				幅	1.3	重	0.3			

91区１・３号焼土

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第23図 PL.15	1	縄文土器 深鉢	91区１号焼土 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＬＲ縄で、横位回転による縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第23図 PL.15	2	縄文土器 深鉢	91区１号焼土 胴部片					繊維多量、粗砂	胴部に０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第23図 PL.15	3	剥片石器 打製石斧	91区１号焼土 完形	長	10.3	厚	2.7	黒色頁岩	短冊型を呈する。表面の中央付近に自然面を残す。剥離は表裏面の周縁から粗く、上下の両端部にやや細かく施される。	
				幅	3.7	重	92.9			
第23図 PL.15	4	縄文土器 深鉢	91区３号焼土 胴部片					繊維多量、粗砂	胴部下半に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.15	1	縄文土器 深鉢	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維	２と同一個体。内反ぎみの大きな波状口縁で、口縁下に肥厚した段をもち、波頂下の三角状となる部分も含めて口縁部文様帯となる。口縁下の肥厚帯には細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による撚糸側面圧痕を鋸歯状に施文し、波頂下の三角部にも同様の撚糸側面圧痕を三角状に施文する。段下の胴部には、０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施されると思われる。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	2	縄文土器 深鉢	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維	１と同一個体。内反ぎみの大きな波状口縁で、口縁下に肥厚した段をもち、波頂下の三角状となる部分も含めて口縁部文様帯となる。口縁下の肥厚帯には細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による撚糸側面圧痕を鋸歯状に施文し、波頂下の三角部にも同様の撚糸側面圧痕を三角状に施文する。段下の胴部には、０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施されると思われる。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	3	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、粗砂	波状口縁の口縁下に２本組(ＬＲ・ＲＬ縄)の撚糸側面圧痕を２列巡らせ、以下の胴部にＲＬ縄で横位回転による縄文が施される。また、内面には横位の整形痕が残る。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	4	縄文土器 深鉢	91区H-１ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	波状口縁で口縁下に肥厚した段をもち、口縁下の肥厚帯には細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による撚糸側面圧痕を波頂下で向きを変えた斜位に施し、段下にも同様の撚糸側面圧痕による文様を施文する。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	5	縄文土器 深鉢	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁で、口唇がシャープな内削ぎ状。口縁下が段状となり、口縁直下に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｒ縄とＬ・Ｌ縄)による撚糸側面圧痕を鋸歯状に施文し、段部に同様の撚糸側面圧痕を巡らせる。さらに、段下に円形刺突をも巡らせる。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	6	縄文土器 深鉢	91区G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、粗砂	口唇部を欠くが、口縁下に段をもち、口縁直下にＬ縄の撚糸側面圧痕を斜位に施文し、段部に同様の撚糸側面圧痕を巡らせる。さらに、段下にも撚糸側面圧痕を斜位に施す。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	7	縄文土器 深鉢	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	口縁下に肥厚した段をもち、口縁下の肥厚帯には細い撚糸側面圧痕で文様を施文し、段下の胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	8	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	９と同一個体。波頂部を欠くが、小波状口縁の口縁下は肥厚し、口縁下に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第24図 PL.15	9	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	８と同一個体。波頂部を欠くが、小波状口縁の口縁下は肥厚し、口縁下に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	10	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維	波状口縁の口縁下は肥厚して段をもち、波頂下に瘤状の低い貼付をもつ。肥厚帯となる口縁部文様には、細い２本組縄による回転絡条体で羽状縄文が施される。以下の胴部に同様の回転絡条体が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	11	縄文土器 深鉢	81区H-23ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	波状口縁の口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２種類の２本組縄による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施される。以下の胴部にも、同様の回転絡条体を横位に施す。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	12	縄文土器 深鉢	91区表採 口縁部片					繊維	平口縁の口縁下が肥厚ぎみで段をもち、口縁以下にＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	13	縄文土器 深鉢	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁下が肥厚して段をもち、口縁以下にＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	14	縄文土器 深鉢	91区G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁下に幅狭なやや肥厚した段をもち、口縁以下にＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	15	縄文土器 深鉢	91区E-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁下が肥厚して段をもち、口縁以下にＬＲ縄で横位・縦位回転により羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	16	縄文土器 深鉢	91区表採 口縁部片					繊維、細砂	外反ぎみの平口縁で、口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯口縁部文様に細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による回転絡条体を斜位に施す。以下の胴部にはＬＲ縄とＲＬ縄の横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	17	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	18と同一個体。平口縁の口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施される。以下の胴部にも、同様の回転絡条体を横位に施すようで、原体の端部処理がある。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	18	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	17と同一個体。平口縁の口縁下は肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施される。以下の胴部にも、同様の回転絡条体を横位に施し、原体の端部処理が明瞭。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	19	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	20・21・40・42と同一個体。小波状口縁の平縁部で、口縁下が肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による回転絡条体を横位施す。以下の胴部に細い２本組縄(Ｒ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	20	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	19・21・40・42と同一個体。小波状口縁の平縁部で、口縁下が肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による回転絡条体を横位施す。以下の胴部に細い２本組縄(Ｒ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	21	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	19・20・40・42と同一個体。口唇部を欠くが、小波状口縁の口縁下が肥厚して段をもち、肥厚帯となる口縁部文様に細い２本組縄(Ｌ・Ｌ縄)による回転絡条体を横位施す。以下の胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	22	縄文土器 深鉢	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維多量	平口縁の口縁下に肥厚ぎみの緩い段をもち、口縁以下に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	23	縄文土器 深鉢	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維多量、細砂	波状口縁で口縁以下に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	24	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁以下にＲＬ縄の縄文が縦位近い方向に施される(羽状縄文ないし縦長な菱状構成の可能性あり)。また、内面には横位の整形痕が顕著。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	25	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口唇部に斜位の刻み？をもち、口縁下に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、複合鋸歯状に口縁部文様を施す。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	26	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁下が肥厚ぎみで段をもち、口縁以下にＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	27	縄文土器 深鉢	91区G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁以下に０段多条のＲＬ縄とＬＲ縄で横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	28	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維多量、細砂	平口縁の口縁以下に、０段多条のＲＬ縄を横位、０段多条のＬＲ縄を縦位・斜位に施文する。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	29	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、粗砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	30	縄文土器 深鉢	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 底部片					繊維、細砂	尖底となる底部で、底部までＲＬ縄とＬＲ縄による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式
第24図 PL.15	31	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 底部片					繊維	尖底となる底部で、底部までＲＬ縄とＬＲ縄による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ｉ式

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第24図 PL.15	32	縄文土器 深鉢	91区F-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 底部片					繊維、細砂	尖底となる底部で、底部付近に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で縦位回転の縄文が施される。内面に炭化物が僅かに残存。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.15	33	縄文土器 深鉢	91区E-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量	胴部下半に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	34	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	35	縄文土器 深鉢	81区H-23ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量	胴部にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	36	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	37	縄文土器 深鉢	91区表採 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	38	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、粗砂	胴部下半にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	39	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維	胴部下半にＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	40	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	19～21・42と同一個体。胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	41	縄文土器 深鉢	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部下半に０段多条のＲＬ縄で、異方向回転による縦長な菱状構成となる縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	42	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	19～21・40と同一個体。胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、縦長な菱状構成に施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	43	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	44	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	45	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	46	縄文土器 深鉢	91区F-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	47	縄文土器 深鉢	91区E-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。また、内面には横位の整形痕が残る。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	48	縄文土器 深鉢	81区H・I-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	49	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。また、内面には指頭状の浅い凹凸がみられる。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	50	縄文土器 深鉢	81区F-25、91区F-１ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。また、内面には指頭状の凹凸がみられ、横位の整形痕が顕著。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	51	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。原体端部は、結節処理。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	52	縄文土器 深鉢	91区L-4ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。原体端部は、結節処理。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	53	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	54と同一個体。胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施され、原体の端部処理が明瞭。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	54	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	53と同一個体。胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施され、原体の端部処理が明瞭。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	55	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維	56と同一個体。胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施される。原体の端部処理が明瞭。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	56	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維	55と同一個体。胴部に細い２種類の２本組縄(Ｌ・Ｌ縄とＲ・Ｒ縄)による回転絡条体で、横位の羽状縄文が施される。原体の端部処理が明瞭。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	57	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、縦位回転による縦位羽状縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	58	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量	胴部に０段多条のＲＬ縄による横位回転の縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	59	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部にＲＬ縄で、横位回転による縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	60	縄文土器 深鉢	91区H-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部にＬＲ縄の縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	61	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量	胴部にＲＬ縄による横位回転の縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	62	縄文土器 深鉢	81区H-18ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	尖底部付近となる胴部下端に、ＲＬ縄で斜位回転による縦走縄文が施される。	花積下層Ⅰ式
第25図 PL.16	63	縄文土器 深鉢	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂	尖底部付近となる胴部下端に、ＲＬ縄で斜位回転による縦走縄文が施される。	花積下層Ⅰ式

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第25図 PL.16	64	縄文土器 深鉢	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂、小礫	尖底部付近となる胴部下端に、ＲＬ縄で縦位ぎみな斜縄文が施される。また、内面には指頭状の浅い凹凸が残る。	花積下層Ｉ式
第26図 PL.16	65	縄文土器 深鉢	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	小波状口縁の口縁下に細い隆帯を２条巡らせ、口縁部文様に斜位の沈線を施す。	塚田式か
第26図 PL.16	66	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維	波頂部を欠くが、小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に低い隆帯を巡らせて緩い段状とする。口縁下にＬＲ縄が施される。また、内面には横位の整形痕が残る。	塚田式
第26図 PL.16	67	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維多量、細砂	68・71と同一個体。小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に隆帯を巡らせ、口縁下に０段多条のＲＬ縄を横位施文する。以下の胴部に、同様の０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。原体端部は、結節処理。	塚田式
第26図 PL.16	68	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維多量、細砂	67・71と同一個体。小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に隆帯を巡らせ、口縁下に０段多条のＬＲ縄を横位施文する。以下の胴部に、同様の０段多条のＬＲ縄で、横位に縄文が施される。原体端部は、結節処理。	塚田式
第26図 PL.16	69	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下は肥厚ぎみな緩い段をもち、口縁以下にＬＲ縄の縄文が横位に施される。	塚田式
第26図 PL.16	70	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、粗砂	小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下にＬＲ縄が横位に施される。また、内面には指頭状の浅い凹凸が残る。	塚田式
第26図 PL.16	71	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維多量、細砂	67・68と同一個体。小波状口縁の波頂下に短い隆帯を垂下させ、口縁下に隆帯を巡らせ、口縁下に０段多条のＲＬ縄を横位施文する。以下の胴部に、同様の０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。原体端部は、結節処理。	塚田式
第26図 PL.16	72	縄文土器 深鉢	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口縁下に幅広でやや肥厚した緩い段をもち、口縁以下にＬＲ縄の縄文が横位に施される。	中道式
第26図 PL.16	73	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁ないし波状口縁の口縁直下に２本の刻みをもつ細い隆帯を巡らせ、口縁部文様体内に刺切文を横位ハ字状に充填する。	二ツ木式
第26図 PL.16	74	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維	口唇部を欠くが、口縁直下に刻みをもつ細い隆帯を巡らせ、口縁部文様体内に刺切文を横位ハ字状に充填する。	二ツ木式
第26図 PL.16	75	縄文土器 深鉢	81区H・I-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 頸部片					繊維、細砂	口縁部文様に２本組の刻み隆帯で蕨手状の主文様を描き、主文様間に刺切文を横位ハ字状に充填する。	二ツ木式
第26図 PL.16	76	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	平口縁の口唇部に円形竹管刺突を施し、口唇から隆帯を垂下させ、隆帯上に円形竹管刺突を施す。口縁下にはＬＲ縄の結節縄文を横位回転で施す。また、内面には横位の整形痕が残る。	二ツ木式？
第26図 PL.16	77	縄文土器 深鉢	81区G-17ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	78～80と同一個体。平口縁の口縁下にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位の結束羽状縄文が施される。また、内面には横位の整形痕が残る。	二ツ木式
第26図 PL.17	78	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	77・79・80と同一個体。平口縁の口縁下にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位の結束羽状縄文が施される。また、内面には横位の整形痕が残る。	二ツ木式
第26図 PL.17	79	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	77・78・80と同一個体。胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位の結束羽状縄文が施される。また、内面は凹凸をもち、横位の整形痕が残る。	二ツ木式
第26図 PL.17	80	縄文土器 深鉢	81区G-17ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	77～79と同一個体。胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位の結束羽状縄文が施される。また、内面は凹凸をもち、横位の整形痕が顕著。	二ツ木式
第26図 PL.17	81	縄文土器 深鉢	91区G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂	82と同一個体。口縁部文様に撚糸側面圧痕で蕨手状等の主文様を描き、口縁部文様帯下端に２条の刻み隆帯を巡らせて文様帯区画し、刻み隆帯間に撚糸側面圧痕を沿わせる。以下の胴部には、０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	二ツ木式
第26図 PL.17	82	縄文土器 深鉢	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂	81と同一個体。胴部に０段多条のＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	二ツ木式
第26図 PL.17	83	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄によるやや幅狭な結束羽状縄文が施される。原体の両端は、結節処理。また、内面には横位の整形痕が顕著。	二ツ木式？
第26図 PL.17	84	縄文土器 深鉢	91区表採 胴部片					繊維、細砂多量	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位の結束羽状縄文が施される。	二ツ木式
第26図 PL.17	85	縄文土器 深鉢	91区表採 胴部片					繊維、細砂多量	胴部にＲＬ縄とＬＲ縄で、横位の結束羽状縄文が施される。また、内面には横位の整形痕が残る。	二ツ木式

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第26図 PL.17	86	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、細砂	波状口縁の口唇部に半截竹管による爪形刺突をもち、口縁下は肥厚ぎみで、頸部が段状に屈曲し、屈曲部に半截竹管による爪形刺突が巡る。口縁以下にＬＲ縄の縄文が横位に施される。また、内面には横位の整形痕が顕著。なお、胴部の器厚は４㎜とかなり薄い。	布目式か
第26図 PL.17	87	縄文土器 深鉢	81区F-25、91区 F- １ｸﾞﾘｯﾄﾞ 頸～胴部片					繊維少、細砂多	頸部下が段状に屈曲し、屈曲部に爪形刺突をもつ。頸部から胴部には、原体幅の短いＲＬ縄の縄文が施される。	布目式か
第27図 PL.17	88	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、粗砂	89 ～ 92と同一個体。波頂部を欠くが、波状口縁の口縁直下に刻みを施し、口縁部文様に刻みをもつ半截竹管による平行沈線で重弧状(半円状)の文様を描き、文様間に円形刺突を充填させる。さらに、口縁部文様の下端を刻みをもつ半截竹管による平行沈線を２条巡らせて文様帯区画し、以下の胴部にＬＲ縄の結節縄文を横位に施す。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	89	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					繊維、粗砂	88・90 ～ 92と同一個体。口縁部文様の文様間に円形刺突を充填させ、口縁部文様の下端を刻みをもつ半截竹管による平行沈線を２条巡らせて文様帯区画する。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	90	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂	88・89・91・92と同一個体。口縁部文様の下端を刻みをもつ半截竹管による平行沈線を巡らせて文様帯区画し、以下の胴部にＬＲ縄の結節縄文を横位に施す。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	91	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂	88 ～ 90・92と同一個体。大きく湾曲する胴部に、ＬＲ縄の結節縄文を横位に施す。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	92	縄文土器 深鉢	81区G-24･25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、粗砂	88 ～ 91と同一個体。胴部下半に、ＬＲ縄の結節縄文を横位に施す。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	93	縄文土器 深鉢	81区F･G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、幅広な横位羽状縄文が施される。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	94	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、やや幅広な横位羽状縄文が施される。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	95	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、やや幅広な横位羽状縄文が施される。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	96	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＲＬ閉端環付縄と０段多条のＬＲ閉端環付縄で、やや幅広な横位羽状縄文が施される。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	97	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維、細砂	胴部に０段多条のＬＲ縄で、横位の幅広な縄文が施される。	関山Ⅰ式
第27図 PL.17	98	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維多量、細砂	胴部下半に軟軸絡条体？を横位に回転施文する。また、内面には斜位の整形痕が顕著。	不明
第27図 PL.17	99	縄文土器 深鉢	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 底部片					繊維多量、小礫	平底となる底部で、胴部下端にＲＬ縄を横位に施し、底面に網代痕状の痕跡を残す。	不明
第27図 PL.17	100	縄文土器 深鉢	91区G- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	波状の口縁が朝顔状に開く深鉢で、地文にＬＲの縄文を施し、波頂下に細い半截竹管による平行沈線を垂下させて軸線とし、菱状の文様を描く。菱中央には、米字状の文様を加える。	諸磯ａ式
第27図 PL.17	101	縄文土器 深鉢	91区V-11ｸﾞﾘｯﾄﾞ 頸部片					細砂	頸部に結節浮線で渦巻き状の文様を施す。	諸磯ｃ式
第27図 PL.17	102	縄文土器 深鉢	91区表採 胴部片					粗砂	胴部に半截竹管による断面Ｄ字状の沈線を同心円状に描き、その隙間に弧状の印刻を施す。	諸磯ｃ式
第27図 PL.17	103	縄文土器 深鉢	91区I- ４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部文様には結節浮線を横位に施文し、地文にＬＲの縄文を施す。	十三菩提式
第27図 PL.17	104	縄文土器 深鉢	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 頸部片					粗砂	朝顔状となる頸部に、半截竹管による渦巻きをもつ沈線で文様を描き、その下端を沈線を巡らせて文様帯区画する。	前期末葉か
第27図 PL.17	105	縄文土器 深鉢	91区F- １ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維	大きく屈曲する胴部にＲＬ縄と０段多条のＬＲ縄で、横位回転による羽状縄文が施される。	前期前葉か
第27図 PL.17	106	縄文土器 深鉢	81区G-23・24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					繊維少、細砂多	胴部にＬＲ縄とＲＬ縄で、横位回転によるやや幅狭な羽状縄文が施される。	前期前葉か
第27図 PL.17	107	縄文土器 深鉢	91区F- １ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部に細い隆帯で渦巻き状の文様を施す。	中期中葉か
第27図 PL.17	108	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	爪状の連続刺突を横位に施す。	中期中葉か
第27図 PL.17	109	縄文土器 深鉢	91区E- ２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部に沈線が巡る。	阿玉台式か
第27図 PL.17	110	縄文土器 深鉢	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部に連結部をもつ２本の隆帯を垂下させ、縦位の綾杉状沈線を施す。	栃倉式
第27図 PL.17	111	縄文土器 深鉢	91区表採 胴部片					粗砂	胴部に隆帯を垂下させ、縦位の綾杉状沈線を施す。	栃倉式
第27図 PL.17	112	縄文土器 深鉢	91区表採 口縁部片					粗砂、小礫	平口縁の口縁下に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、区画内に条線を縦位に施す。	加曽利Ｅ式
第27図 PL.17	113	縄文土器 深鉢	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、その間にＲＬ縄を縦位に充填する。	加曽利Ｅ式
第27図 PL.17	114	縄文土器 深鉢	91区V-13ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部に蛇行隆帯を垂下させ、その間に細い斜行沈線を施す。	中期後半

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第27図 PL.17	115	縄文土器 深鉢	91区F・G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部に２条の隆帯で曲線的な文様を描き、文様内に縄文を施す。	加曽利Ｅ式
第27図 PL.17	116	縄文土器 深鉢	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	湾曲する胴部に沈線で渦巻き状の文様を描き、文様間にＬＲ縄の縄文を充填する。	加曽利Ｅ式
第27図 PL.17	117	縄文土器 深鉢	91区F・G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					粗砂	朝顔状に開く平口縁の口唇部に沈線が巡り、口縁下が無紋となる。	称名寺式
第27図 PL.17	118	弥生土器 甕か	91区V-11ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					粗砂	平口縁の頸部下に３条の沈線が廻る。	弥生中期
第27図 PL.17	119	弥生土器 小型甕か	91区X-12ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	頸部から胴部の屈曲部にかけて、沈線で変形工字文等の文様を描く。表面には、赤色塗彩が施される。	弥生中期
第27図 PL.17	120	弥生土器 甕か	91区W-11ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部に斜位ないし縦位の条線を施す。	弥生中期
第27図 PL.17	121	弥生土器 甕か	91区E・F-１・ ２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部に浅い条痕が斜位に施される。	弥生中期か
第27図 PL.17	122	弥生土器 甕か	91区X-12ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部下半に斜位の条線を浅く施す。	弥生中期
第27図 PL.17	123	弥生土器 甕か	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 底部片					細砂	平底の底面に網代痕をもつ。	弥生中期か
第28図 PL.18	124	剥片石器 石鏃	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	1.6 1.2	厚 重	0.4 0.6	玉髄	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや浅い。	
第28図 PL.18	125	剥片石器 石鏃	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	1.8 1.3	厚 重	0.4 0.6	黒曜石	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第28図 PL.18	126	剥片石器 石鏃	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 一部欠	長 幅	(1.2) (1.2)	厚 重	0.2 0.2	玉髄	先端と左脚端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｖ字状に深い。	
第28図 PL.18	127	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	(1.7) (1.2)	厚 重	0.4 0.5	黒曜石	左脚端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第28図 PL.18	128	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	(1.6) 1.6	厚 重	0.3 0.5	黒曜石	先端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第28図 PL.18	129	剥片石器 石鏃	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	1.9 0.3	厚 重	0.4 0.6	チャート	小型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第28図 PL.18	130	剥片石器 石鏃	91区F-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	2.0 1.3	厚 重	0.4 0.7	玉髄	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第28図 PL.18	131	剥片石器 石鏃	91区表採 僅欠	長 幅	(1.9) (1.5)	厚 重	0.3 0.8	黒色頁岩	左脚端部を僅かに欠く、小型の凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第28図 PL.18	132	剥片石器 石鏃	91区J-５ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	(2.1) (1.5)	厚 重	0.4 1.1	玉髄	右脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅く、平基に近い。	
第28図 PL.18	133	剥片石器 石鏃	91区表採 完形	長 幅	2.5 1.6	厚 重	0.4 1.4	頁岩	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅く、平基に近い。	
第28図 PL.18	134	剥片石器 石鏃	91区表採 完形	長 幅	2.3 1.8	厚 重	0.5 1.3	玉髄	凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施されるが、右側縁は未調整。凹基の抉りは浅く、平基に近い。	
第28図 PL.18	135	剥片石器 石鏃	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	2.6 1.4	厚 重	0.2 0.9	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	凹基無茎鏃。表裏の中央に大きな剥離面を残し、器体の周縁に押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第28図 PL.18	136	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	(2.0) (1.7)	厚 重	0.4 0.8	黒曜石	右脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第28図 PL.18	137	剥片石器 石鏃	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	2.3 2.1	厚 重	0.4 1.0	黒曜石	右脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｖ字状に深い。	
第28図 PL.18	138	剥片石器 石鏃	91区H-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	2.6 (1.7)	厚 重	0.5 1.6	頁岩	左脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第28図 PL.18	139	剥片石器 石鏃	91区H-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右脚欠	長 幅	(2.5) (1.4)	厚 重	0.5 1.6	玉髄	右脚部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
第28図 PL.18	140	剥片石器 石鏃	91区G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 基部欠	長 幅	(3.1) 1.8	厚 重	0.4 1.4	黒曜石	基部の左側を欠く、やや大型の凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
第28図 PL.18	141	剥片石器 石鏃	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	2.6 (1.7)	厚 重	1.0 3.1	黒曜石	左脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや浅い。	
第28図 PL.18	142	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	3.0 2.7	厚 重	0.8 7.2	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	先端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に粗い押圧剥離調整が施されるが、両面に節理面を残す。凹基の抉りはやや浅い。厚みがあること、剥離調整が粗いことから、未製品の可能性もある。	
第28図 PL.18	143	剥片石器 石鏃	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 下半欠	長 幅	(1.8) (1.3)	厚 重	0.3 0.7	黒曜石	下半の基部を欠く。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
第28図 PL.18	144	剥片石器 石鏃	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長 幅	(2.7) 2.7	厚 重	0.8 5.8	黒色頁岩	大型の平基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施され、特に表面が丁寧。裏面には主要剥離面が大きく残る。	
第28図 PL.18	145	剥片石器 石鏃	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	1.9 (1.4)	厚 重	0.4 0.8	黒曜石	右脚端部を僅かに欠き、基部が円弧状となる小型の無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
第29図 PL.18	146	剥片石器 石錐	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長 幅	3.0 1.0	厚 重	0.5 1.5	チャート	上下端を僅かに欠き、棒状で下端となる先端側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施され、先端側ほど丁寧。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第29図 PL.18	147	剥片石器 石錐	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.7	厚	0.7	玉髄	棒状で下端となる先端側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施される。	
				幅	1.0	重	1.8			
第29図 PL.18	148	剥片石器 石錐	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	(3.2)	厚	0.8	黒曜石	下端を僅かに欠き、棒状で下端となる先端側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施される。	
				幅	1.1	重	1.9			
第29図 PL.18	149	剥片石器 石錐	91区I-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.3	厚	0.6	黒色頁岩	棒状で下端となる先端側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施される。	
				幅	1.2	重	2.2			
第29図 PL.18	150	剥片石器 石錐	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	(3.3)	厚	0.6	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	上端を僅かに欠き、やや幅広な棒状で下端となる先端側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施され、先端側ほど丁寧。	
				幅	1.3	重	1.9			
第29図 PL.18	151	剥片石器 石錐	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.5	厚	0.6	チャート	上半が幅広で、下半の先端部側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施され、先端ほど丁寧。	
				幅	1.4	重	1.7			
第29図 PL.18	152	剥片石器 石錐	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.4	厚	1.2	玉髄	左側縁上部に節理面を残す。棒状様で下端の先端部側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施され、下端ほど丁寧。	
				幅	1.6	重	3.4			
第29図 PL.18	153	剥片石器 石錐	91区H-１ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	4.4	厚	0.8	黒色頁岩	逆二等辺三角形様で、下端の先端部側が細くなる。周縁に浅い押圧剥離調整が施され、表面および下端ほど丁寧。裏面中央に主要剥離面を残す。	
				幅	2.2	重	6.7			
第29図 PL.19	154	剥片石器 石錐	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	4.0	厚	1.6	玉髄	上端および両側縁に自然面を残す剥片を素材とする。下端の表裏面に先端部作出のための押圧剥離調整が施される。	
				幅	3.3	重	15.2			
第29図 PL.19	155	剥片石器 石錐	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(2.7)	厚	0.7	チャート	下半の先端部を欠く。上半の裏面中央には主要剥離面を残し、表裏面の周縁から押圧剥離調整が施される。	
				幅	1.9	重	4.2			
第29図 PL.19	156	剥片石器 石錐	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.9)	厚	0.7	玉髄	上端と下半の先端部を欠く。上半の表面中央には節理面を残し、表裏面の周縁から押圧剥離調整が施される。	
				幅	(2.5)	重	3.1			
第29図 PL.19	157	剥片石器 石匙	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.4	厚	0.7	黒色頁岩	横長な石匙。上端両側縁の抉入部は明瞭。表裏面の周縁から押圧剥離調整が施されるが、裏面中央に主要剥離面を大きく残す。特に表面の剥離調整は丁寧。	
				幅	4.7	重	7.8			
第29図 PL.19	158	剥片石器 石匙	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.2	厚	0.8	玉髄	横長な石匙。上端両側縁の抉入部は明瞭。表裏面の周縁から押圧剥離調整が施されるが、表面に節理面を僅かに、裏面中央に主要剥離面を大きく残す。	
				幅	4.0	重	6.5			
第29図 PL.19	159	剥片石器 石匙	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.7	厚	0.8	チャート	横長な石匙。上端両側縁の抉入部は明瞭。表裏面の周縁から深い押圧剥離調整がかなり丁寧に施される。	
				幅	4.8	重	5.0			
第29図 PL.19	160	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.1	厚	0.8	珪質頁岩	表面に僅かに節理面を残す。表裏面の周縁から押圧剥離調整が施される。刃部は右側縁でやや鈍角。	
				幅	2.3	重	5.4			
第29図 PL.19	161	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.8	厚	1.2	チャート	表面に大きく節理面を残す。表裏面の周縁から深く丁寧な押圧剥離調整が施される。刃部は左側縁で鋭角。	
				幅	2.9	重	11.7			
第29図 PL.19	162	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区表採 完形	長	4.9	厚	1.1	頁岩	表面中央に僅かに節理面、裏面中央に主要剥離面を残す。表裏面の周縁から深い押圧剥離調整が施され、特に刃部となる右側縁は丁寧。刃部は鋭角。	
				幅	4.4	重	24.3			
第30図 PL.19	163	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.3	厚	1.6	珪質頁岩	上端に打面を残す横長剥片を素材とし、表裏面の下端および両側縁に押圧剥離調整が施され、特に下端が丁寧。刃部となる下端は鋭角。	
				幅	7.6	重	38.7			
第30図 PL.19	164	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	4.0	厚	1.4	黒色頁岩	横長剥片を素材とし、表裏面の上下端に剥離調整が施されるが、裏面に主要剥離面を大きく残す。刃部となる下端が丁寧。刃部となる下端は鋭角。	
				幅	7.9	重	37.6			
第30図 PL.19	165	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区H-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右半欠	長	(3.7)	厚	1.0	頁岩	右側縁側を欠く。表面の下端に押圧剥離調整が施され、裏面は主要剥離面。刃部となる下端は鋭角。	
				幅	(4.6)	重	11.1			
第30図 PL.19	166	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	3.7	厚	1.3	珪質頁岩	上端を打面とした横長剥片を素材とし、刃部となる下端に剥離調整を集中させる。刃部は鈍角気味。	
				幅	5.4	重	23.4			
第30図 PL.19	167	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	(2.9)	厚	1.0	黒色頁岩	小型な方形状を呈する。横長剥片を縦位に用い、上部は剥離調整前に欠損。表裏面の両側縁と下端に押圧剥離調整が施される。刃部となる下端はやや鋭角。	
				幅	4.3	重	11.7			
第30図 PL.19	168	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.9	厚	1.1	玉髄	小型な方形を呈する。表面の周縁および裏面の下端に押圧剥離調整が施され、表面下端は丁寧。刃部は下端で鋭角。	
				幅	3.0	重	8.9			
第30図 PL.19	169	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右側欠	長	3.8	厚	1.2	流紋岩	右側縁側を欠く。表裏面の周縁から押圧剥離調整が施されるが、裏面に大きく主要剥離面を残す。刃部となる左側縁は丁寧で、鋭角。	
				幅	(3.2)	重	11.5			
第30図 PL.19	170	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区E-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	5.7	厚	1.0	黒色頁岩	横長剥片を縦位に用い、表面の両側縁および左側縁の裏面に押圧剥離調整が施される。刃部となる左側縁は鋭角。	
				幅	1.7	重	7.8			
第30図 PL.19	171	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	91区G-２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.8	厚	1.1	頁岩	素材剥片の表裏面周縁から押圧剥離調整が施され、刃部となる下端は丁寧。刃部は鋭角。	
				幅	4.2	重	10.0			
第30図 PL.19	172	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.2	厚	0.7	流紋岩	小型な方形を呈する。裏面に大きく節理面を残す。表裏面の周縁から押圧剥離調整が施される。刃部は右側縁で鋭角。	
				幅	3.1	重	5.6			
第30図 PL.19	173	剥片石器 ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.6	厚	1.6	珪質頁岩	小型な方形を呈する。表面の右側に節理面を残す。表面の右側縁および裏面の周縁から押圧剥離調整が施される。刃部は右側縁で鋭角。	
				幅	3.2	重	11.4			
第30図 PL.19	174	剥片石器 二次加工剥片	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.9	厚	0.9	チャート	小型な縦長剥片を素材とし、右側縁に集中して細かな押圧剥離調整が施される。	
				幅	2.6	重	4.2			
第30図 PL.19	175	剥片石器 二次加工剥片	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.4	厚	0.9	黒曜石	打面を残す小型剥片を素材に、主要剥離面を表面として、下端に細かな押圧剥離調整が施される。	
				幅	2.5	重	3.1			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第30図 PL.19	176	剥片石器 石篦	81区H-23ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	5.6 3.0	厚 重	1.3 24.8	黒色頁岩	小型で、裏面に主要剥離面を大きく残す。剥離は表面を主に裏面にまで及ぶが、表面周縁は特に丁寧。刃部となる下端は鋭角気味。	
第30図 PL.19	177	剥片石器 石篦	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	6.4 3.6	厚 重	2.0 43.6	黒色頁岩	やや小型で、裏面に主要剥離面を大きく残す。剥離は表面を主に裏面にまで及ぶが、表面周縁は特に丁寧。刃部となる下端は鈍角。	
第30図 PL.19	178	剥片石器 石篦	91区F- ２ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	6.8 3.6	厚 重	1.5 31.2	玉髄	小型で、表面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残す。剥離は裏面を主に表面にまで及ぶが、裏面下端は特に丁寧。刃部となる下端は鋭角気味。	
第30図 PL.20	179	剥片石器 打製石斧	91区H- ４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	12.6 5.0	厚 重	3.1 276.7	頁岩	断面が四角形の棒状礫を素材に、その上下端に剥離調整が施される。刃部となる下端には表裏面から剥離が加えられ、その端部には細かな剥離を施す。	
第30図 PL.20	180	剥片石器 打製石斧	91区G- １ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	9.1 5.3	厚 重	2.0 97.0	頁岩	短冊型を呈する。上端に自然面を僅かに残す。剥離は表裏両面の両側縁から粗く、刃部となる下端は細かく施される。	
第30図 PL.20	181	剥片石器 打製石斧	91区G- １ｸﾞﾘｯﾄﾞ 下端欠	長 幅	(12.0) (7.0)	厚 重	2.3 145.9	安山岩	下端を欠くが分銅型を呈する。両側縁中央が敲打により潰れる。	
第30図 PL.20	182	礫石器 磨製石斧	81区I-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 破片	長 幅	(3.5) (2.5)	厚 重	(2.0) (13.3)	緑色片岩	磨製石斧の上端付近の破片で、丁寧な研磨が施されている。	
第31図 PL.20	183	礫石器 磨石類	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	4.5 3.9	厚 重	2.9 64.5	細粒輝石安山岩	小型礫を素材に、全体に研磨が施され、両側縁の上下端付近に最終的な研磨面をもち、六角形状を呈する。	
第31図 PL.20	184	礫石器 磨石	91区H- ４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	5.8 3.2	厚 重	2.6 75.6	細粒輝石安山岩	小型礫を素材に、全体に研磨が施され、両側縁の上下端付近に最終的な研磨面をもち、六角形状を呈する。	
第31図 PL.20	185	礫石器 磨石類	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	5.6 2.4	厚 重	2.0 42.8	細粒輝石安山岩	小型礫を素材に、表面に研磨面をもつ。	
第31図 PL.20	186	礫石器 磨石	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	4.0 4.1	厚 重	3.5 84.8	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施され、表面が凸状、側縁が平坦となり、裏面は全体に凹状となる。	
第31図 PL.20	187	礫石器 磨石	91区I- ４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	4.2 4.1	厚 重	2.9 74.9	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施される。	
第31図 PL.20	188	礫石器 磨石	91区I- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	5.3 4.9	厚 重	4.2 153.6	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施され、球状に近い。	
第31図 PL.20	189	礫石器 磨石	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	4.8 4.2	厚 重	2.4 72.0	細粒輝石安山岩	小型の円礫を素材に、全体に研磨が施され、やや扁平となる。	
第31図 PL.20	190	礫石器 磨石	91区表採 完形	長 幅	9.7 8.3	厚 重	5.6 642.3	細粒輝石安山岩	拳大の円礫を素材に、全面に研磨が及ぶ。	
第31図 PL.20	191	礫石器 磨石	91区G- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	10.3 9.1	厚 重	5.7 826.3	細粒輝石安山岩	扁平礫を素材に、全体に研磨を施す。裏面の剥離は、被熱による。	
第31図 PL.20	192	礫石器 磨石	91区表採 完形	長 幅	11.6 7.5	厚 重	4.9 681.9	細粒輝石安山岩	やや縦長な扁平礫を素材に、表・裏面に研磨が施され(磨石)、表面に凹部をもつ(凹石)。被熱している。	
第31図 PL.20	193	礫石器 磨石	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	6.8 4.5	厚 重	3.5 156.8	細粒輝石安山岩	拳大の礫を素材に、表･裏･側面の３面に研磨面をもつ。	
第31図 PL.20	194	礫石器 磨石	91区J- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	9.4 8.7	厚 重	3.7 483.8	細粒輝石安山岩	拳大の扁平礫を素材に、表裏面に平坦な研磨面をもつ。	
第31図 PL.20	195	礫石器 磨石	91区H- ４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	11.2 5.0	厚 重	3.2 348.8	細粒輝石安山岩	縦長な扁平礫を素材に、表面に研磨面をもつ(磨石)。また、下端左角には、敲打による剥離をもつ(敲石)。	
第31図 PL.20	196	礫石器 磨石	91区H- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長 幅	7.9 8.2	厚 重	5.4 460.3	細粒輝石安山岩	扁平礫を素材に、全体に研磨を施す。裏面の剥離は、被熱による。	
第31図 PL.20	197	礫石器 磨石	91区I- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	8.5 4.1	厚 重	3.7 182.4	細粒輝石安山岩	縦長な扁平礫を素材に、両側面と裏面に研磨面をもつ(磨石)。剥離痕をもつが、敲石かは不明。	
第31図 PL.20	198	礫石器 磨石	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	9.5 4.6	厚 重	3.0 201.4	細粒輝石安山岩	縦長な礫を素材に、表・側面に研磨が施される。	
第32図 PL.20	199	礫石器 磨石類	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 一部欠	長 幅	11.8 7.2	厚 重	4.3 489.8	細粒輝石安山岩	扁平礫を素材に、全面に研磨が及ぶが、表・裏・両側面は研磨面が平坦となる(磨石)。また、表裏面に凹部をもつ(凹石)。	
第32図 PL.20	200	礫石器 磨石	91区表採 完形	長 幅	11.5 6.9	厚 重	4.3 531.8	細粒輝石安山岩	やや縦長な扁平礫を素材に、表面に研磨(磨石)と凹部を連ねる(凹石)。また、下端は、敲打痕により潰れる(敲石)。被熱している。	
第32図 PL.20	201	礫石器 磨石	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	11.5 6.4	厚 重	3.8 362.4	細粒輝石安山岩	縦長な礫を素材に、表面に研磨が施され(磨石)、表面中央に凹部をもつ(凹石)。	
第32図 PL.20	202	礫石器 磨石類	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	8.2 4.8	厚 重	2.1 102.8	細粒輝石安山岩	拳大の扁平礫を素材に、表面に研磨面(磨石)と凹部をもつ(凹石)。	
第32図 PL.20	203	礫石器 磨石	91区F- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 一部欠	長 幅	(9.6) (8.7)	厚 重	4.5 446.8	細粒輝石安山岩	扁平礫を素材に、表面に研磨面(磨石)と凹部をもつ(凹石)。被熱している。	
第32図 PL.20	204	礫石器 磨石	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	7.0 5.4	厚 重	2.3 125.3	細粒輝石安山岩	拳大の扁平礫を素材に、表面に研磨が施され(磨石)、裏面上部に凹部をもつ(凹石)。	
第32図 PL.20	205	礫石器 凹石	91区F- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ ほぼ完形	長 幅	12.6 11.3	厚 重	5.2 1056.1	花崗閃緑岩	扁平な円礫を素材に、表面に凹部を連ねる。被熱している。	
第32図 PL.20	206	礫石器 凹石	81区F-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	10.8 5.1	厚 重	3.0 211.6	細粒輝石安山岩	縦長な扁平礫を素材に、表面の長軸上に凹部を連ねる。	
第32図 PL.20	207	礫石器 敲石	91区E- ３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長 幅	11.1 6.2	厚 重	5.1 424.3	細粒輝石安山岩	縦長な礫を素材に、下端は敲打により剥離する。	
第32図 PL.20	208	石製品 玉類	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 埋土 完形	径	2.0	厚 重	0.5 3.3	珪質頁岩	研磨により外形は円形を呈し、その中央に両面穿孔による孔をもつ。孔径0.3cm。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.21	209	剥片石器 石鏃	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	2.1	厚	0.4	黒曜石	左脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはやや浅い。	
				幅	(1.3)	重	0.8			
PL.21	210	剥片石器 石鏃	81区I-23ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	(1.8)	厚	0.3	流紋岩	先端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
				幅	1.5	重	0.8			
PL.21	211	剥片石器 石鏃	91区表採 完形	長	2.1	厚	0.5	黒曜石	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
				幅	1.5	重	1.0			
PL.21	212	剥片石器 石鏃	91区J-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	1.8	厚	1.5	黒曜石	先端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に周縁のみに押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは逆Ｖ字状に深い。	
				幅	1.5	重	0.5			
PL.21	213	剥片石器 石鏃	91区G-１ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右脚欠	長	2.4	厚	0.4	黒曜石	右脚部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
				幅	(1.6)	重	1.0			
PL.21	214	剥片石器 石鏃	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 左脚欠	長	2.2	厚	0.4	黒曜石	左脚部を欠く凹基無茎鏃。表面に丁寧な押圧剥離調整を施すが、裏面は基部と左側縁のみ調整。凹基の抉りは浅い。	
				幅	(1.5)	重	0.8			
PL.21	215	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 左脚欠	長	2.2	厚	0.3	黒曜石	左脚部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
				幅	(1.5)	重	0.7			
PL.21	216	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.9)	厚	0.5	黒曜石	先端と両脚端部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
				幅	(1.4)	重	1.4			
PL.21	217	剥片石器 石鏃	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 左半欠	長	(2.1)	厚	0.5	玉髄	左半を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
				幅	(1.0)	重	0.9			
PL.21	218	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右半欠	長	(1.5)	厚	(0.4)	黒曜石	先端から右脚部にかけてを欠く凹基無茎鏃。表面を主に押圧剥離調整が施される。	
				幅	(0.7)	重	0.3			
PL.21	219	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長	(1.6)	厚	0.4	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	上半の先端側を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
				幅	1.7	重	1.0			
PL.21	220	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.7)	厚	0.4	玉髄	先端部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
				幅	1.9	重	1.2			
PL.21	221	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	2.1	厚	0.4	黒曜石	右脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
				幅	(1.6)	重	1.2			
PL.21	222	剥片石器 石鏃	91区表採 先端欠	長	(1.5)	厚	0.5	黒曜石	先端部を欠く小型の凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
				幅	1.3	重	1.0			
PL.21	223	剥片石器 石鏃	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長	(1.2)	厚	0.4	黒曜石	上半の先端側を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い。	
				幅	1.8	重	0.8			
PL.21	224	剥片石器 石鏃	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長	(1.2)	厚	0.3	黒曜石	上半の先端側を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施され、特に表面が丁寧。裏面には主要剥離面が大きく残る。凹基の抉りは浅い。	
				幅	1.5	重	0.6			
PL.21	225	剥片石器 石鏃	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長	(1.0)	厚	0.4	黒曜石	上半の先端側を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅い。	
				幅	1.5	重	0.7			
PL.21	226	剥片石器 石鏃	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.6)	厚	0.4	黒曜石	先端部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは浅く、平基に近い。	
				幅	1.9	重	1.2			
PL.21	227	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.4)	厚	0.3	黒曜石	先端部を欠き、基部が円弧状となる無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
				幅	1.7	重	0.7			
PL.21	228	剥片石器 石鏃	91区G-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.9)	厚	0.6	黒曜石	先端部を欠く平基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。基部は平らとなる。	
				幅	1.9	重	2.1			
PL.21	229	剥片石器 石鏃	91区I-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右脚欠	長	1.8	厚	0.3	チャート	右脚部を欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。脚部は長く、凹基の抉りは逆Ｖ字状。	
				幅	(1.7)	重	0.7			
PL.21	230	剥片石器 石鏃	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 右半欠	長	3.0	厚	0.9	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	右半を欠く平基無茎鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施される。基部は平らとなる。	
				幅	(1.4)	重	2.5			
PL.21	231	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 僅欠	長	(2.2)	厚	0.5	玉髄	先端と両脚端部を僅かに欠く凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りは深い？。	
				幅	(1.5)	重	1.9			
PL.21	232	剥片石器 石鏃	81区G-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.1	厚	0.4	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	凹基無茎鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。凹基の抉りはかなり浅く、平基無茎鏃に近い。	
				幅	1.3	重	0.8			
PL.21	233	剥片石器 石鏃	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端欠	長	(1.8)	厚	0.5	黒曜石	先端部を欠く平基無茎鏃。表裏面に押圧剥離を施すが、全体的に調整が甘く、未製品の可能性あり。	
				幅	1.8	重	1.6			
PL.21	234	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 基部左半	長	(1.8)	厚	(0.8)	珪質頁岩	平基無茎鏃の左脚部。表裏面共に押圧剥離調整が施される。	
				幅	(1.5)	重	1.3			
PL.21	235	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	1.9	厚	0.4	珪質頁岩	基部が円弧状となる小型の無茎鏃。表裏面の周縁のみに押圧剥離調整が施される。	
				幅	1.2	重	0.8			
PL.21	236	剥片石器 石鏃	81区H-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	長	2.5	厚	0.4	玉髄	基部が円弧状となる無茎鏃。表裏面に押圧剥離調整が施すが、表面が丁寧。裏面に主要剥離面を残す。	
				幅	1.3	重	1.0			
PL.21	237	剥片石器 石鏃	91区J-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 先端部	長	(1.3)	厚	(0.3)	黒曜石	石鏃の先端部。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
				幅	(1.0)	重	0.3			
PL.21	238	剥片石器 石鏃	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 下半欠	長	(1.6)	厚	(0.4)	黒曜石	下半を欠く石鏃の先端部。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
				幅	(1.4)	重	0.6			
PL.21	239	剥片石器 石鏃	81区G-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ 下半欠	長	(1.6)	厚	0.5	黒曜石	下半の基部側を欠く。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。節理面による欠損。	
				幅	(1.5)	重	1.2			
PL.21	240	剥片石器 石鏃	91区F-３ｸﾞﾘｯﾄﾞ 基部欠	長	(2.5)	厚	(0.7)	珪質変質岩(流紋岩質凝灰岩)	基部を欠く石鏃。表裏面共に丁寧な押圧剥離調整が施される。	
				幅	(2.0)	重	2.4			
PL.21	241	剥片石器 石鏃	91区H-１ｸﾞﾘｯﾄﾞ 基部欠	長	(2.3)	厚	0.4	黒色頁岩	基部を欠く石鏃。表裏面共に押圧剥離調整が施される。	
				幅	(1.3)	重	1.3			
PL.22	242	剥片石器 石鏃未製品	91区表採	長	2.1	厚	0.8	黒曜石	石鏃の未製品。裏面を主に押圧剥離を施すが粗く、表面の厚みを残す。	
				幅	1.8	重	2.0			
PL.22	243	剥片石器 石鏃未製品	91区G-４ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	1.8	厚	0.6	黒曜石	石鏃の未製品。表裏面に押圧剥離を施して基部と右側縁を作出するが、他は未調整。基部は凹基の可能性あり。	
				幅	1.9	重	1.7			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.22	244	剥片石器 石鏃未製品	81区G-23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	2.9	厚	0.7	黒曜石	素材となる剥片の周縁へ、粗く押圧剥離を加える。	
				幅	1.2	重	2.0			
PL.22	245	剥片石器 石鏃未製品	91区G- 3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	2.3	厚	0.7	黒曜石	石鏃の未製品。表裏面に押圧剥離を施して先端部から両側縁上半を作出するが、他は未調整。	
				幅	1.9	重	2.8			
PL.22	246	剥片石器 石鏃未製品	91区H- 3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	2.6	厚	0.6	黒曜石	石鏃の未製品。表裏面に押圧剥離を施して先端部と右側縁を作出するが、他は未調整。	
				幅	1.7	重	2.0			
PL.22	247	剥片石器 石鏃未製品	91区表採	長	(1.9)	厚	0.5	黒曜石	上半を欠く石鏃の未製品。表裏面共に押圧剥離を施すが、左側縁と基部の調整が甘い。	
				幅	1.8	重	1.8			
PL.22	248	剥片石器 石鏃未製品	91区G- 3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	2.0	厚	0.6	黒曜石	石鏃の未製品。表裏面に押圧剥離を施すが、左側裏面と右脚部は未調整。基部は凹基の可能性あり。	
				幅	1.6	重	1.7			
PL.22	249	剥片石器 石鏃未製品	81区H-24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	2.5	厚	0.3	チャート	素材剥片の表裏面周縁から丁寧な押圧剥離を施して器体を整えるが、基部への調整が及んでいない。	
				幅	2.0	重	1.7			
PL.22	250	剥片石器 石鏃未製品	91区G- 3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	(2.4)	厚	1.1	黒曜石	先端部を欠く石鏃の未製品。表裏面共に押圧剥離を施すが粗く、厚みを残す。	
				幅	2.0	重	3.9			
PL.22	251	剥片石器 石鏃未製品	91区G- 3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	長	3.5	厚	0.6	流紋岩	石鏃の未製品。表面の先端と左側縁に押圧剥離を施すが、他は未調整。	
				幅	2.5	重	4.6			
PL.22	252	剥片石器 石鏃未製品	91区表採	長	(3.3)	厚	1.3	チャート	先端部を欠く石鏃の未製品。表裏面共に押圧剥離を施すが粗く、厚みを残す。基部は平基の可能性あり。	
				幅	3.0	重	11.8			

91区１号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第34図 PL.22	1	土師器 甕	口縁部片					細砂粒・粗砂粒/酸化煙/橙色	頸部は直立気味で、２条の横ナデ調整。内面は横位ヘラナデ。	

91区２号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第37図 PL.22	1	灰釉陶器 皿	1/4					細砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第37図 PL.22	2	須恵器 椀	1/5					細砂粒・粗砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形。高台は貼付。	
第37図 PL.22	3	須恵器 壺	頸～肩部					細砂粒・小礫/還元煙/灰色	４と同一個体。ロクロ整形か。頸部はやや外反気味に立ち上がり、頸部から肩部にかけて横ナデ。内面は横位ナデ。	
第37図 PL.22	4	須恵器 壺	肩～底部					細砂粒・小礫/還元煙/灰色	３と同一個体。ロクロ整形か。肩部に把手をもち、肩部から胴部下半まで横ナデ。内面も横位ナデ。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第37図 PL.22	5	須恵器 羽釜	口縁部片					粗砂粒/酸化煙/灰橙色	ロクロ整形か。口縁部から鍔部は横ナデ。内面は横位ナデ。	
第37図 PL.22	6	須恵器 羽釜	鍔部片					粗砂粒/酸化煙/褐灰橙色	ロクロ整形か。口縁部から鍔部は横ナデ。体部は縦位のヘラ削り。内面は横位ナデ。	
第37図 PL.22	7	土師器 甕	口縁部片					細砂粒・粗砂粒/酸化煙/白橙色	頸部は外反気味に直立。口縁部は横ナデ。体部は横位ヘラ削り。内面は横位ヘラナデ。	
第37図 PL.22	8	須恵器 小型甕	口縁部片					粗砂粒/酸化煙/褐灰橙色	ロクロ整形。口縁部は短く外反し、口縁部から肩部にかけて横ナデ調整。	
第37図 PL.22	9	鉄製品 槍鉋	先端部	長	(8.1)	厚	0.4		槍鉋の先端部で、基部を欠く。先端は最大幅1.3cmを測り、先端ほど薄くなり、尖る。基部側は欠損部で幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。錆化が激しい。	
				幅	1.3	重	15.9			

91区３号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第38図 PL.23	1	須恵器 羽釜	口縁～体部2/3					粗砂粒/酸化煙/褐灰橙色	ロクロ整形か。口縁部は内反気味で、口縁から鍔部は横ナデ。体部は縦位のヘラ削り。内面は横位ナデ。	
第38図 PL.23	2	土師器 小型甕	ほぼ完形					細砂粒・粗砂粒/酸化煙/褐橙色	ロクロ整形。口縁部は短く外反し、口縁部から体部上半にかけて横ナデ調整。体部下半は縦位ヘラナデ。	
第38図 PL.23	3	礫石器 凹石	完形	長	15.5	厚	5.0	細粒輝石安山岩	凹石を転用したもので、上端が剥離し、表面には点状に鉄滓が付着する。	
				幅	7.9	重	819.5			

91区４号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39図 PL.23	1	土師器 甕	口縁～体部1/3					細砂粒・粗砂粒/酸化煙/褐橙色	頸部は直立気味で、２条の横ナデ調整。ナデは肩部にまで及ぶ。体部は縦位ヘラ削り。内面は横位ヘラナデ。	
第39図 PL.23	2	礫石器 敲石	完形	長	17.2	厚	4.9	斑糲岩	上端および表面に剥離痕をもち、下端に敲打による潰れ痕をもつ。全体は研磨されている。	
				幅	8.2	重	1066.3			

91区７号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第44図 PL.23	1	須恵器 椀	91区７号土坑 底部片					細砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	

第３章　上原Ⅲ遺跡

第１節　調査に至る経緯と経過

第１項　調査に至る経緯

調査は町道建設に伴う事業として、実施された。当初の調査予定面積は1,389㎡であったが、県文化財保護課によって行われた試掘調査によって約半分に減じ、さらに、一部用地取得の関係から、最終的な調査面積は317㎡となった。

調査面積が狭く、遺跡地の北側および南側は、土地改良事業に伴い町教委により平成23年度に調査が行われ、平安～縄文時代の住居、土坑等が多数検出されている。調査を行う時点では、調査地以外は、圃場整備事業が終了しており、特に南側については、２m以上の段差があり、調査方法に苦慮した。

第２項　調査の経過

発掘調査は、平成25年６月17日から7月22日にかけて実施した。発掘調査の手順とし、事前に調査対象区域を委託者側立ち会いの下で範囲および上物等の確認を行った。

調査区は幅約11m、長さ28mの範囲で、調査区への進入路が西側に限定されていたため、調査は東側から順次行うこととした。また、狭い範囲であったにもかかわらず、排土も調査区内において処理せざるを得ない状況を確認した。

第２節　調査の方法

第１項　調査区とグリッドの設定

上原Ⅲ遺跡の発掘調査にあたっては、八ッ場地区において、これまで行ってきた設定方法を踏襲、調査区全体を覆う形でグリッド設定を行った。測量方眼設定にあたっては、日本測地系2000第Ⅸ系を使用し、１㎞方眼の大グリッド「地区」を設定しさらにこの中を100m方眼の中グリッド「区」に分けた。この区が調査区を表す名称として使用されている。

中グリッド「区」の中をさらに４m方眼で細分したものを最小グリッドとして使用している。このグリッドの呼称は、中グリッドの南東隅を起点とし、北方向に１・２・３・・と数字を付し25まで、西方向へはＡ・Ｂ・Ｃ・・・とＹまで付した。こうして設定した最小グリッドの呼称は中グリッド「区」、小グリッドの南東交点(例えばＡ－１)を付け○区Ａ－１と呼ぶこととした。今回の調査区は狭小であったために、37地区(大グリッド)内の６区(中グリッド)の中に収まり、小グリッドは、東西Ｇ～Ｍ、南北17～20の範囲となる。住居、土坑等の遺構番号については、１から付番した。

第２項　発掘調査の方法

調査にあたっては、委託者である国交省の担当と調査範囲、調査期間等の事前打ち合わせを行い、調査範囲の確定後、伐採、表土の掘削を開始した。

調査区は南北側が狭く、調査区の両側は圃場整備の工事完了直後であり、法面、進入道路の盤が固まっていないこともあり、慎重な作業が要求された。また、調査区は狭く、排土の搬出ができなかったことから、調査区内での移動処理を行わざるを得なかった。

調査区を分割し、表土の除去を行い、遺構確認面を確定した。試掘データから遺構確認面を確定し、掘り下げたが、場所により黒色土が厚く、２ないし３面以上の調査が必要な場合も考えられたため、表土除去時には注意を払った。

遺構確認作業後、各遺構の掘削に入り、新しい時代の遺構から調査を開始。また黒色土の堆積が厚く遺構の検出が難しい場所については、グリッド方眼を設定し、掘り下げを行った。

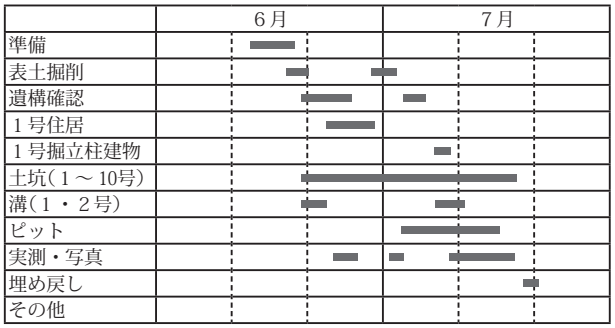
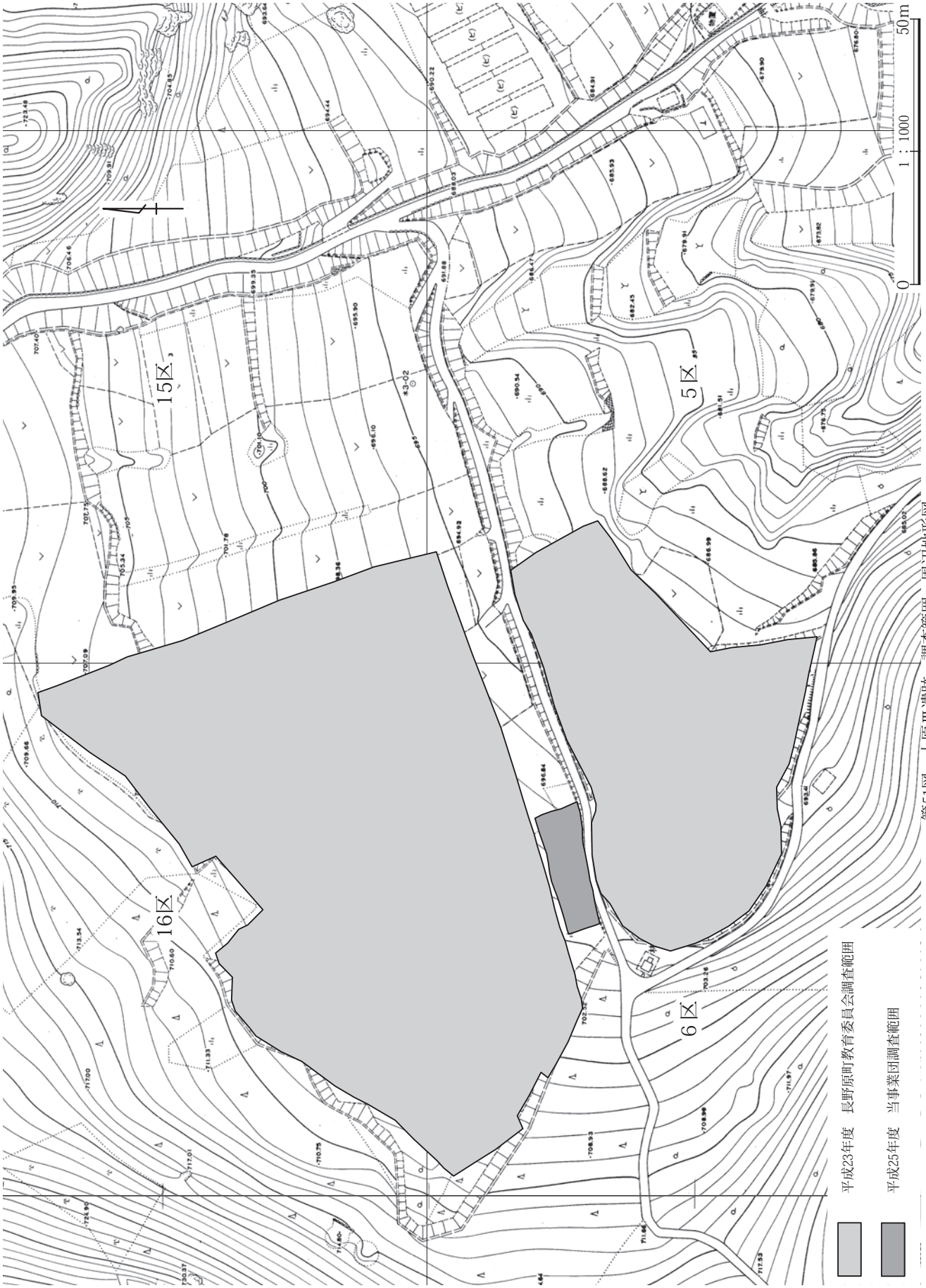


表４　発掘調査工程表



第51図　上原Ⅲ遺跡　調査範囲・周辺地形図

第３節　遺跡の立地と基本土層

第１項　遺跡の立地

吾妻川の左岸上位段丘の丘陵部に形成された、扇状地形の上流西部分に遺跡は位置する。

標高は696 ～ 700mである。周辺は扇状地状の地形の南斜面地で、本遺跡の南側に位置する林花畑遺跡、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡などでは、縄文時代を中心とした遺構密度の濃い集落遺跡が確認されており、本遺跡は上記の遺跡が位置する段丘面の、さらに上位に位置している。

第２項　基本土層

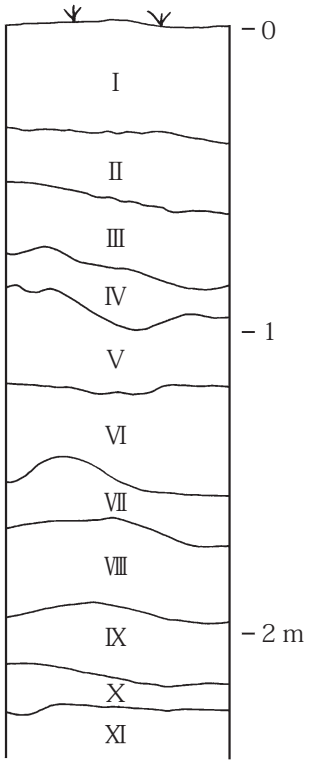
Ⅰ．表土
Ⅱ．黒褐色土
Ⅲ．暗褐色土　ローム小塊混入。
Ⅳ．暗褐色土　Ⅲと似るが礫の混入少なく、やや細粒。
Ⅴ．暗褐色土　ローム(二次堆積か)白色粒含む。
Ⅵ．暗黄褐色土　Ⅴに似るが色調は暗い。
Ⅶ．暗黒褐色土
Ⅷ．暗褐色土　角礫、(白色)凝灰岩礫含む。
Ⅸ．暗褐色土　小礫若干混入。
Ⅹ．黒褐色土
XI．暗黄褐色土　大型礫混入、締まり有り。

調査区内は傾斜が見られ、Ⅰの表土およびⅡの黒褐色土については場所により厚さが異なる。また、Ⅲ層以下に関しても場所により確認されない層も見られる。

遺構は大きく、Ⅲ層の下面に於いて確認されるものと、Ⅳ層下層において確認可能となる遺構に大別され、遺物もこの層において出土している。

但し、確認面による違いが必ずしも時代差であるという確証は無く、調査区内においてもそれぞれの層厚にばらつきが見られるようである。

柱状図は調査区北面側のもので、あまり傾斜が見られないが、東壁では各層が南側に大きく傾斜を持って堆積している。



第52図　上原Ⅲ遺跡　基本土層

第４節　検出された遺構と遺物

第１項　概要

遺跡地は、北側に山を背負い、南に傾斜を持った扇状地形で、調査区は上位西側に位置する。今回の調査区は平成23年度に圃場整備事業に伴う発掘調査として、町教委により、広範囲に調査が行われ、平安時代の集落が確認されている範囲内にあたる。

調査の結果、平安時代の住居１軒、掘立柱建物と思われる一部が１棟、土坑10基、溝２条、ピットが検出された。

出土遺物はあまり多くはなかったが、住居内において、椀、羽釜、鉄製品が、土坑からも数点の平安時代、弥生・縄文土器が出土している。その他、遺構外において土器数点が出土した。

調査区は遺跡地の西寄りに在り、遺構の密度もやや希薄になっている場所で、特に北西寄りの部分では、土坑等もほとんど見られない。

第２項　遺構と遺物

１．竪穴住居

１号住居　（第54図、PL.26・28）

今回の調査で唯一確認された住居である。調査区の南東隅に検出した。傾斜を持つ調査区内の最も下がった位置において、住居の一部を確認した。

位置：調査区の南東隅で検出した、方形を呈すと思われる住居の北西部分のおよそ４分の１を検出した。

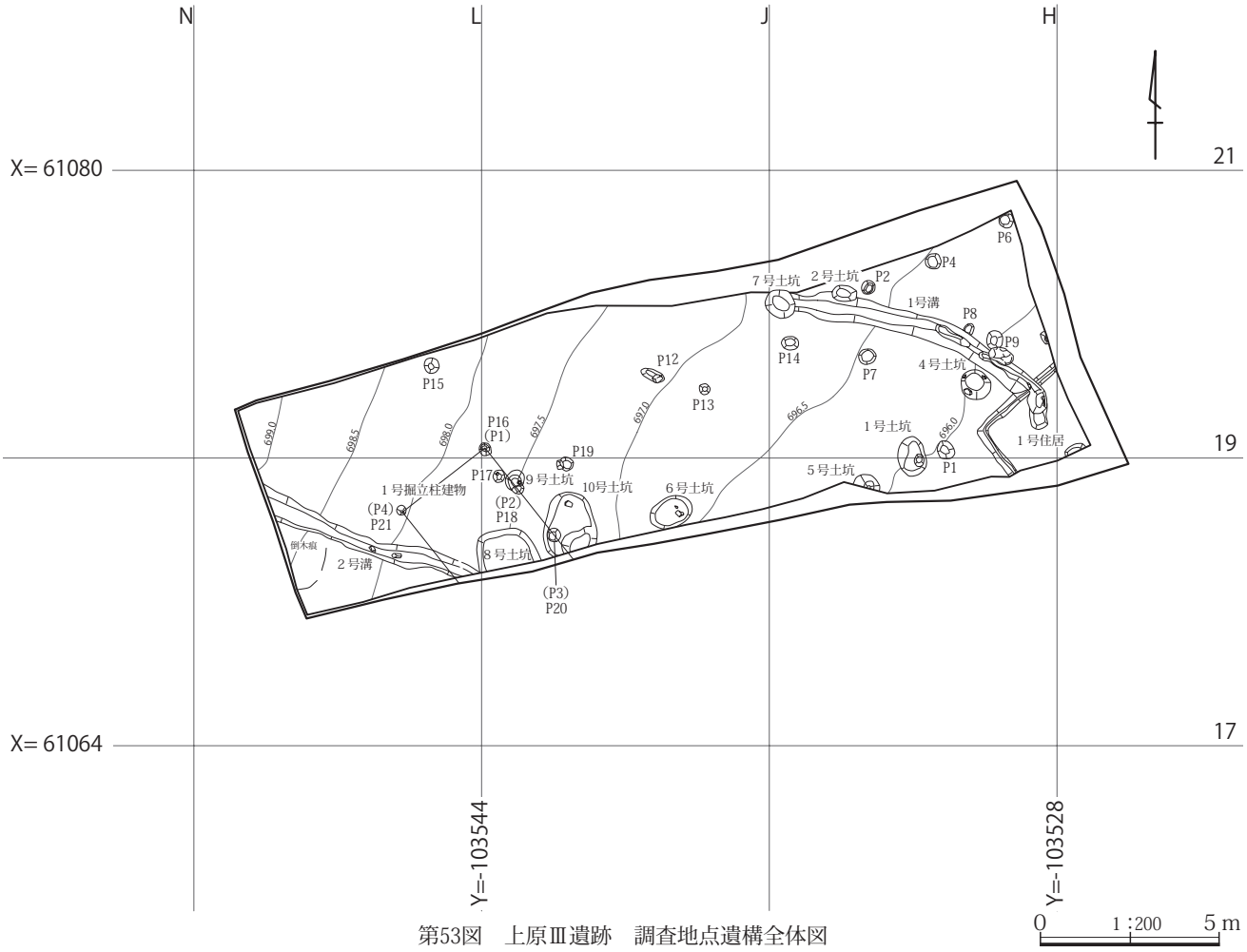
グリッド：６区Ｇ・Ｈ－18・19に位置する。

形状：調査では、住居の北西隅のみを検出したが、町教委調査例から想定すれば、全体形状は方形を呈し、東壁中央南寄りにカマドをもつタイプと想定される。壁下には幅約15cmの壁溝が廻る。北壁の中央部には、北西方向から流れ下る、自然流路と思われる１号溝が、壁と床面の一部を壊した状況で検出されている。

規模：確認長は、南北2.42m、東西2.82m、壁高0.66m。

床面積：検出された面積は4.86㎡である。

埋没土：暗黒褐色土で、軽石、小礫混じりの土を主とし、



第53図　上原Ⅲ遺跡　調査地点遺構全体図

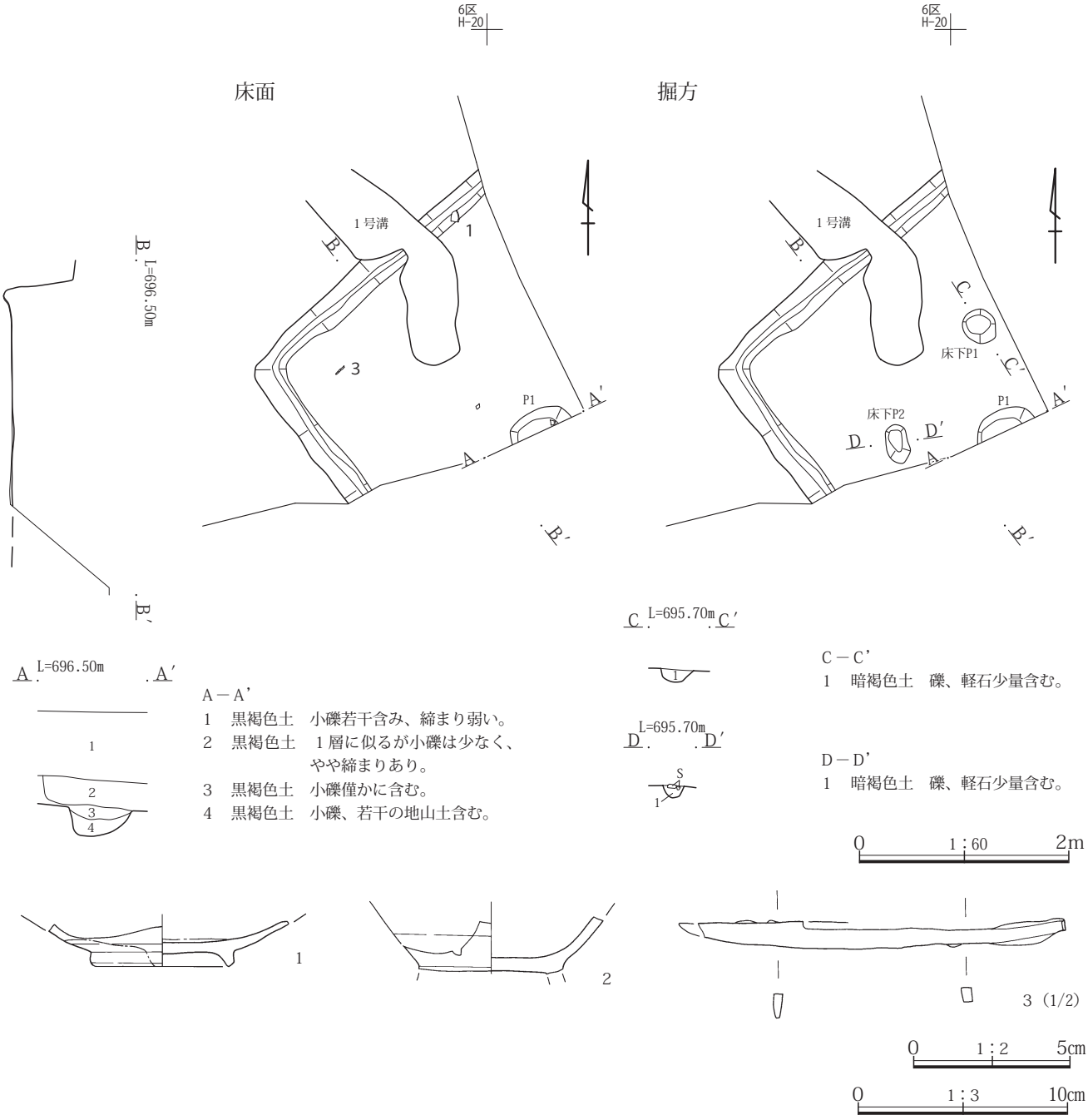
上層には水流で洗われた小礫混じりの砂質土が見られる。南側部分は、住居覆土近くにまで礫を含む層が落ち込んでいた。

床面・壁：北側の壁下には、1号溝に抉られたＶ字状の落ち込みが見られたが、その他の床面はほぼ平らで、比較的踏みしめられていた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認された部分では、幅15㎝、深さ約10㎝の周溝が廻っていた。明瞭な貼り床は確認されなかった。

その他：掘り方調査で、２基のピットを検出、柱穴とは考えられず、性格は不明である。

遺物：出土遺物は少なかった。北壁下に灰釉陶器椀、さらに床面近くに鉄製品(刀子)１点が床面より、およそ10㎝浮いた状態で出土している他、覆土中からも数点の土器片が出土している。

時期：出土した灰釉椀・須恵器椀・羽釜類から、10世前半の住居と考えられる。町教委が調査を行った一連の住居群の一つにあたるものと考えられる。



第54図　１号住居　平・断面図、出土遺物

表５　１号住居　遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第54図 PL.28	1	灰釉陶器 皿	底部片	底	6.8			細砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第54図 PL.28	2	須恵器 椀	底部片					細砂粒・粗砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形。高台は貼付。	
第54図 PL.28	3	鉄製品 刀子	一部欠	長 幅	(11.7) 0.9	厚 重	0.5 12.4		先端と刃部の一部を欠く。錆化が激しく、内部は空洞化。	

２．掘立柱建物

１号掘立柱建物(第55図)

調査時には確定できなかったが、調査区の南西部に掘り込まれたピットの並びから、掘立柱建物を想定した。

検出されたピットは４本で、東側列に３、西側は北西隅の１本である。

位置：調査区の南西よりに確認した。

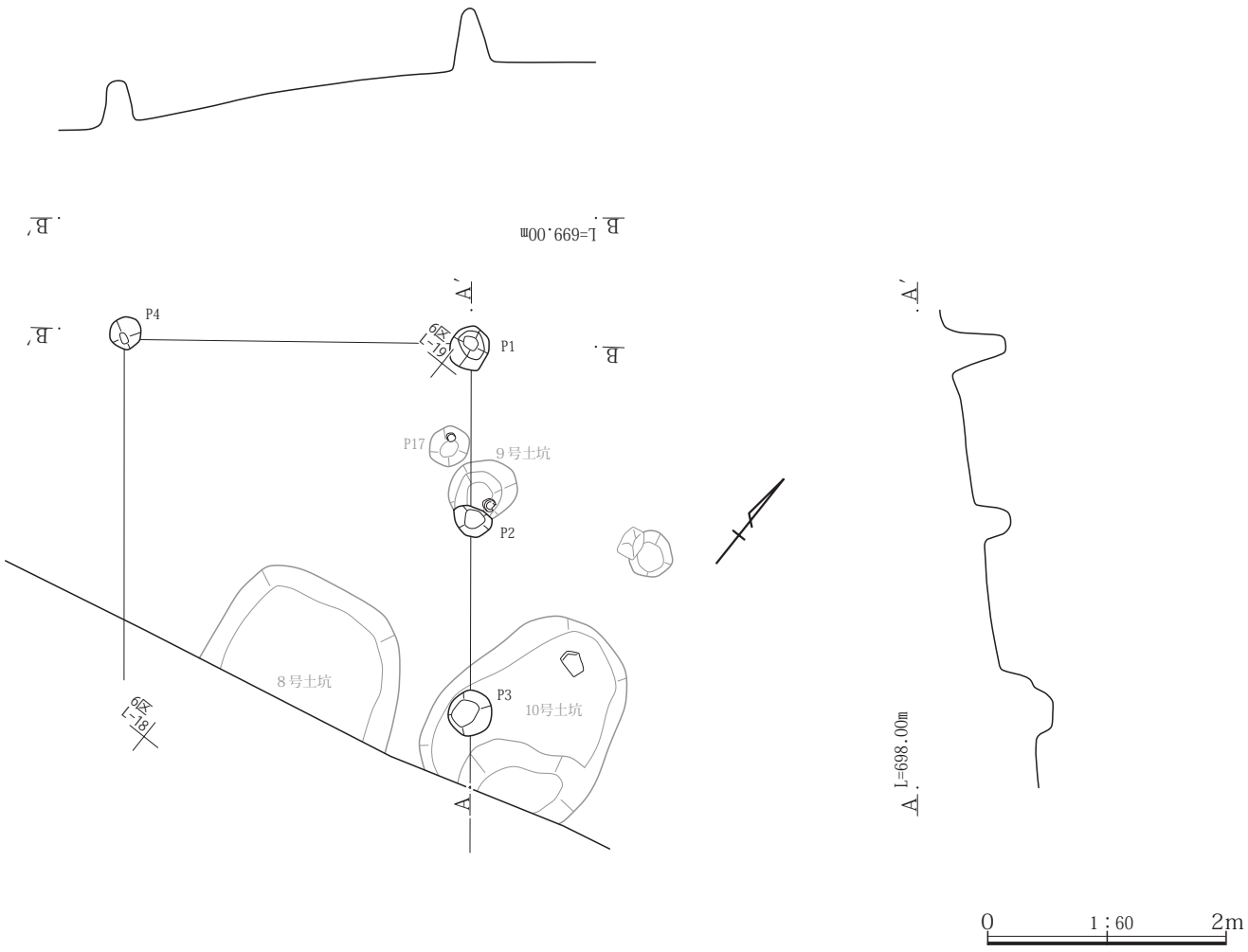
規模：１間×２(３)間と思われる。東西柱間1.9m、東側南北1.5、1.6mを計測。さらに南に延びているものと思われる。

主軸：N－39°－E

その他：確認面は南にやや傾斜を持つ、P1とP4は深さ約50cmと比較的深い掘り込みを持つ。P2・3は確認された深さは、それぞれ約20cm、10cmと比較的浅いが、掘り込み面はさらに上方であった可能性がある。

出土遺物：建物内に位置するP17、および重複する９号土坑中より、須恵器の椀と甕の底部片が出土しているが、本址に帰属するかは不明である。

時期：平安時代か。



第55図　１号掘立柱建物　平・断面図

３．土坑

総数10基を確認した、大きさや深さはまちまちで、時期も縄文～近世のものまでが混在すると考えられる。

ここでは、出土遺物、埋め土などから時期を特定できた土坑について記述する。

遺物が見られたのは、６号土坑および９号土坑で、それぞれ縄文時代後期の鉢の底部片、平安時代の甕の底部片が出土している。６号土坑は楕円形で幌込みは浅い、礫を伴っていた。９号土坑は１号掘立柱建物のP2と重複している。

土坑全体の分布をみると、南東部分にやや集中している様子が伺え、等高線に沿うように並ぶ傾向が指摘できる。

１号土坑　（第56図、PL.26）

位置：調査区の南東側に位置し、東側にはP1が位置する。

グリッド：６区Ｈ・Ｉ－18・19

形状：楕円形

規模：長軸1.10m、短軸0.80m、深さ0.22m

長軸方向：Ｎ－０°

その他：傾斜に対して、主軸を直交方向に持つ。

埋土は、黒褐色土で礫と地山のロームを僅かに含む。全体に軟質で、黒味がある。時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

２号土坑　（第56図、PL.26）

位置：調査区の北東側に位置し、１号溝と重複。

グリッド：６区Ｉ－20

形状：ほぼ東西方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸0.68m、短軸0.42m、深さ48㎝

長軸方向：Ｎ－80°－Ｗ

埋土は、小礫、ローム粒含み、軟質である。底面はやや丸みを有す。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

３号土坑　欠番。

４号土坑　（第56図、PL.26）

位置：調査区の南東側に位置し、東側に隣接して１号溝が走る。

グリッド：６区Ｈ－19

形状：上面は円形であるが、底面やや隅丸を呈す。

規模：長軸0.8m、深さ0.37m

長軸方向：－

埋土は、大型礫を混入する暗褐色土で、締まりを持った土塊を含む。底面は、平坦となる。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

５号土坑　（第56図、PL.27）

位置：調査区の南東壁に掛かり、北側半分を検出。

グリッド：６区Ｉ－18

形状：円形か、掘り込みは比較的深い。

規模：長軸(0.36m)、短軸0.76m、深さ0.74m

長軸方向：Ｎ－16°－Ｅ

埋土は、小礫、ローム粒を含み、やや軟質である。掘り込みは深く、底部は狭くなっている。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降と考えられる。

６号土坑　（第56図、PL.27・28）

位置：調査区の南西壁側に位置する。

グリッド：６区Ｊ－18

形状：楕円形を呈し、掘り込みは浅い。

規模：長軸1.20m、短軸0.80m、深さ0.28m

長軸方向：Ｎ－56°－Ｅ

埋土は、大型の地山角礫を混入、若干のローム粒、ロームブロックを含みやや軟質。覆土上部に縄文土器の底部片が検出されているが、覆土の状況などから、古代以降の土坑と考えられる。

７号土坑　（第57図、PL.27）

位置：調査区の北東壁に接して検出された。１号溝と重複する位置にあるが、切り合いは不明瞭である。

グリッド：６区Ｉ－20

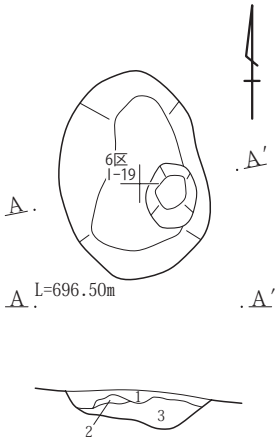
形状：楕円形で浅い掘り込みである。

規模：長軸0.84m、短軸0.76m、深さ0.23m

長軸方向：Ｎ－45°－Ｗ

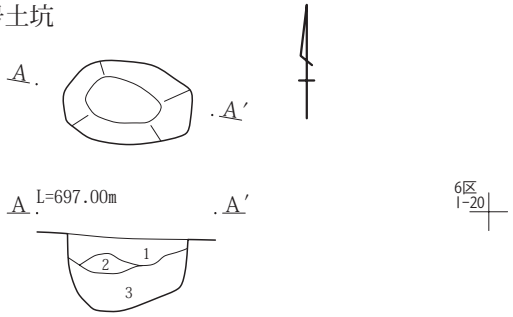
埋土は、若干の小礫、ローム粒含み、軟質である。掘り込みは浅く、鍋底状を呈す。時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

１号土坑



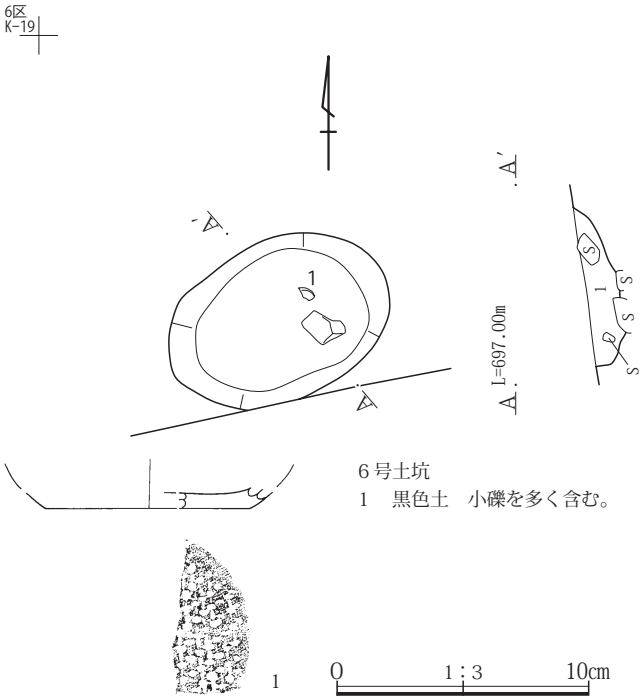
１号土坑
1　暗黒褐色土　締りやや弱く、白色・黄色軽石粒を僅かに含む。
2　暗黒褐色土　白色・黄色軽石粒を多く、炭化粒を僅かに含む。
3　暗黒褐色土　１層に比べ、締りさらに弱い。

２号土坑



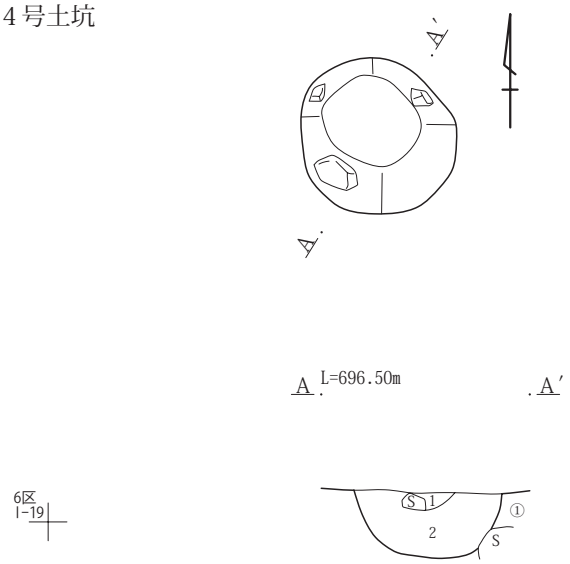
２号土坑
1　暗黒褐色土　締りやや弱く、白色･黄色軽石粒を僅かに含む。
2　暗黒褐色土　地山暗褐色ロームブロックを含む。
3　暗黒褐色土　１層に比べ締り弱く、軽石粒少ない。

６号土坑



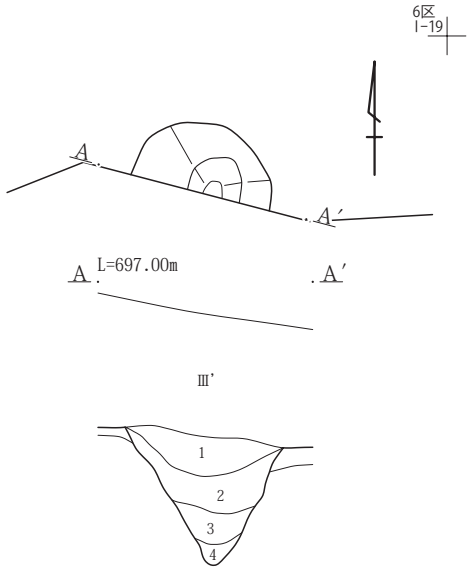
６号土坑
1　黒色土　小礫を多く含む。

４号土坑



４号土坑
1　暗黒褐色土　締りやや弱く、白色・黄色軽石粒を僅かに含む。
2　暗黒褐色土　締り強い。白色・黄色軽石をやや多く、礫を含む。

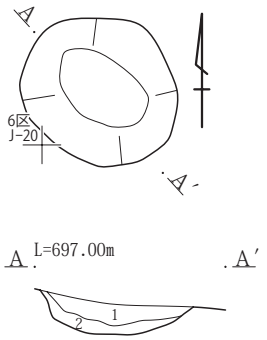
５号土坑



５号土坑
Ⅲ′暗褐色土　基本土層Ⅲと似るが、礫の混入少ない。
1　黒色土　小礫、ローム粒を含む。
2　黒色土　小礫を多く含む。
3　黒色土　小礫、ローム粒を多く含む。
4　黒色土　若干の小礫を含み、締まりあり。

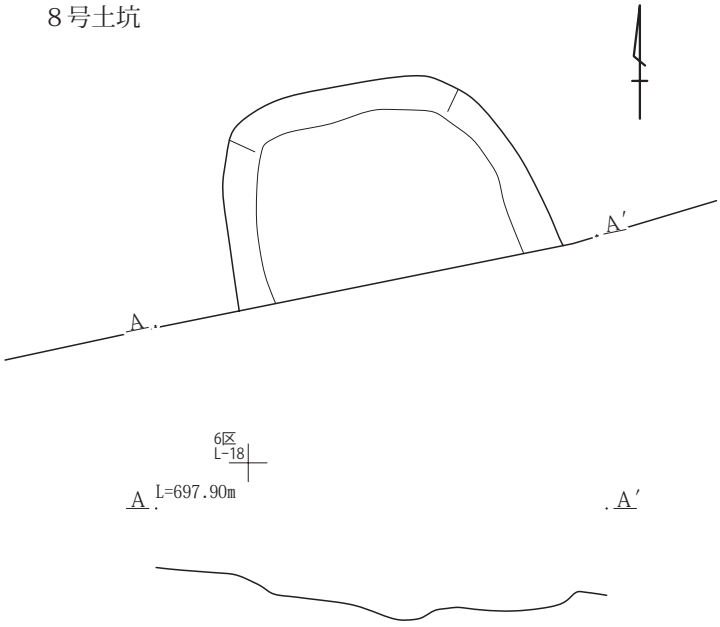
第56図　１・２・４～６号土坑　平・断面図、出土遺物

７号土坑

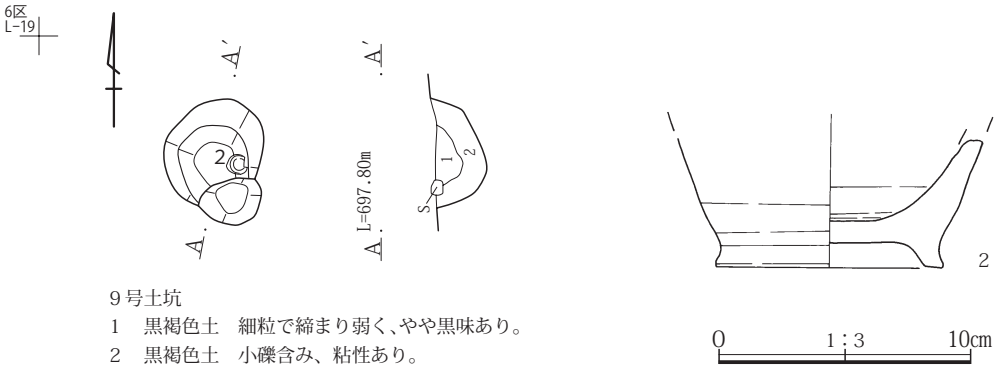


７号土坑
1　黒褐色土　細粒で締まり弱い。
2　黒褐色土　小礫含み締まり、粘性あり。

８号土坑

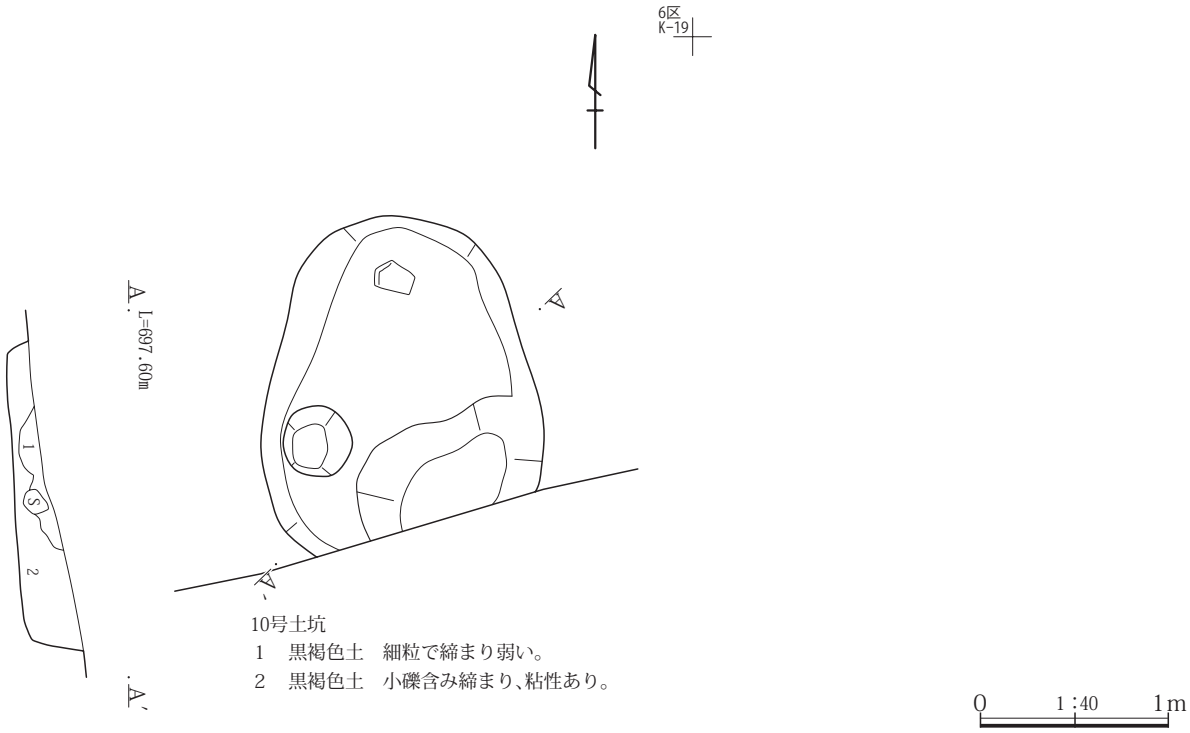


９号土坑



９号土坑
1　黒褐色土　細粒で締まり弱く、やや黒味あり。
2　黒褐色土　小礫含み、粘性あり。

10号土坑



10号土坑
1　黒褐色土　細粒で締まり弱い。
2　黒褐色土　小礫含み締まり、粘性あり。

第57図　７～10号土坑　平・断面図、出土遺物

８号土坑　（第57図、PL.27）

位置：調査区の南西壁に半分掛かった状態で確認された。東側に隣接して10号土坑が位置する。

グリッド：６区Ｋ－18

形状：南側が未調査であるが、隅丸の長方形か。

規模：長軸(1.04)m、短軸1.74m、深さ0.24m

長軸方向：Ｎ－33°－Ｗ

埋土は、黒味を有す黒褐色土で、小礫を含む。掘り込みは浅く、底はほぼ平坦である。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

９号土坑　（第57図、PL.27・28）

位置：調査区の南西寄りに位置、P18と重複する。

グリッド：６区Ｋ－18

形状：楕円形で底は丸みを呈す。

規模：長軸(0.60)m、短軸0.50m、深さ0.30m

長軸方向：Ｎ－０°

埋土は、地山角礫を含み、軟質、上層に須恵器の壺の底部片が出土している。重複するＰ18は１号掘立柱建物の柱穴と認定されており、関連があると思われる。平安時代か。

10号土坑　（第57図、PL.27）

位置：調査区の南西壁に一部が掛かる。西側に８号土坑が近接する。

グリッド：６区Ｋ－18

形状：楕円形で南側が僅かに広がる。

規模：長軸(1.90)m、短軸1.50m、深さ0.42m

長軸方向：Ｎ－０°

埋土は小礫、ローム粒を含み軟質、掘り込みはあまり深くなく、底面は平坦であるが、壁際は部分的に落ち込んでいる。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

表６　６・９号土坑　遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第56図 PL.28	1	弥生土器 壺か	６号土坑 底部片	底	(8.0)			細砂	底面に網代痕をもつ。	
第57図 PL.28	2	須恵器 壺か	９号土坑 底部片	底	(9.0)			細砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形。高台は貼付。	

４．溝

１号溝　（第58図、PL.27）

位置：調査区の北東寄りから南東隅に向かって走り、１号住居の一部を壊す。

グリッド：６区Ｈ・Ｉ－19・20

形状：調査区の北壁から南東隅に向かい、やや右に曲がる。

規模：検出長は約８ｍ、北壁付近では幅約60㎝、深さは10㎝であるが、1号住居の壁部分では幅70㎝、深さは50㎝で断面はＶ字状を呈す。長軸(1.90)m、短軸1.50m、深さ0.42m

底はかなり凹凸が有り、下層部分には水流で洗われた砂礫が多く見られた。この溝の上流および下流部分は町教委調査区内においても、断続的に検出されており、形状や覆土の状況から自然流路と判断される。平安時代の住居を壊していることから、平安時代後期以降から近世にかけての所産と考える。

２号溝　（第58図、PL.27）

位置：調査区の南西部に検出。

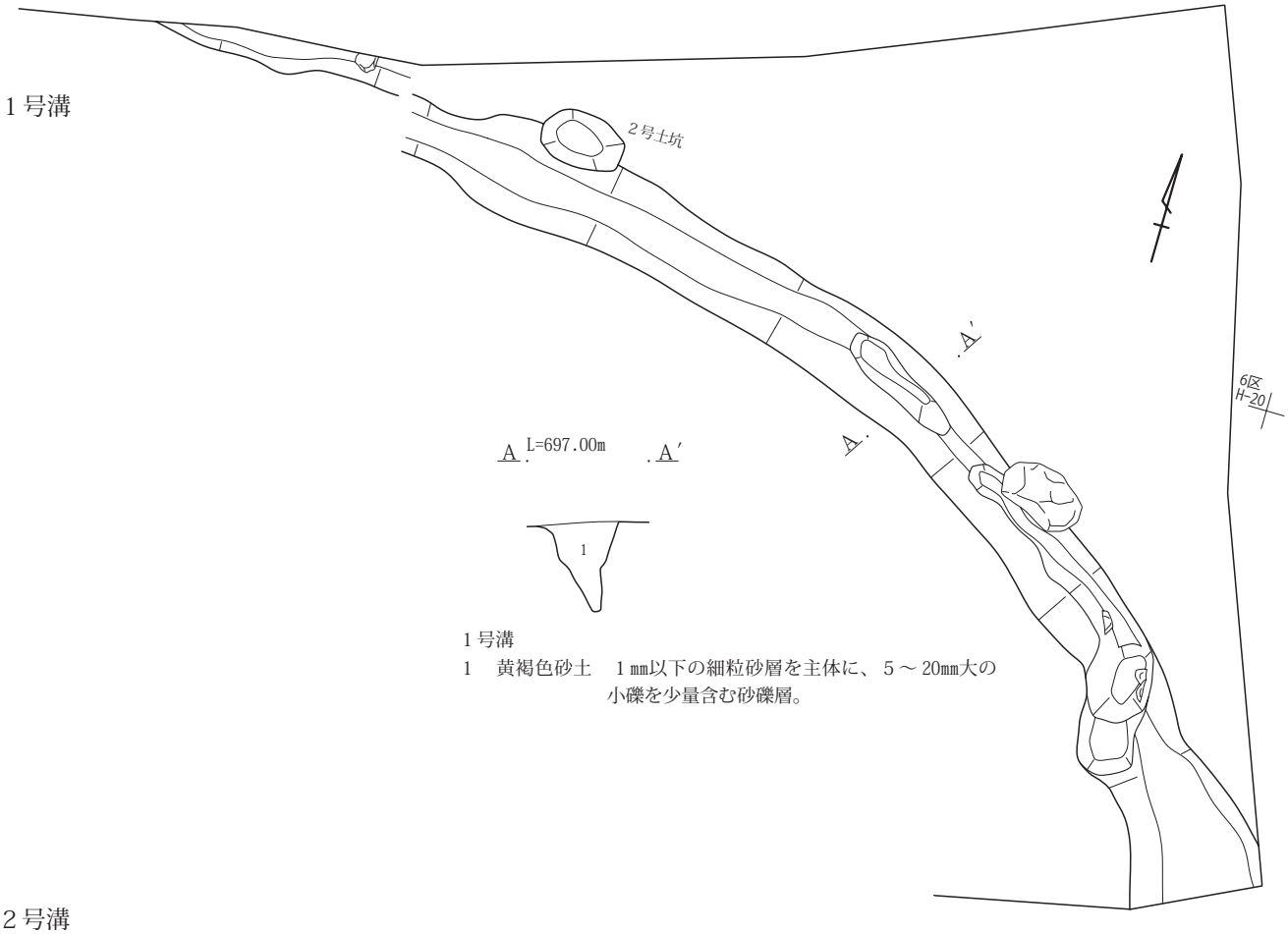
グリッド：６区Ｌ・Ｍ－18

形状：調査区の西壁から出て、南壁に向かって走る。

規模：検出長は６ｍ、幅は40～70㎝で、深さは約20㎝である。

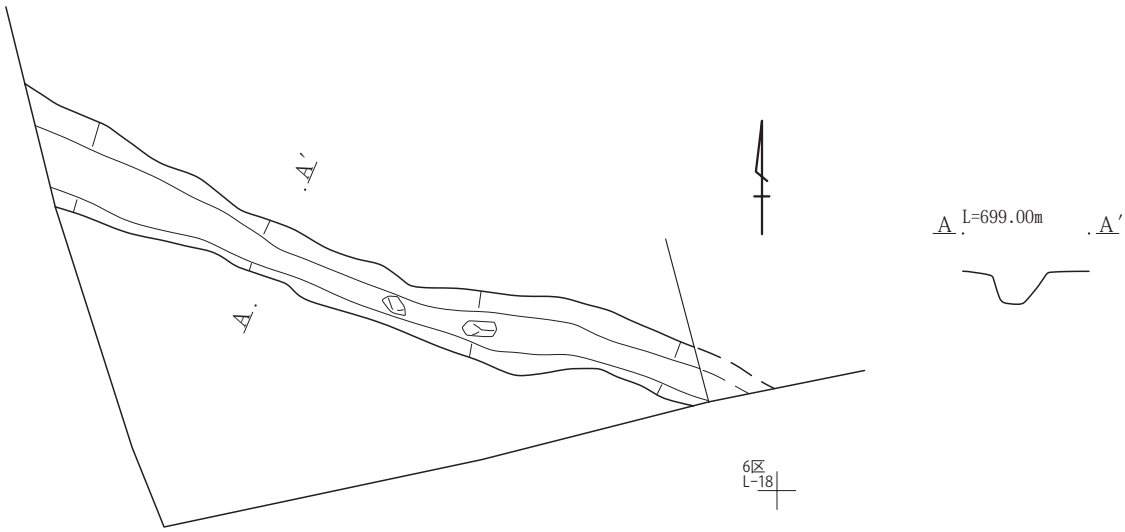
１号溝とほぼ並行して走るが、極めて部分的にしか確認できなかった。自然の流路と考えられるが、水の流れた痕跡ははっきりせず、時期も不明である。

１号溝



１号溝
1　黄褐色砂土　１㎜以下の細粒砂層を主体に、５～20㎜大の小礫を少量含む砂礫層。

２号溝



0　1：60　2m

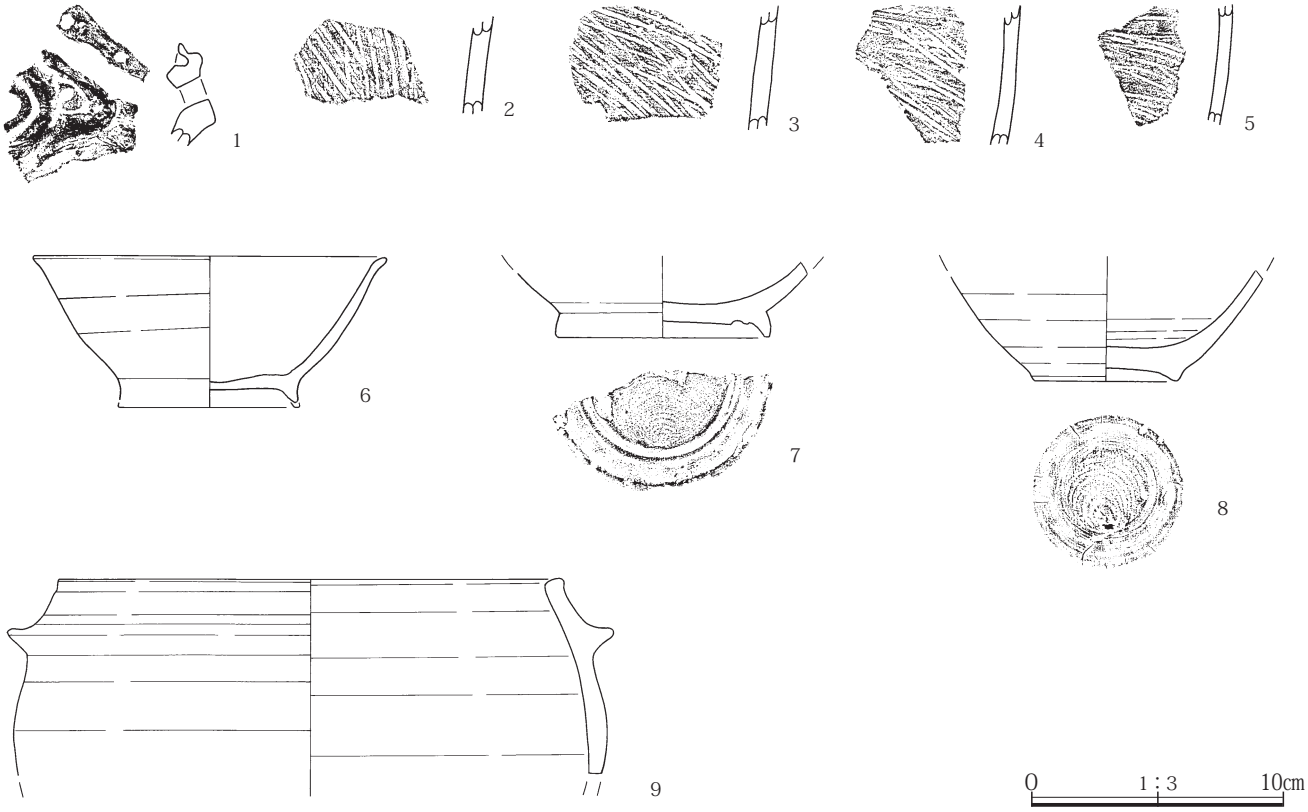
第58図　１・２号溝　平・断面図

５．遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は総点数10点程である。これらは、遺構確認時に検出されており、調査区中央から南東部に集中して検出されている。

平安時代の遺物は、羽釜片、須恵器椀類の比較的大きな破片が出土、いずれも10世紀代に比定されるものである。その他、縄文時代後期、弥生時代中期の土器片が検出されている。これらは、いずれも小破片で、弥生土器は同一個体片の可能性が高い。

縄文・弥生時代の遺構に関しては今回の調査では確認されていない。



第59図　遺構外出土遺物

表７　遺構外　遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第59図 PL.28	1	縄文土器 深鉢	J-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片					細砂	頸部が朝顔状に開き、口縁が僅かに直立する平口縁に、円形孔と刺突をもつ突起を有する。	縄文時代後期
第59図 PL.28	2	弥生土器 甕か	J-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部に斜位の条痕を施す。	弥生時代中期
第59図 PL.28	3	弥生土器 甕か	L-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					粗砂	胴部に斜位の条痕を施す。	弥生時代中期
第59図 PL.28	4	弥生土器 甕か	L-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部に斜位の条痕を施す。	弥生時代中期
第59図 PL.28	5	弥生土器 甕か	M-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 胴部片					細砂	胴部に斜位の条痕を施す。	弥生時代中期
第59図 PL.28	6	須恵器 椀	P-17ｸﾞﾘｯﾄﾞ 1/4	口	(14.0)	高	(5.6)	細砂粒・粗砂粒/還元煙/灰白色	器面の剥落が著しい。ロクロ整形、高台は貼付。	
第59図 PL.28	7	須恵器 椀	J-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 体～底部片	底	(8.5)			細砂粒/還元煙/灰色	ロクロ整形。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第59図 PL.28	8	須恵器 椀	K-18ｸﾞﾘｯﾄﾞ 体～底部	底	5.8			細砂粒/還元煙/暗灰色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第59図 PL.28	9	須恵器 羽釜	I-19ｸﾞﾘｯﾄﾞ 口縁部片	口	(20.0)			粗砂粒・小礫/還元煙/灰色	ロクロ整形か。口縁～鍔部下まで横ナデ。内面横ナデ。	

表８　遺構一覧表

１号住居

遺構名	位置	平面形状	規模(m)				長軸方位	炉	カマド				重複関係	時期/備考
	(グリッド)		長軸	短軸	深さ	床面積			位置/方位/規模(m)				(古→新)	
１号住居	６区Ｇ・Ｈ－18・19	－	－	(2.42)	0.66	4.86	－	－	位置	－	方位	－		１号溝が入り込んでいる
									長さ	－	幅	－		
ピット１	６区Ｇ－19	－	－	－	0.28	－	－							
床下ピット１	６区Ｇ－19	楕円形	0.34	0.30	0.13	－	Ｎ－21°－Ｗ							
床下ピット２	６区Ｈ－18・19	楕円形	0.37	0.20	0.13	－	Ｎ－18°－Ｗ							

１号掘立柱建物跡

遺構名	位置	平面形状	規模(m)					桁行方位	重複関係	時期	備考
	(グリッド)		桁行	梁行	床面積	柱間距離			(古→新)		
１号掘立	６区Ｉ・Ｌ－18・19	－	２間	１間	9.03	桁行	1.5～1.6	Ｎ－38°－Ｗ			
			3.1	2.9		梁行	2.9				

溝

遺構名	位置	規模(m)				走向方向	重複遺構/交差溝	所属時期/備考
	(グリッド)	長さ	上面幅	底面幅	深さ			
１号溝	６区Ｇ－18・19、Ｈ－19、Ｉ－19・20	9.36	0.80	0.34	エレベから0.74、①0.13、②0.15、③0.29、④0.51、⑤0.56、⑥0.90、⑦0.14	北西→南東	２号土坑	
２号溝	６区Ｌ・Ｍ－18	5.86	0.76	0.40	①0.34、②0.25、③0.27、④0.29	西→東		

土坑

遺構名	位置	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
	(グリッド)		長軸(径)	短軸	深さ			
１号土坑	６区Ｈ・Ｉ－18・19	楕円形	1.10	0.80	0.22	Ｎ－０°		
２号土坑	６区Ｉ－20	楕円形	0.68	0.42	0.48	Ｎ－80°－Ｗ	１号溝	
３号土坑	欠番							
４号土坑	６区Ｈ－19	円形	0.8	－	0.37	－		
５号土坑	６区Ｉ－18	－	(0.36)	0.75	0.74	Ｎ－16°－Ｅ		
６号土坑	６区Ｊ－18	楕円形	1.20	0.80	0.28	Ｎ－56°－Ｅ		
７号土坑	６区Ｉ－19・20	楕円形	0.84	0.76	0.23	Ｎ－45°－Ｗ		
８号土坑	６区Ｋ・Ｌ－18	－	(1.04)	1.74	0.24	Ｎ－33°－Ｗ		
９号土坑	６区Ｋ－18	ほぼ楕円形	(0.60)	0.50	0.30	Ｎ－０°	18号ピット	
10号土坑	６区Ｋ－18	ほぼ楕円形	(1.90)	1.50	0.42	Ｎ－０°	20号ピット	

ピット

遺構名	位置	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
	(グリッド)		長軸(径)	短軸	深さ			
１号ピット	６区Ｈ－19	楕円形	0.54	0.42	0.28	Ｎ－27°－Ｗ		
２号ピット	６区Ｉ－20	円形	0.38	－	0.36	－		
３号ピット	欠番							
４号ピット	６区Ｈ－20	円形	0.44	－	0.25	－		
５号ピット	欠番							
６号ピット	６区Ｈ－20	円形	0.40	－	0.23	－		
７号ピット	６区Ｉ－19	楕円形	0.48	0.44	0.25	Ｎ－40°－Ｗ		
８号ピット	６区Ｈ－19	楕円形	0.36	0.28	0.42	Ｎ－24°－Ｅ		
９号ピット	６区Ｈ－19	楕円形	0.52	0.46	0.28	Ｎ－12°－Ｅ		
10号ピット	欠番							
11号ピット	欠番							
12号ピット	６区Ｊ－19	楕円形	0.66	0.30	0.20	Ｎ－61°－Ｗ		
13号ピット	６区Ｊ－19	円形	0.30	－	0.12	－		
14号ピット	６区Ｉ－19	楕円形	0.48	0.36	0.15	Ｎ－84°－Ｅ		
15号ピット	６区Ｌ－19	円形	0.42	－	0.47	－		
16号ピット	６区Ｋ・Ｌ－19	楕円形	0.36	0.32	0.52	Ｎ－40°－Ｗ		１号掘立柱建物(P1)
17号ピット	６区Ｋ－18	円形	0.34	－	0.26	－		
18号ピット	６区Ｋ－18	不整形	0.32	0.30	0.24	Ｎ－64°－Ｗ	９号土坑	１号掘立柱建物(P2)
19号ピット	６区Ｋ－18	円形	0.40	－	0.20	－		
20号ピット	６区Ｋ－18	円形	0.36	－	0.15	－	10号土坑	１号掘立柱建物(P3)
21号ピット	６区Ｌ－18	円形	0.28	－	0.44	－		１号掘立柱建物(P4)

第５節　調査の成果(総括)

本遺跡は、八ッ場ダム建設工事に関連する町道建設を原因として発掘調査が行われた。

発掘調査は周辺の調査で取り残された形の調査区となり、残土置き場の問題など調査工程上、東と西側の２つの調査区を打って返しで行われた。調査面積は317㎡である。遺構は、平安時代の竪穴住居１軒、掘立柱建物１棟、土坑10基、ピット17基、溝２条である。

調査区の南東隅に置いて、検出された平安時代の住居は、出土遺物は少なかったが、全体の約４分の１を調査、灰釉陶器、須恵器の椀および鉄製品(刀子)１点が出土している。周辺の調査により確認されている例からすると、東壁側にカマドをもつ住居であろうと推定される。

時期は、灰釉陶器の年代観から10世紀前半と考えられる。

検出した２条の溝は調査区を斜めに横切る形で走る、町教委で調査が行われた両側において、この溝の続きと考えられるものが、確認されている。これを含めると１号溝は全長約80mの長さとなる。谷筋に沿うように走っており、形状や堆積物の様子などから、大雨等により、かなり短期間に形成されたものと判断される。下層より天目茶碗片が出土しており、中世あるいは近世にまで下る可能性がある。

掘立柱建物は棟方向を南東に持つ建物が想定されるが、かなりの傾斜地にあることや、検出された柱穴の数が少ないことから、不確定な部分もある。

今回の調査範囲は上原Ⅲ遺跡の中では極めて、狭い範囲であり、遺跡の性格を考えるには、町教委の調査結果と併せて考えて行きたい。

平成23年度に、今回調査を行った上原Ⅲ遺跡の周囲において、土地改良事業に伴う発掘調査が町教委により実施されている。

調査成果は平成26年度に刊行(注)されており、確認された遺構の内容は以下のようである。

弥生時代の土坑１基。平安時代の鍛冶工房１軒、竪穴住居13軒、竪穴状遺構１基、焼土遺構６カ所、陥し穴29基、土坑11基。近世の流路５条、土坑墓１基、時期不明土坑116基、ピット154基である。

遺物は各遺構に伴うものの他、遺構外出土の土器、石器が検出されている。

遺跡は南東に向かって傾斜する地形で、住居の分布を見ても、最も高い位置につくられたものと、低い位置に作られた住居との比高差は約15mを示す。

遺構は調査区の西側に集中して見られ、住居および土坑等も集中している。

今回の調査で検出された住居は、そうした住居群の一つと位置付けられる。

町教委で調査した住居の時期は、いずれも10世紀前半頃と考えられており、今回調査された住居も、出土した灰釉碗の時期から同時期と判断される。

鍛冶遺構と考えられる、SI－12は多量の羽口、鉄滓と伴に砂鉄も確認されており、比較的規模の大きな鍛冶関連の生産活動を行っていたことが想定される。

長野原地区内では、平安時代の集落が近年の調査でしだいに明らかになってきており、その数も増えている。特に比較的山間地域でその数は目立っているように思える。これらの集落の生業や生産活動について、資料の増加からしだいに解明が行われてきており、今後より詳細な検討が加えられることにより、明らかになるものと考える。

(注)長野原町埋蔵文化財調査報告第30集「林地区遺跡群」
　　長野原町教育委員会　　2015

第60図　上原Ⅲ遺跡　遺構分布全体図(合成図)

第４章　林宮原遺跡

第１節　調査に至る経緯と経過

第１項　調査に至る経緯

林宮原遺跡は、八ッ場ダム建設工事に係わる町道建設に伴う発掘調査である。林宮原遺跡が立地する長野原町林地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、発掘調査が各遺跡で行われている。林宮原遺跡も、当事業団調査は本調査が最初となったが、既に町教委で数度の調査が行われ、平安時代集落が検出された他、長野原町では極めて珍しい古墳時代（５世紀末～６世紀初頭）の住居を調査している。このような遺跡の内容を踏まえ、遺跡を東西に横断する町道建設計画に伴い、平成22・23年、林宮原遺跡の試掘調査が群馬県教育委員会によって行われた。

試掘調査の結果、林宮原遺跡西端にあたる地区で、複数の土坑や柱穴が確認され、平成24年４月より当事業団による発掘調査が着手された。

第２項　調査の経過

当初、林宮原遺跡の調査範囲は西側斜面を中心とした420㎡であった。そのため、調査期間は短く５月には、県道建設に伴う町遺跡発掘調査に調査班は移動した。しかしながら、本遺跡東側には樹木の繁茂が著しく、県教委による試掘調査が及ばなかった用地があり、ここを５月に県教委が試掘調査を行った。その結果、本遺跡の当初調査で得られた掘立柱建物と同様の柱穴が確認されたため、調査班は町遺跡の調査を中断し、再度６月より、林宮原遺跡東側の発掘調査を着手した。

東側の調査区は430㎡であり、調査を進めた結果、西側調査区で得られた掘立柱建物と軸をほぼ同じにした掘立柱建物群が調査された。

以上のような調査経緯のため、結果的に調査は、東側と西側に２分割した行程となり、当初調査区は西側で、後に東側の調査区を調査した。

西側調査区中央でピットが群在して検出され、東西に長軸を持つ掘立柱建物群として捉えられた。その他に土坑数基の調査を行った。東側調査区でもピット群の調査となったが、西側調査区に比してやや密度は低く、東側にかけて、掘立柱建物群を見ることができた。

第２節　調査の方法

第１項　発掘調査の方法

八ッ場ダム関連の発掘調査における統一した調査方法は第１章で触れているため省略し、ここでは林宮原遺跡の調査方法を述べる。

林宮原遺跡の発掘調査は、人力による表土掘削による意向確認面の把握と大型重機（バックホー）による表土除去を平行し、西側調査区より着手した。東側調査区着手の際にも同様で、遺構確認面を把握しながら重機による表土除去を行った。

表土・黒褐色土の堆積は北側と東西に厚く１m近くの層厚を見るが、調査区中央から南側にかけては約20㎝前後の厚さであった。遺構確認面は、表土下の黒褐色土の堆積状況を観察しつつ、下位に堆積するローム漸移層で遺構平面形の把握を行った。

表土除去後、作業員による遺構確認、個別遺構の調査は、ジョレン・移植ごてなどの道具を使用した。

調査で得られた各遺構名は中グリッドにこだわらず通番とした。遺構は埋没土層の記録化のため半截調査あるいはベルトを設定して、写真・土層図の記録をとった。平面図・断面図の縮尺は1/20とし、測量は業者委託し、デジタル測量を施している。

本遺跡の主な遺構は掘立柱建物であることから、柱穴配置と建物確定が重要な作業となった。配置の目安として直線状に並ぶピットを優先し、そのピット列と平行するピット列を把握し建物を検出した。併せてピット土層の観察と記録も果たし、柱痕のあるピットを柱穴の目安とした。

なお、前章に述べたように、西側調査区終了後、半月後に東側調査区の調査着手に至るのであるが、西側調査区は、安全対策のため各遺構は既に埋め戻しており、両調査区を併せた全景写真撮影は果たせなかった。

第３節　遺跡の立地と基本土層

第１項　遺跡の立地

林宮原遺跡は、長野原町大字林に所在し、吾妻川左岸に位置する。吾妻川が形成した河岸段丘面のうち最上位段丘面にあたり、周辺は緩やかな南側への緩傾斜地形が広がる。南側端部の上位段丘面との境は、段丘崖で画され、上位段丘面と最上位段丘面との境界は明瞭に分別される。しかしながら、林地区の最上位段丘面上位は王城山(1,232m)南斜面裾部と一体化しており、前章で扱った上原Ⅲ遺跡周辺は扇状地形の扇央部及び扇端部に近い地形に位置するように、最上位段丘面は山地斜面地形上の延長にある緩斜面地形を保つ段丘面である。

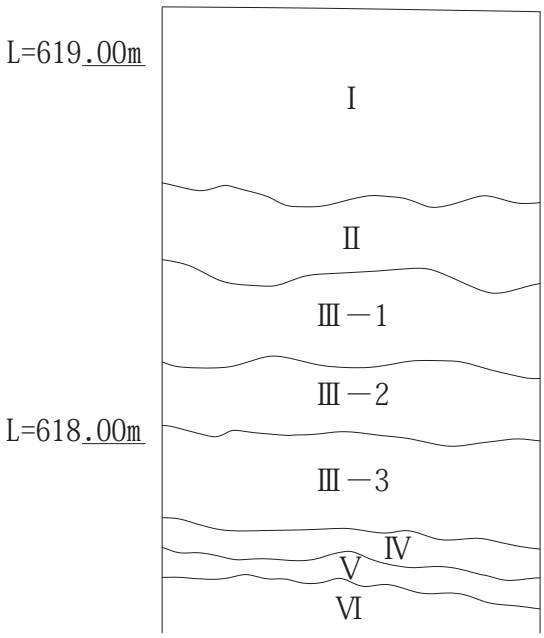
この段丘面の西端から中央にかけて位置する林宮原遺跡ではあるが、調査区の北側には、王城山神社があり山地斜面が迫る。南側の段丘崖までは約１kmの距離で、幅狭の緩斜面地形に位置する。また、林地区の最上位段丘面には幾筋かの小河川が南流するが、林宮原遺跡の西側を画す室沢や東接する林中原Ⅰ遺跡との境には押手沢がある。また、埋没谷も存在しており、調査区の西端にも狭小な低地地形を確認した。さらに東側にかけても傾斜しており、おそらく埋没谷が存在するものと思われる。これら小河川、埋没谷に画された台地状地形は、洪積台地であり本遺跡調査でもローム層が確認されている。

第２項　基本土層

本遺跡の基本土層は高標高部分と低地部分など３箇所で観察した。ここでは、東側調査区北側壁の黒色土・黒褐色土の層厚が良好な地点を選んで掲載する。

Ⅰ・Ⅱ層は表土および軟質な黒褐色土で木根の影響も多く、近世～現代層にあたろう。Ⅲ層は古代～中世の遺構・遺物が検出される層位と考えている。このうちⅢ－２層に青灰色粒子を見たが、浅間粕川テフラ(As-Kk)の可能性もある。As-Kkは当地域の平安時代住居上層に堆積する例が見られ、町教委が調査した林宮原遺跡Ⅷの SI02でも良好な堆積が認められている。Ⅲ－３層は調査区全域を覆うが､遺構確認面としては不安定要素があり、重機掘削はⅢ－3層中で止め、その後は人力でⅣ層上面まで掘り下げる調査行程をとった。

このように、林宮原遺跡の層位は黒色土や黒褐色土の堆積が厚く観察される箇所があり、遺構確認には慎重な観察が必要とされよう。



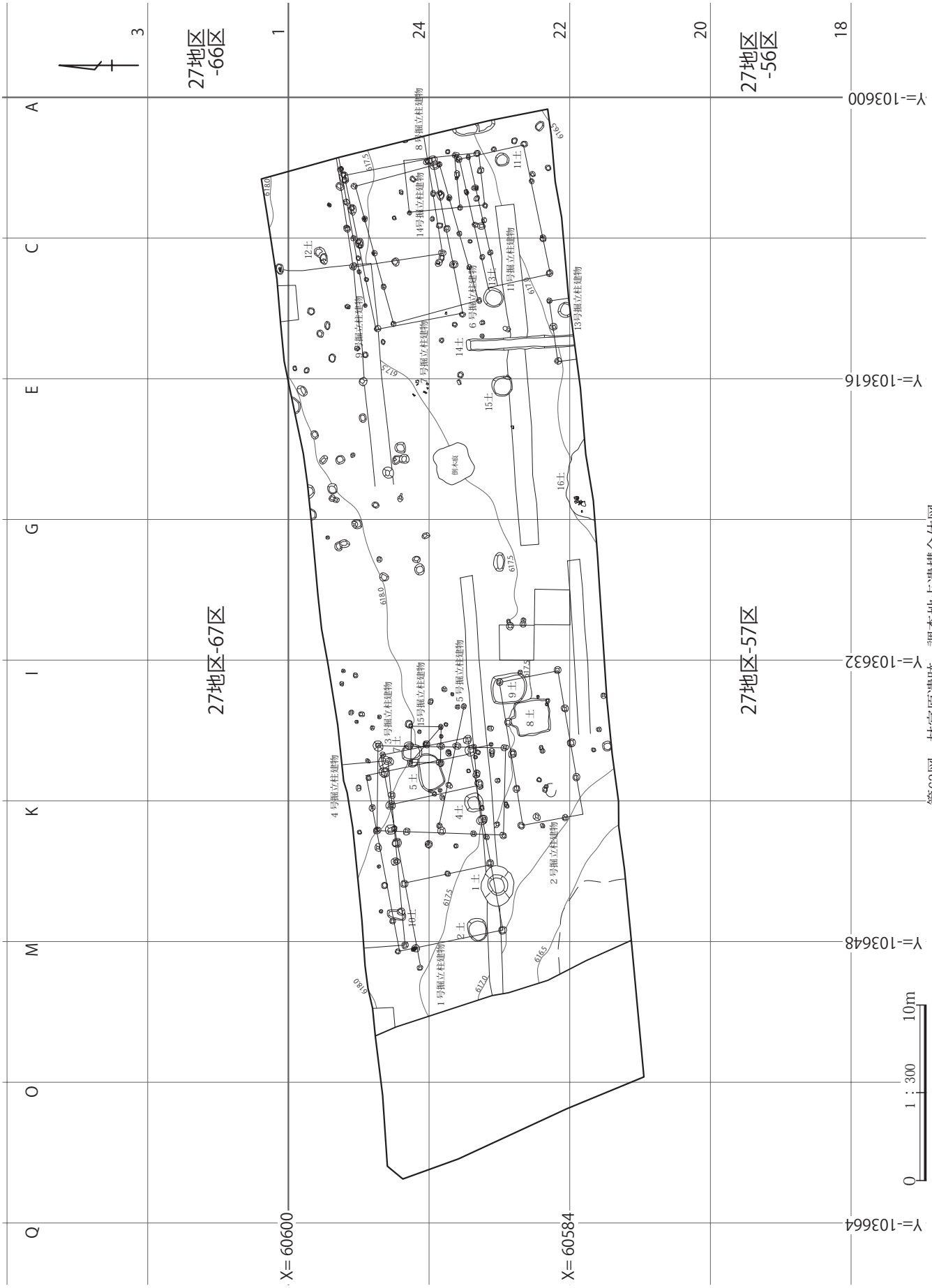
67-D1 北壁土層

Ⅰ	黒褐色土	表土。しまり弱く、木の根の影響大きい。
Ⅱ	黒色土	赤色粒子・白色粒子を散在する。しまり弱い。
Ⅲ-1	黒褐色土	赤色粒子・白色粒子を多く含む。青灰色粒子を微量含む。
Ⅲ-2	黒色土	赤色粒子・白色粒子を極めて多く含む。
Ⅲ-3	黒色土	赤色粒子・白色粒子を少量、ローム小塊を微量含む。
Ⅳ	黒褐色土	As-YPk・ローム小塊を含む。
Ⅴ	暗褐色土	ローム塊を多く含む。ローム層漸移層。
Ⅵ	黄褐色土	ローム層。

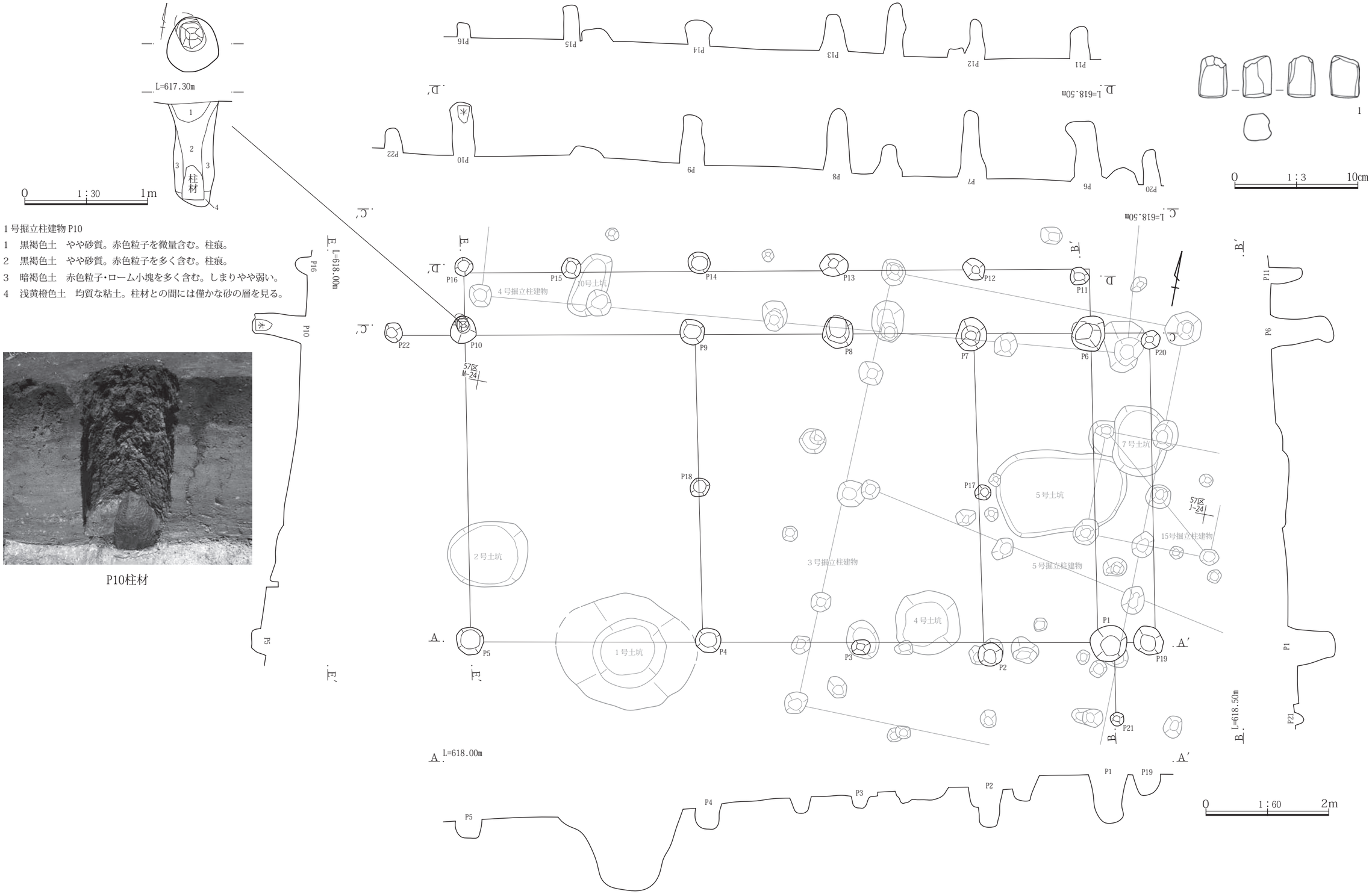
1:20

第61図　林宮原遺跡　基本土層

第62図　林宮原遺跡　調査範囲・周辺地形図



第63図　林宮原遺跡　調査地点遺構全体図



1号掘立柱建物 P10

1　黒褐色土　やや砂質。赤色粒子を微量含む。柱痕。

2　黒褐色土　やや砂質。赤色粒子を多く含む。柱痕。

3　暗褐色土　赤色粒子・ローム小塊を多く含む。しまりやや弱い。

4　浅黄橙色土　均質な粘土。柱材との間には僅かな砂の層を見る。

P10柱材

第64図　1号掘立柱建物　平・断面図、出土遺物

第４節　検出された遺構と遺物

第１項　概要

林宮原遺跡は掘立柱建物を調査した遺跡である。13棟の建物群を検出し、調査区の東西に分かれて、２群からなる分布状況を示す。ここでは、西群と東群と分けて述べていきたい。

西群の掘立柱建物群は、１～５号掘立柱建物と15号掘立柱建物の６棟をまとめた。一方東群とした建物群は９棟を数える。６～９号、11号、13号、14号掘立柱建物７棟が相当する。なお、整理作業において、柱穴配置を検討し10号、12号掘立柱建物を欠番とし、新たに14号と15号掘立柱建物を加えている。

両群の建物群とも、台地頂部には設けず、やや緩やかな斜面地形に占地する傾向がある。重複することからある程度の時間幅が想定できるが、柱穴内の数少ない出土遺物から、中近世を比定しておく。なお、発掘調査では掘立柱建物を構成する柱穴も全てピットとして、通番の中に含んで記録した。本書では調査で使用したピット番号ではなく、掘立柱建物に属するP1・P2・・・と命名して報告する。各柱穴の規模は表９の遺構一覧表を参照していただきたい。

土坑は14基を報告する。陥穴状土坑あるいは墓壙もあるが密度は希薄で散漫な分布を示す。時期は掘立柱建物と同様に中近世、一部は近代に比定されよう。

第２項　遺構と遺物

１．掘立柱建物

13棟の掘立柱建物を報告する。前述のようにローム台地の西斜面と東斜面にそれぞれ重複状態で検出されている。仮に西群と東群とするが、両群とも顕著な敷地造成面の痕跡や区画溝を見出せなかった。これは、遺構確認面をⅣ層であるローム漸移層に下げたため、造成面を明瞭に把握できなかったためで、造成面・区画溝の有無は判断を控えたい。ただ、両地点とも南側にはロームが露出する箇所が見られ、建物設営に伴う削平があった可能性も示唆する。また石垣等の施設も確認できなかった。存在するとすれば、北側の未調査区に予想されるが、石垣を付帯しない例も念頭におきたい。

１号掘立柱建物（第64図・PL.31・34）

西斜面で検出された。調査区内で最大規模を示す建物である。

位置：57区Ｊ～Ｋ－22～24　西側斜面を占める様相検出された。西端は低地部に面し、東端は台地頂部にかかる。その比高差は２m近くあり、斜面地形を跨ぐ設営と捉えられる。

重複：３～５・15号掘立柱建物、１・２・４・５・７号土坑が重なる。掘立柱建物柱穴との重複はP1が３号掘立柱建物P4と切り合うが、土層軸が通っておらず不明である。また、４号掘立柱建物南東隅の柱穴とP6・P20が重なるが、重複範囲が狭小で明瞭な新旧ではない。土層の観察では、４号掘立柱建物を切る新旧関係を得ている。

規模：５間×２間（10.0×6.3m）　横長の長方形を呈す東西棟で北側に庇を確認できた。

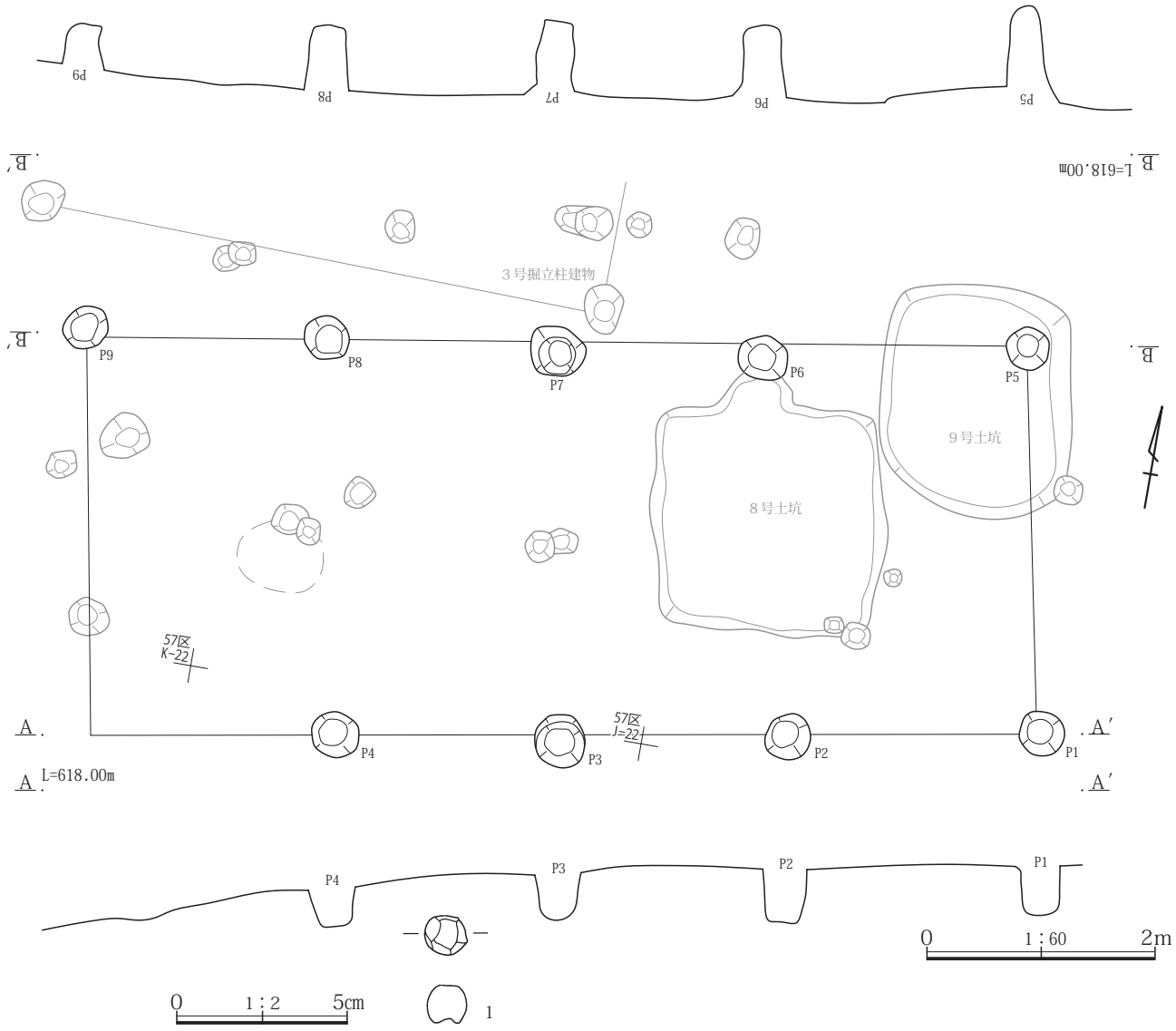
主軸方位：Ｎ－80°－Ｅ　南接する２号掘立柱建物とほぼ平行する。

施設：北側にP11～16が長軸上に並び、庇・軒に関わる柱穴と見た。東側にP19・20が短軸上に平行するが、張り出し部であろうか。またP21が南側に、P22が西側に突出するが、これも庇・張り出し等の施設の存在が予想される。

柱穴：P1～P22が相当する。このうちP1～P10・P17・P18が身舎と思われる。北辺と南辺の柱穴配置も統一的で整った印象を得る。北辺のP6～P10は平面形・深さ伴に統一性が窺えるが、南辺のP1～P5のうちP3～P5は極めて浅い。これは確認面の高さに起因しており、おそらく生活面を上層に想定すれば、北辺との規格は近くなる。なお、P10底面からは柱材が残存した状態で出土している。柱材は下端が平坦で上端は朽ちたためか尖る。樹皮はなく、若干の整形痕跡がある。柱材の下位～下端には粘土が埋められており、おそらく礎石と同様の効果を意図した例と考えられた。他の柱穴には柱材は遺存しておらず、P10周辺の湧水による残存と見る事ができよう。柱材は残っていなかったが、柱痕は残存度の良好な北辺柱穴を中心に観察された。柱間距離は、桁行が1.9～2.4m、梁行は1.1～2.7mである。

遺物：柱穴からの出土として、P17より小型の砥石が出土している。

時期：時期を特定する遺物の出土を見ないため、中近世



第65図　２号掘立柱建物　平・断面図、出土遺物

の所産としたい。

２号掘立柱建物（第65図・PL.31・34）

位置：57区Ｉ～Ｋ－21～23　１号掘立柱建物の南に近接する。

重複：８号土坑、９号土坑が重なる。P5とP6と切り合い８号土坑がP6を切る土層観察を得ている。

規模：４間×１間（8.3×3.4m）　横長の長方形を呈す東西棟である。

施設：炉及び庇などの施設は見ない。

主軸方位：Ｎ－81°－Ｅ　１号掘立柱建物とほぼ軸を同じにする。

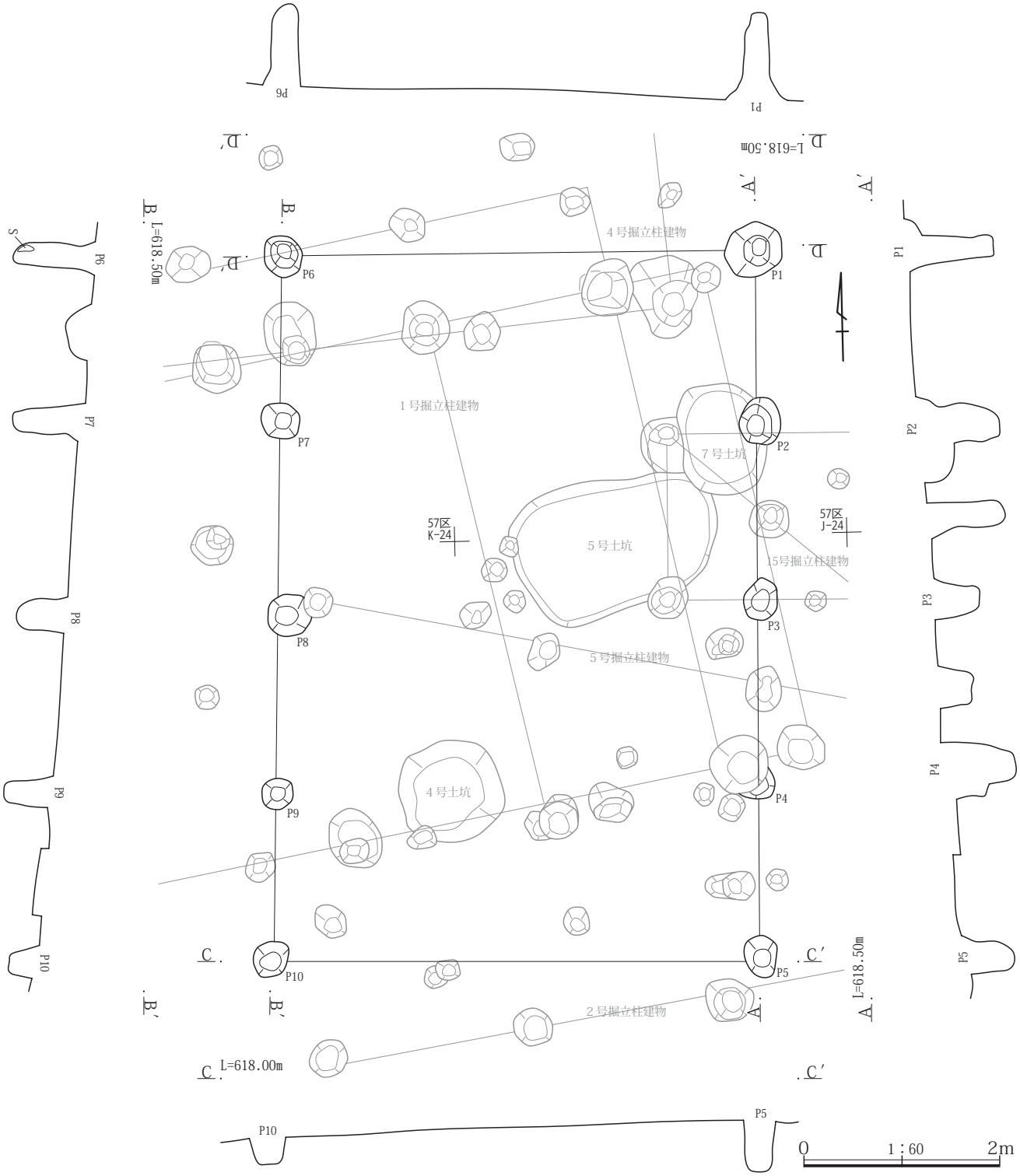
柱穴：９基の柱穴からなる。南西隅に相当する柱穴は検出できなかった。急傾斜地形が始まる箇所で、逸失したものと考えた。その他の柱穴は北辺、南辺ともにほぼ等間隔に配された整然とした配置を示す。柱間距離は桁行が1.8～2.3m、梁行は3.4mを測る。柱痕はP1・P2・P4・P8・P9に見られた。その他の柱穴も土層軸の設定がずれたため観察できなかったもので、おそらく柱痕は存在していたと思われる。

遺物：P6より鉄砲玉の出土をみている。

時期：１号掘立柱建物と軸を同じにし、相互に重複もしていないことから、同時期と捉えられるだろう。中近世とした。

３号掘立柱建物（第66図・PL.31）

位置：57区Ｊ・Ｋ－22～24　西群の東側で検出した。西側と南側への傾斜が始まる変換点に位置する。



第66図　３号掘立柱建物　平・断面図

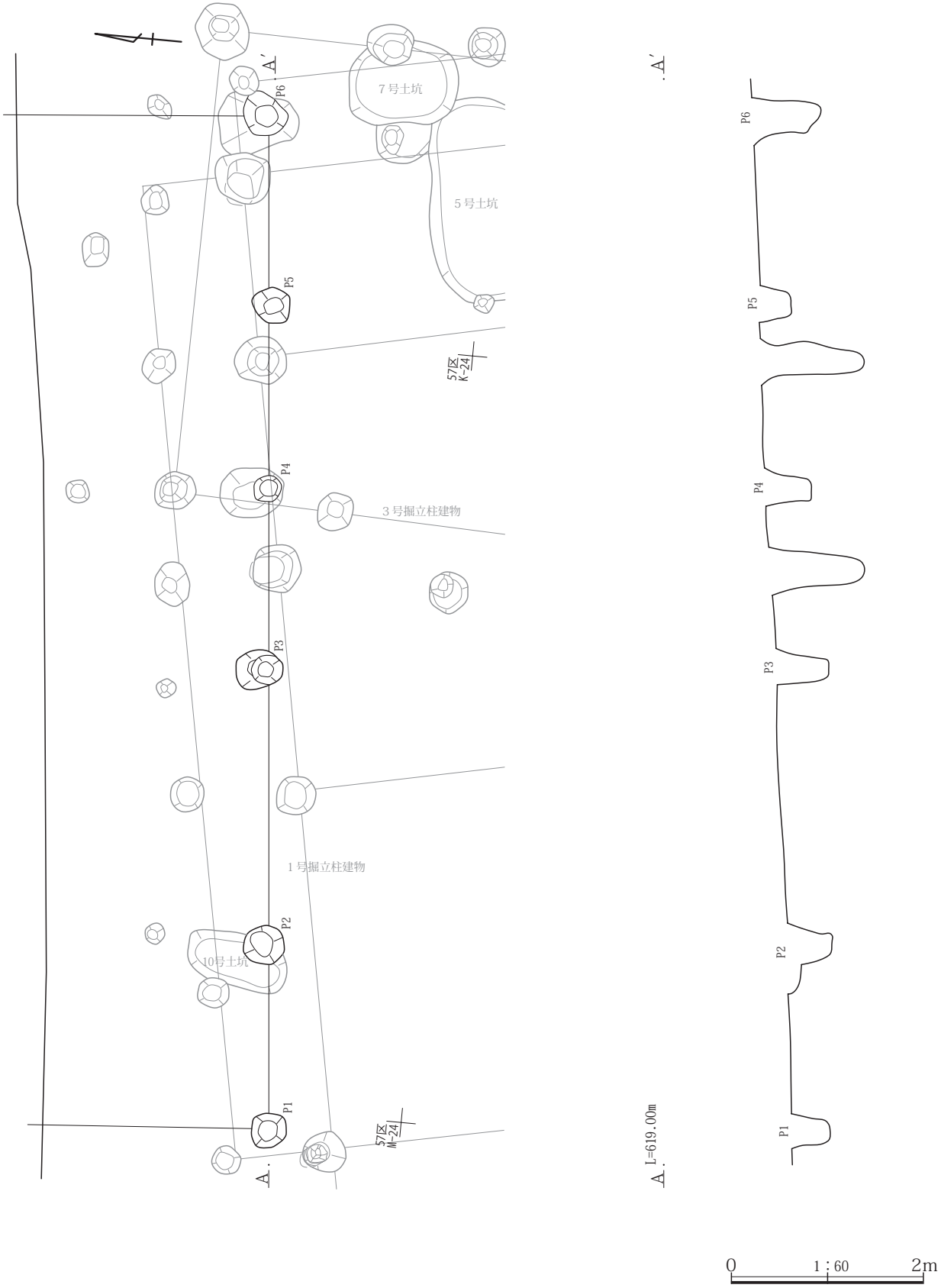
重複：１・４・５・15号掘立柱建物、４・５・７号土坑が重なる。１号掘立柱建物P1がP4を、７号土坑がP2を切る重複関係を示す。

規模：４間×１間(7.3×5.0m)　縦長の南北棟である。

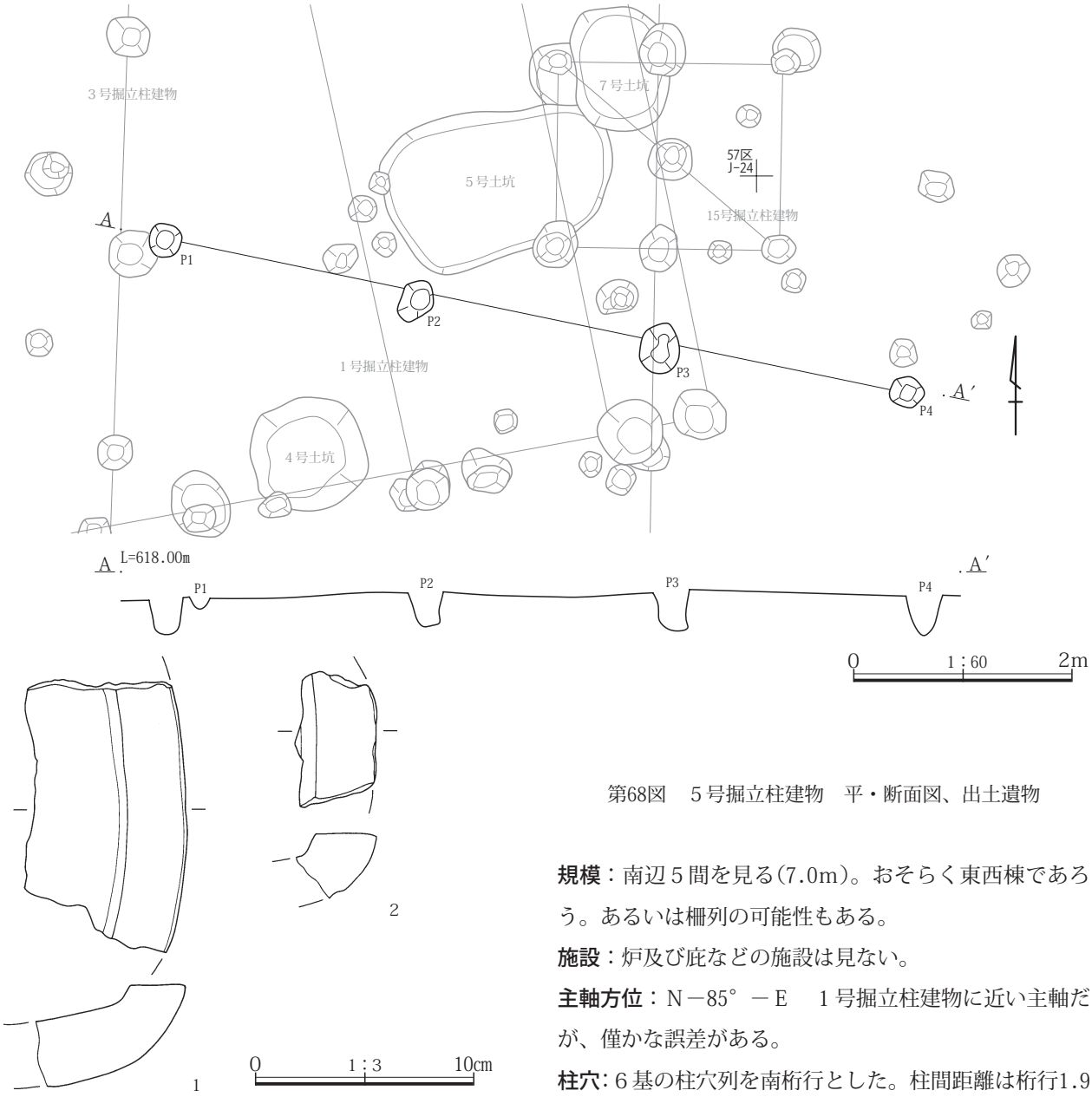
施設：炉及び庇などの施設は無い。

主軸方位：Ｎ－２°－Ｅ　西群では、他の掘立柱建物とは異にし、主軸を北に向ける。東群では14号掘立柱建物が近い。

柱穴：10基の柱穴からなる。いずれも、しっかりした掘り込みで深さを有す。P5・P10はやや浅いが、南側への傾斜のためである。柱間距離は、桁行1.8～1.9m、梁行5.0mを測る。柱穴配置も良好で西辺と東辺の柱穴配



第67図　４号掘立柱建物　平・断面図



第68図　５号掘立柱建物　平・断面図、出土遺物

置も等間隔で整っている。柱痕はP1・3・5～7で確認できた。

遺物：遺物は出土していない。P6下位に自然石の出土を見るが、補強石ではなく混入と判断した。

時期：１号掘立柱建物に切られる重複関係があるが、詳細な時期は不明である。中近世としたい。

４号掘立柱建物（第67図・PL.31）

位置：57区Ｊ～Ｍ－24　西群の北側にあたる。調査区北側に大半を延ばし、南辺の柱穴６基のみを見る。

重複：１・３号掘立柱建物、10号土坑と重複する。１号掘立柱建物P6とP20が本建物P6を切る新旧関係である。

規模：南辺５間を見る（7.0m）。おそらく東西棟であろう。あるいは柵列の可能性もある。

施設：炉及び庇などの施設は見ない。

主軸方位：Ｎ－85°－Ｅ　１号掘立柱建物に近い主軸だが、僅かな誤差がある。

柱穴：６基の柱穴列を南桁行とした。柱間距離は桁行1.9～2.8mを測る。柱痕は見られなかった。柱穴配置はやや不規則で統一性に欠ける。

遺物：出土していない。

時期：中近世と捉えたい。

５号掘立柱建物（第68図・PL.34）

位置：57区Ｉ～Ｋ－23　西群の建物が重なる箇所で他の建物とは軸を異にして検出された。

重複：１・３号掘立柱建物。３号掘立柱建物P8が本建物P1を切る重複関係を示す。

規模：３間（7.0m）　あるいは柵列の可能性もある。

主軸方位：Ｎ－78°－Ｗ

柱穴：４基の柱穴列からなる。桁行2.3～2.4mを測り

等間隔の配列である。柱痕はP4に確認された。等間隔に並ぶやや浅い柱穴に注意し、対応する柱穴の検出を試みたが、柱穴列の抽出に止まった。

遺物：P2より同一個体の石臼片２点の出土を見る。

時期：中近世と考えた。

６号掘立柱建物（第69図・PL.31）

位置：57区Ａ～Ｄ－23～25　東群の中核部で調査された。周辺は南東への緩やかな傾斜地形を呈す。

重複：７・８・14号掘立柱建物が重なる。７号掘立柱建物P5と本建物P5が重複するが、残念ながら新旧は不明である。

規模：４間×１間（8.2×5.1m）　横長の長方形を呈する東西棟である。

施設：炉及び庇などの施設は無い。

主軸方位：Ｎ－75°－Ｅ　重複する７号掘立柱建物と同様の方位である。両者の近縁性が窺えよう。

柱穴：10基の柱穴からなる。柱痕が観察された例はなかったが、いずれも径30㎝前後の小型の円形を平面形とし、深さも50㎝を超える例が多くしっかりした掘り込みである。柱間距離は、桁行2.0～2.2m、梁行5.1mを測り整った配置を示す。

遺物：出土遺物は見られなかった。

時期：中近世と考える。

７号掘立柱建物（第70図・PL.31）

位置：57区Ａ～Ｄ－23～25　東群の中核部で６号掘立柱建物とともに調査された。周辺は南東への緩やかな傾斜地形を呈す。

重複：６・８・14号掘立柱建物。６号掘立柱建物との新旧は不明である。

規模：４間×１間（9.0×5.2m）　横長の長方形を呈する東西棟である。

主軸方位：Ｎ－81°－Ｅ　重複する６号掘立柱建物とほぼ同じ主軸を向くが、若干本建物が北に傾く。

柱穴：10基の柱穴からなる。北辺と南辺の柱穴配置は整っている。柱間距離は、桁行1.9～2.9m、梁行5.2mを測る。特に西側のP1－P2間とP7－P8までの距離が長く等間隔ではない。柱穴規模は、径40㎝前後の円形の平面形で、深さの良好なP9～P12は60㎝を超えるしっかりした例である。なお、P8・P9は試掘トレンチにより上半を逸失している。

P4～P6及びP9～P12は、重複状態で２基のピットが確認されている。建物主軸に沿う配列のため、おそらく同一建物内で建て替えが行われたものと考えられる。

遺物：出土遺物は見られなかった。

時期：中近世と考える。

８号掘立柱建物（第71図・PL.31）

発掘調査では、３基の柱穴（P5～P7）の配列を８号掘立柱建物としていたが、整理段階で、南側に平行する４基の配列を見せる柱穴列（10号掘立柱建物）を併せて８号掘立柱建物とした。その際、梁間柱穴にP8（P145）を充てた。

位置：57区Ａ～Ｃ－23～25　東群の東端にあたり、おそらく調査区域外に建物東端が延長すると捉えた。

重複：６・７・９・14号掘立柱建物。６号掘立柱建物P5と重複するが新旧関係は不明である。

規模：３間×２間（5.3×5.1m）　調査区域外に東辺を設けた場合、長方形を平面形とした東西棟である。

主軸方位：Ｎ－81°－Ｅ　重複する７号掘立柱建物と同軸の方位である。何らかの関連性を窺わせよう。

柱穴：８基の柱穴からなる。北辺に３基、南辺に４基の配列が見られ、整然と対応していない。柱間距離も桁行1.6～1.9m、梁行2.4～2.7mを測り、ややばらつきが観察される。

遺物：出土していない。

時期：中近世とした。

９号掘立柱建物（第71図）

位置：57区Ａ～Ｃ－24・25　東群の北端で検出した。

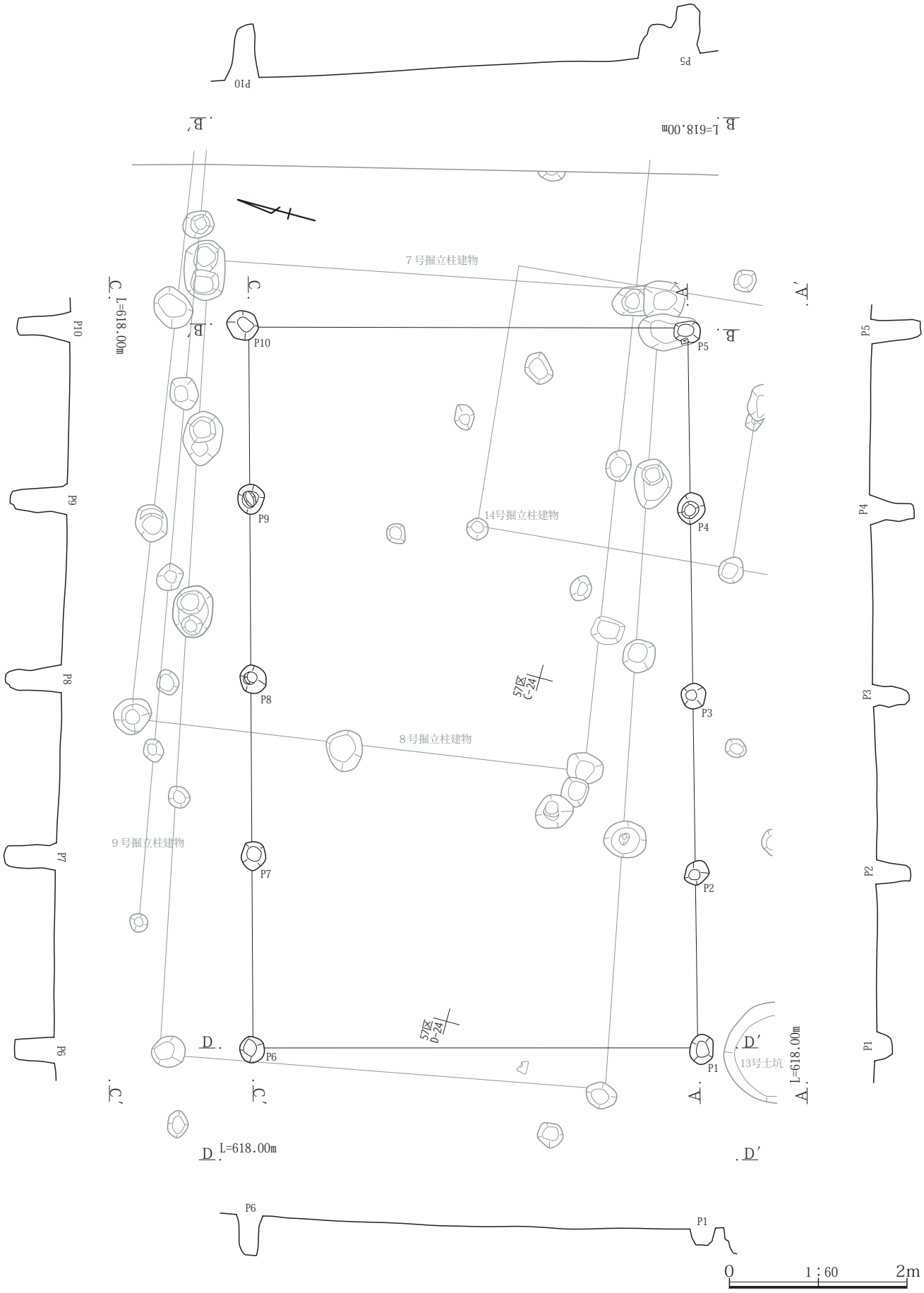
重複：７号掘立柱建物が重なるが柱穴の重複はなく新旧は不明である。

規模：４間（7.9m）　対応する桁を抽出し得なかった。あるいは柵列の可能性もある。

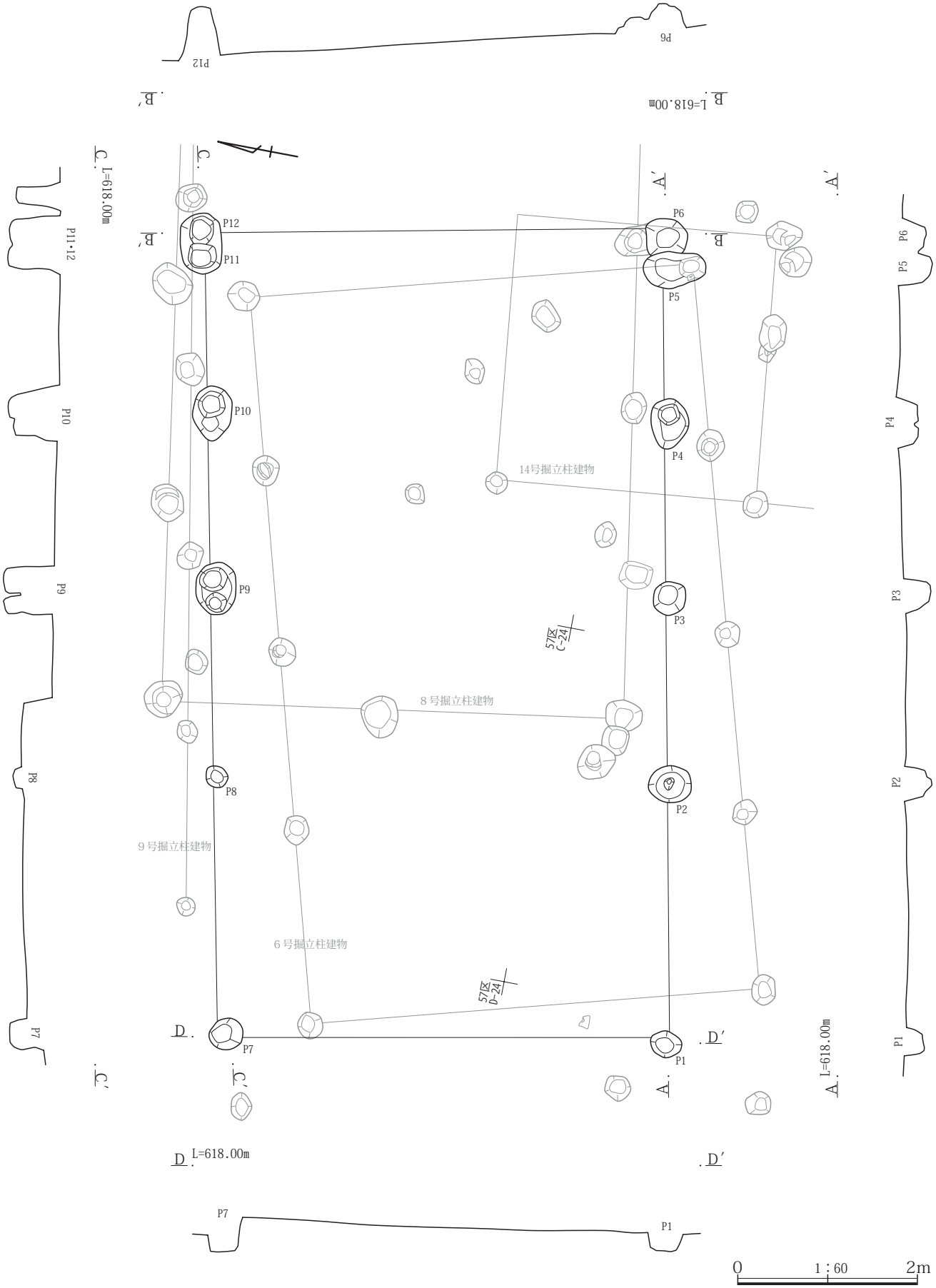
主軸方位：Ｎ－80°－Ｅ　７号掘立柱建物とほぼ同軸方位で、重複関係を見ることから、時間差を持った近縁性が窺われよう。

柱穴：５基の柱穴からなる。桁行1.9～2.1mを測る。

柱穴規模は径約30～40㎝で円形の平面形を呈し、深

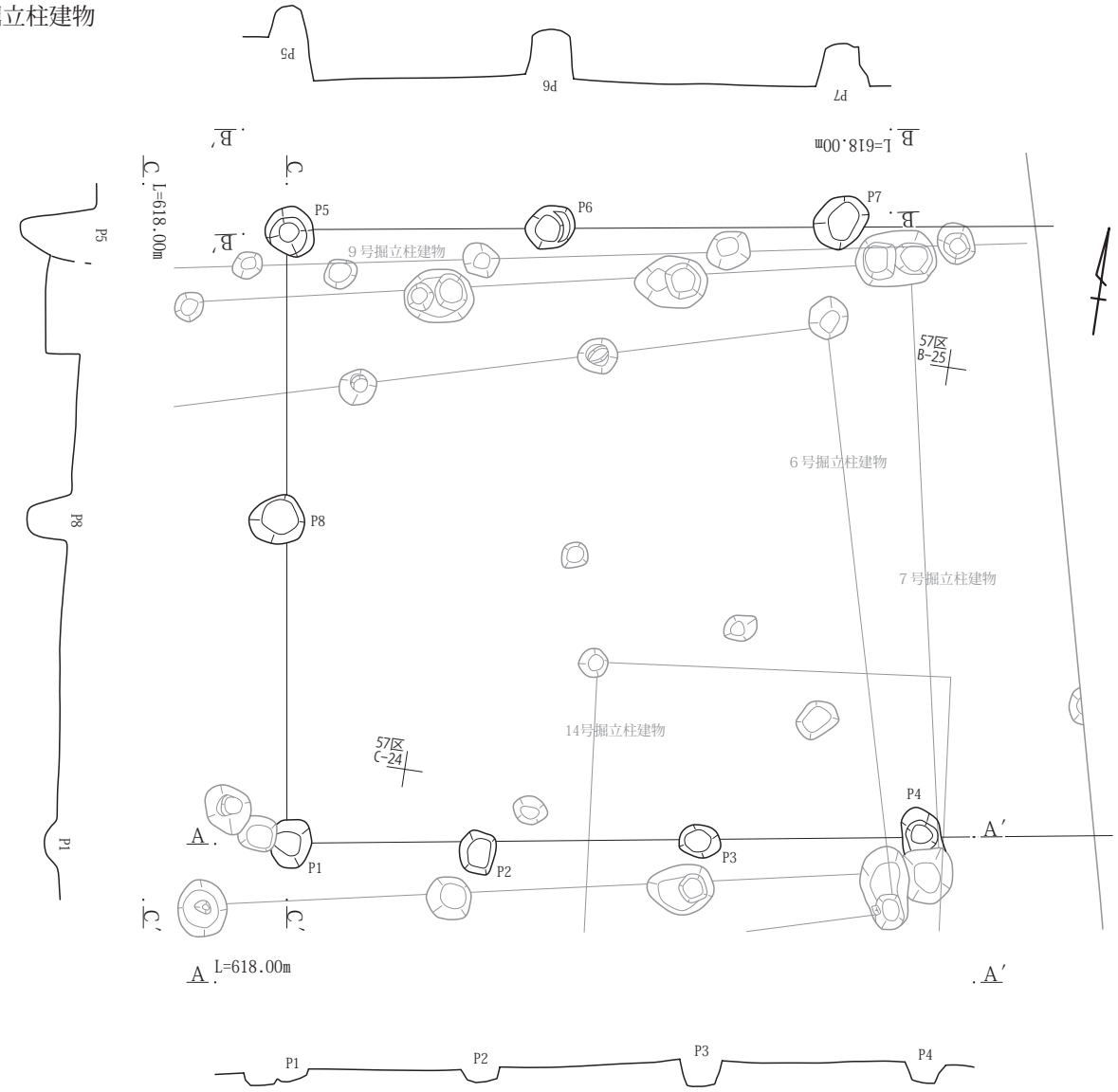


第69図　６号掘立柱建物　平・断面図

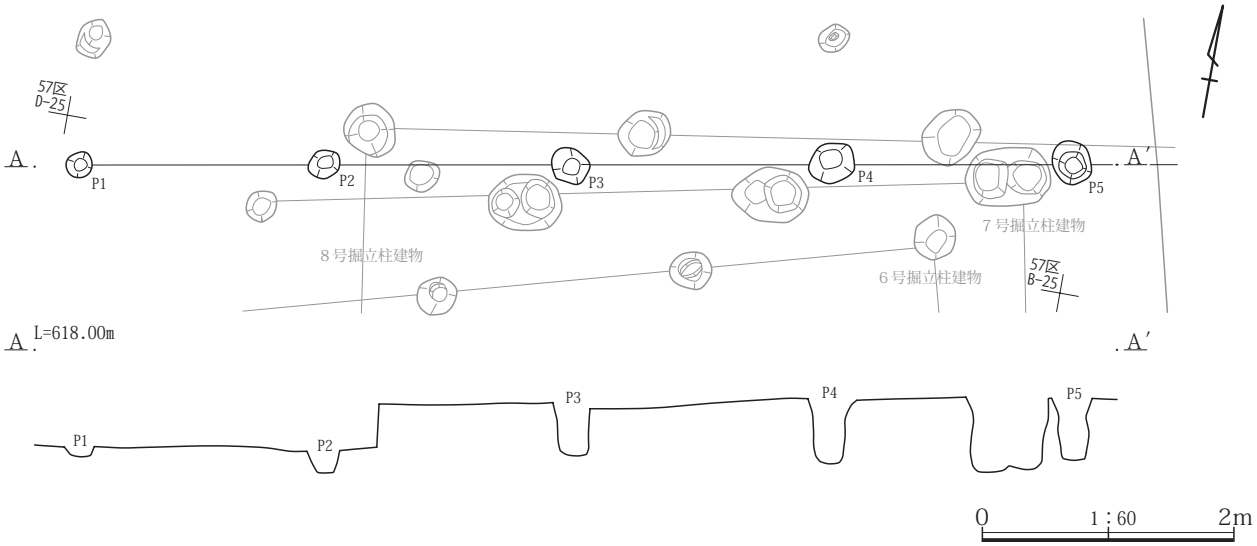


第70図　７号掘立柱建物　平・断面図

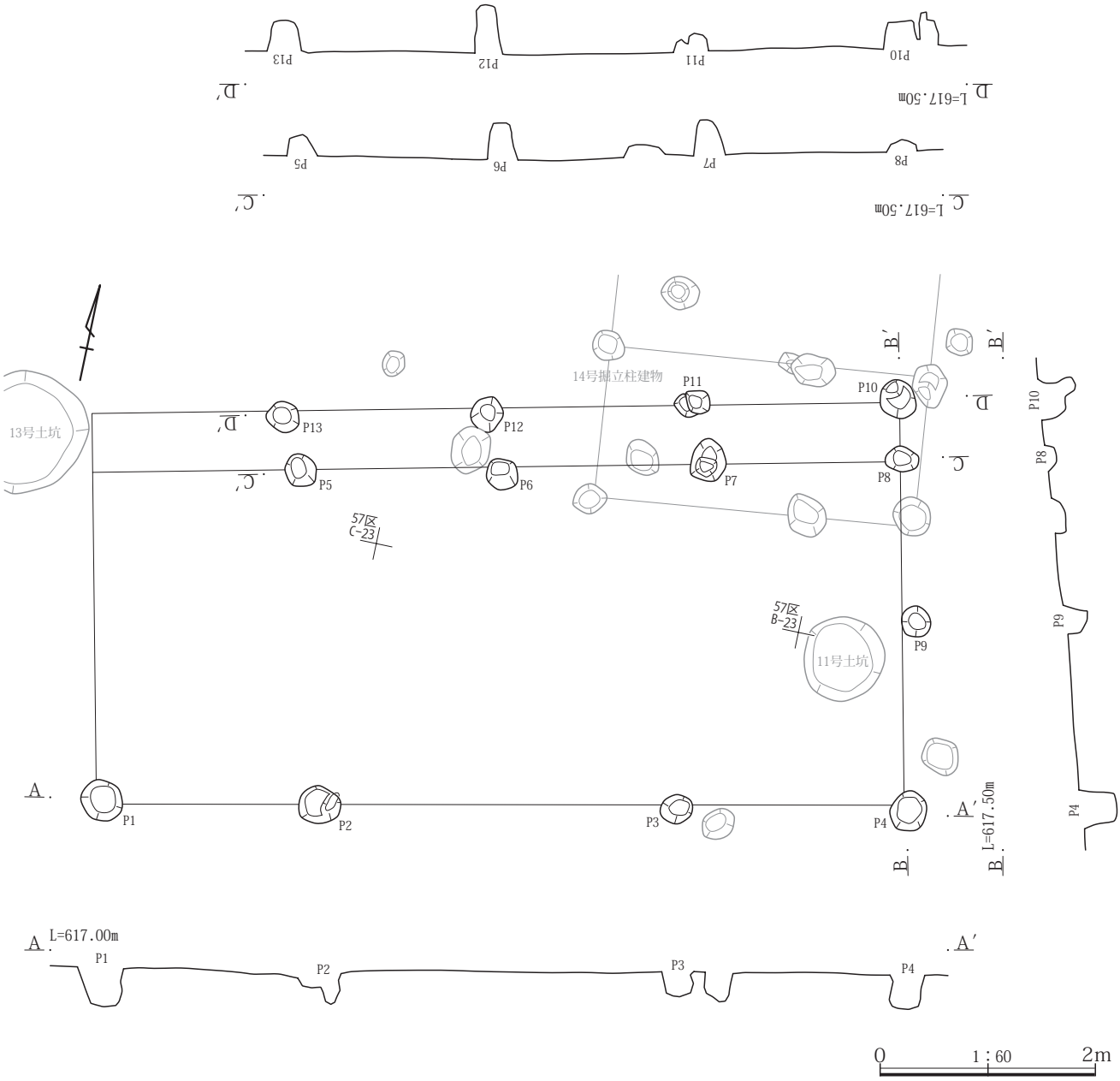
８号掘立柱建物



９号掘立柱建物



第71図　８・９号掘立柱建物　平・断面図



第72図　11号掘立柱建物　平・断面図

さも40～50㎝程の良好な掘り込みを示す。西側の２基は試掘トレンチのため上半部を逸する。

遺物：出土していない。

時期：中近世とした。

11号掘立柱建物（第72図・PL.31）

発掘調査では、11・12号掘立柱建物として２棟の建物を想定したが、整理段階で北辺の柱穴列を庇と考え、１棟の建物と捉えた。

位置：57区Ａ～Ｃ－22・23　東群の南で検出された。南側への傾斜がやや強くなる地点 である。

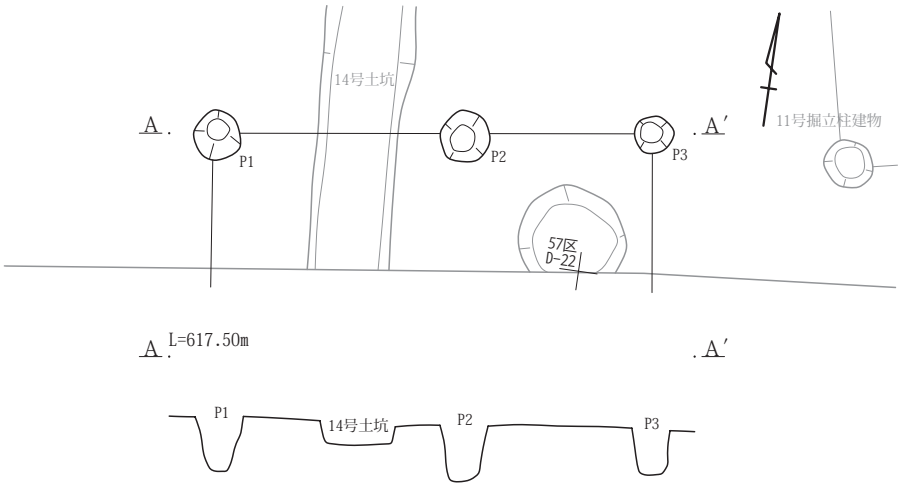
重複：14号掘立柱建物・11号土坑。柱穴相互の重複は無く、新旧は不明である。

規模：３間×３間(7.5×3.9m)　横長の東西棟である。

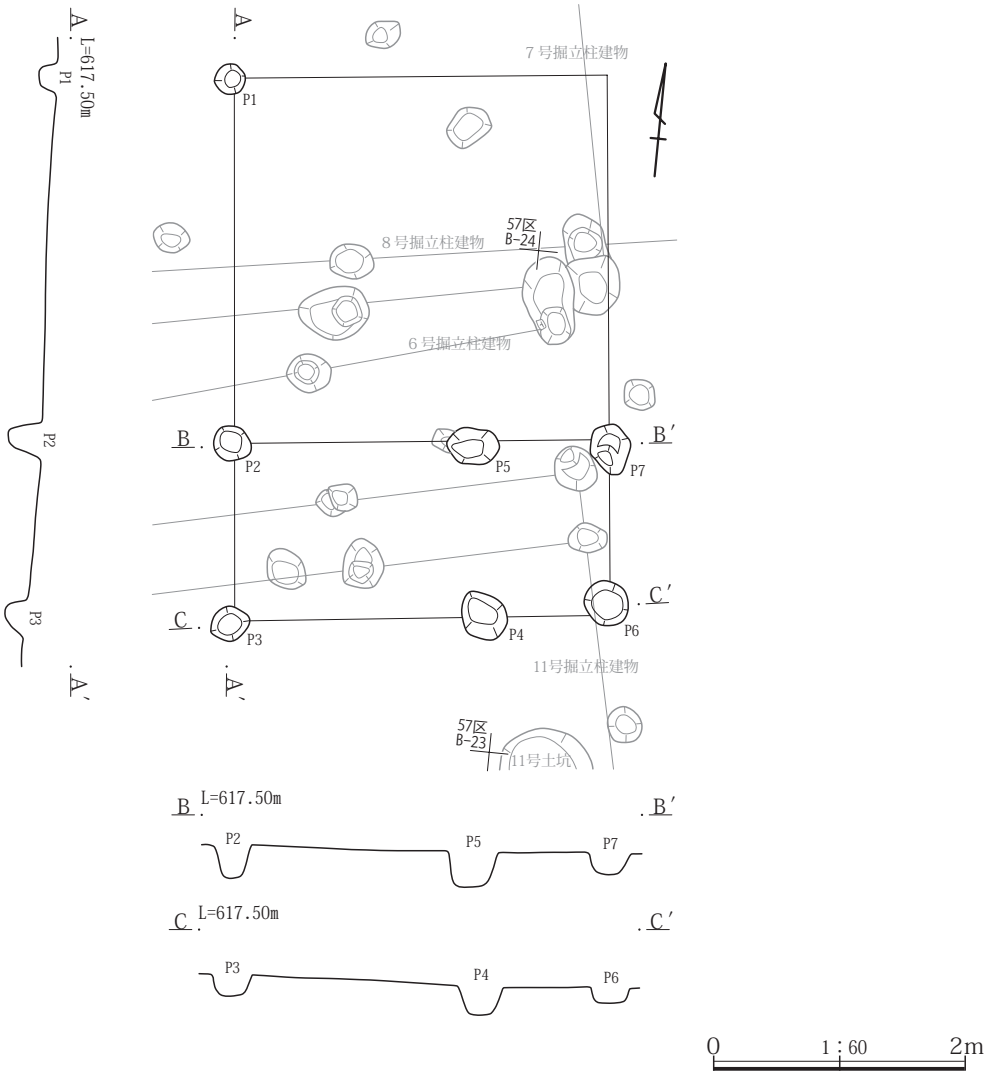
主軸方位：Ｎ－80°－Ｅ　東群の建物群とほぼ同軸を向く。

柱穴：12基の柱穴を充てた。径30～40㎝程度の小型の円形を平面形とし、深さも20～40㎝とやや浅い。南側での検出が起因している。P1～P9を身舎と捉え、P10を北辺の庇と考えた。庇柱穴配列と身舎北辺の柱穴配列はほぼ

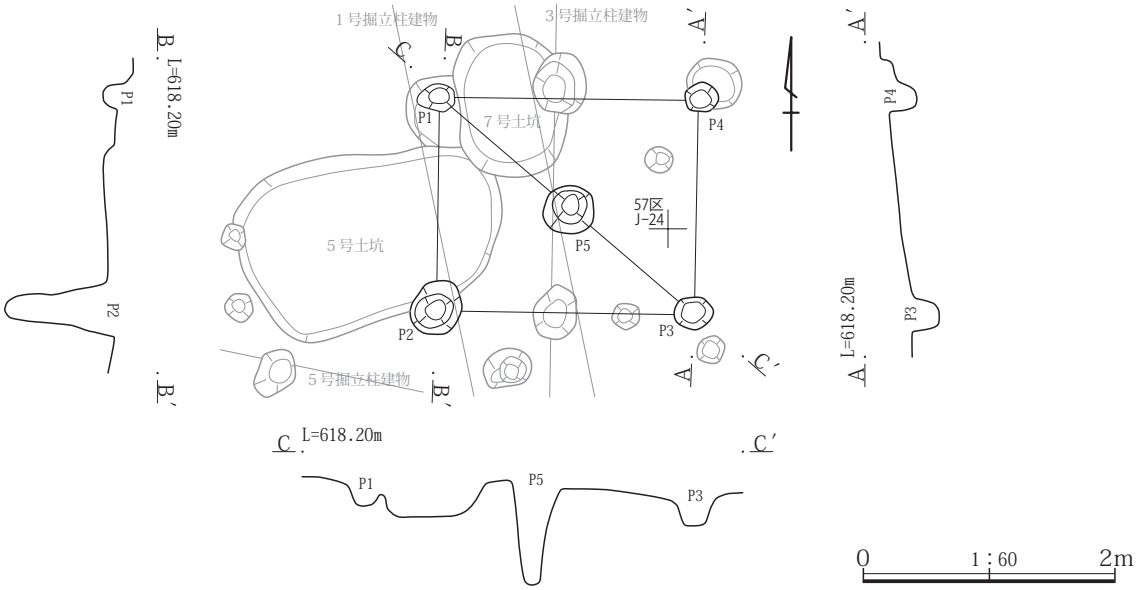
13号掘立柱建物



14号掘立柱建物



第73図　13・14号掘立柱建物　平・断面図



第74図　15号掘立柱建物　平・断面図

対応するが、南辺の柱穴に整合性を見ない。南辺P1に相応する北辺の柱穴が見られず、北辺P6に対する南辺柱穴を欠く。このように柱穴配置にやや規則性が見られないが、東群にあって庇を設ける建物として位置付けておきたい。

遺物：出土遺物は無い。

時期：中近世と考えた。

13号掘立柱建物（第73図・PL.32）

位置：57区Ｃ・Ｄ－22　東群とは南西に距離を置き、調査区南東で調査された。

重複：14号土坑と重なるが新旧は不明である。

規模：２間（3.5m）　南側を調査区域外へ延長すると思われる。小型の建物と考える。

主軸方位：Ｎ－82°－Ｅ　北辺のみの検出のため、判然としないが、東西棟か。

柱穴：３基の柱穴を充てた。桁行1.5～2.0mを測り、径30～40cm程の円形の平面形を呈す。深さは30～40cmで比較的しっかりした掘り込みである。

遺物：出土していない。

時期：中近世としたが、東群と距離を置くことから、東群掘立柱建物との時期差も考えられる。土層の観察からは、近世～近代の可能性もある。

14号掘立柱建物（第73図）

整理段階で抽出した建物である。

位置：57区Ａ・Ｂ－23・24　東群の東端に位置する。

重複：６～８・11号掘立柱建物。重複する柱穴は無く新旧は不明である。

規模：２間×２間（4.3×3.0m）　南北棟か。

主軸方位：Ｎ－５°－Ｅ

柱穴：P2～P6は対応する小ピットである。北に距離を置いてP1を充てた。径30cm前後の円形の平面形で、深さは20～30cmとやや浅い。

遺物：出土遺物は無い。

時期：中近世か。

15号掘立柱建物（第74図）

整理段階で抽出した建物である。

位置：57区Ｉ・Ｊ－23・24　西群の東端に位置する。

重複：１・３号掘立柱建物、５・７号土坑が重複するが新旧は不明である。

規模：１間×１間（2.1×1.7m）　小型の建物とした。

主軸方位：Ｎ－１°－Ｅ　ほぼ北を向き、３号掘立柱建物と近い主軸を持つ。

柱穴：総柱で５基の柱穴からなる。桁行2.1m、梁行1.7mを測る。

遺物：出土遺物は無い。

時期：中近世か。

２．土坑

14基の土坑を調査した。３号土坑と６号土坑は欠番である。発掘調査時において平面形を確認したが、現代遺物(ビニール片など)を出土したため発掘段階で欠番とした。

１号土坑(第75図・PL.32)

位置：57区Ｋ・Ｌ－22・23　調査区西側の南西斜面に位置する。

重複：１号掘立柱建物。新旧は不明である。

規模・形状：平面形は約2.3×1.9mを測り、不整楕円形を呈す。深さは約1.3mと深い。

長軸方位：Ｎ－90°－Ｅ

遺物：出土遺物は無かった。

時期：中近世か。

所見：試掘調査で確認された土坑である。調査深度が深く、下面においては湧水が著しかった。陥穴状土坑あるいは井戸状遺構と思われるが、当地域の陥穴状土坑の多くは単独で設けられず、ここでは、井戸状遺構としての性格を想定したい。

２号土坑(第75図・PL.32)

位置：57区Ｌ－23　調査区西側の南西斜面に位置する。

重複：１号掘立柱建物。新旧は不明である。

規模・形状：径約1.3×1.1mの不整円形を呈す。浅く、皿状の断面形を示す。0.24mを測る。

長軸方位：Ｎ－73°－Ｅ

遺物：出土していない。

時期：土層の特徴から、近世～近代か。

４号土坑(第75図・PL.32)

墓壙である。埋土上層～中層より大型の角礫が集中し、下位に１個体分の人骨が出土している。頭位を北東に置き、大腿骨を南西に置く。遺存度はやや不良である。おそらく屈葬に埋葬されたのであろう。

位置：57区Ｊ・Ｋ－23　西側斜面のほぼ中央に位置する。南西への傾斜がやや強くなる地点である。

重複：１・３号掘立柱建物。新旧は不明である。

規模・形状：径約1.0mの不整円形を平面形とし、深さは0.40mを測る。

頭位方位：Ｎ－26°－Ｅ

遺物：出土していない。

時期：中近世か。

５号土坑(第76図・PL.32)

位置：57区Ｊ－23・24　西斜面上位の傾斜変換点で検出された。土坑・ピットが群在する箇所である。

重複：１・３・15号掘立柱建物、７号土坑・17号ピット。７号土坑とは新旧関係は不明である。土層観察では17号ピットを切る新旧を得た。

規模・形状：不整楕円形を呈す。平面規模は約2.1×1.4m、深さは0.16mと浅い皿状の形態を示す。

長軸方位：Ｎ－76°－Ｅ

遺物：出土遺物は無い。

時期：近世か。

７号土坑(第76図・PL.32)

位置：57区Ｊ－24　５号土坑同様、西斜面上位の傾斜変換点で調査された。

重複：１・３・５号掘立柱建物、５号土坑。３号掘立柱建物P2と重複し、本土坑がP2を切る土層観察を得ている。

規模・形状：平面規模は1.1×0.9mの不整楕円形を呈す。深さは0.40mを測り、しっかりした掘り込みを見せる。

長軸方位：Ｎ－７°－W

遺物：出土していない。

時期：近世か。

８号土坑(第76図・PL.33・34)

墓壙であろうか。平面形、底面の様相から竪穴状の小型住居の可能性もあるが、底面に柱穴はなく、焼土・炭化物の出土も見られない。鉄釘が出土したことから、墓壙の可能性を考えたい。

位置：57区Ｉ・Ｊ－22　西斜面南側で検出された。周辺は南側への傾斜変換点である。

重複：２号掘立柱建物。近接遺構として９号土坑が北東に接する。２号掘立柱建物P6が本土坑北側の突出部と重複する。本土坑が新しい土層観察である。

規模・形状：北側壁に突出部を見るが、重複ではなく本土坑の一部と判断した。軸長2.0mの不整正方形を呈す。深さは約0.30mで箱状のしっかりした断面形を示す。坑

底面は、硬化面を見ないが平坦面を維持する。
長軸方位：Ｎ－８°－Ｗ
遺物：埋土中より鉄釘を出土している。
時期：中近世か。

９号土坑（第76図・PL.33・34）
８号土坑と同様に墓壙の可能性がある。人骨の出土は見ないが、墓壙とした４号土坑と同様に礫を集中する特徴を有し、カワラケの出土が見られた要素を注意したい。
位置：57区Ｉ－22・23　８号土坑北東に接して調査された。土坑相互の新旧は不明である。
重複：２号掘立柱建物P5が土坑底面で重複する。本土坑に伴う角礫がP5を覆うため、本土坑を新しく捉えた。
規模・形状：平面形は不整方形を呈し、約2.0×1.6mを測る。深さは約0.20mでやや浅い皿状の断面形を示す。
長軸方位：Ｎ－７°－Ｗ　８号土坑と同方向を向く。
遺物：埋土下位～底面にかけて、カワラケの出土を見た。
時期：カワラケから中世と捉えた。

10号土坑（第77図）
位置：57区Ｌ－24　西斜面北側に位置する。
重複：１号掘立柱建物P15・４号掘立柱建物P2が重複する。新旧は不明である。
規模・形状：不整楕円形を呈す。平面規模は約1.0×0.5m、深さは約0.26mを測る。
長軸方位：Ｎ－12°－Ｅ
遺物：石器細片１点の出土を見たが図化に至っていない。
時期：不明。

11号土坑（第77図・PL.33）
位置：57区Ａ－22・23　調査区東端で検出された。緩やかな南東斜面にある。
重複：単独の検出だが、周辺は掘立柱建物が群在する。
規模・形状：径約80㎝の不整円形を呈す。深さは約30㎝を測る。断面形は箱形である。
遺物：出土していない。
時期：不明である。埋土の様相は掘立柱建物柱穴埋土に近い。

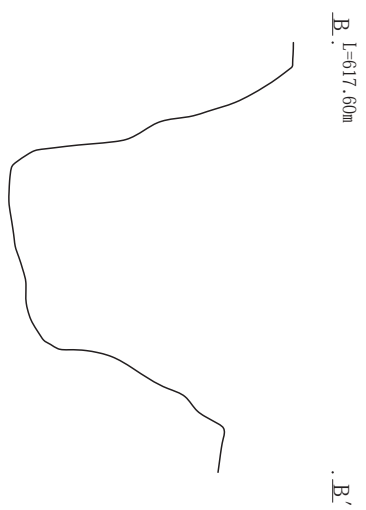
12号土坑（第77図・PL.33）
位置：57区Ｃ－25　東斜面北東側に位置する。
重複：重複状態の２基の土坑を本土坑とした。
規模・形状：不整形を呈し、平面形は約1.0×0.8m、深さは約0.20mを測る。断面形は不連続な皿状である。
遺物：出土していない。
時期：不明。埋土の様相は近世～近代か。

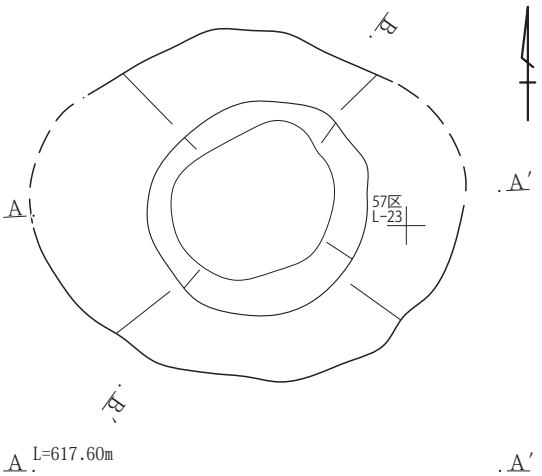
13号土坑（第77図・PL.33）
位置：57区Ｃ－22・23　東斜面南西部に位置する。南への傾斜変換点にあたる。
重複：ない。掘立柱建物東群の南西部で近接する。
規模・形状：径約1.1m前後の円形を呈する。深さは0.30m以上で箱形の断面形を示す。
遺物：出土していない。
時期：不明。近世～近代か。

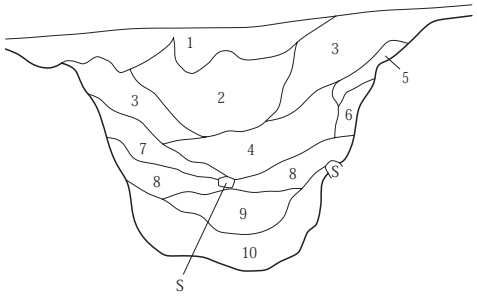
14号土坑（第77図・PL.33）
位置：57区Ｄ－21～23　東斜面南側に位置する。南側を調査区域外へ延ばす。
重複：13号掘立柱建物。新旧は不明である。
規模・形状：縦長長方形を呈す。軸長残存部で6.0mを超え、短軸長は0.7mを測る。深さは0.28mで箱形の断面形を示す。
長軸方位：Ｎ－２°－Ｗ　傾斜に沿う南北の走行を示す。
遺物：出土していない。
時期：近世～近代か。いわゆるイモ穴に近い形状である。

15号土坑（第78図・PL.33）
位置：57区Ｄ・Ｅ－22・23　東斜面南側で単独で検出された。南東への斜面地形にある。
重複：重複遺構は無い。距離をおいて14号土坑が東に近接する。
規模・形状：径約1.1mの円形を平面形とし、深さは約0.30mを測る。しっかりした箱形の断面形を示す。
遺物：出土していない。
時期：不明。近世～近代か。

１号土坑

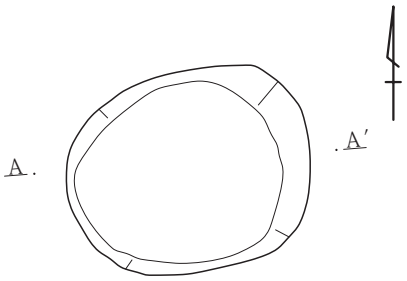


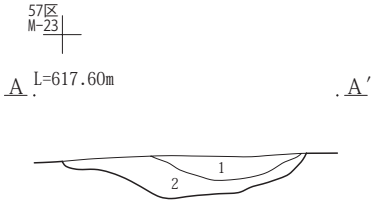




１号土坑
1　黒褐色土　暗褐色土ブロック・ローム粒を含む。
2　黒褐色土　大粒のAs-YPkを少量含む。
3　黒褐色土　As-YPkを含まない。
4　黒褐色土　やや明るく、大粒のAs-YPkを微量含む。
5　鈍い褐色土　褐色土ブロックが主体。
6　黄褐色土　ロームブロックが主体。
7　暗褐色土　やや暗く、白色粒を少量含む。
8　暗褐色土　やや明るく、小粒のAs-YPkを含む。
9　暗褐色土　暗く、小粒のAs-YPkを少量含む。
10　黄褐色土　ロームブロック・As-YPk・小礫を含む。

２号土坑

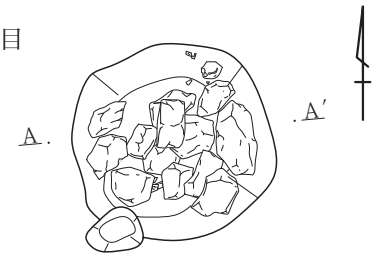




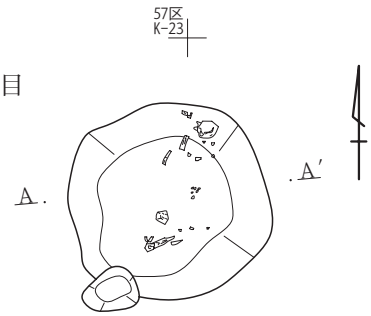
２号土坑
1　黒褐色土　赤色粒子を含む。
2　暗褐色土　赤色粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。

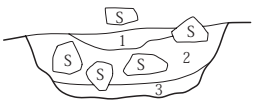
４号土坑

１面目



２面目



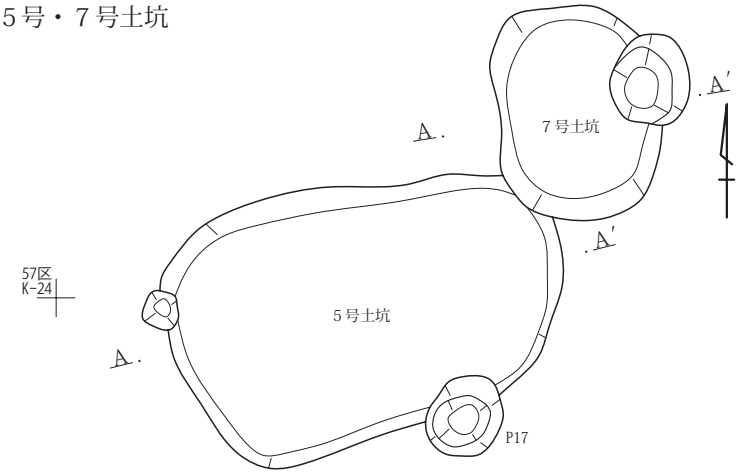


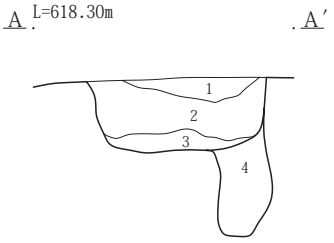
４号土坑
1　黒褐色土　軟質で、灰色味を帯びる。
2　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。
3　黒褐色土　ローム小ブロックを多く含む。

0　1:40　1m

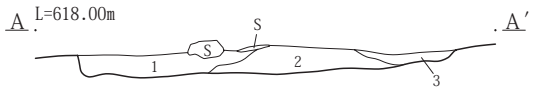
第75図　１・２・４号土坑　平・断面図

５号・７号土坑



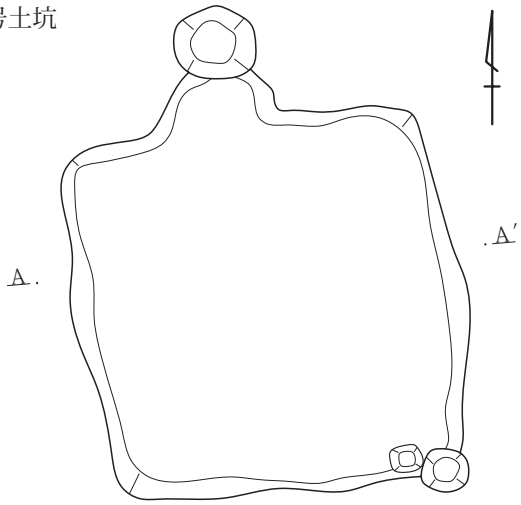


７号土坑
1　暗褐色土　赤色粒子・ロームブロックを僅かに含む。
2　暗褐色土　赤色粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む。
3　暗褐色土　赤色粒子・ロームブロックを多く含む。
4　暗褐色土　赤色粒子を多く含む。

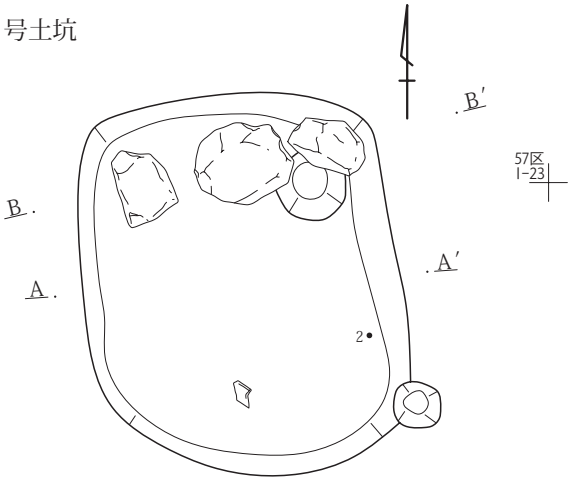


５号土坑
1　黒褐色土　赤色粒子・ロームブロックを僅かに含む。
2　黒褐色土　赤色粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む。
3　黒褐色土　攪乱。

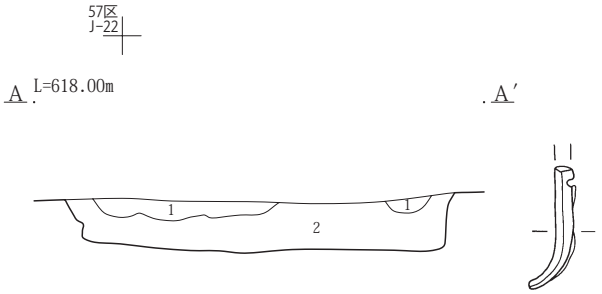
８号土坑



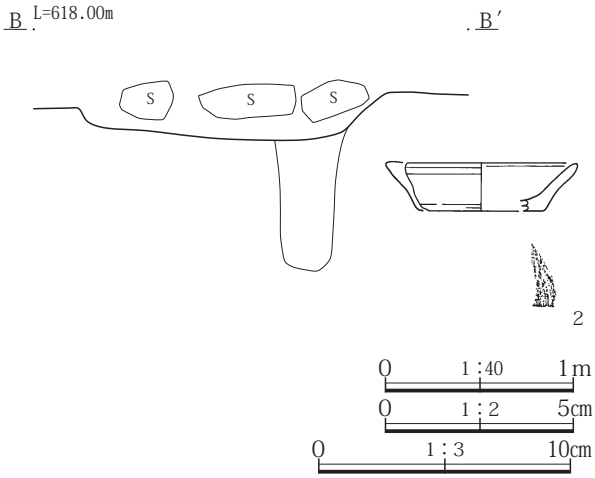
９号土坑



９号土坑
1　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。

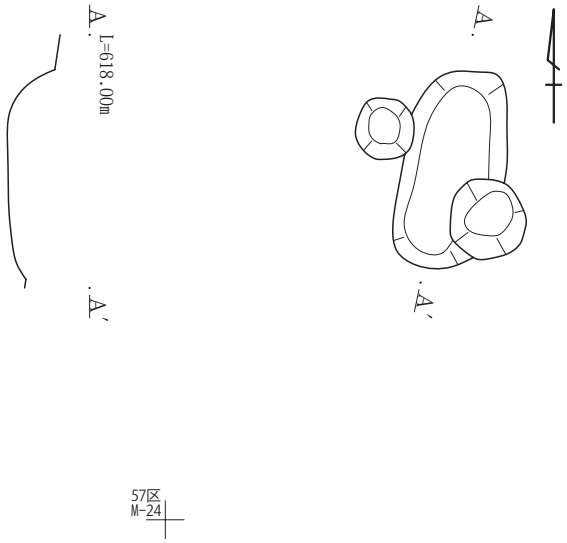


８号土坑
1　黒褐色土　やや明るく、ローム小ブロックを少量含む。
2　黄褐色土　ローム大ブロックが主体。

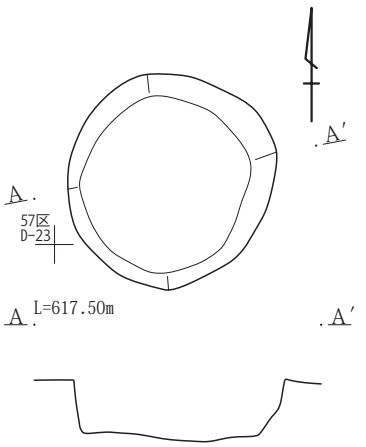


第76図　５・７～９号土坑　平・断面図、出土遺物

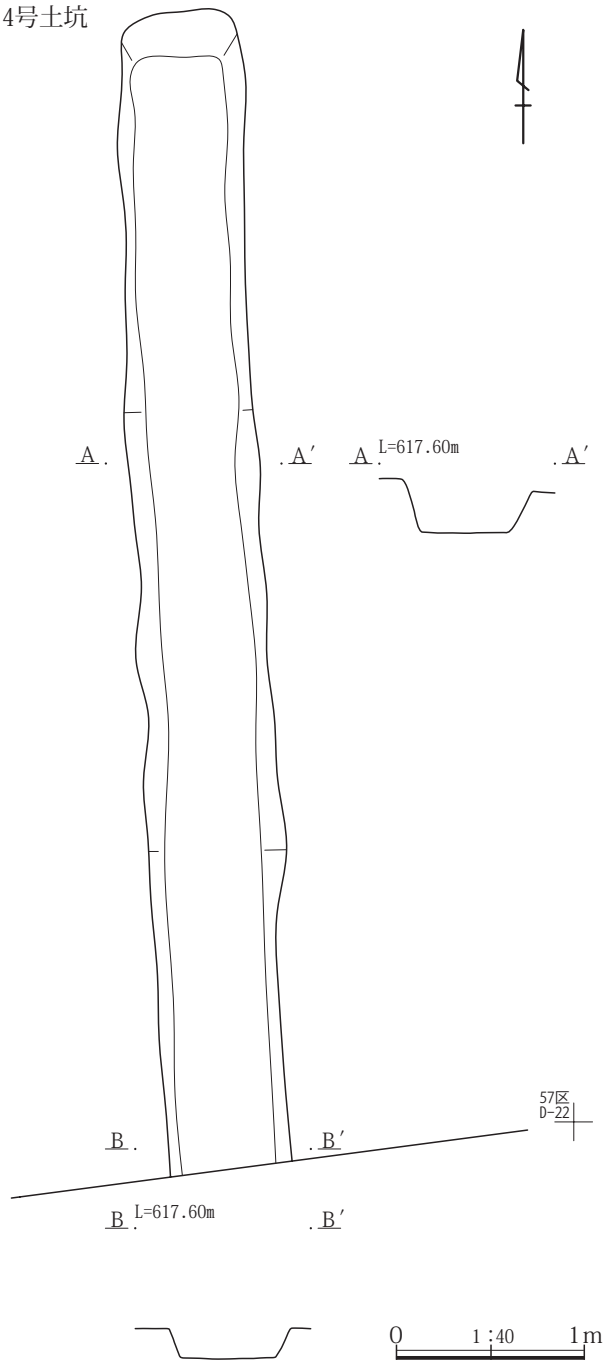
10号土坑



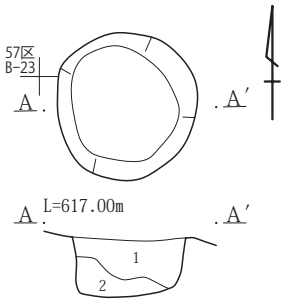
13号土坑



14号土坑

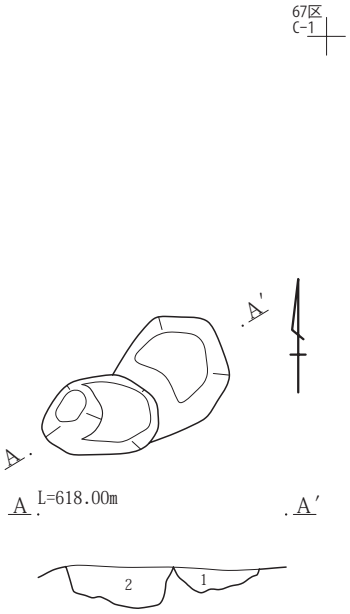


11号土坑



11号土坑
1　暗褐色土　暗く、締まり弱い。
2　暗褐色土　やや明るく、橙色粒を少量含む。

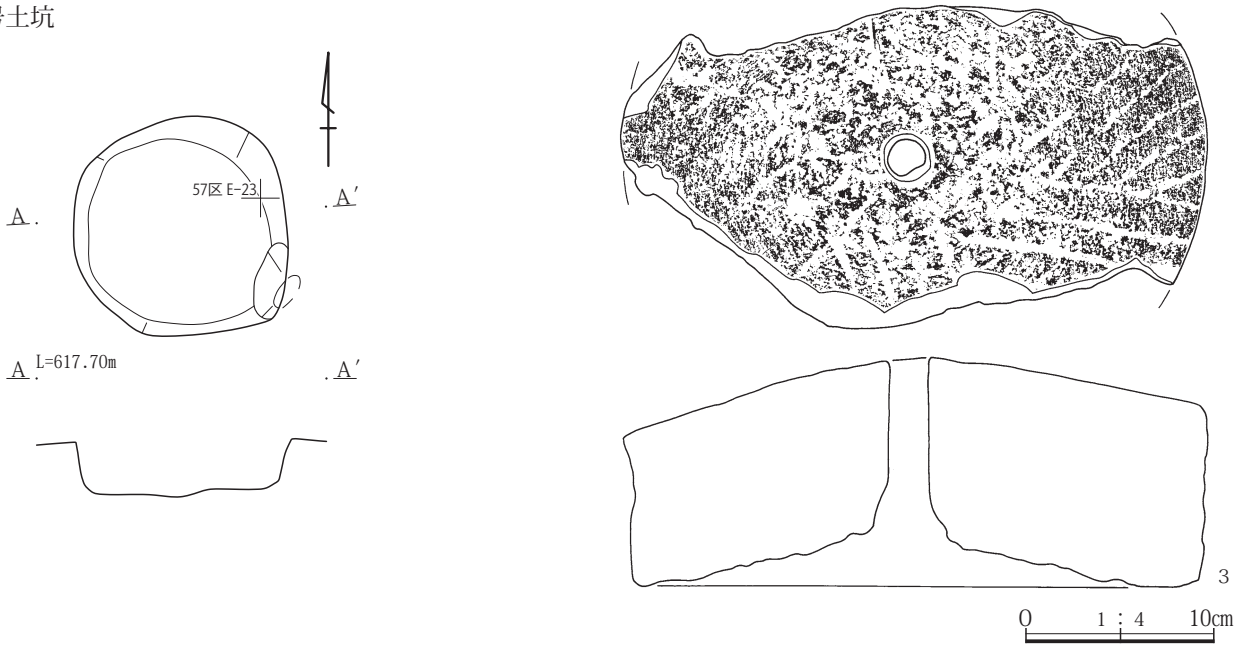
12号土坑



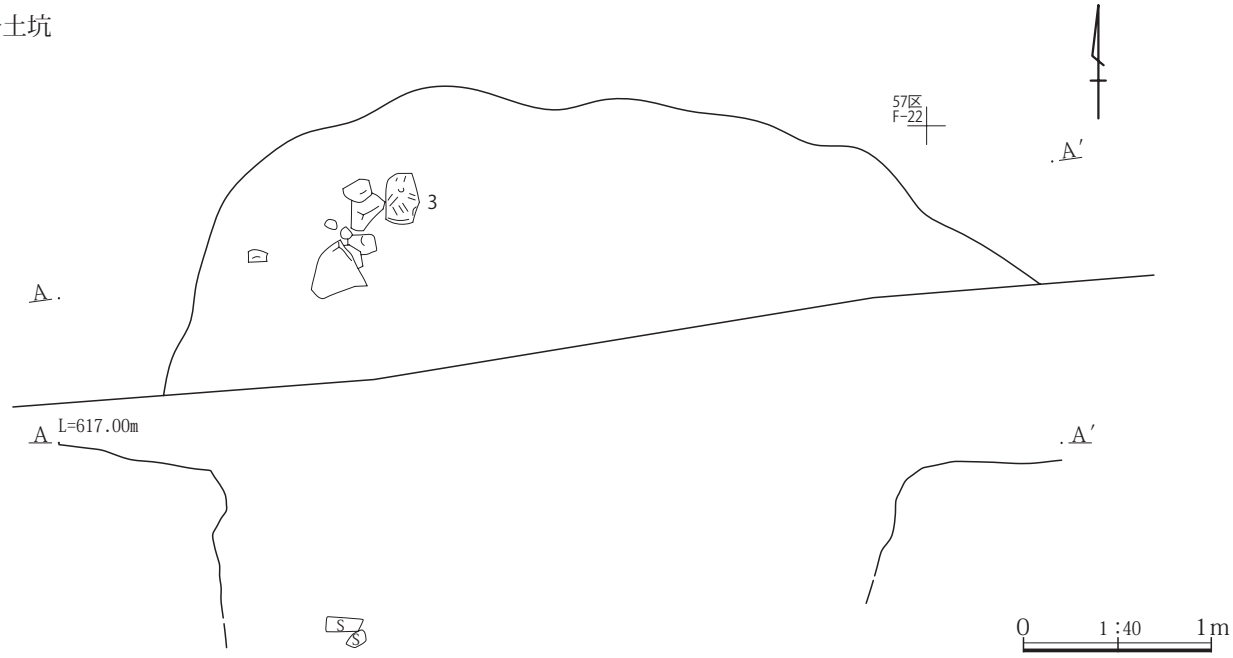
12号土坑
1　黒褐色土　赤色粒子・黒色地山ブロックを少量含む。
2　黒褐色土　黒色地山ブロックを僅かに含む。

第77図　10～14号土坑　平・断面図

15号土坑



16号土坑



第78図　15・16号土坑　平・断面図、出土遺物

16号土坑（第78図・PL.33・34）

南側の大半を調査区域外へ延長する。１m以上の掘り下げを行ったが、調査区壁の崩落が懸念されたため、安全対策上、土坑下位の調査は断念している。

位置：57区Ｅ～Ｇ－21・22

重複：単独の検出である。

規模・形状：一部の調査に止まったため全容は把握できない。４m以上の平面形で１m以上の深度を見た。

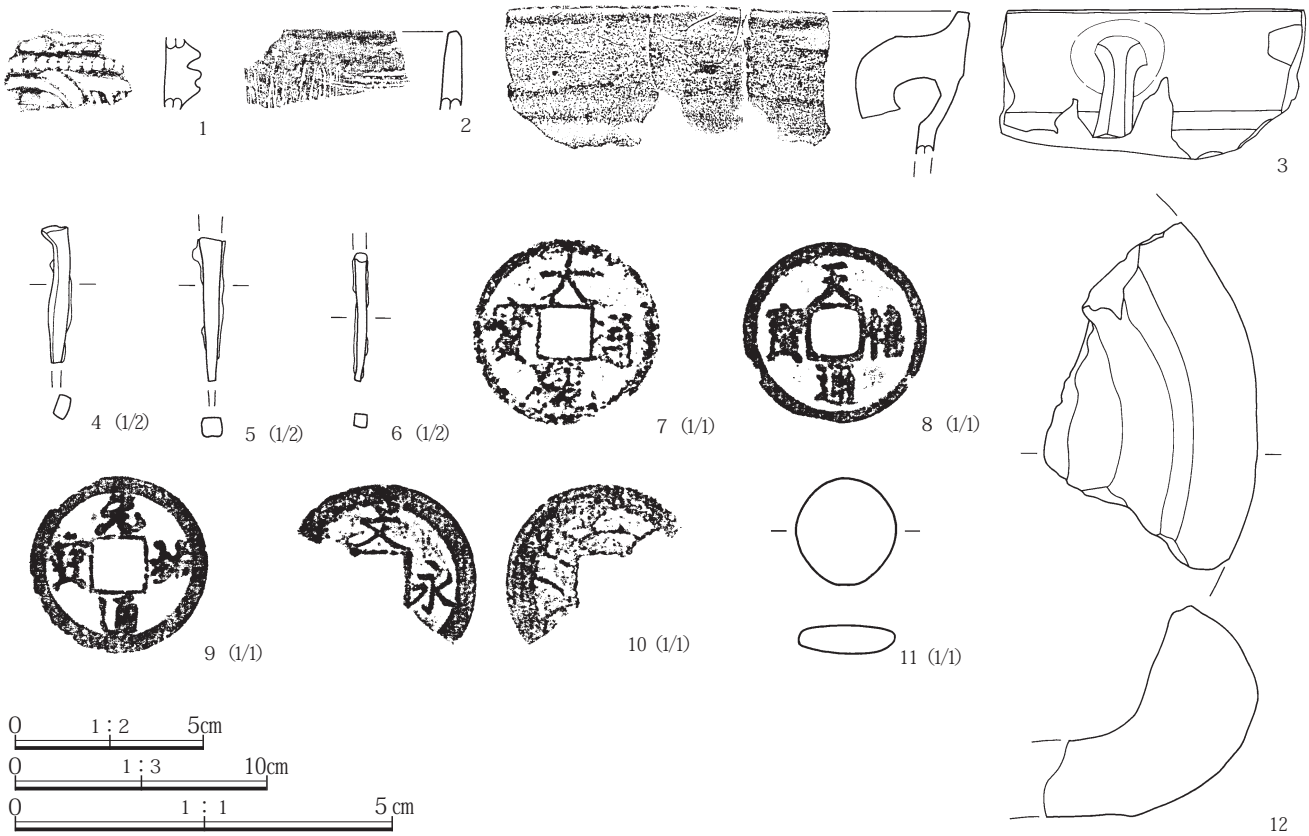
遺物：下臼破片を図示したが、他に在地土器内耳鍋体部小破片が出土している。

時期：中近世か。

３．ピット

林宮原遺跡では多数のピットを調査した。そのうち東西方向に並ぶピットを抽出し、掘立柱建物を検出したが、掘立柱建物柱穴以外にも多くのピットが残る。本章ではそれらのピットを全て掲載せず、遺構一覧表にまとめた。参照していただきたい。

ピットからの出土遺物は非常に少ない。図示し得た例では71号ピットからは内耳鍋口縁部破片（第79図３）、86



第79図　遺構外出土遺物

号ピットからは銭貨「大觀通寶」（第79図７）が出土している。また図示し得なかったピット出土遺物の大半が内耳鍋破片である。このことから、本遺跡で検出されたピット、掘立柱建物柱穴の多くは中世に比定されると考えられよう。

４．遺構外出土遺物

遺構外出土遺物も図示に耐えられる遺物は少ない。縄文土器破片２点（第79図１・２）、釘３点（第79図４～６）、銭貨３点（第79図８～10）、碁石１点（第79図11）、石鉢１点（第79図12）を掲載した。縄文土器以外は、帰属する時期を中近世に求められよう。これは掘立柱建物に比定した時期であり、掘立柱建物を中心とした生活痕跡の一部が遺構外遺物に反映したと見られる。

第５節　調査の成果（総括）

林宮原遺跡は、13棟の掘立柱建物（以下建物）を調査した。その他に土坑・墓壙、ピットなどを見るが、調査の主体となる遺構は建物群である。ここでは、建物に注目し、その傾向を再度把握しておきたい。

立地：調査区の西側と東側に分かれて検出している。東側を東群と称し、１～５号、15号建物を充てた。一方の西群は６～９号、11号、13号、14号建物からなる。両群とも南側への緩斜面地形に立地し、台地頂部を中心として東西に分かれる配置である。両群間の距離は20mを超えることから居住者相互の関連性は弱いと考えられる。東西棟を主とすることから、南側斜面地形への影響を考慮した上での立地と思われる。

平坦面などの造成面の痕跡は見出せなかった。大規模な造成は行われていないと判断できる。また、囲繞施設としての溝状遺構や石垣などは見られなかった。

主軸：南北棟である３号、14号建物を除き、ほぼ東西棟と捉えられる。桁行方位はＮ－75°～82°－Ｅの範

囲に収まる。西群では、１号建物と２号建物の軸方位が近く、同時併存していた可能性がある。１号建物は庇付きであり、身屋ともいうべき性格が想起されよう。同様な例は東群にも見られ、７号建物と11号建物が相当しよう。11号建物に庇状の柱穴配置を見る。なお、７号建物と重なる６号建物は、桁行軸に差が見られるが７号建物と同規模の建物であり、６号→７号建物の建て替えが想定される。また８号、９号建物も７号建物と同軸方位を示し、６号建物と同様に、建て替え等の近縁性が捉えられよう。

重複：２号建物を除き、建物相互の重複が認められる。なお、柱穴同士の重複関係が捉えられたのは西群の建物を主としており、東群の柱穴は黒色土を埋土としていたため、確定的な新旧関係が把握できなかった。

西群建物の柱穴重複関係からは、４号建物(旧)→１号建物(新)、３号建物→１号建物、４号建物→３号建物、５号建物→３号建物という新旧が観察されている。このうち５号建物は、柱穴列のみの検出のため除外すると、４号建物→３号建物→１号建物という変遷が読み取れよう。４号建物と１号建物は桁行５間10mを測る身屋ともいうべき東西棟であり、４号建物→１号建物という移動の間に、南北棟の３号建物が営まれる変遷である。これは、東群の建物群でも同様と思われ、６～９号建物のような東西棟に南北棟である14号建物が配される時間的な推移が捉えられる。前述のように、東群建物は柱穴土層が良好ではないため、詳細な変遷は求められないが、西群の建物変遷の様相から、東西棟→南北棟→東西棟という変化も念頭におきたい。

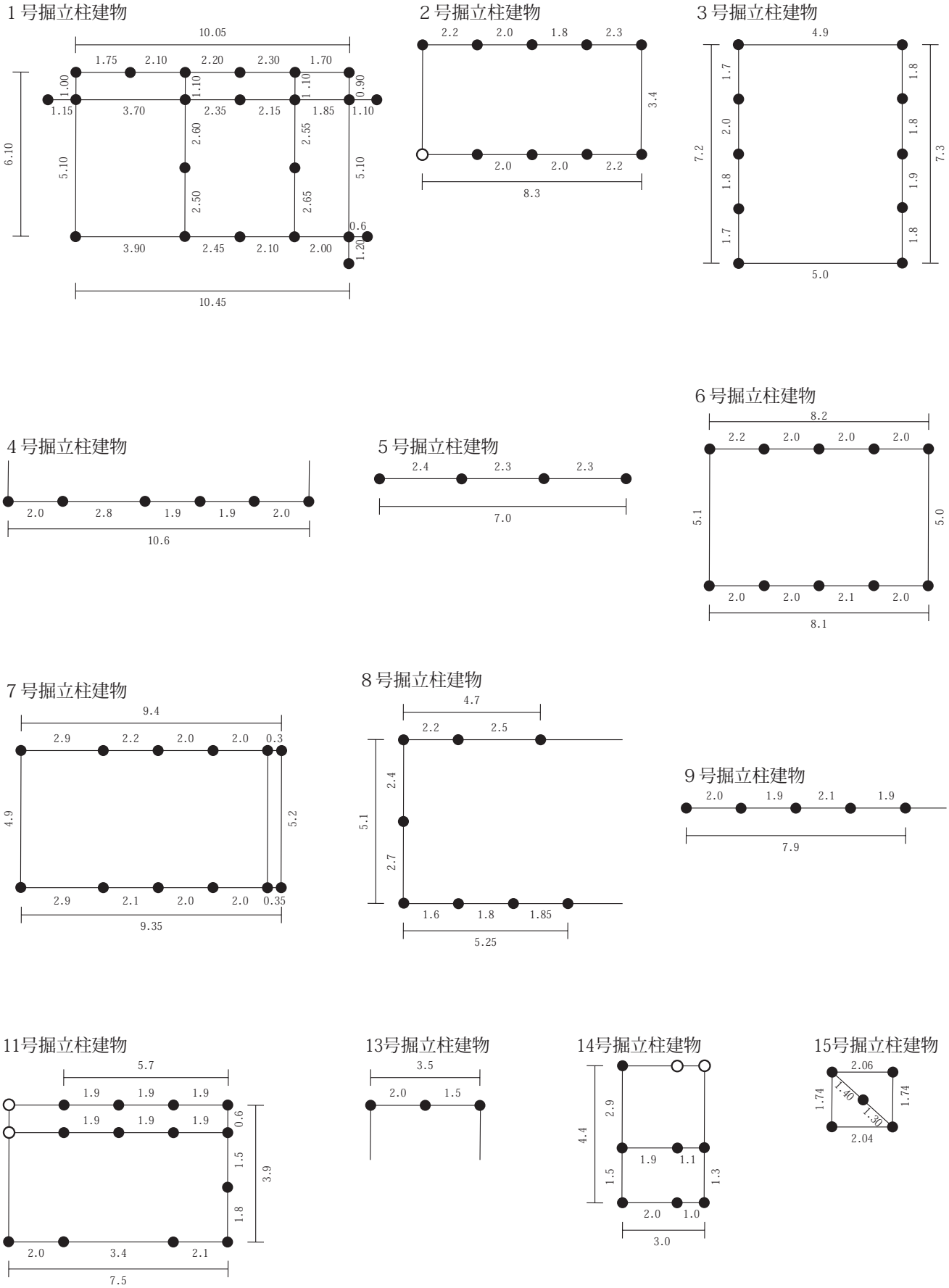
時期：１号建物柱穴より砥石、２号建物P6より鉄砲玉、５号建物P2より石臼片の出土を見る程度で、出土遺物量が少なく、明確な時期が特定できない。調査当初より、中近世という時間幅を持った時期を充てていたが、周辺地点にも類例が無く、比較検討の材料を持たない。その中で、９号土坑より出土したカワラケ片に注意を払いたい。

９号土坑は軸長２m程の不整方形を示す土坑で北壁際にやや浮いた状態で大型角礫が集中する。２号建物P5が大型礫下で検出されたことから、おそらく９号土坑が２号建物P5を切る重複関係と判断できよう。９号土坑より出土したカワラケ片は小片のため、詳細な時期判断は控えるが、一応、中世として位置付けられよう。また、図化されなかった土器片にも在地土器内耳鍋が伴出しており、このことから、９号土坑の帰属時期は中世と判断できる。９号土坑に切られる２号建物の時期であるが、古代に求めるには建物や柱穴規模が相応ではなく、また周辺に古代の遺構・遺物は出土しておらず、そのため、２号建物の時期も９号土坑と同様に中世に求めておきたい。さらに、１号建物と２号建物は主軸方位も近似し、重複もしていない。このことから両者の同時併存は前にも述べた通りである。西群内の建物において１号建物をもっとも新しい時間的位置に置くことも前に述べた。故に重複する３号、４号建物も中世に時期を求めても良いだろう。おそらく数十年単位の短時間内における移動・建て替えが行われたと判断できる。同時に立地、桁行方位が西群と類似する東群とした建物群も同様の時期を想定したい。なお、本報告書本文中では、建物の時期を中近世としているが、これは９号土坑出土カワラケが周辺からの流入で、土坑の時期が下る可能性も含んでおり、時間幅を広く設けて報告している。

隣接遺跡の建物遺構：東接する林中原Ⅰ遺跡が、中近世の掘立柱建物を多数調査している。37棟の建物から構成されており、中近世屋敷として位置付けられている。ただし、林中原Ⅰ遺跡は林城と外縁の諸施設を含んでおり、屋敷の性格としては、本遺跡の建物群と差が予想される。

林宮原遺跡は、当事業団にとっての調査は初例となったが、町教委では数度にわたり調査を行っている。９世紀後半～10世紀前半代の集落を主としており、中世建物は検出されていない。当事業団が調査した地点とも距離を置き、おそらく中世に比定され得る遺構は、本遺跡を中心とした地点に点在するのであろう。微高地周辺の散漫な分布も予想される。

今回の調査では、柱穴を主とした小規模な調査ではあったが、中世掘立柱建物群を位置付けることができた。今後、周辺調査において中世建物群がさらに充実することを期待したい。



第80図　林宮原遺跡　掘立柱建物柱間計測図

表９　遺構一覧表

掘立柱建物

遺構名	位置	平面形状	規模(m)					桁行方位	重複関係	時期	備考
	(グリッド)		桁行	梁行	床面積	柱間距離			(古→新)		
１号掘立	57区J･K－23･24、L－22～24、M－24	長方形	５間	３間	61.99	桁行	1.9～2.4	N－80°－E	３・４・５・15号掘立柱建物		縁つき
			10.0	6.3		梁行	1.1～2.7				
２号掘立	57区I-22･23、J･K－21･22	長方形	４間	１間	28.64	桁行	1.8～2.3	N－81°－E			
			8.3	3.4		梁行	3.4				
３号掘立	57区J･K－22～24	長方形	４間	１間	35.69	桁行	1.8～1.9	N－２°－E	１・４・５・15号掘立柱建物		
			7.3	5.0		梁行	5.0				
４号掘立	57区J～M－24	－	５間	－間	－	桁行	1.9～2.8	N－85°－E	１・３号掘立柱建物		
			10.6	－		梁行	－				
５号掘立	57区I～K－23	－	３間	－間	－	桁行	2.3～2.4	N－78°－W	１・３号掘立柱建物		
			7.0	－		梁行	－				
６号掘立	57区A－23･24、B－23～25、C･D－23･24	長方形	４間	１間	40.35	桁行	2.0～2.2	N－75°－E	７・８・14号掘立柱建物		
			8.2	5.1		梁行	5.1				
７号掘立	57区A－23･24、B･C－23～25、D－23･24	長方形	４間	１間	44.92	桁行	1.9～2.9	N－78°－E	６・８・14号掘立柱建物		
			9.0	5.2		梁行	5.2				
８号掘立	57区A～C－23～25	長方形	３間	２間	38.56	桁行	1.6～1.9	N－81°－E	６・７・９・14号掘立柱建物		
			5.3	5.1		梁行	2.4～2.7				
９号掘立	57区A･B－25、C－24･25	－	４間	－間	－	桁行	1.9～2.1	N－80°－E	８号掘立柱建物		
			7.9	－		梁行	－				
10号掘立	欠番										
11号掘立	57区A～C－22･23	長方形	３間	３間	27.62	桁行		N－80°－E			縁つき
			7.5	3.9		梁行	0.6～1.8				
12号掘立	欠番										
13号掘立	57区C･D－22	－	２間	－間	－	桁行	1.5～2.0	N－82°－E			
			3.5	－		梁行	－				
14号掘立	57区A･B－23･24	－	２間	２間	12.98	桁行	1.5～2.9	N－５°－E	６・７・８・11号掘立柱建物		
			4.3	3.0		梁行	1.0～2.0				
15号掘立	57区I･J－23･24	－	１間	１間	3.52	桁行	2.1	N－１°－E	１・３号掘立柱建物		
			2.1	1.7		梁行	1.7				

土坑

遺構名	位置	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
	(グリッド)		長軸(径)	短軸	深さ			
１号土坑	57区K･L－22･23	楕円形	2.30	1.88	1.32	N－90°－W		
２号土坑	57区L－23	楕円形	1.30	1.08	0.24	N－73°－E		
３号土坑	欠番							
４号土坑	57区J･K－23	円形	1.04	－	0.40	－		
５号土坑	57区J－23･24	楕円形	2.12	1.38	0.16	N－76°－E	17号ピット	
６号土坑	欠番							
７号土坑	57区J－24	楕円形	1.14	0.86	0.40	N－７°－W	18号ピット	
８号土坑	57区I･J－22	隅丸方形	2.0	2.00	0.32	N－８°－W		
９号土坑	57区I－22･23	隅丸方形	2.01	1.60	0.18	N－７°－W	92号ピット	
10号土坑	57区L－24	長楕円	1.08	0.54	0.26	N－12°－E	４・５号ピット	
11号土坑	57区A－22･23	円形	0.78	－	0.32	－		
12号土坑	57区C－25	不整形	1.04	0.58	0.22	N－59°－E		
13号土坑	57区C－22･23	円形	1.10	－	0.34	－		
14号土坑	57区D－21～23	長方形	(6.10)	0.70	0.28	N－２°－W		
15号土坑	57区D･E－22･23	円形	1.12	－	0.32	－		
16号土坑	57区E－21、F－21･22、G－21	－	－	－	－	－		

ピット

遺構名	位置	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
	(グリッド)		長軸(径)	短軸	深さ			
１号ピット	57区M－24	円形	0.28	－	0.26	－		１面、１号掘立柱建物P16
２号ピット	57区M－24	方形	0.36	－	0.44	－		４号掘立柱建物P1
３号ピット	57区M－24	不整円形	0.43	－	0.70	－		１号掘立柱建物P10
４号ピット	57区Ｌ－24	円形	0.30	－	0.58	－	10号土坑	１号掘立柱建物P15
５号ピット	57区Ｌ－24	円形	0.40	－	0.48	－	10号土坑	４号掘立柱建物P2
６号ピット	57区Ｌ－24	円形	0.40	－	0.78	－		１号掘立柱建物P9
７号ピット	57区Ｌ－24	円形	0.36	－	0.44	－		１号掘立柱建物P14
８号ピット	57区K－24	楕円形	0.50	0.40	0.58	N－26°－W		４号掘立柱建物P3
９号ピット	57区K－24	不整円形	0.50	－	1.02	－		１号掘立柱建物P8
10号ピット	57区K－24	楕円形	0.40	0.36	0.74	N－83°－W		３号掘立柱建物P7
11号ピット	57区K－23・24	円形	0.42	－	0.25	－		
12号ピット	57区K－23	円形	0.42	－	0.50	－		３号掘立柱建物P8
13号ピット	57区K－23	円形	0.30	－	0.5	－		３号掘立柱建物P9
14号ピット	57区K－24	不整円形	0.52	－	0.60	－		１号掘立柱建物P7
15号ピット	57区J－24	円形	0.30	－	0.60	－	P99	１号掘立柱建物P20
16号ピット	57区J－24	楕円形	0.58	0.52	1.04	N－８°－E	P99	１号掘立柱建物P16
17号ピット	57区J－23	楕円形	0.46	0.38	0.84	N－32°－E		15号掘立柱建物P2
18号ピット	57区J－24	楕円形	0.48	0.42	0.85	N－11°－E	７号土坑	３号掘立柱建物P2
19号ピット	57区J－23	楕円形	0.46	0.34	0.35	N－10°－E		５号掘立柱建物P3
20号ピット	57区J－23	楕円形	0.50	0.44	0.35	N－66°－W		１号掘立柱建物P19
21号ピット	57区J－23	楕円形	0.54	0.30	0.35	N－30°－E		５号掘立柱建物P2
22号ピット	57区J－23	楕円形	0.32	0.26	0.26	N－81°－E		
23号ピット	57区K－23	円形	0.26	－	0.1	－		
24号ピット	57区J－24	楕円形	0.60	0.52	0.86	N－55°－E		３号掘立柱建物P1
25号ピット	57区J－24	円形	0.40	－	0.34	－		４号掘立柱建物P5
26号ピット	57区K－24	楕円形	0.38	0.30	0.67	N－51°－W		１号掘立柱建物P12
27号ピット	57区I・J－24	円形	0.20	－	0.39	－		
28号ピット	57区I－24	不整円形	0.42	－	0.25	－		
29号ピット	57区I－23・24	楕円形	0.34	0.26	0.16	N－79°－W		
30号ピット	57区K－23	円形	0.28	－	0.34	－		５号掘立柱建物P1
31号ピット	57区K－24	不整円形	0.28	－	0.51	－		４号掘立柱建物P4
32号ピット	57区K－24	円形	0.18	－	0.33	－		
33号ピット	57区K－24	楕円形	0.45	0.36	0.63	N－90°－W		１号掘立柱建物P13
34号ピット	57区K－24・25	円形	0.24	－	0.25	－		
35号ピット	57区J－23・24	円形	0.40	－	0.80	－		15号掘立柱建物P5
36号ピット	57区J－23	楕円形	0.44	0.34	0.48	N－６°－E		３号掘立柱建物P3
37号ピット	57区J－23	円形	0.22	－	0.30	－		
38号ピット	57区I－23	楕円形	0.30	0.26	0.19	N－90°－E		15号掘立柱建物P3
39号ピット	57区I－24	楕円形	0.26	0.22	0.38	N－63°－W		
40号ピット	57区I－24	方形	0.20	－	0.40	－		
41号ピット	57区I－24・25	楕円形	0.34	0.28	0.19	N－４°－E		
42号ピット	57区I－25	円形	0.28	－	0.51	－		
43号ピット	57区I－25	不整円形	0.24	－	0.43	－		
44号ピット	57区K－24	楕円形	0.66	0.50	0.28	N－５°－W		
45号ピット	57区J－24・25	楕円形	0.34	0.28	0.37	N－90°－W		
46号ピット	57区J－24	不整円形	0.30	－	0.52	－		１号掘立柱建物P11
47号ピット	57区J－24	楕円形	0.26	0.20	0.28	N－18°－E		
48号ピット	57区Ｌ－24	円形	0.20	－	0.42	－		
49号ピット	57区K・Ｌ－23	円形	0.30	－	0.55	－		１号掘立柱建物P18
50号ピット	57区K－23	円形	0.40	－	0.44	－	１号土坑	１号掘立柱建物P4
51号ピット	57区K－23	不整円形	0.30	－	0.27	－		
52号ピット	57区K－23	楕円形	0.30	0.24	0.25	N－79°－E		１号掘立柱建物P3
53号ピット	57区J－23	円形	0.38	－	0.65	－		１面、１号掘立柱建物P2
54号ピット	57区K－22	円形	0.34	－	0.29	－		３号掘立柱建物P10
55号ピット	57区I－22	円形	0.38	－	0.44	－		２号掘立柱建物P1
56号ピット	57区I－22	円形	0.38	－	0.50	－		２号掘立柱建物P2
57号ピット	57区J－21・22	円形	0.46	－	0.44	－		２号掘立柱建物P3
58号ピット	57区J－21	円形	0.40	－	0.38	－		２号掘立柱建物P4
59号ピット	57区K－22	円形	0.38	－	0.39	－		２号掘立柱建物P9
60号ピット	57区J－22	円形	0.38	－	0.60	－		２号掘立柱建物P8
61号ピット	57区J－22	楕円形	0.42	0.32	0.55	N－０°		３号掘立柱建物P5
62号ピット	57区J－23	方形	0.26	－	0.37	－		
63号ピット	57区J－23	円形	0.58	－	0.78	－	P98	１号掘立柱建物P17
64号ピット	57区I－23	円形	0.30	－	0.37	－		５号掘立柱建物P4
65号ピット	57区I－23	不整円形	0.26	－	0.25	－		
66号ピット	57区I－25	方形	0.18	－	0.40	－		
67号ピット	57区I－25	円形	0.20	－	0.46	－		

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	規模(m) 長軸(径)	短軸	深さ	長軸方位	重複関係	時期/備考
68号ピット	57区K－22	円形	0.34	－	0.08	－		
69号ピット	57区K－22	不整円形	0.26	－	0.23	－		
70号ピット	57区K－22	楕円形	0.44	0.36	0.16	N－52°－E		
71号ピット	57区J－22	楕円形	0.44	0.30	0.20	N－64°－W		１面
72号ピット	57区J－22	円形	0.28	－	0.11	－		
73号ピット	57区K－22	楕円形	0.38	0.12	0.25	N－62°－E		１面
74号ピット	57区K－22・23	楕円形	0.38	0.28	0.10	N－48°－W		
75号ピット	57区J－22・23	円形	0.27	－	0.16	－		
76号ピット	57区J－22	楕円形	0.46	0.28	0.20	N－67°－E		１面
77号ピット	57区J－21	不整円形	0.22	－	0.28	－		
78号ピット	57区J－21	円形	0.52	－	0.20	－		
79号ピット	57区I・J－21	不整円形	0.28	－	0.29	－		
80号ピット	57区I－21	楕円形	0.30	0.26	0.54	N－84°－E		
81号ピット	57区I－22	円形	0.40	－	0.65	－	８号土坑	２号掘立柱建物P6
82号ピット	57区J－22	不整円形	0.48	－	0.64	－		２号掘立柱建物P7
83号ピット	57区I－25	楕円形	0.26	－	0.25	－		
84号ピット	57区I・J－23	楕円形	0.36	0.28	0.45	N－０°		
85号ピット	57区J－23	不整円形	0.40	－	0.39	－		
86号ピット	57区J－23	楕円形	0.38	0.30	0.38	N－77°－E		
87号ピット	57区I－23	不整円形	0.22	－	0.14	－		
88号ピット	57区I－22	不整円形	0.16	－	0.23	－		
89号ピット	57区I－23	不整円形	0.18	－	0.16	－		
90号ピット	57区I－23	円形	0.30	－	0.17	－		
91号ピット	57区J－23	不整円形	0.21	－	0.21	－		
92号ピット	57区I－22・23	円形	0.38	－	0.70	－	９号土坑	２号掘立柱建物P5
93号ピット	57区M－24	不整円形	0.30	－	0.41	－		１号掘立柱建物P22
94号ピット	57区L－22・23	円形	0.44	－	0.30	－		１号掘立柱建物P5
95号ピット	57区J－23	不整円形	0.22	－	0.13	－		１号掘立柱建物P21
96号ピット	57区K－24	楕円形	0.42	0.38	0.84	N－５°－W		３号掘立柱建物P6
97号ピット	57区J－23	円形	0.26	－	0.28	－		１号掘立柱建物P17
98号ピット	57区J－23	－	(0.34)	(0.16)	0.32	－	P63	断面図無、平面レベルより計測、３号掘立柱建物P4
99号ピット	57区J－24	不整形	0.82	0.66	0.71	N－０°	P15・16	断面図無、平面レベルより計測、４号掘立柱建物P6
100号ピット	57区H－22	円形	0.40	－	0.24	－		１面
101号ピット	57区H－22	円形	0.30	－	0.23	－		１面
102号ピット	57区J－23	不整円形	0.22	－	0.25	－		
103号ピット	57区J－23	円形	0.20	－	0.17	－		
104号ピット	57区J－23	不整円形	0.45	－	0.34	－		１面
105号ピット	57区K－23	楕円形	0.30	0.24	0.21	N－62°－E		
106号ピット	57区B－23	楕円形	0.38	0.32	0.33	N－０°		11号掘立柱建物P7
107号ピット	57区A・B－23	不整円形	0.36	－	0.23	－		14号掘立柱建物P4
108号ピット	57区A－22	不整円形	0.32	－	0.30	－		
109号ピット	57区A－22	楕円形	0.38	0.34	0.31	N－０°		11号掘立柱建物P4
110号ピット	57区A－22	楕円形	0.56	0.42	0.33	N－54°－W		
111号ピット	57区B－22	円形	0.30	－	0.22	－		11号掘立柱建物P3
112号ピット	57区D－24	円形	0.36	－	0.39	－		７号掘立柱建物P7
113号ピット	57区C－24	円形	0.24	－	0.11	－		７号掘立柱建物P8
114号ピット	57区C－24･25	楕円形	0.56	0.46	0.55	N－78°－E		１面、７号掘立柱建物P9
115号ピット	57区B－25	楕円形	0.60	0.40	0.58	N－78°－E		１面、７号掘立柱建物P10
116号ピット	57区B－25	円形	0.65	－	0.57	－		１面、７号掘立柱建物P11・12
117号ピット	57区C－24	円形	0.20	－	0.09	－		９号掘立柱建物P1
118号ピット	57区C－24･25	不整円形	0.23	－	0.14	－		９号掘立柱建物P2
119号ピット	57区D－24･25	不整円形	0.27	－	0.23	－		
120号ピット	57区D－23	不整円形	0.26	－	0.21	－		
121号ピット	57区D－23	楕円形	0.36	0.28	0.22	N－０°		７号掘立柱建物P1
122号ピット	57区D－23	不整円形	0.24	－	0.14	－		
123号ピット	57区D－22	楕円形	0.44	0.30	0.24	N－14°－E		
124号ピット	57区D－23	不整円形	0.26	－	0.14	－		
125号ピット	57区D－24	円形	0.28	－	0.47	－		６号掘立柱建物P6
126号ピット	57区C－23	不整形	0.78	0.36	0.43	N－60°－W		２面、８号掘立柱建物P1
127号ピット	57区B－23	円形	0.28	－	0.44	－		６号掘立柱建物P3
128号ピット	57区C－23	楕円形	0.48	0.40	0.23	N－17°－W		７号掘立柱建物P2
129号ピット	57区C－23	不整円形	0.28	－	0.41	－		６号掘立柱建物P2
130号ピット	57区C－23	不整円形	0.30	－	0.29	－		11号掘立柱建物P13
131号ピット	57区C－23	不整円形	0.30	－	0.21	－		11号掘立柱建物P5
132号ピット	57区B－25	円形	0.40	－	0.42	－		８号掘立柱建物P6

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	規模(m) 長軸(径)	短軸	深さ	長軸方位	重複関係	時期/備考
133号ピット	57区B－25	楕円形	0.38	0.30	0.53	N－61°－E		９号掘立柱建物P4
134号ピット	57区C－23	不整円形	0.22	－	0.13	－		
135号ピット	57区B－23	円形	0.28	－	0.28	－		14号掘立柱建物P2
136号ピット	57区C－25	円形	0.40	－	0.63	－		８号掘立柱建物P5
137号ピット	57区B－23	円形	0.32	－	0.49	－		６号掘立柱建物P4
138号ピット	57区C－24	円形	0.30	－	0.50	－		６号掘立柱建物P8
139号ピット	57区B－24	円形	0.32	－	0.62	－		６号掘立柱建物P9
140号ピット	57区B－25	不整円形	0.34	－	0.60	－		６号掘立柱建物P10
141号ピット	57区B・C－25	不整円形	0.30	－	0.42	－		９号掘立柱建物P3
142号ピット	57区B－25	楕円形	0.26	0.20	0.13	N－39°－E		
143号ピット	57区B－25	楕円形	0.46	0.38	0.36	N－28°－E		８号掘立柱建物P7
144号ピット	57区A・B－25	楕円形	0.36	0.30	0.50	N－33°－W		９号掘立柱建物P5
145号ピット	57区C－24	不整円形	0.42	－	0.35	－		８号掘立柱建物P8
146号ピット	57区C－24	楕円形	0.32	0.26	0.59	N－87°－E		６号掘立柱建物P7
147号ピット	57区B－24	楕円形	0.26	0.22	0.25	N－84°－E		
148号ピット	57区B－23	楕円形	0.36	0.26	0.20	N－90°－W		８号掘立柱建物P3
149号ピット	57区B－23	楕円形	0.40	0.28	0.28	N－85°－E		14号掘立柱建物P5
150号ピット	57区A－23	円形	0.34	－	0.25	－		１面、11号掘立柱建物P10
151号ピット	57区B－23	楕円形	0.56	0.40	0.24	N－80°－E		７号掘立柱建物P4
152号ピット	57区B－23	楕円形	0.42	0.36	0.30	N－13°－E	P153	
153号ピット	57区B－23	不整円形	0.28	－	0.47	－	P152	11号掘立柱建物P12
154号ピット	57区C・D－25	楕円形	0.32	0.24	0.19	N－19°－E		
155号ピット	57区C－23	楕円形	0.34	0.26	0.20	N－73°－E		６号掘立柱建物P1
156号ピット	57区B－23	円形	0.38	－	0.30	－		７号掘立柱建物P3
157号ピット	57区A・B－23	楕円形	0.70	0.40	0.32	N－22°－W		１面、６・７号掘立柱建物P5
158号ピット	57区A－23・24	不整楕円形	0.46	0.36	0.26	N－22°－W		１面、７号掘立柱建物P6、８号掘立柱建物P4
159号ピット	57区B－23	楕円形	0.34	0.30	0.14	N－０°		８号掘立柱建物P2
160号ピット	57区A－24	－	(0.30)	(0.10)	0.39	－		
161号ピット	57区A－23	円形	0.30	－	0.20	－		11号掘立柱建物P9
162号ピット	57区A－23	円形	0.36	－	0.12	－		14号掘立柱建物P6
163号ピット	57区B－23	不整円形	0.30	－	0.33	－		11号掘立柱建物P6
164号ピット	57区B－23	不整円形	0.26	－	0.22	－		
165号ピット	57区D－22	円形	0.40	－	0.45	－		13号掘立柱建物P2
166号ピット	57区B・C－22	円形	0.36	－	0.26	－		11号掘立柱建物P2
167号ピット	57区C－22	円形	0.40	－	0.35	－		11号掘立柱建物P1
168号ピット	57区D－22	円形	0.38	－	0.42	－		13号掘立柱建物P1
169号ピット	57区B－23	方形	0.20	－	0.17	－		断面図無、平面レベルより計測、11号掘立柱建物P11
170号ピット	57区A－23	楕円形	0.30	0.24	0.11	N－０°		断面図無、平面レベルより計測、11号掘立柱建物P8
171号ピット	57区B－22	楕円形	0.32	0.26	0.18	N－37°－E		
172号ピット	57区C－22	円形	0.30	－	0.38	－		13号掘立柱建物P3

表10　遺物観察表

１号掘立柱建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第64図 PL.34	1	石製品 砥石か	97号ﾋﾟｯﾄ(P17) 完形	長	3.4	厚	2.2	流紋岩	砥石の再加工品と思われ、上下面を含む全面に研磨が及ぶ。	
				幅	2.3	重	26.4			

２号掘立柱建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65図 PL.34	1	金属製品 鉄砲玉	81号ﾋﾟｯﾄ(P6) 完形	長	1.2	厚	1.2		鉛製と思われる。	
				幅	1.2	重	9.4			

５号掘立柱建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第68図 PL.34	1	石製品 石臼	21号ﾋﾟｯﾄ(P2) 受け皿部片	長	(12.5)	厚	4.6	粗粒輝石安山岩	２と同一個体。受け皿部片で、下部に高台が付くと思われる。	下臼
				幅	(7.2)	重	358.7			
第68図 PL.34	2	石製品 石臼	21号ﾋﾟｯﾄ(P2) 受け皿部片	長	(6.2)	厚	(2.9)	粗粒輝石安山岩	１と同一個体。受け皿部片で、下部に高台が付くと思われる。	下臼
				幅	(3.6)	重	55.9			

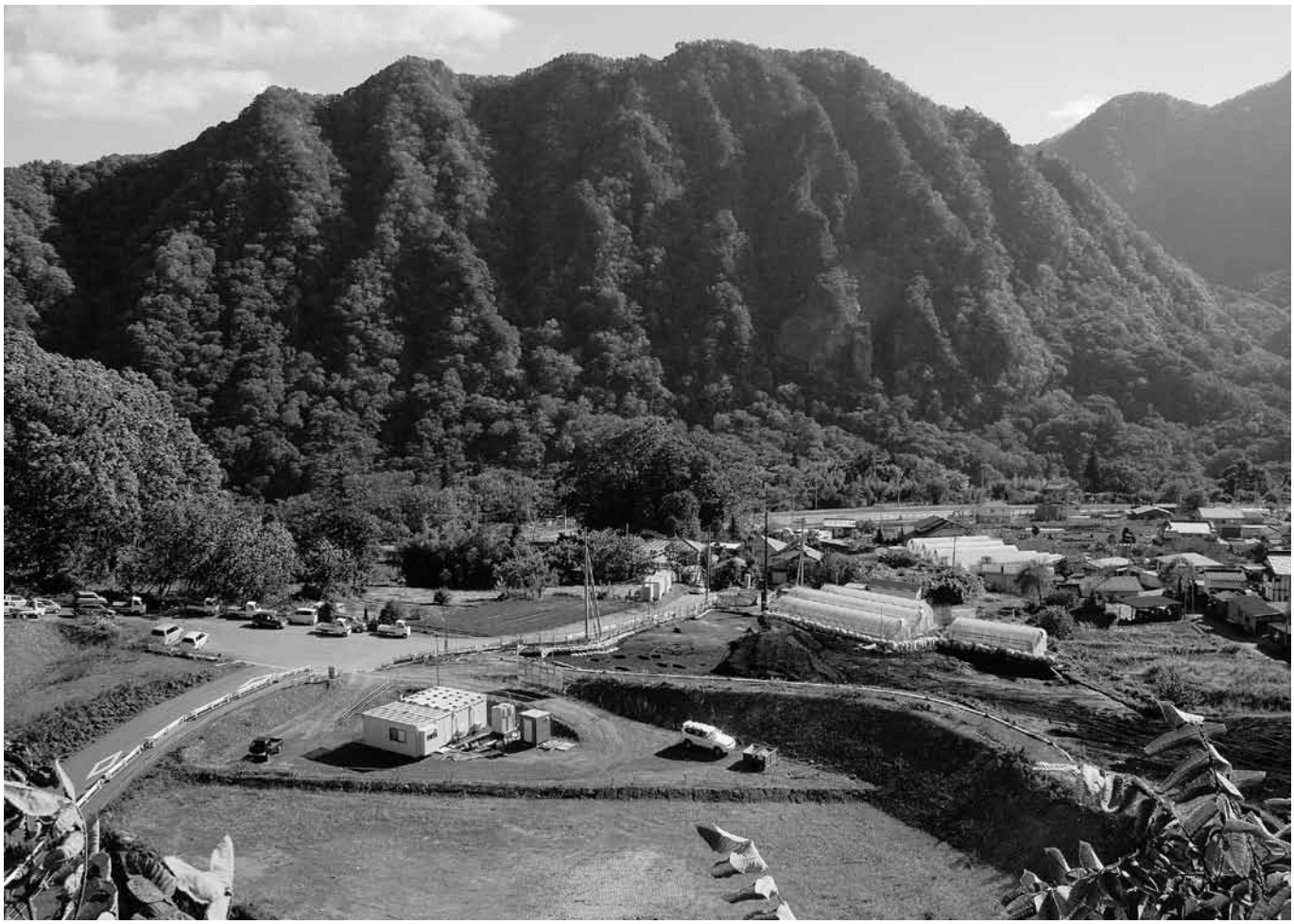
８・９・16号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第76図 PL.34	1	鉄製品 釘	８号土坑 完形	長 幅	(3.3) 0.5	厚 重	0.5 1.9		短い角釘で、頭部は屈曲して平らとなり、下端が曲がっている。	
第76図 PL.34	2	在地土器 カワラケ	９号土坑 口縁部片	口 底	7.6 5.0	高	1.9	細砂粒/酸化煙/橙色	ロクロ整形。底面に回転糸切り痕あり。	
第78図 PL.34	3	石製品 石臼	16号土坑 1/3	径 高	30.9 12.2	重	7100.0	粗粒輝石安山岩	使い込まれ、すり合わせ部は摩耗している。臼の上面に刻まれた溝は痕跡程度。芯棒孔は狭く、径２㎝。	下臼

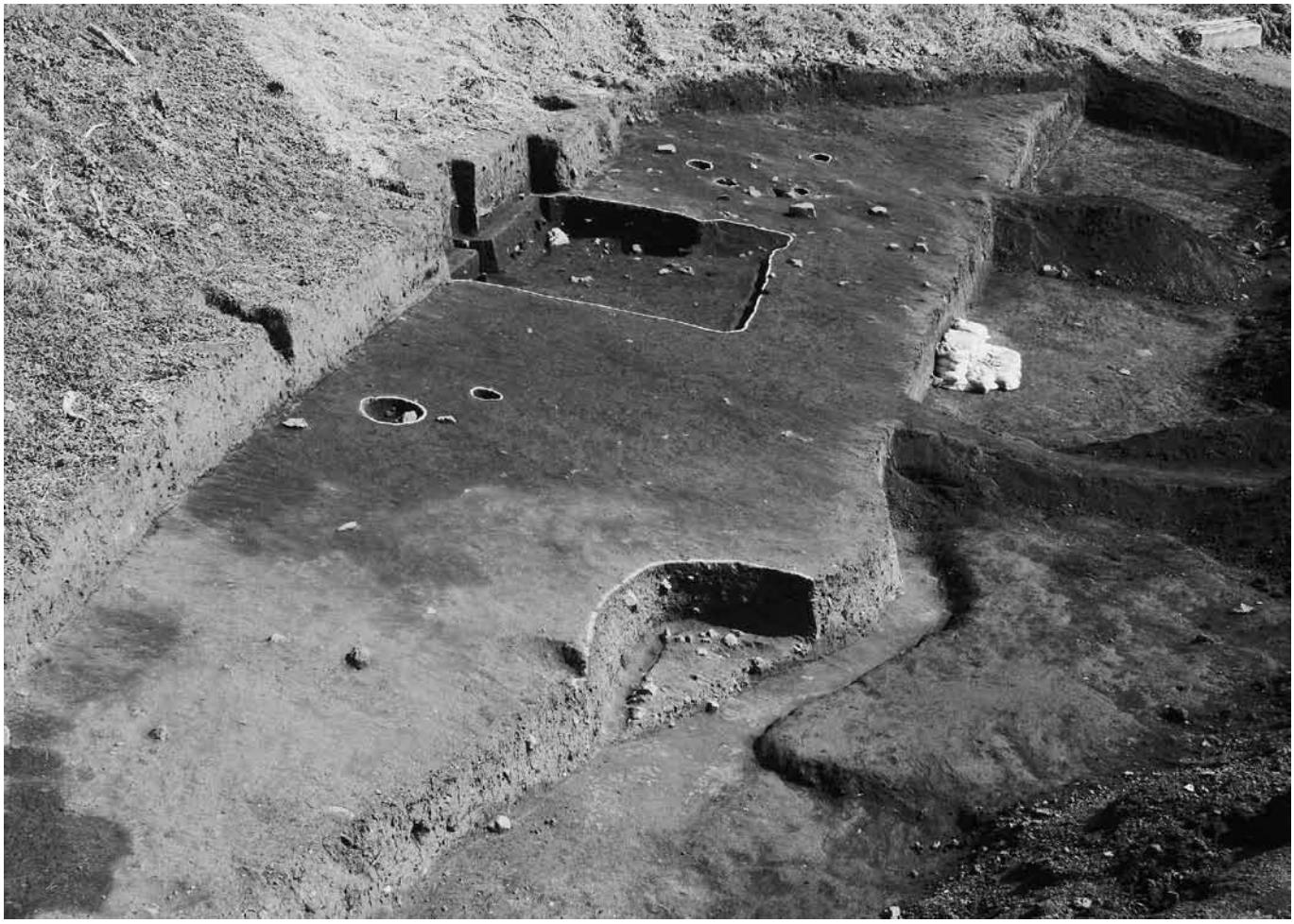
遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)・(g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第79図 PL.34	1	縄文土器 深鉢	A-23ｸﾞﾘｯﾄﾞⅡ層 胴部片					粗砂	胴部に間に刺突列をもつ２本の隆帯を回らせて文様帯区画し、区画内に隆帯と沈線で曲線的な文様を描く。	縄文時代中期
第79図 PL.34	2	縄文土器 深鉢	132号ﾋﾟｯﾄ 口縁部片					粗砂	直立する平口縁で、口縁下に狭い無文帯をもち、以下の胴部に縦位・横位に細い条線で文様を描く。	縄文時代後期
第79図 PL.34	3	在地土器 内耳鍋	71号ﾋﾟｯﾄ 口縁部片					粗砂粒/酸化煙/褐橙色	口縁部がやや膨れる平口縁で、口端は平ら。外内面は横ナデで、内面口縁下に耳部をもつ。	
第79図 PL.34	4	鉄製品 釘	K-22ｸﾞﾘｯﾄﾞ２層 下半欠	長 幅	3.7 0.7	厚 重	0.7 2.6		下半を欠く角釘で、頭部は屈曲して平らとなる。	
第79図 PL.34	5	鉄製品 釘	J-22ｸﾞﾘｯﾄﾞ３層 上半欠	長 幅	(3.8) 0.8	厚 重	0.6 2.3		上半を欠く角釘。	
第79図 PL.34	6	鉄製品 釘	K-22ｸﾞﾘｯﾄﾞ 上半欠	長 幅	(3.4) 0.4	厚 重	0.4 1.4		上半を欠く角釘。	
第79図 PL.34	7	金属製品 銭貨	86号ﾋﾟｯﾄ 完形	径 孔	2.5 0.6	厚 重	0.1 2.6		「大觀通寶」(1107)、北宋。	
第79図 PL.34	8	金属製品 銭貨	I-25ｸﾞﾘｯﾄﾞ 完形	径 孔	2.4 0.6	厚 重	0.1 2.6		「天禧通寶」(1018)、北宋。	
第79図 PL.34	9	金属製品 銭貨	表採 完形	径 孔	2.4 0.7	厚 重	0.1 2.9		「元祐通寶」(1093)、北宋。	
第79図 PL.34	10	金属製品 銭貨	表採 半欠	径 孔	(2.6) (0.6)	厚 重	0.1 1.3		「文久永寶」(文久年間)、背面に波あり。	
第79図 PL.34	11	石製品 碁石	J-22ｸﾞﾘｯﾄﾞ2層 完形	長 幅	2.0 2.0	厚 重	0.6 2.7	珪質変質岩	白碁石で、表面がやや荒れている。	
第79図 PL.34	12	石製品 石鉢	２号試掘ﾄﾚﾝﾁ 1/6	長 幅	(13.6) (8.4)	高 重	8.2 695.9	粗粒輝石安山岩	平口縁で、体部外面が膨らむように湾曲する。	

写 真 図 版



1　遠景(北から)



2　91区西　第1面　全景(北から)

1　91区東・81区　第１面　全景(北から)

2　91区東・81区　第２面　全景(北から)

1　第１面　91区１号住居　全景(西から)

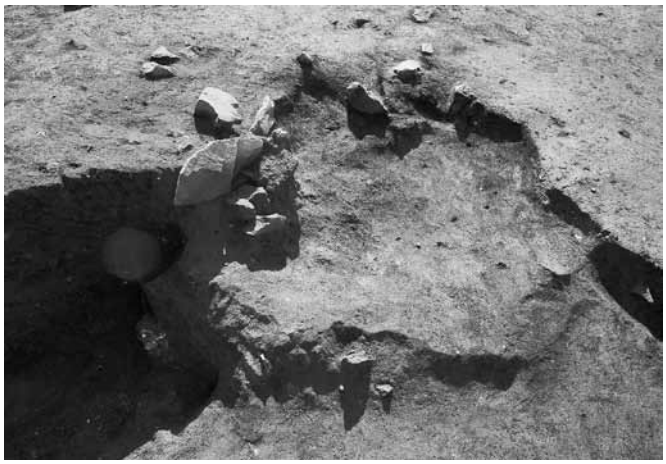
2　第１面　91区１号住居　掘り方(南から)

3　第１面　91区２号住居　遺物出土状況(西から)

4　第１面　91区２号住居　全景(西から)

5　第１面　91区２号住居　掘り方(西から)

6　第１面　91区２号住居　１号カマド(北西から)



7　第１面　91区２号住居　１号カマド(北西から)

8　第１面　91区２号住居　２号カマド(南から)

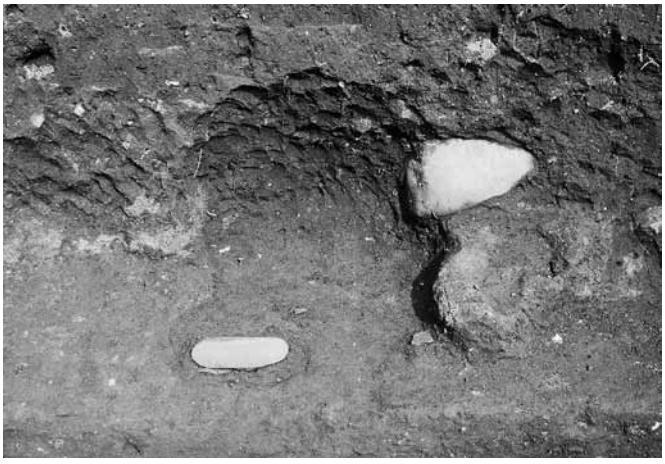
1　第１面　91区３号住居　全景(西から)

2　第１面　91区３号住居　掘り方(西から)

3　第１面　91区３号住居　カマド(西から)

4　第１面　91区２・４号住居　重複状況(南から)

5　第１面　91区４号住居　全景(南から)



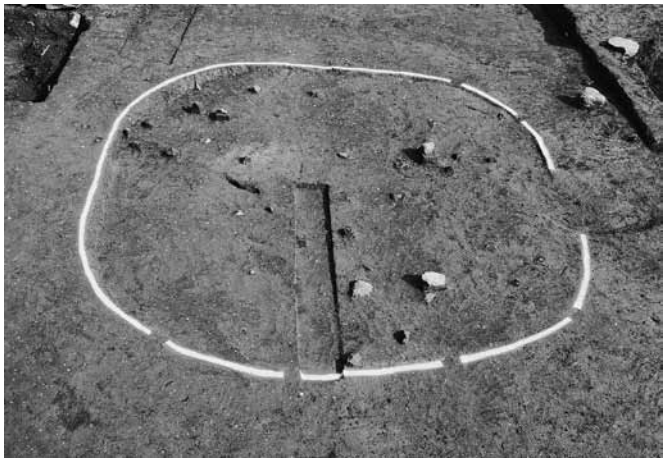
6　第１面　91区４号住居　カマド(南から)

7　第２面　91区５号住居　全景(南から)

8　第２面　91区５号住居　全景(南西から)

1　第２面　91区６号住居　全景(南から)

2　第２面　91区６号住居　遺物出土状況(南西から)



3　第２面　91区７号住居　全景(西から)

4　第２面　91区８号住居　遺物出土状況(南から)

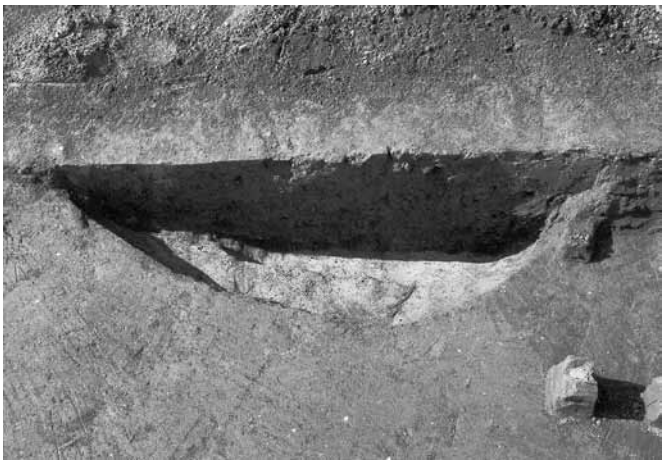
5　第２面　81区１号住居　床面(南から)

6　第２面　81区１号住居　遺物出土状況(西から)

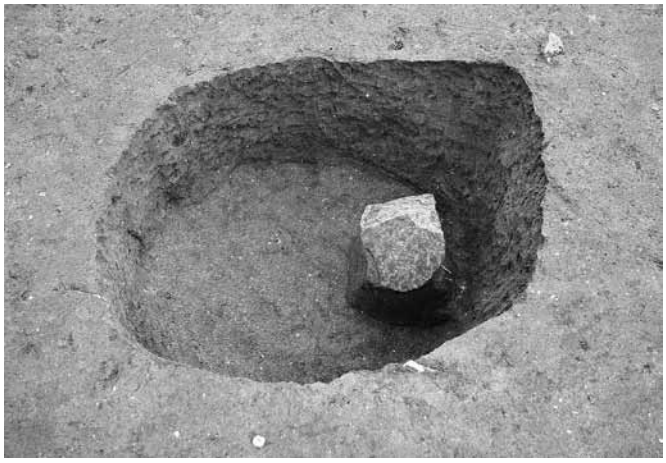
7　第２面　81区２号住居　遺物出土状況(南から)

8　第２面　81区２号住居　床面全景(西から)

1　第２面　81区２・３号住居　床面全景(南西から)



2　第２面　81区４号住居　床面全景(東から)



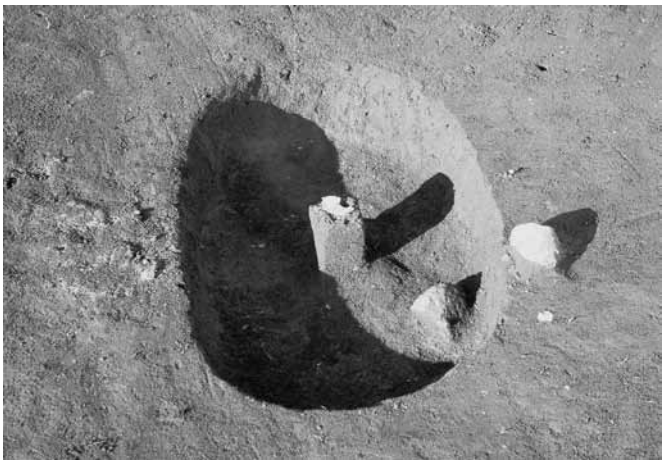
3　第１面　91区１号土坑　全景(東から)

4　第１面　91区２号土坑　全景(南から)

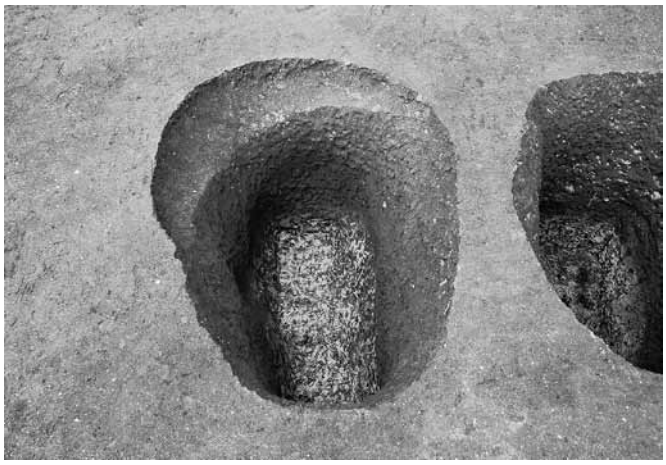
5　第１面　91区３号土坑　全景(東から)

6　第１面　91区５号土坑　全景(南から)

7　第１面　91区６号土坑　全景(南から)



8　第１面　91区７号土坑　全景(南から)



1　第１面　91区８号土坑　全景(南から)

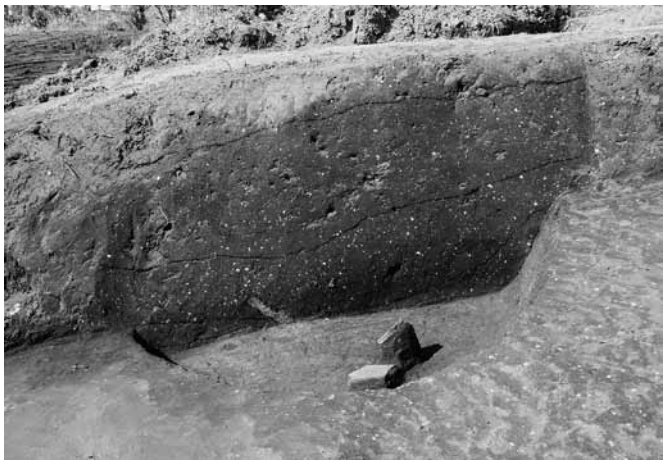
2　第１面　91区９号土坑　全景(南から)

3　第１面　91区10号土坑　上面(南から)

4　第１面　91区10号土坑　全景(南から)

5　第１面　91区11号土坑　全景(南東から)

6　第１面　91区12号土坑　全景(東から)



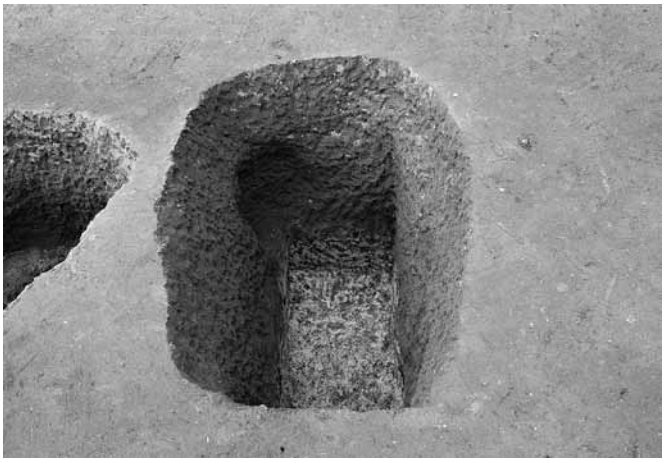
7　第２面　91区13号土坑　全景(東から)

8　第２面　91区15号土坑　全景(南から)

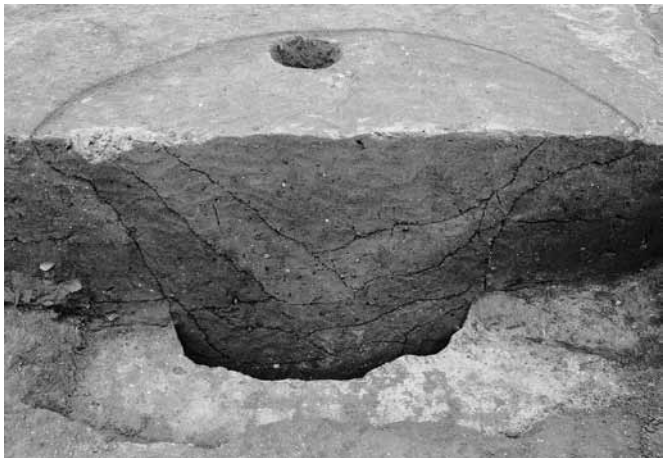
1　第１面　81区１号土坑　全景(南から)

2　第１面　81区２号土坑　全景(南から)

3　第１面　81区３号土坑　全景(南から)



4　第１面　81区４号土坑　全景(南から)



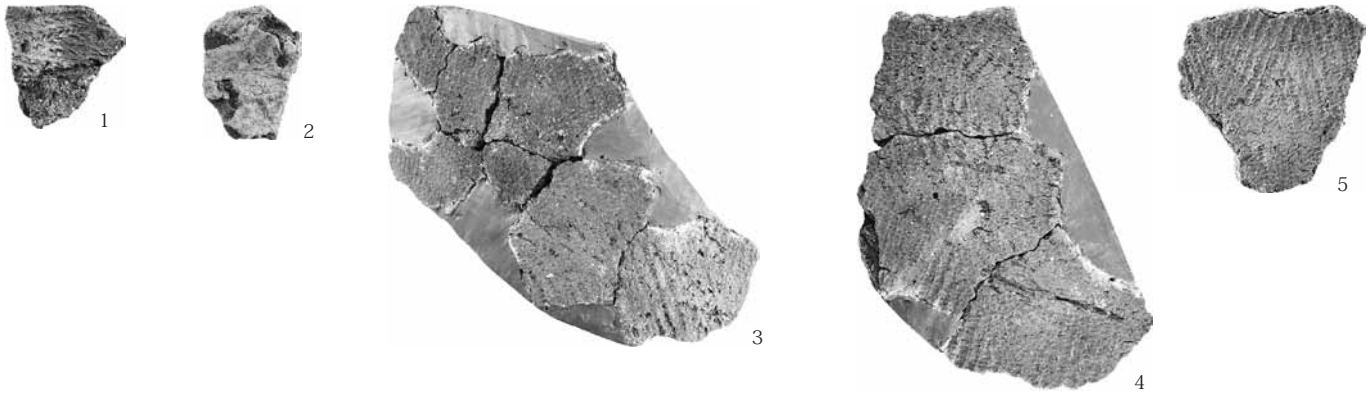
5　第１面　81区５号土坑　土層断面(西から)

6　第１面　81区５号土坑　全景(南から)

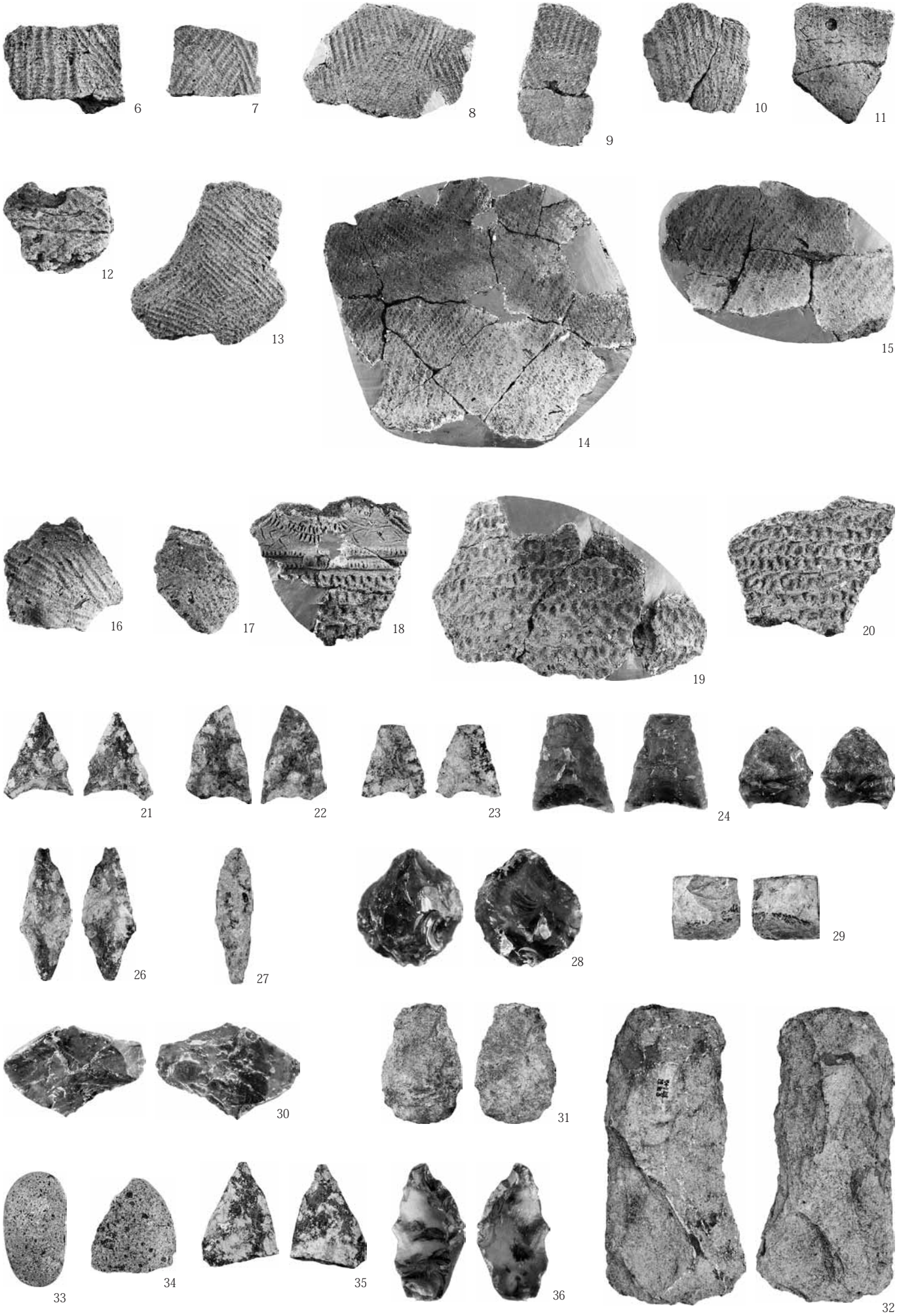
7　第２面　81区H-23グリッド遺物出土状況(西から)

8　第２面　81区H-24グリッド遺物出土状況(南から)

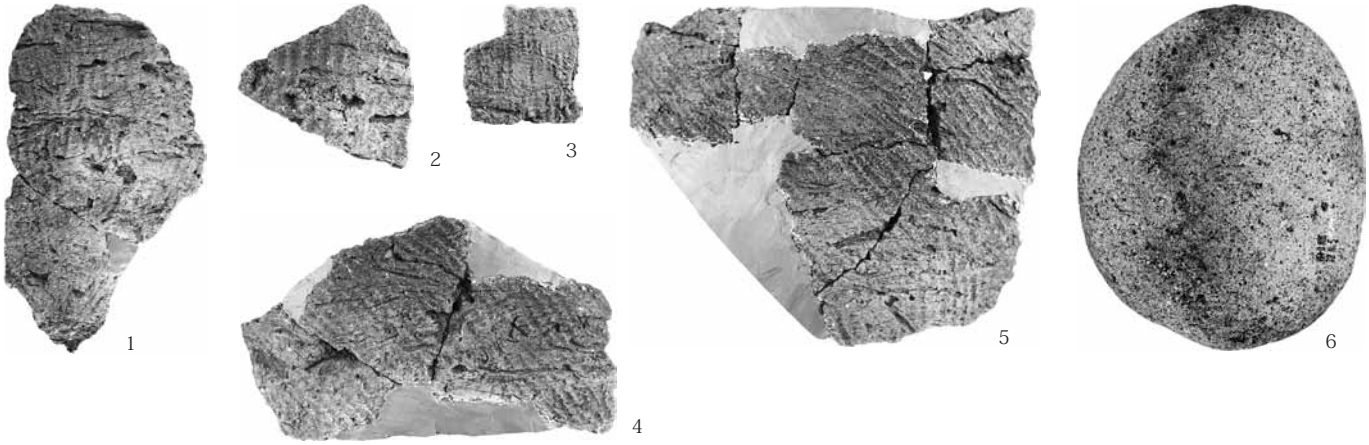
81区１号住居出土遺物



81区２号住居出土遺物（１）



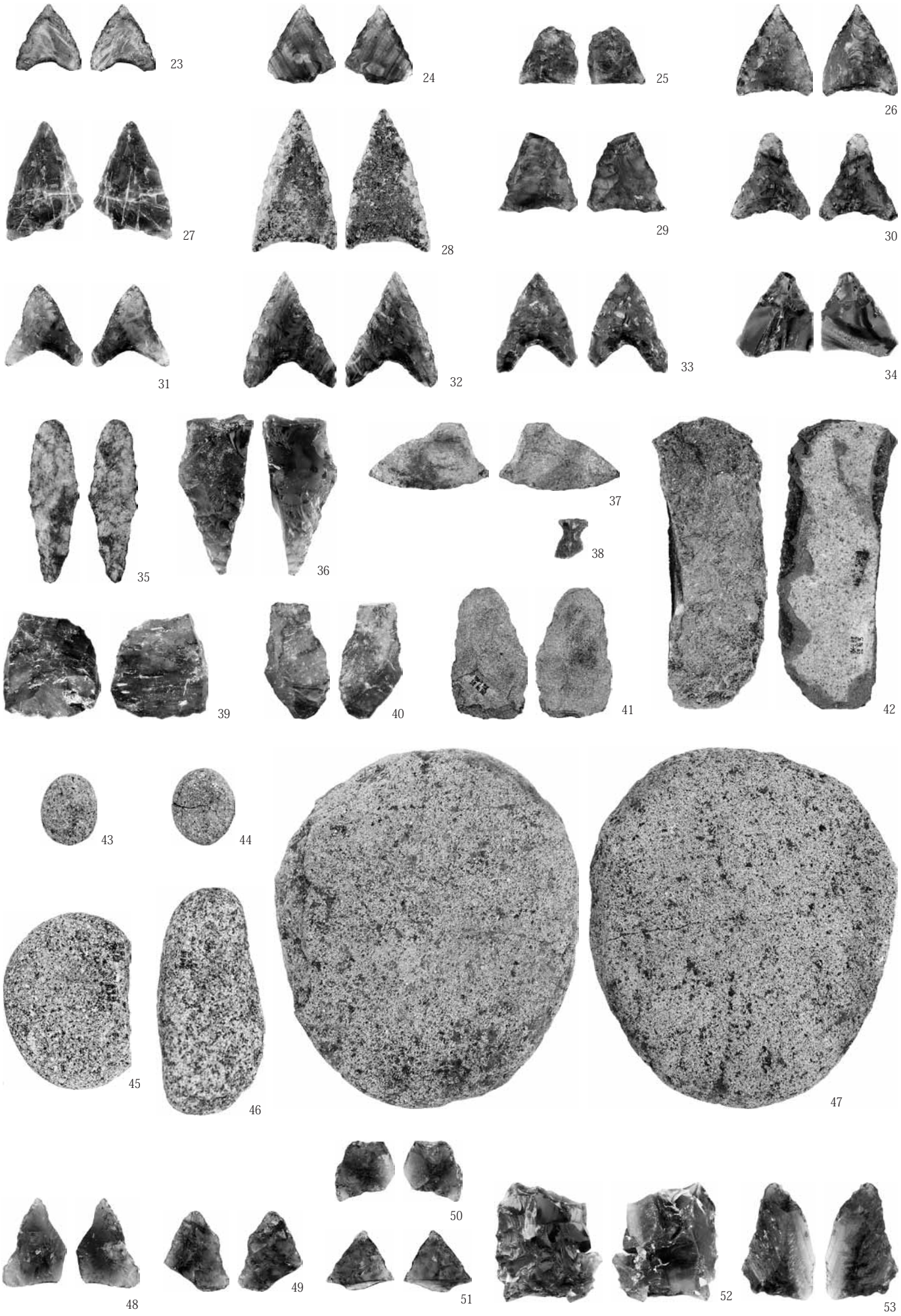
81区２号住居出土遺物（２）



81区３号住居出土遺物

81区４号住居出土遺物

91区５号住居出土遺物（１）



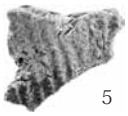
91区５号住居出土遺物（２）

1

2

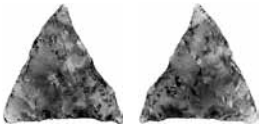
3

4

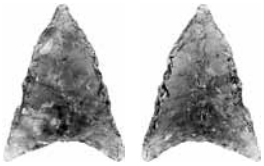

5

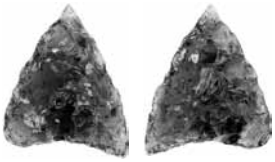
6

7


8

9


10


11

12

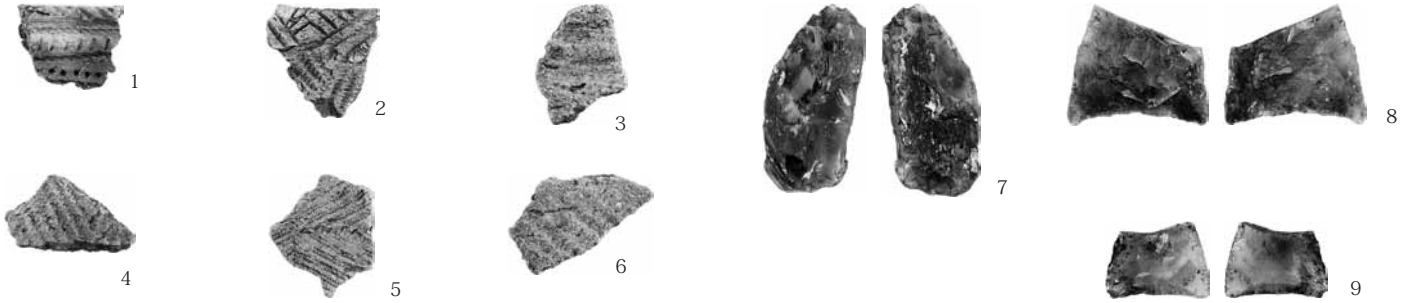
13

14

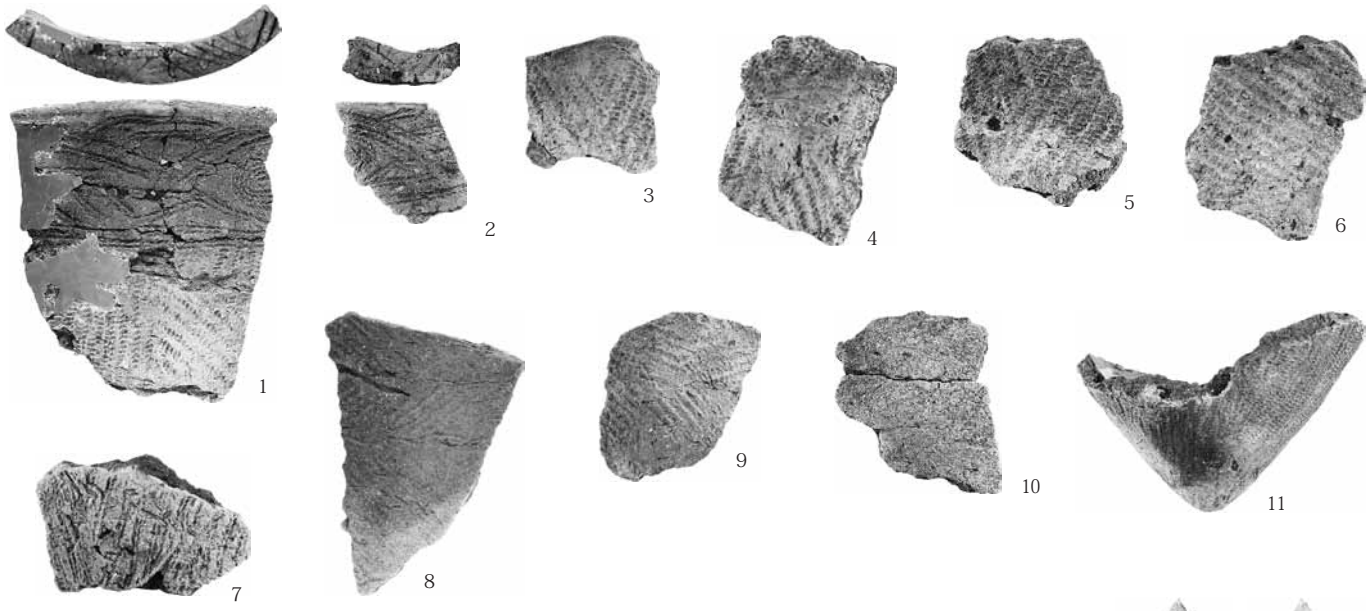
15

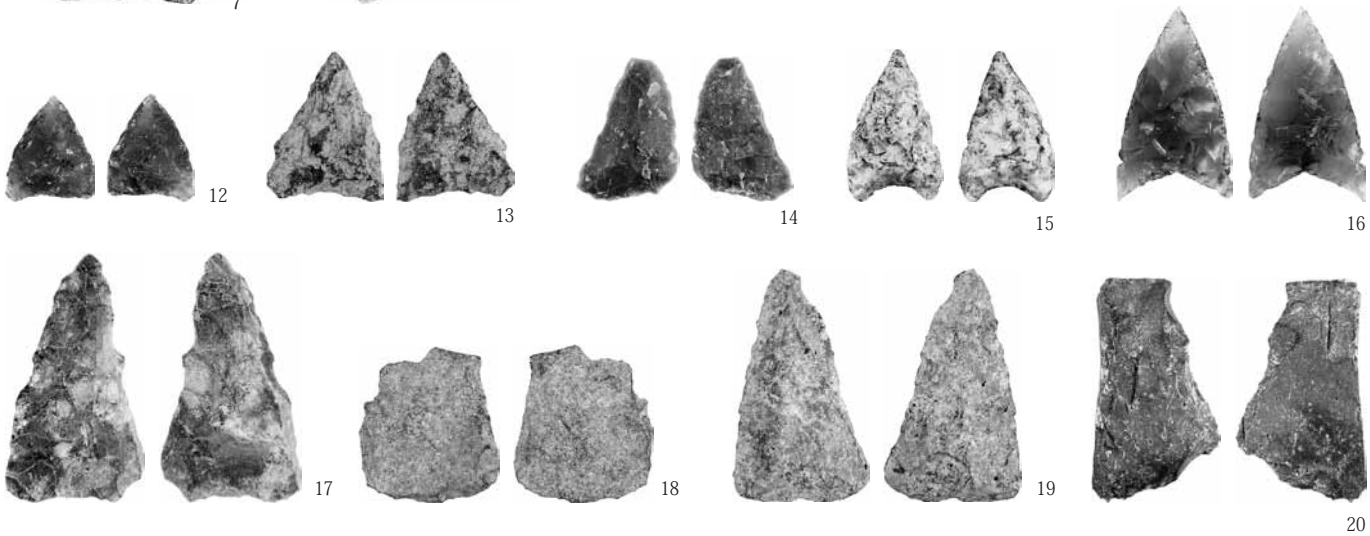
16

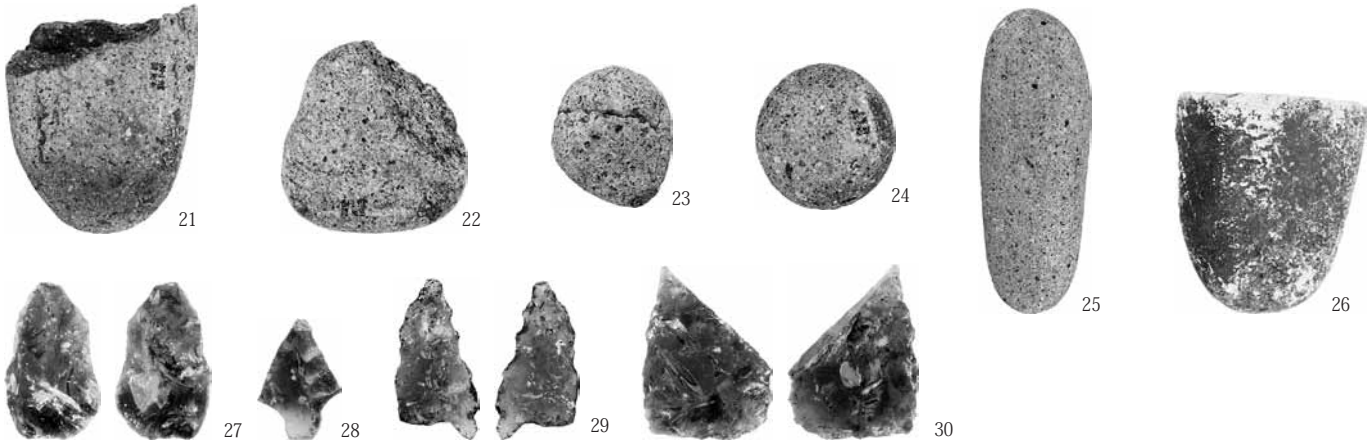
91区６号住居出土遺物



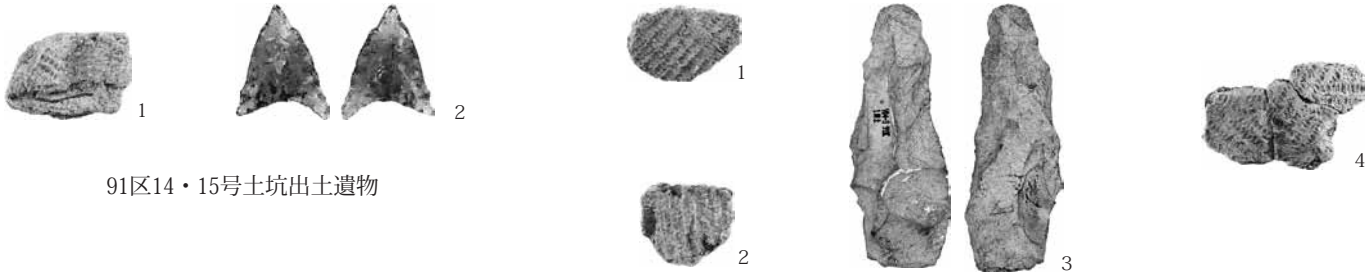
91区７号住居出土遺物





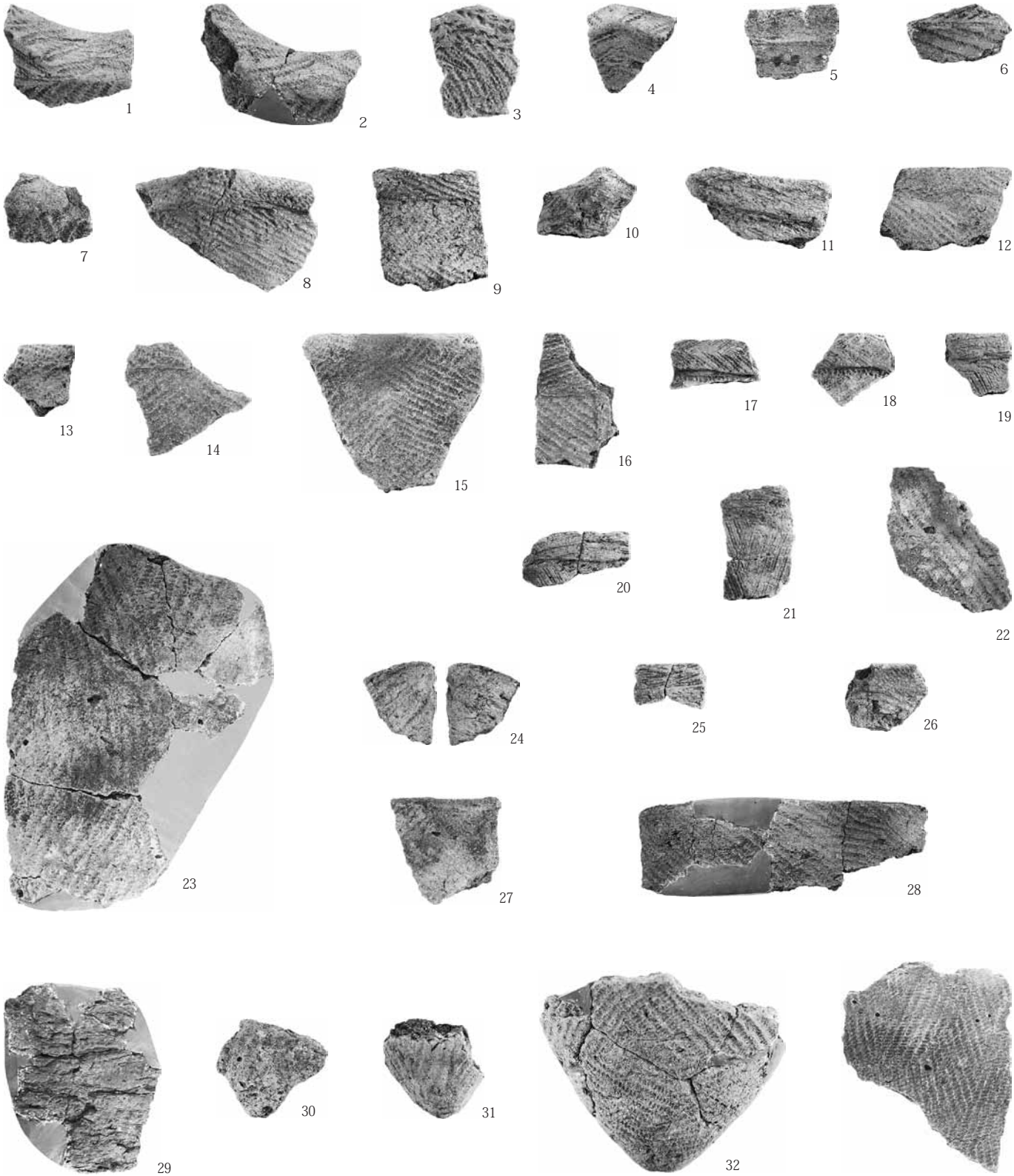


91区８号住居出土遺物

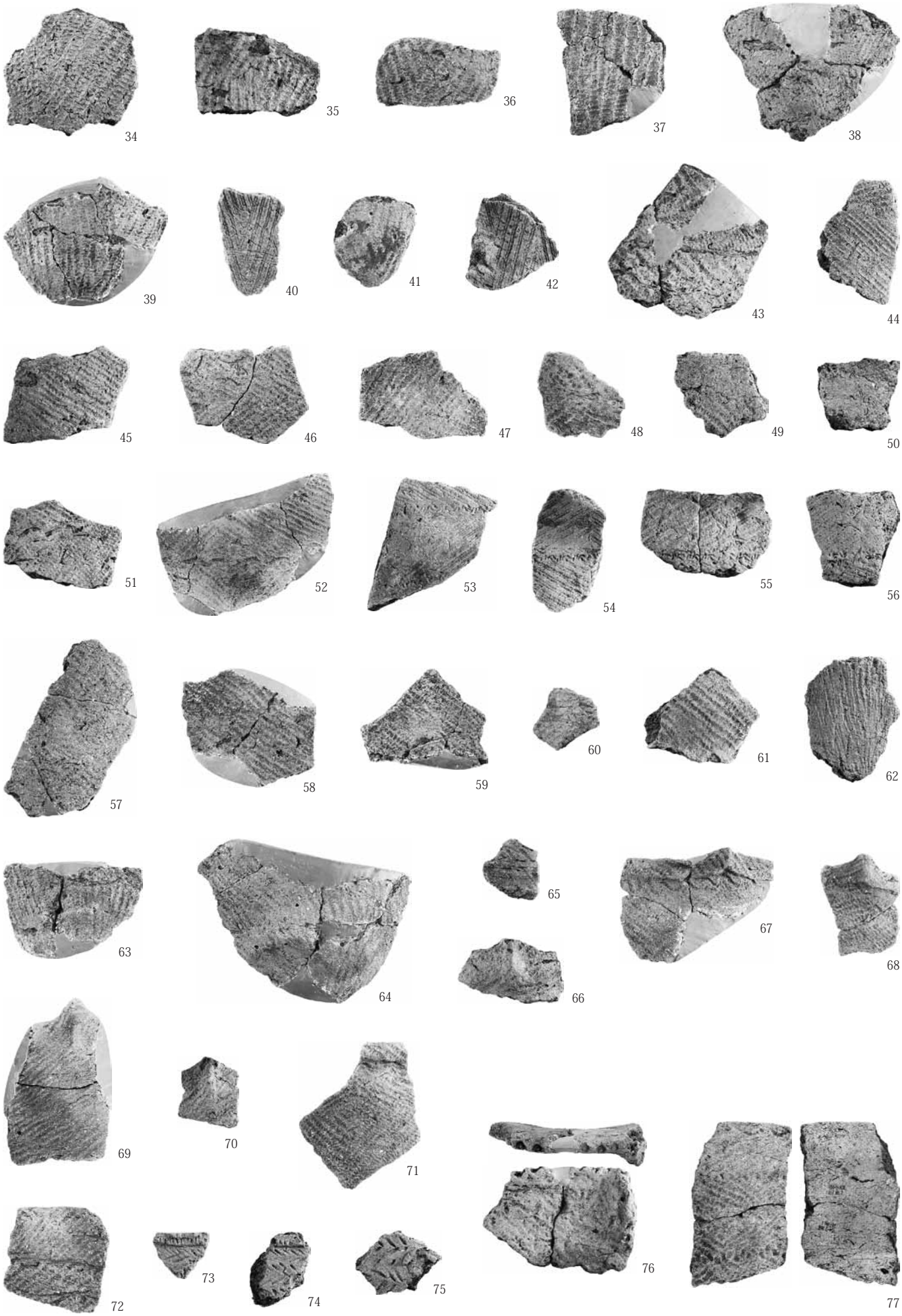


91区14・15号土坑出土遺物

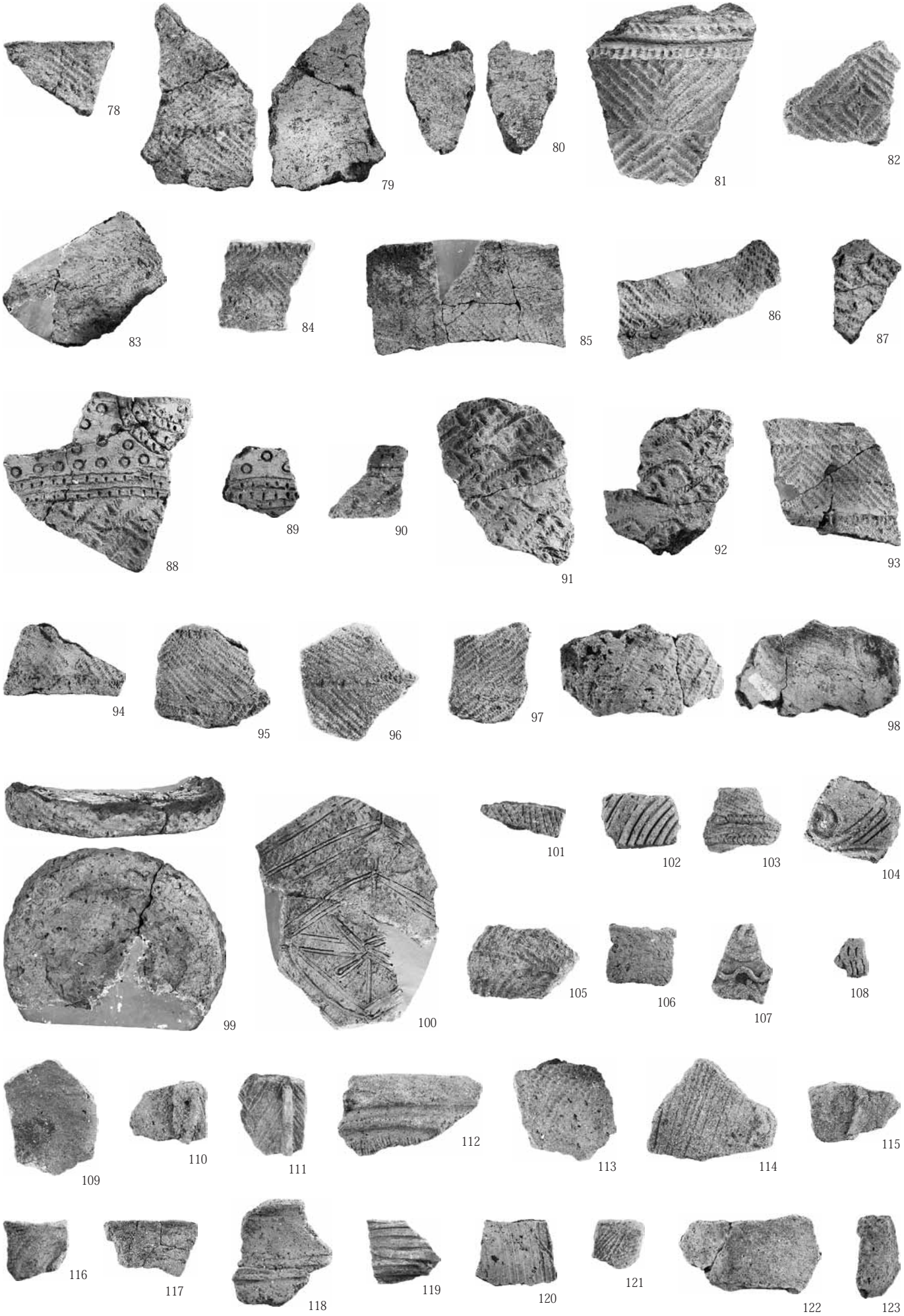
91区１・３号焼土出土遺物



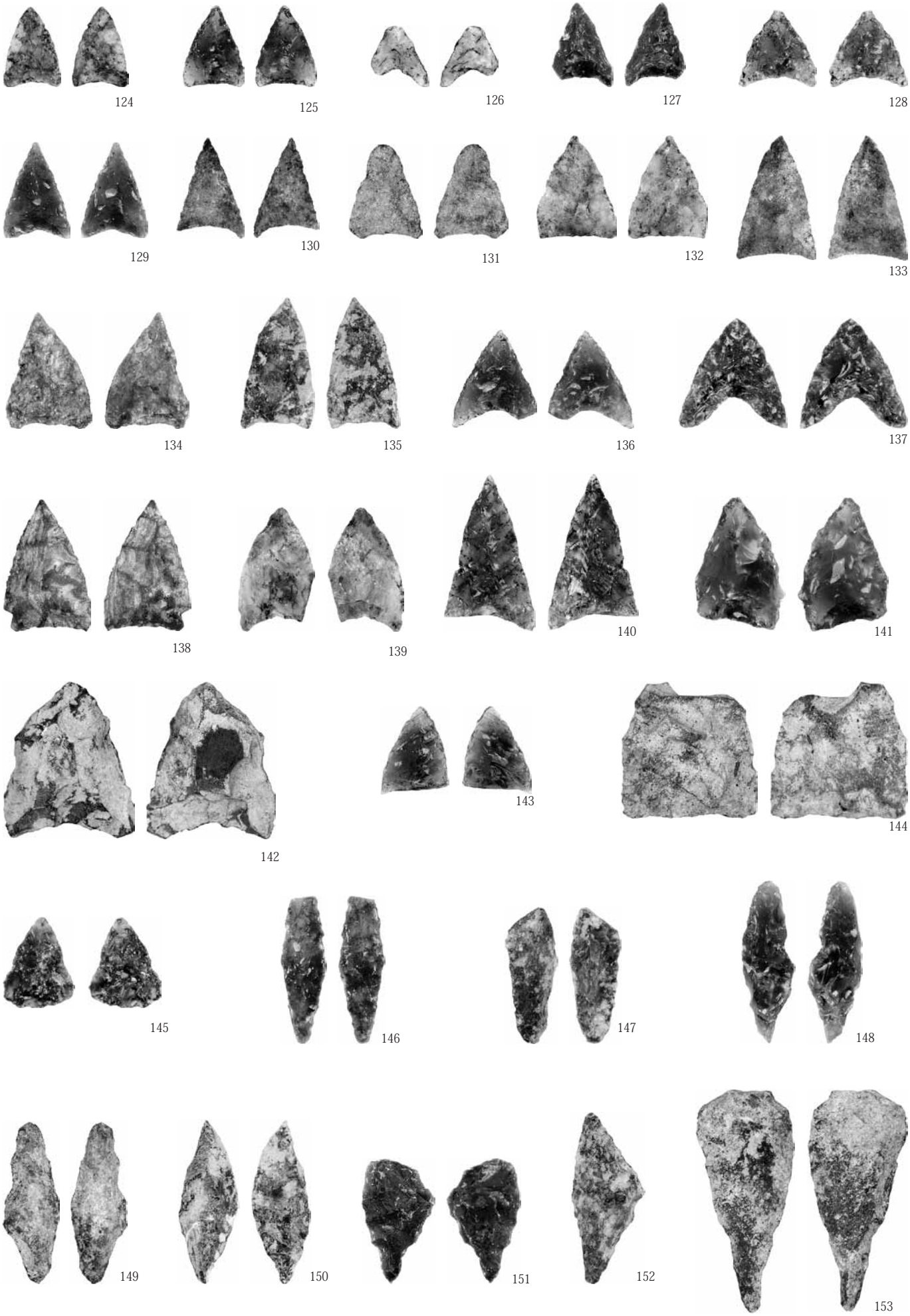
遺構外出土遺物（１）


34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77

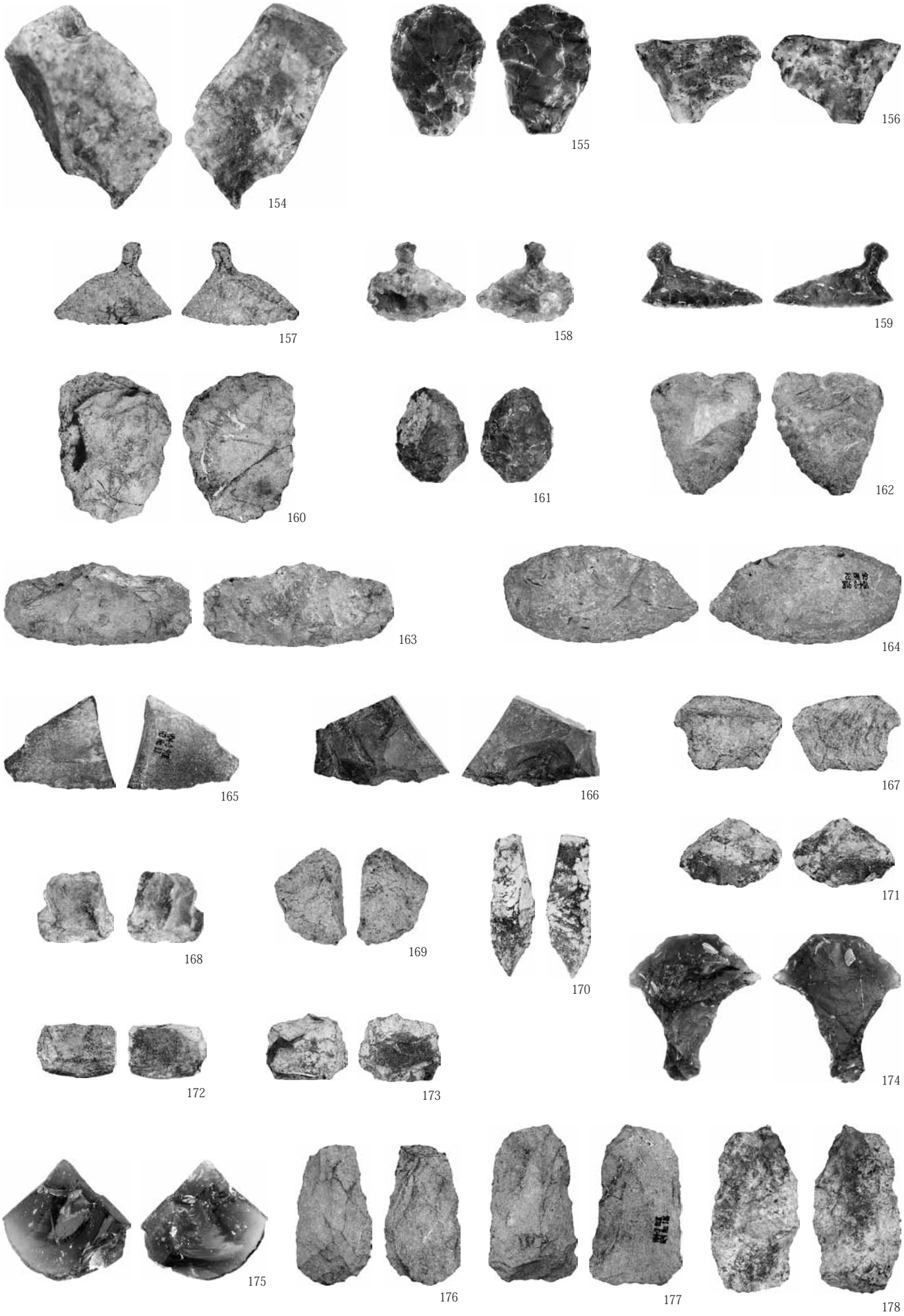
遺構外出土遺物（２）


78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123

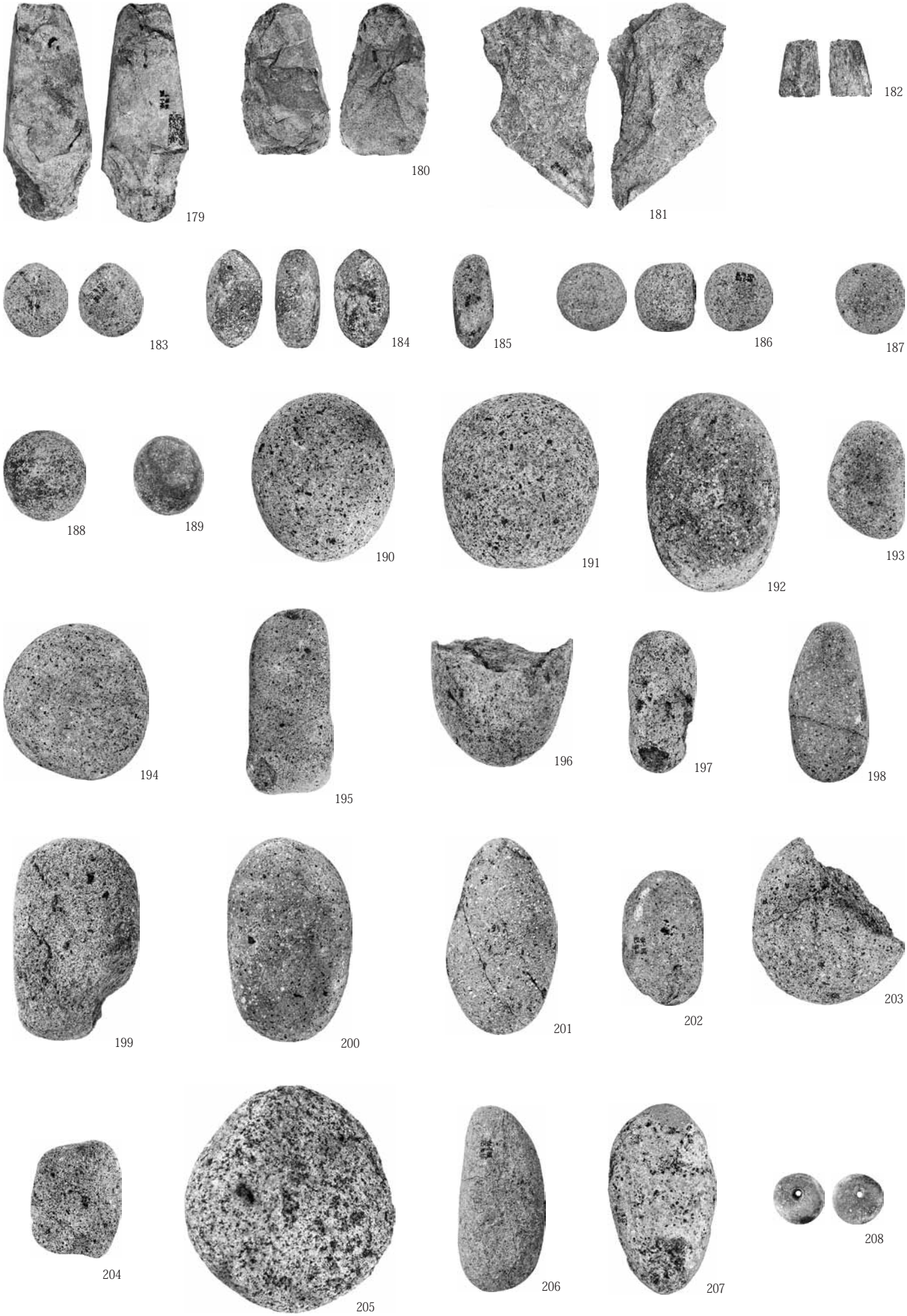
遺構外出土遺物（３）


124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153

遺構外出土遺物（４）

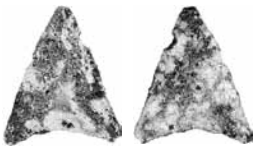

154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178

遺構外出土遺物（５）


179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208

遺構外出土遺物（６）

209


210

211

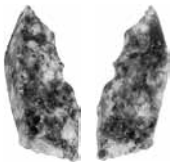
212

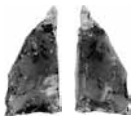
213

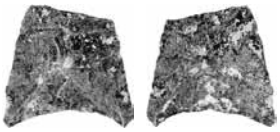
214

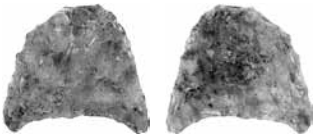
215

216


217

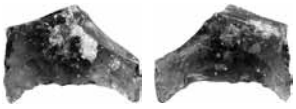

218

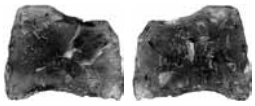

219


220

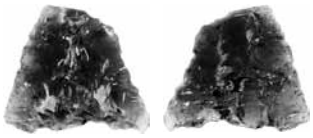
221

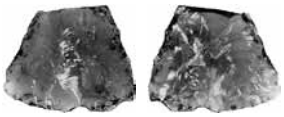
222


223

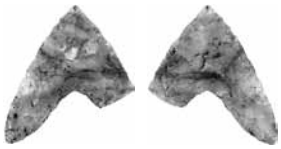

224

225


226

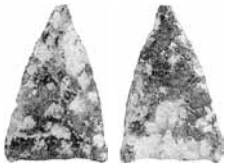

227

228

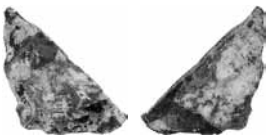

229

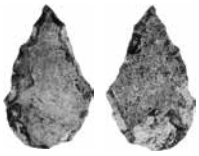
230

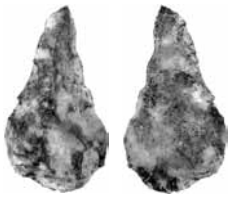
231

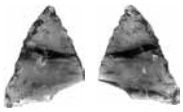

232

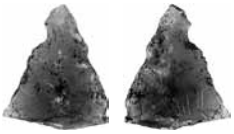
233


234


235


236


237

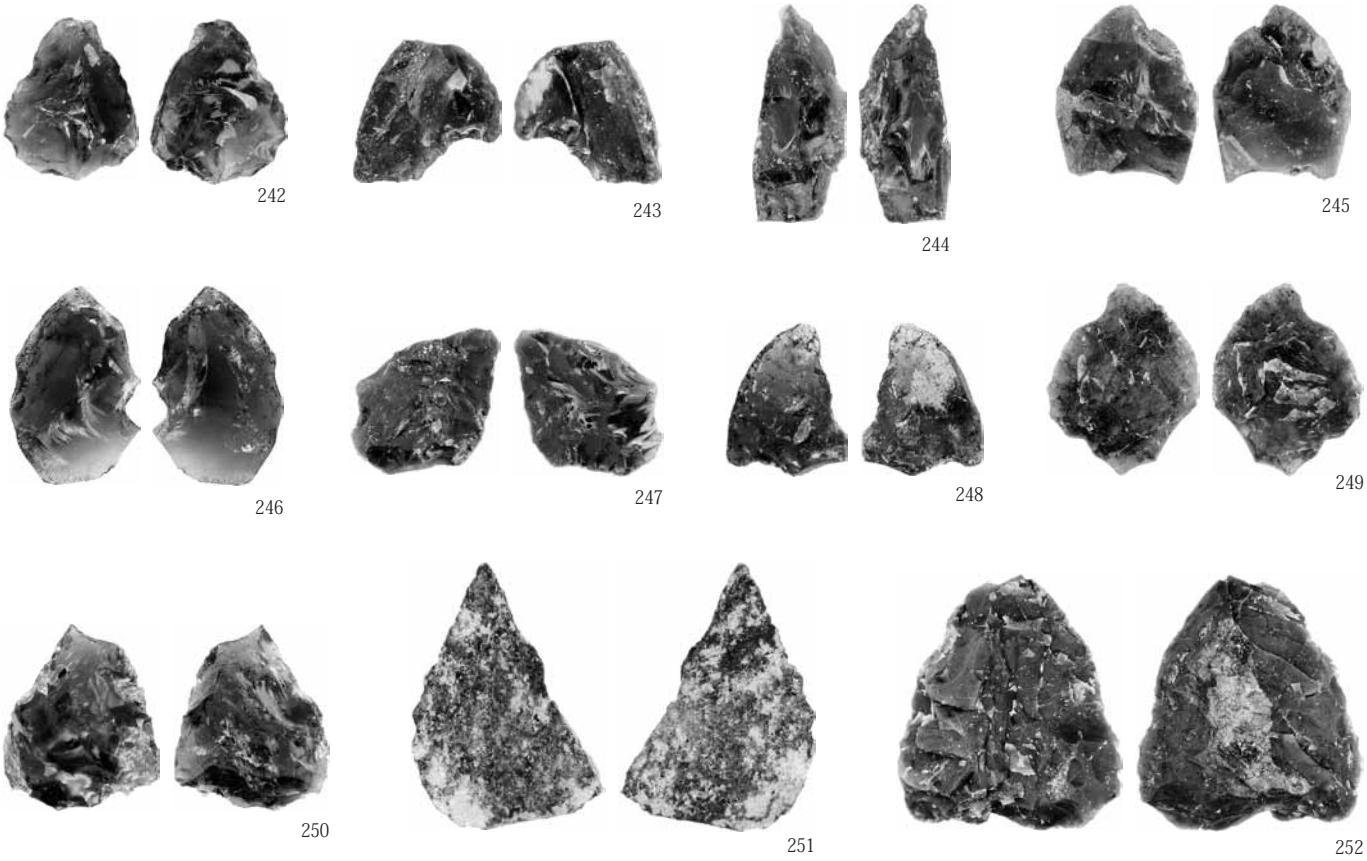

238

239

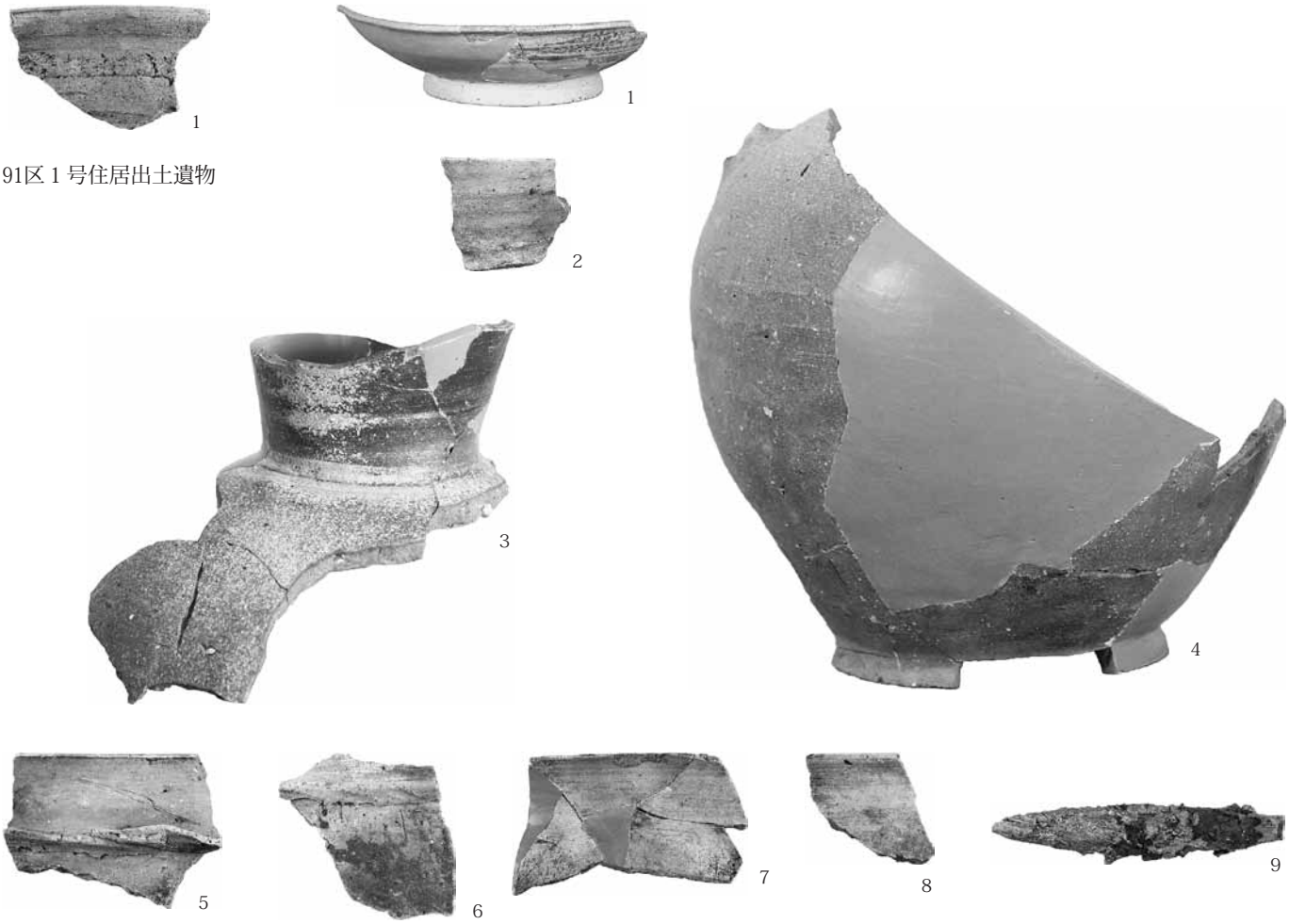
240

241

遺構外出土遺物（７）



遺構外出土遺物（８）



91区１号住居出土遺物

91区２号住居出土遺物

1

2

3

91区３号住居出土遺物

1

2

91区４号住居出土遺物

1

91区７号土坑出土遺物

1　調査区　近景(西から)

2　東区　全景(西から)

1　中区　全景(東から)

2　西区　全景(東から)

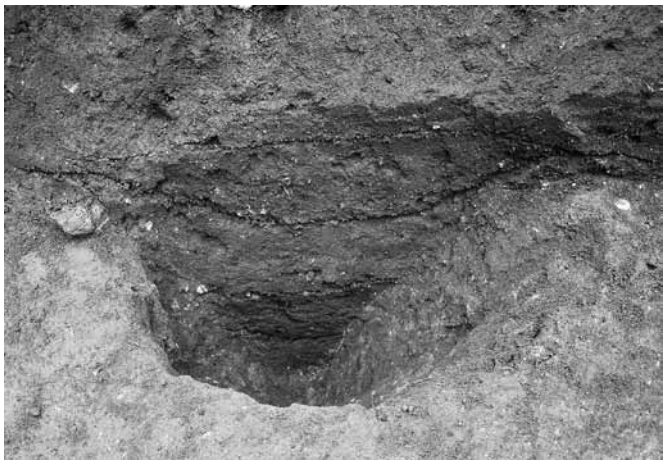
1　1号住居　全景(西から)

2　1号住居　掘り方(西から)

3　1号土坑　全景(南から)

4　2号土坑　全景(南から)

5　4号土坑　全景(南から)



1　５号土坑　全景(北から)

2　６号土坑　全景(南から)

3　７号土坑　全景(南から)

4　８号土坑　全景(北から)

5　９号土坑　全景(東から)

6　10号土坑　全景(北から)

7　１号溝　全景(北西から)

8　２号溝　全景(南東から)

1

2

3

1号住居出土遺物

1

2

6・9号土坑出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

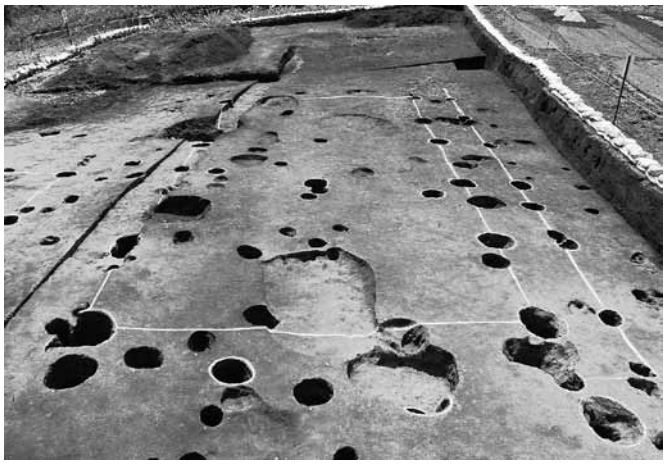
遺構外出土遺物

1　遠景（北東から）

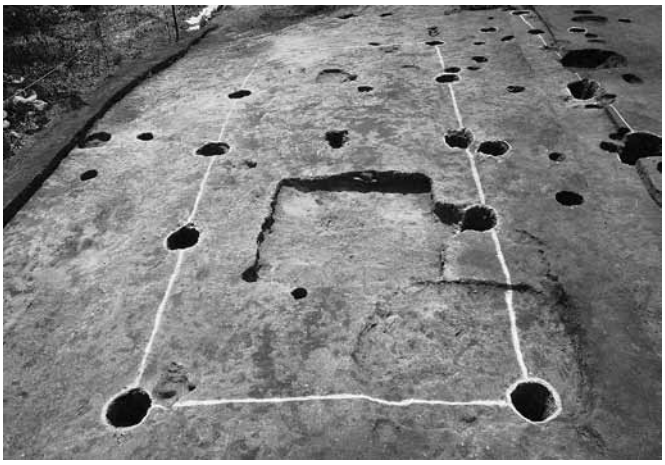
2　近景（北東から）

1　西側　全景(西から)

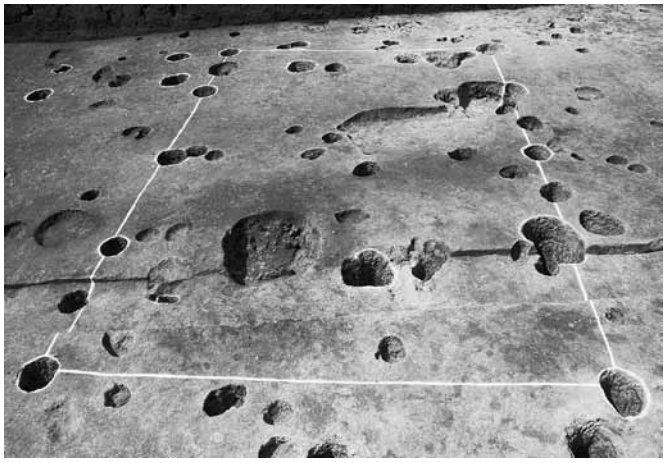
2　東側　全景(東から)



1　１号掘立柱建物　全景(東から)

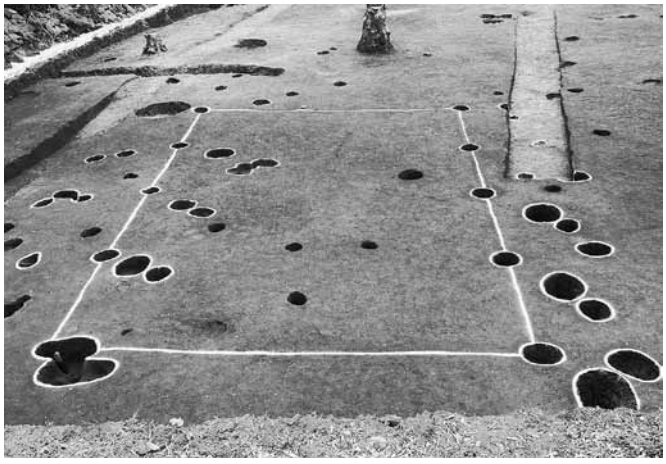


2　２号掘立柱建物　全景(東から)

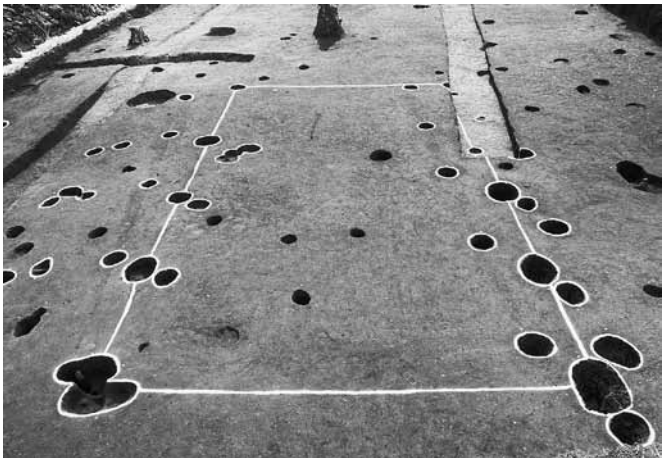


3　３号掘立柱建物　全景(南から)

4　４号掘立柱建物　全景(南から)

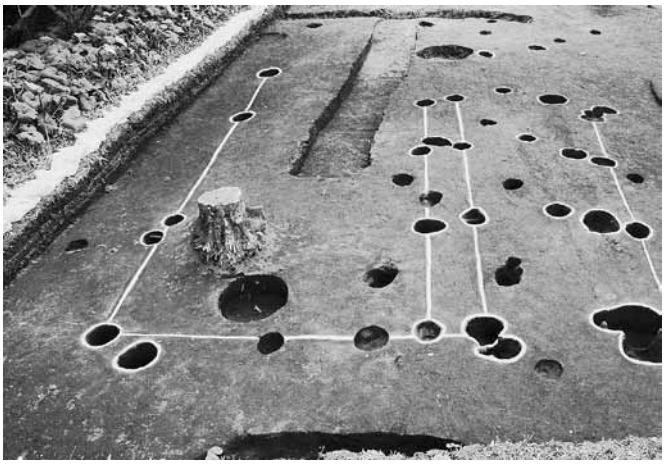


5　６号掘立柱建物　全景(東から)

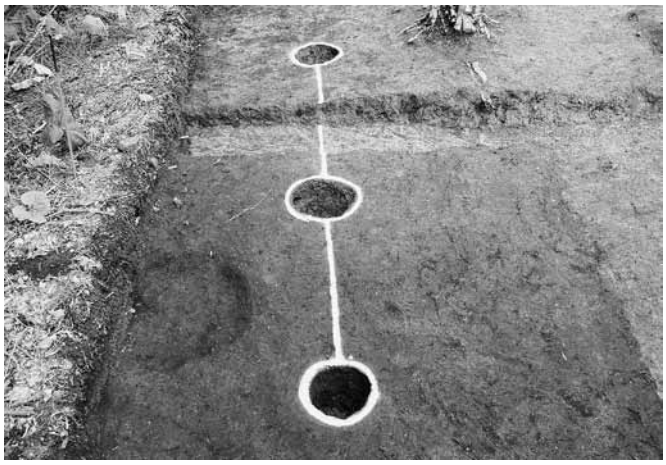


6　７号掘立柱建物　全景(東から)

7　８号掘立柱建物　全景(東から)

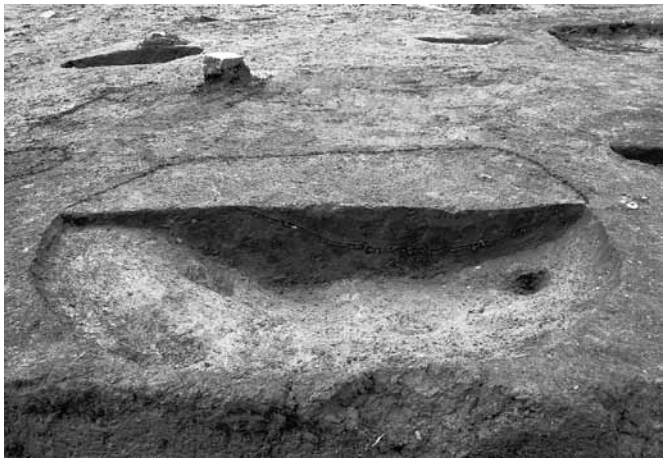


8　11号掘立柱建物　全景(東から)



1　13号掘立柱建物　全景(東から)

2　1号土坑　全景(南から)

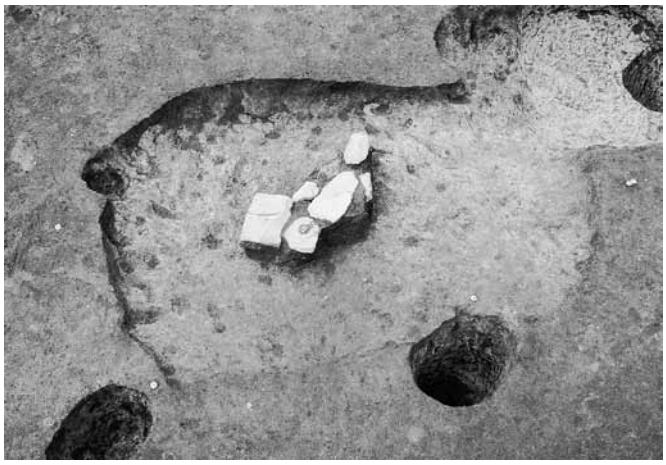


3　2号土坑　土層断面(南から)

4　4号土坑　上面石組状況(南から)

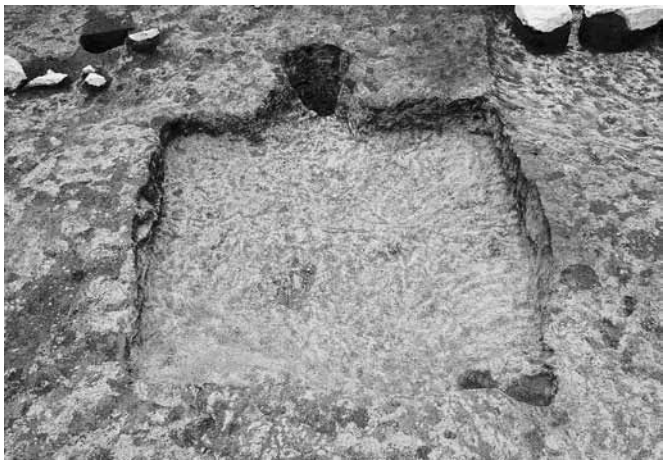
5　4号土坑　人骨出土状況(南から)

6　4号土坑　底面(南から)

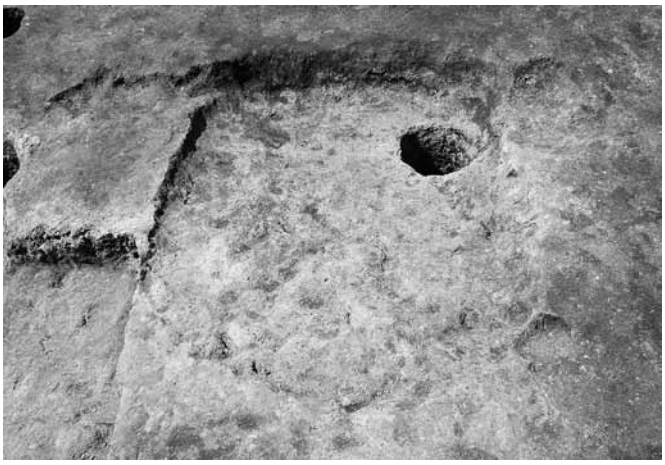


7　5号土坑　全景(南から)

8　7号土坑　全景(南から)



1　８号土坑　全景(南から)



2　９号土坑　全景(南から)

3　11号土坑　全景(南から)

4　12号土坑　全景(南から)

5　13号土坑　全景(南から)

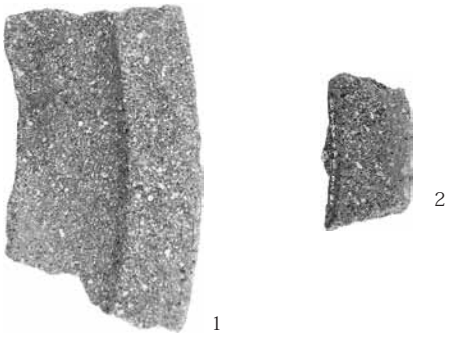
6　14号土坑　全景(南から)

7　15号土坑　全景(南から)

8　16号土坑　全景(北から)

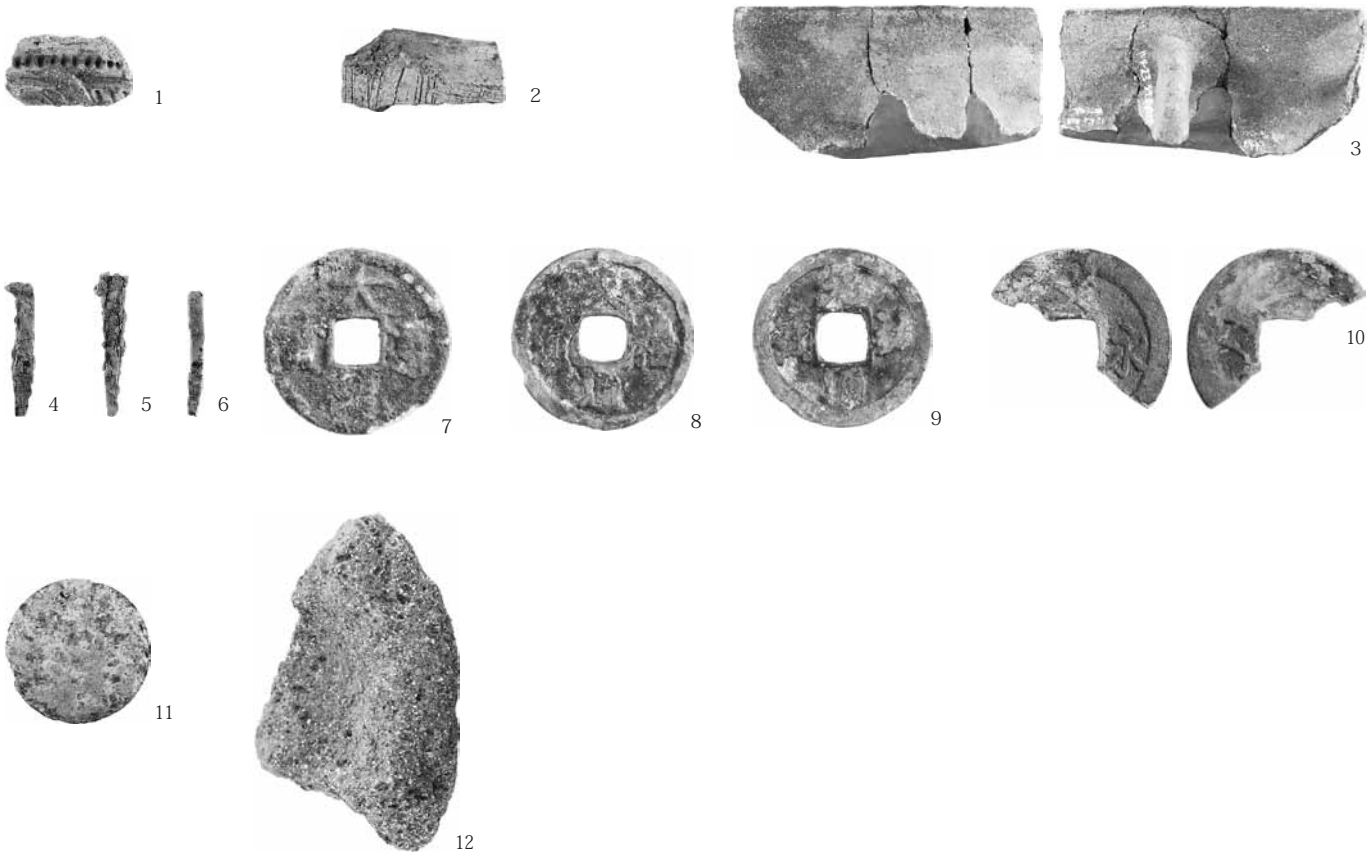
1号掘立柱建物出土遺物

2号掘立柱建物出土遺物



5号掘立柱建物出土遺物

8・9・16号土坑出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	うえはらいちいせき・うえはらさんいせき・はやしみやはらいせき
書　名	上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡
副書名	八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	46
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	604
編著者名	谷藤保彦/山口逸弘/小野和之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20151002
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	うえはらいちいせき
遺 跡 名	上原Ⅰ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやしあざうえはら
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林字上原
市町村コード	10424
遺跡番号	0041
北緯(世界測地系)	363249
東経(世界測地系)	1384042
調査期間	20121009-20121130
調査面積	1,392㎡
調査原因	ダム建設(町道)
種　別	集落
主な時代	縄文/平安
遺跡概要	縄文-住居８+土坑３+焼土13/平安-住居４+土坑17/その他-遺構外-縄文土器+石器
特記事項	縄文時代前期初頭の住居跡、および平安時代の住居跡、土坑。
要　　約	南に広がる傾斜地に展開する縄文時代前期初頭(花積下層Ⅰ式期)の集落跡。西側隣接地は、長野原町教育委員会により調査が行われ、同期の竪穴住居９軒が検出されている。検出例の少ない、同時期の集落として注目される遺跡である。その他平安時代の住居４軒を検出。
遺跡名ふりがな	うえはらさんいせき
遺 跡 名	上原Ⅲ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやしあざうえはら
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林字上原
市町村コード	10424
遺跡番号	0043
北緯(世界測地系)	363252
東経(世界測地系)	1384024
調査期間	20130617-20130722
調査面積	317㎡
調査原因	ダム建設(町道)
種　別	集落
主な時代	平安/近世
遺跡概要	平安-住居１+土坑10+自然流路２/その他-遺構外-縄文土器+石器+平安時代土器+近世-陶磁器
特記事項	平安時代の住居跡、土坑。自然流路。
要　　約	南に広がる傾斜地に、鍛冶遺構を伴う平安時代の集落が展開する遺跡。両側は町教委の調査で平安時代の集落が検出されている。今回の調査はこの集落中央部の狭隘な部分の調査であり、平安時代の住居１軒と、掘立柱建物、土坑を確認。
遺跡名ふりがな	はやしみやはらいせき
遺 跡 名	林宮原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやしあざみやはら
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林字宮原
市町村コード	10424
遺跡番号	0048
北緯(世界測地系)	363237
東経(世界測地系)	1384025
調査期間	20120401-20120517、20120531-20120612
調査面積	850㎡
調査原因	ダム建設(町道)
種　別	集落
主な時代	中世/近世
遺跡概要	中近世-掘立柱建物15+土坑16/その他-遺構外-縄文土器+中近世-石製品+金属器+陶磁器+土器
特記事項	中近世の掘立柱建物群、墓壙・土坑。
要　　約	吾妻川河川崖を南に臨む緩傾斜地形に立地する。13棟の中近世の掘立柱建物群を主な遺構とする。東西２群の建物群で構成され、主要な建物は東西棟を中核に重複も多く建て替えも示唆された。１号掘立柱建物柱穴１基は柱材を残す。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第604集

上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

平成27(2015)年9月24日　印刷
平成27(2015)年10月2日　発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷/ジャーナル印刷株式会社